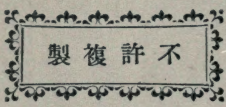
（岡山製本）

大正四年六月廿五日印刷
大正四年六月廿八日發行

有朋堂文庫（非賣品）
平賀源内集

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

田判官景連、手の者引ぐし追取巻き、「ソレ遁すな」と下知すれば、心得兵庫は若君を道念に抱かせて、當るを幸なぎちらせば、むら〳〵ばつと逃ちるを、遁さじやらじと追うて行く。其隙に江田判官、二人の繩付助けんと、立寄る所に不思議やな、華表の笠木落ちかゝり、清忠景連畠山、壓に打たれて一時に、みぢんに成つて死してけり。コハふしぎなる神徳と、勅使も感涙義岑公、兵庫助を始として、有合ふ人々下部迄、ハット計に三拜九拜。實に著き靈驗は、響の聲に應ずるごとく、水清ければ月やどる、諸願成就長久の、君と神との道直に、榮ふる御代こそ目出度けれ。

平賀源内集　終

怒をなだめんと、矢口の村に社を建て、けふ遷宮と聞き傳へ、參詣群集をなしにける。華表の方より人拂ひ、勅使のお入とざゝめけば、新田小太郎義岑公、裝束改め出で給ふ。兵庫助信忠は、德壽丸をかしづきて、禮儀正しくひかへ居る。程なく勅使四條大納言隆資卿、まうけの席につかせ給ひ、「ホヽめづらしゝ義岑、それなるは德壽丸よな。扨も義興が靈魂、鎌倉六波羅のやかたにて、種々の恨をなせしゆゑ、尊氏義詮おそれをなし、南北朝御和睦調ひ、天下太平に治まり、萬民安堵の思ひをなすも、全く義興が神靈の德、古今に類なき忠臣と、叡感ことに美しく、新田大明神と崇むべし。又悴德壽丸は新田の城を賜はり、父が本領安堵すべし、義岑は少將に任官し、昇殿を許し給はる。兵庫助が忠勤、南瀨六郎が節義、叡聞に達し、甚感じ思召さる、義岑宜しく沙汰有るべしとの綸命。猶も忠勤勵むべし」と、聞いて兩人有難涙。義岑公謹んで、「コハ有難き勅定、此上ながら宜しき樣、奏聞願ひ奉る」と、勅答有れば兵庫助、「尊氏公の執權畠山道誓、淸忠卿と心をあはせ、天下を奪はん工にて、親しき一家の新田足利、爭亂に及びし段、彼等が惡事顯れ、兩家御和睦の印迚、鎌倉より兩人に繩をかけ、引渡されて候なり、夫々」と有りければ、ハツトいらへて道念が、下知に隨ふ守護の武士、二人の繩付引出す折こそ有れ、思ひがけなき後の方、鬨をどつとぞ上げにける。コハ何事と見る所に、江

者共、此川にて去年の冬、義興めを殺せしゆゑ、恨をなすと覺えたり。シヤなにほどの事あらん」と、虛空をにらんで立つたる所に、空中より聲高く、「ヤア〳〵竹澤監物秀時たしかに聞け、汝が術にほろびたる、新田左兵衛佐義興が、一念爰にあらはれて、恨みをなさん、思ひ知れ」と、呼はる聲の下よりも、小山のごとく波立つて、ふねをゆり居ゑゆりおろせば、廣言吐きし竹澤も、五體わな〳〵膽礬色。なほも吹き來る暴風、舟は碎けてとびちれば、あまたの家來一時に、底の藻屑となりにける。中にも強氣の竹澤が、波をくゞつて泳ぎ行く、上より黑雲おほひかゝり、甲冑を帶したる、義興公の御すがた、馬上ゆゝしく出立つて、御手をのべて竹澤が頭を抓むと見えけるが、二つにさつと引裂いて、「今こそうらみ晴れたり」と、いふ聲ともに船中にて、亡び失せたる十騎の魂魄、君を守護してあり〳〵と、空中に顯るれば、雷もしづまり浪風も、治る御代の末迄も、運をまもりの御神德、十騎の宮と諸共に、あふがれ給ふぞ有りがたき。

第五

新田左兵衛佐義興公、怒の一念止む時なく、鎌倉六波羅の館にて、雷鳴數度に及びければ、御

「二つの矢を奪はれては、新田の家名のおとろへんことをうれへ、我一念の通力にて、敵の手より奪ひ返し、其方へあたふる者なり。新田小太郎殿、義興」と、讀みも終らず義岑公、「ハハヽ、扨は兄上義興公、お命ほろび給ひても、魂魄はれい〳〵と、家を思ひ弟を、あはれみ給ふ大恩、何を以てか報ずべき。ふたゝび御矢手に入るからは、官軍をかりあつめ、朝敵をほろぼして、兄上の恨を散ぜん。代々つたはる此御矢、家の重寶、武運のまもり。ハヽ、有がたし忝し」と、をどり上つて悦び給ふ。末世の今にいたるまで、新田の社へ參詣し、守の御矢頂戴の、因緣かくとぞ知られける。時にむかふの川岸に、松明挑灯きらめきて、さながら晝のごとくなり。「ムヽさてこそ〳〵、敵方の捕手の人數、押寄すると覺えたり。此隙に落延びん」と、臺もろ共いつさんに、やう〳〵遁れ落ち給ふ。程もあらせず竹澤監物、あまたの家來一同に船にこみ乘り、「ヤア〳〵者共、頓兵衛にいひつけおきし相圖の太鼓の聞えしは、落人をいけどりしと、まて共〳〵沙汰せぬは、仕損ぜしと覺えたり。おつかけて討ちとめん、いそげやつ」と下知すれば、櫓をおし立ててえいさつさ、川のなかばに乘り出す。不思議やにはかに風おこり、川波逆立ちかきくもる、空に雷電霹靂、すさまじくも又醜ろしゝ。あまたの家來を始めとして、水主楫取色ちがひ、不敵の竹澤すこしもひるまず、舩につゝ立上り、「ヤア卑法なり

き。跡は間遠に鳴る太鼓、はるかに隔たる川むかう、頓兵衛は腕限り、なんなく舟をのり付けて、陸へ飛おりかけ出す。堤の陰より高聲に、「ヤア〳〵新田小太郎義岑是に在り。匹夫め待て」と呼びかけられ、頓兵衛は立留れば、すつくと立つて義岑公、「現在の兄の敵、見のがすべき奴ならねど、どうで助けぬおのれが命、娘がせつなる志にめで、暫時の命助けしに、おつかけ來る不敵者、モウ赦されず」と抜きはなせば、「ヤア飛んで火に入る夏の蟲、名乘りて出たは百年め」と、渡合ひて丁々はつし、何とかしけん頓兵衛が、つまづく所を義岑公、付入つて取つて組ふせ、首をかゝんとする所へ、臺を引提げ六藏が、「サア義岑、親方殺さば此女、たゞ一思ひ」と締付ける。ハツト驚くたるみを見、持返して頓兵衛が、踏むやら蹴るやら、叩くやら。「コリヤ六藏、娘が敵の二人の奴原、なぶりごろしにしてくれん」と、櫂と水棹のからさを打。無念々々と義岑公。臺は苦しき聲限り、力一ぱい牛頭馬頭が、いつそとゞめの一思ひ。「今が最期、觀念」と、ふり上ぐる間もあらふしぎや、いづくより其しら羽の矢、二人がのどぶえ射ぬかれて、其儘息は絶えはてたり。義岑臺は起上り、「お前にお怪我はなかつたか」「そなたは無事なか、去るにても、何者の業なるぞ」と引抜き〳〵、「ヤア是こそは家の重寶、水破兵破の二つの御矢」と、驚き給へば臺は目早く、「其矢に何か短册が」「ム、げにも」と月あかり、何々、

を集むる法螺吹き立て、さも物凄き其有様。娘は苦しき身をあせり、「村々より大勢にて取巻かれ給ひなば、何とてお命あるべき」と天にあこがれ地にひれ伏し、正體涙のひまよりも、思ひ付いたる一思案、上なる太鼓にきつと目を付け、「此太鼓を打つときは、生捕りしと心得て、村々のかこみをとくと、最前聞いたが天のあたへ、爰ぞ殿御へ心中の、女の操」と一筋に、思ひ付いたる心の詢、よろめく足を踏しめ〳〵、やう〳〵撥をふり上げて、打たんとしても手はとゞかず、のび上りてはよろ〳〵〳〵。又起直つて飛上り、どんと一聲かつぱと伏す。音におどろきかけ來る六藏、「それ打たせてよいものか」と、抱きとむるを突退けはねのけあらそふ內、身がるに出立つ頓兵衛が、つなぎしふねに飛び乘りて、櫓を押立てて漕ぎ出す。上には娘が身をあせり、「コレナウ〳〵」と聲かぎり、呼べど叫べど叶はねば、又もや撥をふり上げる。おつとまかせとうしろより、ばち引つたくる六藏が、わきざし引拔き切付けられ、欄干より眞逆様、川へざんぶり水煙。上には娘がせんかたも、落ちたる鞘をふり上げて、めつたむしやうに打つ太鼓。響にあらそふ頓兵衛は、櫓を押立ててえいさつさ。手疵に痿まぬ六藏が、日比に馴し水練に、早瀬の浪を事ともせず、抜手を切つて立およぎ。娘は死手のだんまつま、夫をしたふ執著心、蛇とも成るべき日高の川、領巾麾山のかなしみも、是にはいかで増るべ

へ恐ろしいわるだくみが仕たらいで、たつた一人の娘の戀人、ころさうといふ惡心から、現在我子を手にかける、あんまり非道ぢやどうよくぢや。死ぬる我身はいとはね共、跡にのこつたお前の身の上、案じ過しがせらるゝ」と恨みなげけば、「エヽやくにも立たぬよまいごと、落人を取にがして、此親が立つものか」と、突退けはね退け行かんとす。娘は袖にしがみ付き、「意見いうても歎いても、聞入れ給はぬ無得心、かゝ樣がござるなら、仕樣模樣も有らうもの、何をいうても身一つに、思ひつめたる義岑樣、此世で添はれぬ惡緣と、聞けば聞くほどなほ戀しく、お手にかゝつて死んだなら、親と一つでないといふ、いひわけ立てば未來にて、いとし殿御にあはれうかと、夫を頼み二つには、一人の娘が先立てば、一念發起もし給ひて、お心も直らうかと、はかない事を頼にて、覺悟きはめて死にまする。娘かはいと思すなら、お心を飜へし、義岑樣を助けてたべ。頼まする」とくどき立て、ワツト計に伏沈み、血汐にあらそふ血の涙、ふびんといふも愚なり。頓兵衛はせゝら笑ひ、「此年迄仕こんだ根性、釋迦如來が元服して、あやまり證文書かうというても、いつかな〳〵ひるがへさぬ。相圖をさだめた義岑めを、取迯しては竹澤樣へ、やくそくの顏が立たぬ」と、娘を取つてつきとばし、二階をかけおり川端に、仕懸し烽火に火うちの早業、天を焦せる炎の光。かねて相圖の村々より、人

と、目をむき出し、怒の大聲。娘は顏をつれ〴〵と、恨めしさうに打ちながめ、「申しとゝ樣、浮世に生れた人ごとに、慾を知らぬはなけれ共、お前の樣にこりかたまり、佛共法共わきまへず、人は死なうが倒れうが、我さへよければかまはぬと、身勝手ばかりの強慾非道。有らう事か源氏の大將、義興樣をたばかつて、むざ〳〵と殺したる、其天罰がわが子に報い、宵にとまりし旅のお方、義岑樣とはつゆ知らず、可愛らしい殿ぶりに、恥かしながら心の迷ひ、お傍へ寄ればおそろしや御籏の咎、義興樣の御怒にて悶絶せしも、さうとは知らぬ戀路の闇。さいぜん六藏を追出し、一間へ忍び樣々となげきしに、義岑樣のおつしやるには、「兄を殺せし頓兵衛が娘ゆゑ、此世でそふ事ならね共、親と一所でないといふ、一つの功を立つるなら、未來で添はうとおつしやつた、其一言がわしや嬉しい。此内にお出有つては、お身の上も心元なく、委細のわけを打明けて、月の出ぬ間を幸に、船にておとし參らせし」と、聞くより頓兵衛じだんだふみ、娘がもとゞり引つかみ、「エヽおのれは〳〵大膽千萬な。見ず知らぬ男めに惚れくさつて、親の大事を他人にうち明け、手に入れた代物を、ようも〳〵落しをつた。道知らず、罰あたり、憎い奴」と、拳を振上げ丁々々、手負の上の打擲に、娘はいきもたえ〴〵に、「エヽ罰當り道知らずといふ事、お前も見事御存じか。つね〴〵不埒な勝負ずき、あまつさ

て時刻も久方の、空さえ渡る冬の夜の、二十日ゐなかの月出でて、遠寺の鐘のかう〱と、常に流るゝ川水も、いとものすごき門口の、一群茂る藪の中、ぬつと出でたる主の頓兵衛、時分はよしと呼子のふえ、塀の陰より下人の六藏、頓兵衛小聲に、「コリヤ六藏、娘めが目を覺し、邪魔ひろげばひち面倒、物音のせぬ樣に、おれ一人で忍び入らん、手前は表に氣を付けて、もし逃出でば討取よ」「ヲツト合點」とうなづき呫き六藏は、元の小陰に身をしのぶ。頓兵衛は門の戸を、引けどしやくれど明かざれば、大だら引拔き壁切あけ、はいれば吹き込む川風に、燈火きえて眞の闇。勝手おぼえし我内も、慾に心のくらまぎれ、忍べばいとゞ身も重く、床はぎち〱足音の、耳へはいれば立留り、一息ほつと次の間へ、又もふみ出すあしの下、ぴつしやり碎ける煙草盆、エヽどんくさいと心では、怒りながらもそつとなげ、褄にばつたりあいたしこ、なんなく忍ぶ亭座敷、梯子の上へ二足三足、「イヤ〱〱、きやつも名におふ義興が、一族なればこは者」と、心でうなづきそつとおり、下屋へ廻つて探り寄り、闇にも光るだんびらを、拔いて突込む二階のいた。上にはワツト玉ぎる聲、してやつたりと刃物引拔き血押のごひ、二階の梯子かけ上り、障子蹴放し月影に、夜著引まくり見て恟り、「ヤア〱わりや娘か、お舟か」と驚きながら、「義岑と女めはいづくへやつた、有やうにぬかせ〱」

い」と、とめても留まらぬ其勢、一間に立聞く義岑公、娘は一づに戀のじやま、拂はんものと思案を定め、「ヲヽ無理に其方をとゞめはせぬ、が、何ほいうても相手は武士、若仕損じまいものでもない、僅のはうびに目がくれて、わしが言ふ事聞かぬからは、是迄何のかのといやつたは、みなうそかや」といはれて恟り、「ソリヤお前ほんの事か。イヤ〳〵アノ奥の男めに氣が有るゆゑ、おれを留めうといふ謀、さううまくは參るまい」「イヤナウ、そなたの心を見た上と思うてゐたゆゑ、是迄は返事もせなんだが、夫共に疑やるなら、そなたの勝手にしたがよい」と、ぴんとすねられ六藏は、惡寒發熱あたまに湯氣、「コイツハエイワイ〳〵。夫ならおまへは、此六藏が性根を見た其上では、きまつてくれるといふ腹か」「サイノ、そなたがおれと夫婦になりや、とゝ様のために子ぢやないか、親子の間にぬけがけして、一人の手柄にするにやおよばぬ、とゝ様は庄屋殿へ行てなれば、とくと相談した上で、どう共したがよからう」と、口へ出まかせ間に合を、いうて水棹や詞の楫。わたりに舟と六藏は、のせかけられてふはと乘り、「コリヤ近年にないよい目が出たわい。そんなら私は庄屋へいて、親方を連れて來う。奥のやつらをにがさぬ樣、氣を付け給へ女房共」と、延びた鼻毛のとちめんぼう、振廻してぞ出でて行く。しすましたりと門の戸の、懸金かけてとつかはと、一間の内へ入りにける。かく

ばたちまちに、二人は夢の覺めたる心地。表の方には六藏が、戻りかゝつて窺ひ足。義岑公あたりを見廻し、「此家に泊りてうかゞひ見れば、家業に似ざる普請の結構、樣子といひ場所といひ、かた〴〵もつて心得ずと、娘が戀慕を幸に、問落さんと思ひしゆゑ、近寄れば今のしだら、しさいぞ有らん此家の內」と、御簱を取つて卷をさめ、臺來れと引きつれて、奧の一間に入り給ふ。跡にしよんぼりほいなげに、何と詞もなげ首し、たづきも知らぬ海中に、楫なきお舟が物おもひ、打しをれてぞ居たりける。表に扣へし六藏は、木部屋にかくせし一腰ほつ込み、「アノ簱を持つからは、まがひなき新田方の落人、相圖の狼烟を上げうか。イヤ〳〵討手を引うけ討たせては、手がらにならず、拔懸し搦取つて褒美の金、おれ一人でせしめてくれん。うまい〳〵」とうなづき〳〵、おくを目がけてかけ入るを、立ふさがつて娘のお舟、「コレ六藏、そなたはおくの旅人を、何とせうと思やるぞ」「ヤア何ととは知れた事、さつきにとくと見て置いた、中黑の簱持つからは新田の落人、義岑に違ひはない。去年親方と相談して、舟底をくりぬいて、義興を殺す時は、命がけの事手傳はせ、御褒美を貰ふ時は、親方一人であたゝまり、此六藏はおちやつぴい、出物に成つて今に此ざま。其弟の義岑、此度はおれが生捕つて、御褒美丸であたゝまり、おれも出世をせにやならぬ。邪魔なさるりやお主とて用捨はな

うけれど、エヽもうつんと、わしに計物言はせ、コレイナ〳〵、こちら向いて下さんせ」と、右よ左と付け廻す、琥珀の塵や磁石の針、粋も不粋も一様に、迷ふが上の迷ひなり。義岑公は氣の毒さ、「思ひがけなきお宿の無心、いかいお世話に成りまする」と、入らんとし給ふ袂をひかへ、「ソリヤ餘りでござんする、是程思ひ詰たものを、返事のないはお胴欲。なんぼ田舎生れでも、惚れたが因果惚れられたが、不肖と思うて下さんせ。日かげの木々も花咲けば、岩のはざまのたまり水、すめばすむ世の思ひ出に、叶へてやらうとつい一口、いうてくれたがよいわいな」と、すがり付いたる袖袂、さはらで落つる玉笹の、あられもないが戀路なり。義岑公も稲舟の、いなにもあらず、「ムヽ夫程迄に思うて下さるお志、さら〳〵仇には思ひませぬ」と、じつとしめたる手の内は、戀のぢやうまへ情の要、たがひに抱きつき草の、うつろひやすきいろ糸の、ぬれの糸口綻び口、すひ付き引付きしめ付けて、はなれがたなき風情なり。時にふしぎや義岑公、娘もともに色かはり、ハツト身震ひ忽に、どつかと倒れ息絶えたり。音におどろきかけ出る臺、「コリヤ何事」とうろたへながら、柄杓の水を口うつし、介抱しても呼びいけても、其かひさらにせんかたも、思ひ付いたる氣てんの臺、「扨は娘の色香に迷ひ、心の穢れ御旗の、咎なるか」と手を淸め、義岑公の懐へ、手を差入れてくだんの御旗、さつとひらけ

くし、「旅づかれの私ら、お留なさつて下さるとは、忝うござんする」「アイお前もお連なら、おとまりなさんせ。サア申し、見ぐるしけれどアノおくの、亭座敷がよい見はらし、あれでゆるりとお足休め」「しからば左樣」と義岑公、臺諸共打連れて、奥の一間に入り給ふ。跡打ながめ娘のお舟、「ほんに美しいといはうか、可愛らしいといはうか、とても女に生るゝなら、あんな殿御と添うて見たい。夫はそうとあの女中、兄弟なりやよいが、もし夫婦なら、わしや何とせう」どうせうと、おぼこ娘の一筋に、思ひみだるゝ糸芒、ほにあらはれて見えにける。義岑公は一間を立出で、「申し〳〵、お女中、つれの女が藥たべる、お湯の無心」と宣へば、娘はハツト手をもぢ〳〵、「申し旅のおかたねへ、お前にちつと御無心がござんする」「コレハしたり、かうおせわに成るからは、何なり共御遠慮なう」「アイ、アノ連の女中樣は、妹御でござんすか、お內儀樣でござんすかえ」「是は扨かはつた事に御念が入る」「アイお妹御ならようござんすが、若御夫婦なら、こつちにちつと濟まぬわけがござんする」「アイ成程、あの女は私の妹、久々の病氣ゆゑ、保養がてら淺草の觀音樣へ、連れてさんけい致しまする」「アヽ嬉しや嬉しや、それ聞いたらもう何もかも入りませぬ、お前どうぞ私が內に、十日も二十日も、十年も、百年も、逗留なされてくださりませ。したが、私らが樣な田舍者は、相手に成るもおいやで有ら

て、新田の方へと志し、矢口の渡に差かゝより、「ナウ臺、爰が兄義興殿の御最期有りし矢口の渡、此水底の恨めしや」と、川に向ひて合掌し、「南無尊靈出離生死頓生菩提」と、回向の聲と諸共に、暫し涙にくれ給ふ。臺も倶に涙聲、「ヲヽお歎は御尤、早う新田へお歸り有り、御一門をかたらひて、御矢の詮議兄御樣の、敵をお討遊ばせ」と、諫むる詞に義岑公、「見れば渡に人もなし、道にて聞けば此家が、渡守の内とかや、頼んで見ん」と門口に歩寄り、「頼みませう〳〵」と宣へば、奥より走つて娘のお舟、「何の御用」と立出づれば、義岑公しとやかに、「川の向へ參る者、舟の無心」とのたまへば、顔つく〴〵と打守り、「イエ〳〵舟はいくらも有るけれど、落人の詮議で日暮れては出しませぬ、其上にお前の樣な美しい殿御には、貸す事は猶成りませぬ」と、顔に見とれてうつとりと、心の内は燒がらの、胸をこがせる薄烟、いとしと思ひ懸香の、どうぞ留めたき下心。義岑公は氣の毒顔、「我々はいそぎの道、暮に及んで宿屋はなし、差當つて難儀なれば、何とぞ渡して下さりませ」「イエ〳〵どう有つても成りませぬ、宿屋がなくば私の内に、泊りなさつたがよいわいな」「スリヤとめて下されうか」「留めいで何といたしませう」「夫は近比忝い。連の女が持病の痞、さいはひのよい足やすめ。臺こちへ」と呼入るれば、「ム、スリヤあなたはおつれ樣かえ、エヽにくらしい」とぴんとする。臺はゐしや

「そんなら一寸行てやらう。ヤイ六藏、若も落人臭いやつが見えたら、烽火と太鼓の手都合を忘れるな」と、腰に大だらぼつ込んで、小底を連れて出でて行く。跡に六藏小聲になり、「申し〳〵お舟樣、エヽお前はむごい」とすり寄れば、「とゝ樣の留守になると、又じやら〳〵とてんがう計」「アイヤてんがうぢやござりませぬよ、とうからお前に惚れて居て、何ぼ口説いても戸板にごろ付豆よ。其豆故に身をつくし、根津音羽はいふに及ばず、氷川から補袮樓、朝鮮長屋鮫が橋、蘿蔔圃迄ほついたれど、笠森のおせんと、お前程なはどつこにもござりませぬわい。コレ申し、どうぞ叶へて下さりませ。アレ〳〵〳〵、テモ耳の早いやつでは有る、コリヤたまらぬ」と抱付く。放せ〳〵とせり合ふ所へ、表口から日傭の八助、「コレ六藏殿、ちつとの内用が有る、代に渡場頼むといふて、己に任せて貴樣は、コリヤじなぢやなく〳〵、親玉へ知れると毛氈をかぶる出入だ。サア〳〵ござれ」と引立つれば、「アイヤ少し仕かけた用が有る、もちつと待つて下され」「イヤ〳〵待つ事はごんせぬ、貴樣の顔で色事とは、唐なすもモウ古い、飛んだ茶銚が西瓜と化けた」と、打連れ舟場へ急ぎ行く。娘は跡に獨言、「けふの髮は上村のおみよ樣が、筋立ててくれなさつた、大事の髱を損うて、此笄の吹廻しの、紋迄なくして仕舞うた」と、つぶやきつぶやき入りにける。鴛鴦の番離れぬ二人連、義岑公は漸〳〵と、道念が忠義故、生麥村を落のび

矢張たべ付けたぶつかけの、渡守がよござりまするを申し上げたりや、そんなら何なと望めと有る、そこでお金をしたゝか請けて、そいつを元手に大勝負、勝つ程にける程に、持丸長者とはおれが事。かう普請をやらかしても、昔を忘れない樣にと、アレアノ通床の間に、櫓や簑を飾物、出世の因緣かくの通り」と語るにぞ、三人は不審晴れ、「夫で聞えた、そんならおいらも一思案、何ぞあてずつぽうにやつて見よかい。ヂヤガ刳拔かうにも船はなし、是から坪皿をくり拔いて、硝子入れてやらかさう。ナウ候兵衛」「イヤ〳〵夫よりもおらが望は、爰なお娘の舟底が刳拔いて進ぜたい。サア〳〵お暇其内」と、皆々打連れ立歸る。道引違へて走り來る、村の小庇がずつと這入り、「申し頓兵衛樣、お尋者の事に付いて、竹澤樣から御用が有る、庄屋殿迄只今一寸」「ム、お尋者とは知れた事、新田方の落人の、御詮議であんべい。夫なら行くにや及ばない、どちから來ても此渡を、渡らにやならぬ一筋道、兼て竹澤樣と牒し合せ、新田方の落人が、若此所へ來るが最期、相圖の烽火を上げると、村々で法螺を吹けば、竹澤樣から捕手が出る、若も己が方で搦取るか討取るか、加勢に及ばぬといふ知らせには、アノ亭座敷の上に釣した太鼓を打てば、村々で取圍んだが皆ちる約束。庄屋どのが大きな面で、どう參つたかう參つた、隣の姥樣茶を參つたと、むだ計いうで有ろ」「イヤ何か樣子は知りませぬが、呼んでこいとの言付」

バサ、昔からない物は金と化物といへ共、化物はまだも出ようが、今時ない物は錢金、折々氣ばらしに芝居を見ても、近年は淨るりでさへ、何ぞといや金のない事、餘りけちな此時節、有る所にはかう澤山、マアどうすれば此樣に、めつたに金が出來まするぞ、咄して聞かして下され」と、いへば頓兵衛烟管こち〳〵、「イヤサ皆が了簡が惡いから、出來る金も出來ないわい。塵が積つて山といへど、積る内には又吹散る、二文四文ぢや埒や明かない。出世しやうなら相場か金山、博奕は勿論、是も近年はこずいかうで、能い鴨もかゝらぬ故、此頓兵衛が思付、彼鎌倉で借元の大將、足利尊氏樣と謀反勝負の義興殿が、やみ雲の高つぱり、武藏野の窩賭で大勝負、元手の強い尊氏樣も、根こんざいぶち負けて、コリヤ一番切替うと鎌倉へ盆がへ、何か破れかぶれの義興、うぬが命を投長半、鎌倉へ仕掛の博奕、手におへない首尾に成つたを、鼻ばりの竹澤監物殿、かすり取の江田判官殿から、此親父へ人をよこして、てらをしてくれると思つて、どうぞ魂膽してくれろと、色々とのお頼、ハテ後生こそ願ふまいけれ、人の爲に成る事だ、ぢやが甘口ではいけまいと、水銀奴からの思ひ付で、船の底を刳抜いて、六藏めにさるを引かせ、一番ごつきりで義興めを、川中でぐはんと言はせた、其御褒美に此頓兵衛、尊氏樣の尻持で、大名に成る筈なれど、夫では結句氣が詰り、好の博奕が打たれませぬ、大名けんどんよしにして、

どやと、しつかり候兵衛三上十次、からのぴん助三人連、「親分は内にか」と揚口から大あぐら、「皆樣ようお出でなさんした」と、お舟があいその煙草盆、「とゝ樣はまだ晝寢、御用が有るなら起しませう」と、いふ聲聞いて一間より、欠まじくら、「ム丶今そこへ行て逢ふべい」と、ゆるぎ出でたる主の頓兵衛、雪を欺く白髮に、朱を灑いだるしかみ面、强欲無道の眼ざし、八反掛の大廣袖、紙子仕立の伊達羽織、どつかと座して、「ヲヽ皆揃つてよう來た、して仕合はどうだぞやい」「どうかう所ぢやごんせぬ、持つて立つた大失敗、三人ながら此中の元手、すつぽり負けて仕舞ひました、面目もなき仕合」と、もぢかはすれば、「ム丶ソリヤさんざんな目に合うた。えいは、負ける時がなけりや勝つ事もない道理、少と計負けた迚、補鍋匠が華鯨を請合うた樣に、騷ぐ事たないわい、今一勝負やつて見ろ。コリヤ娘よ、ソレ板厨の金を出してやれ」「アイ板厨を明けるにも及びませぬ、さつきに品川の兵五郎樣と、青山の萬九郎樣が見えて、日外借りた金ぢや迚、持つて來てでござんす故、つい掛硯の引出へ」「ム丶そんなら出してやるべい」と、引出明けて、「ヲヽ幸爰に六包有る、一人前二百兩で足りずば、もちつと借さうか」といふに三人肝をつぶし、「ナント聞いたか」「ヲイヤイ、凡金持も多けれど、つがもないはした錢か何ぞの樣に、掛硯にも六百兩、目出度といふも程が有る」「サレ

分三厘三毛三拂。そこで稻荷樣の腹を立て、ヨイヤサ王子の親玉眞先がけ、見めぐり笠森烏森、杉の森から三崎熊谷蕎麥切九郎助、福德愛敬稻荷に西の宮、此神々の御罰にて、其邊は若い衆賴みます、此萬八めを締ろやい。ヨイサ〳〵ヨイコレハノサ、ヨイヤナア引立ててこそ三叉行末の、六鄕は近き世よりの渡にて、其古は都より、東へ通ふ旅人の、廻るも遙弓と弦、矢口の渡と聞えたる、その水上は調布や、さらす垣根の朝露を、貫き留めぬ玉川の、舟を浮べる流より、知れぬ心の底深き、津人の頓兵衛が內とは思ひ棧作、物好したる亭座敷、渡世には似ぬ家作は、馬腦の階瑠璃の門扉、龍宮城の乙姬か、夫かあらぬか娘のお舟、鳶が孔雀のほつとり者、田舍に惜しき姿なり。擔桶に水を打擔げ、立歸る下人の六藏、「申しお舟樣、モウ料理は出來ましたか。旦那殿はまだ晝寢。ほんにマア有らう事か、今渡守の頓兵衛というては、おそらく日本國中に續く者なき大長者、なれ共餘り人使がひどいから、幾度置いても奉公人が、三日とは居たゝまらぬ故、お娘御のお前が、竈本の世話なさるで、可愛らしい其お手が、荒うかと思へば悲しうて〳〵、酸漿程な血の淚、御家老か番頭かと、恭はれる此六藏、渡舟を漕ぐ隙々には、薪を割つたり水汲んだり、いま〳〵しい事では有る。爰な內でも旦那殿と、渡舟がなけりや樂ちや」と、小言にお舟は氣の毒顏、「コレ六藏、人聞の惡いとゝ樣の噂、よしてたもれ」と制する折からどや

て下さりませ」と口々詫びれば、「ムヽそんなら此以後、落人など搦捕るとは言はぬか」「何が扨く」「夫なれば赦して取らす」「ハア有難うござります、此お禮には小豆飯」「イヤまだ有るまだ有る。此庵の道念が托鉢に出た時、通れと言はずにたんと入れるか」「何が扨く、大抓に入れませう」「夫なれば赦して取らす。此萬八めは大悪人、林清汝常陸の抜参の、小娘を勾引し、神奈川へ飯盛に賣つた事覺えてゐるか」「南無三寶、是は委しうよう御存じ。其時は博奕に負け、しやう事なしの出來心、微塵も慾では致しませぬ、お赦しなされて下さりませ」「オヤまだ有るく。イセオンド伊勢原の百姓が、御年貢納に出る所を、おこはにかけて船へ乗せ、五十三兩負けさせた、其言譯は少共有るまい」「アヽ悲しや夫迄を御存じか、さう知られてはお堪りやない」「まだ有るく。隣の權助が房州へ鰯網にいた留主で、かゝアを汝がちよろまかし、孕ませた迄知つてゐる」「コレハ扨きつい見通し、イヤモ一言もござりませぬ」「ヤイく百姓共」「ハアイ」「聞く通の大悪人、萬八めが村に居る故、ソコデ此村が繁昌せぬ、村境から追放する、おれに付いて引立て來れ」「ハア畏つた」と百姓共、萬八を壓狀ずくめ。道念は神前の幣帛取つて先に立ち、クドキ抓面張る、打奪の萬八はヨイく、慾の深い事は麹町の井戸よ。ヨウイくヨイヨイヨイ、アリヤリヤコリヤリヤキヤリ練間大根で太いの根と來た、爪の長さが三十三間三尺三寸三

し、社を目懸け立寄つて、扉を明けんとする處へ、取つて返す道念が、鉈振上げし勢に、「コリヤ叶はぬ」と萬八が、一散に迯げて行く。猶もやらじと追つかけしが、半途より立歸り、扉を開き二人を呼出し、「今の奴等が歸らぬ内、此道より落ち給へ」と、勧に是非なく義岑公、臺も用意そこ〳〵に、あてどもなしに落ちて行く。道念跡を見送りて、社の内へそつと這入り、扉を立つる間もなく、追々歸る百姓共、萬八も一度に落合ひ、「コレ〳〵皆の衆、玉の有所は見て置いた。さつきにもいふ通、何でも角でも二つに割り、半分は己がしてやる、半分を惣割だぞ。皆こい〳〵」と立掛り、扉開いて引出せば、思懸なく道念が、狐の面を引被り、すつくと立つたる有樣に、ワイと驚く百姓共、萬八も愕りはいまう。道念は作聲、「うぬらが根性ため直せと、稻荷大明神の御神託、謹んで承れ」と、横飛こん〳〵狐の身ぶり。百姓共は身の毛立ち、只ハア〳〵と計にて、一度に頭を地にすり付け、尻もつ立つてひれ伏せば、仕濟したりと圖に乘る道念、「汝等が心を試さんと、假に女の姿と化し、此所へ來りしに、強慾無慙の百姓めら、又稻荷の神の御罰にて、田畑殘らず踏荒し、思ひ知らさん思ひ知れ」と、はつたと睨む目も口も面で隔てて見えね共、ふんぢがつたる勢に、恐慄く百姓共、「アヽ申し〳〵、夫は餘りお胴慾樣、私等は露塵程も曲つた心はござりませねど、此萬八が頼む故、雇はれて參つた計、御免なされ

の、最期の御無念思ひやる。思へば〳〵八幡にて、我を殘させ給ひしも、生存へて家を繼げと、言はぬ計の御情。夫に引きかへ義岑は、若氣の至の不行跡、遊所より付込みし竹澤が計略の、元を探せば皆我故。手こそおろさね兄上を殺せしも同じ事、其天罰にて此艱難、御赦されて下さりませ」と、歎けば臺は噦上げ、「敵の方便にたらされて、とやかう言うたが種と成り、兄御樣の御最期の惡人を、引入れし科人は此臺、御籏の手前も恥かしい、罰當の我身をば、蹴殺し給へ」と打ふして、又さめ〴〵と泣居たる。道念は目をすり赤め、「言うても泣いても返らぬ事、此上にもお前樣は、お家を興すが御孝行、私はかういふ身の上、是より諸方を修行して、他力をかつて我君を、一社の神に祝はん」と思ひ立つたる道念が、志願は今に傳はりて、新田の社建立と、たえせぬ修行ぞ賴もしき。かゝる折しも萬八が勸にて、一度に寄り來る百姓共、内にはハツト驚く道念。義岑公は手ばしかく、御籏を取つて懷中し、又も隱るゝ稻荷の社。表の方には無二無三、戸を蹴破つて一時に、どつと這入れば、「ヤア何奴なれば狼藉」と、言はせも果てず、「コレお坊、此萬八が相談に乘らぬからは、お觸の有つた駈落者、引縛つて連れて行く。玉は何方へこかしをつた、吐かせ〳〵」と摑付く。「さうはさせぬ」と道念が、有合ふ鐵刀を追取つて、切つて掛れば百姓共、御免々々と迯行くを、跡を慕うて追うて行く。萬八は小戻

の下戸棚、明けて取出す一包、内に何かは白木の箱、蓋を開いて有合す、物干竿を手ばしかく、きり〱しやんと押立つれば、外に類の中黒は、紛ふ方なきお家の白旗、壁に立掛け飛退り、「御旗を所持する此坊主は、元來お家の御旗持、久助と申す者にて、身は輕けれど譜代の御家來、矢口でお果てなされた時の、其無念さ口惜しさ、冥途のお供と川端へ、幾度か立寄つたれど、御先祖より傳はりし、大切の此御旗、敵の手へは渡すまじ、一先古郷へ持ち歸り、若君樣へ差上げて、其後死んでくれうと、殿樣の御最期を、見捨ててすご〱歸りましたりや、情なやお家は亡び、城は敵に乘取られしと、聞いた時のほいなさ悔しさ。己やれ敵の中へ踏込んで、一人なり共切殺し、死んで仕舞ふと思ひしが、イヤ〱〱弟御のお前樣の、お行方を尋出し、御旗をお渡し申さんと、此通姿をかへ、上方へと思うても、差當つて路金はなし、お行方知れぬと聞くからは、世間も少と鎭まつたら、古郷の方へ御出有らんと、此所に住居して、托鉢するも海道筋。待ちに待つた甲斐有つて、昨日不思議に御目にかゝりましたは、私が存念が屆いたか、有難やと思へば〱嬉しくて、昨夜もろく〱夜も寢られず、嬉し涙で此正月、名主殿からしてくれた、布子を涙で絞りました」と、嗄上げたる泣聲は、奇特にも又哀なり。義岑公はから手水、御旗を取つて押戴き、「此旗を見るに附け、討死なされし兄上

知らなけりや是非がない、必ず後悔さつしやるな」と、苦を放してじろ〳〵と、そこら傍を見廻し〳〵立歸る。「ヤレ〳〵〳〵とんだ男が有るものだ」と、言ひつゝ立つて、「ホヽ冬の日は扨短い、咄する間にもう暮れた」と、表を遙に眺遣り、内へ這入つてあたふたと、門の戸しめてせどロの、稲荷の社の扉を開けば、内より出づる義岑公、臺も共に悄れ顏。「マア〳〵こちへ」と内へ伴ひ、たつた一枚嗜の、掛川莞筵をさらりと敷き、遙下つて手をつかへ、「思へば盡きぬ御縁迚、昨日不思議にお目に懸り、御供申しは申しながら、世を忍ぶ御身なれば、人の見る目を憚れ共、見る影もなき此庵室、忍ばせ申す所もなく、幸とアノ稲荷様は、此村の鎭守にて、預の此道念、外からいらひてもござりませねば、神は見通し稲荷様へ、お詫申して暫しの隱家、嘸お氣詰御究屈。いかに世の末なれば迚、義貞様の御公達、義岑様共有らう御身が、此有様は何事ぞ」と、こぼす涙に義岑公、「思ひがけなきそなたの世話、何角に付けて心遣、過分至極」と宣へば、「ほんに不思議の御縁にて、見ず知らずの私迄、いかいお世話」と計にて、しをるゝ姿海棠の、雨をおびたる風情なり。「アイヤ〳〵其お禮には及びませぬ、私はお前様を能く存じて居ますれど、末々の者なれば、御見知も遊ばしますまい。兄御様に附添うて武藏野の御合戰、矢口の渡の御最期迄、始終御供に參りし者、其證據御目にかけん」と、佛壇

「イヤ／＼夫は悪い了簡、世帶佛法腹念佛。コレ坊樣、そんな片意地言はずと、此方に少と賴む事が有る、何と聞いて下さるべいか」「ハアテ頭を丸めた役なれば、お前のお爲になる事なら」「とは忝い、別の事でもないがコレ、高がかうだは。貴樣を歷々の和尙に仕立て、外に釣出す仕事が有る、どうぞ賴まれて下され」「ア、イヤ／＼／＼そんなおつかない事は赦して下され。ヤレヤレこはや醜しや」と取つても付かぬ杵で鼻、嚙付く樣に萬八が、「イヤコレ御坊、餘り潔白にやらかしても、己ががんばつて置いた、めんかのまぶいけんさいの事さ」「ハイ」「いやさ昨日の暮過、器量のよい女と若い男が、爰の內へ入つたを、とつくりと見て置いた。あれは慥に駈落者、こなた一人の仕事にや行くまい。おれと相談する氣なら、男めをまいて仕舞ひ、玉を此方へ引たくり、品川へ賣つてやれば、十兩詰から上の代物。したがコレ、弓箭筋なら金にやならぬ又親指に肉がなけりや、これも商賣屋で嫌ふ事、氣を付けて置かつしやれ。癲癇を試すには、なた豆喰はしやつい知れる。身の代はこなたと山割、なんと甘いか／＼」と、己一人が吞込んで、濡手で粟のぶつたくり、世に萬八といふ事は、此男より始りける。道念は無氣まじめ、「ハテ扨お前はとんだ事、明るけりや月夜だと思うて、起きてるながら寢言いはしやる。一人住の此庵室、駈落者とやら女子とやら、其樣事は存じませぬ」「そんならこなたは知らないか、

餘したるあぶれ者、ぶつたくりの萬八が、ゆがみ捻れた繩のれん、頭で明けてずつと這入り、「コレ道念殿、看經もモウよさつしれ」と、いへど答も一心不亂、願以此功德平等施一切、發菩提心往生安樂、ちやん〱〱と、鉦打納め燈明しめし、「ホヽ萬八様お出なされませ」「イヤ坊樣精が出るよ。したが先の知れぬ後生願ふより、施餓鬼かおんぞうでもじろかい」「ハイ其おんぞうとやらせがきとやらをもじるとは、何の事でござりますぞ」「イヤコレとぼけた顔せずと、おらは大乘ぶちまけて仕舞はしやれ」「デモ一向に存じませぬ」「ハテやほなわろぢやの、おらは圍者の相談に、寺方へ出入る故、よう覺えて居まする、おんぞうとは鰻の事だが、宗旨によつてしゆきん共、又鉢巻ともいふげな、せがきとは鯖の事、又鯖を普賢といふ事は、法華經とやら二十八とやら、片假名とやらへちまとやらで、八宗を兼學せにや、一々は知られぬ事だと、旦那寺の和尚様が、お花の席で咄された。今時の出家が此様事知らないで、よい寺は取れぬぞや。次手に覺えて置かつしやれ、コレ人足とは石持の事、百姓とは田作の事、こいらはずんど覺え易い。蛸を天がいといふては、凡夫めらが悟る故に、今では袋足袋とやらかすだ。國姓爺とは蛤。淨國とは鮑の事。よう稽古して置かしやれ」と、いへど相手になら柴折りくべ、火を吹付けて、「イヤ〱かうあたまを丸めては、肴が喰ひたい共思はねば、聞いて置く氣もござりませぬ」

リヤ餘りぢや胴欲な。今更いふではなけれ共、勤の身にて勤をば、離れて逢ふは勤せぬ、人よりは又百そうばい、粋程結句愚痴になり、根のない事に腹も立ち、口舌いうたりつめつたり、あちら向いても張弱く、ついした拍子に下紐も、猶うち解けてひつたりと、抱きしめたる睦言に、かはい〳〵の明烏、盡きぬ咄につく鐘の、ならふ事なら夜の明けぬ、國に生れていつ迄も、抱かれてねやの隙白く、起別れてもうつり香の、殘る思の十寸鏡、片時顔を合はさねば、生きて居ぬ氣を知りながら、むごい心」と計にて、すがり付いては中々に離れがたなき花水の、橋も漸々打過ぎて、ひらに〳〵と平塚や、緣求むる藤澤に、宿のおじやれが聲々に、唄東男に都の女郎、いきと情を一つに寄せて、色で丸めた戀の山、傍で見るさへにくらしい、そりや餘り強過ぎる。武藏野の月吉野の櫻、景と風情を一つに寄せて、雪で丸めた富士の山、噂聞くさへうら山し、そりや餘り強過ぎる。謳ふ一ふし聞き捨てて、いそげば道もとつかはと、古郷も近き程ヶ谷と、思へばいとゞ二つ文字、牛の角文字直な文字、讀み盡されぬかな川に、漸々たどり三重著き給ふ。歸妙頂禮地藏尊、しやかのふぞくを臆念し、惡趣に出現し給ひて、衆生の苦患を導けり、鉦鼓の聲も幽なる、生麥村の離れ家に、住めば都と墨染に、浮世を捨てし道心者、たそがれ前の看經は、殊勝にも又物淋し。大海は塵をえらばす不淨にも、口は照國の公や、持

神かけて、二世も三世もまだ先の世も、かはらぬ中の義岑は、過ぎし八幡の難儀より、しるべの方にやう／＼と、臺諸共忍ぶ身の、忍ぶとすれど忍ばれず、まだ夜をこめて鳥が鳴く、東の方へとたどり行く、心の内ぞたよりなき。二人が中はつき出の、其日に呼んで呉竹の、ふしぎな縁で大津ぞと、みな口の葉に唄はれて、互に上る坂の下、人目の關も龜山の、しやうの惡いは男のならひ、見せかけ計石藥師、女郎に苦はないものと、見やしやんしたは間違の、かういふ事になるみ潟、おまへも捨てて岡崎と、思へばわたしも藤川の、もつれ合ひたる胸の内、打明けていやあか坂の、なんぼ源氏の大將でも、御ゐせいに惚れやせぬわいな。器量吉田の二かはめ、下ざまの事しらすかの、あらゐ上げたる殿振に、深うはまりし濱松の、素振を見付けられまいと、誓紙を隠す袋井の、契を江戸冷泉二世と掛川や、金谷せぬとはいみ詞、言はぬ島田の亂髪、人目に心沖津川、由井しよ正しき御身にて、此有樣は何事と、思ひ廻せば廻す程、腹の立つのは女の癖、顔つく／＼と三島より、運ぶ箱根の山こえて、いつかはときに大磯と、打涙ぐむ計なり。義岑公も諸共に、しをるゝ心取直し、「大事をかゝへし我身なれば、鎌倉へ忍び込み、再び御矢を取かへすか、兄上の敵を討つか、二つに一つ何れにも、助かりがたき我命、そなたは都へ立歸り、亡跡とうて」くれ／＼と、跡は詞も涙なり。臺ははつとせき上げて、「ソ

捨つる、かゝる家來の有りながら、御運拙き我夫の、御身の上の悲しや」と、過ぎし事まで思ひ出し、悲嘆の涙にくれ給ふ。六郎は目を見開き、「アヽ後れたり狼狽へたり。死する所はちがふ共、我一念は亡君の、御跡慕ひ奉らん。さらば／＼」と聲の下、吭の鎖をかき切つて、かつぱと伏して息絶えたり。妻は泣く／＼我子の死骸かき抱き、稱ふる廻向は弘誓の舟、生死の岸にぼんなうの、流を渡る三ツ瀬川、かはいや先立つをさな子は、無常の風の櫻川、ちりにまじはる芥川、かゝる浮世に隅田川、兵庫が心の荒川と、見えしも智謀深川の、ふかき忠義の胸の中、みがき立てたる玉川や、淵は瀬となる飛鳥川、御臺所は若君に、思ひも寄らず藍染川、六郎が魂魄は、主君の跡を大井川、其源のにごりなき、君に仕ふる武士の、やたけ心ぞ賴もしき。

第四
道行比翼の袖

唄 白玉か、何ぞと人の問ひし時、露と答へん落人の、身に添ふものは影ばかり、夫さへ月の入りぬれば、二人はもとの二人にて、けふたち初めし旅衣、きるに切られぬ緣の糸、結ぶの神の

に立つて死ぬる命、合點づくなら泣きもせまい、思切り樣も有らうけれど、お前一人の了簡で、わたしには露知らさず、殺して置いて今に成つて、卑怯な泣くな未練なとは、いかに男のかうけぢや迚、我儘いふも事による、むごいわいの」と打伏して、又さめ〴〵と泣き居たる。「アイヤ其恨は去る事ながら、お家の密事、天下の大事、女童に打明ける兵庫ならず。とはいふものの、いかに計略なれば迚、朋友の六郎に手を負せ、久しぶりで逢うた悴をもぎ取つて、只一討、知らぬ汝の歎より、我子と知りつゝ手にかける、其時の心の內、コリヤどの樣に有らうと思ふぞやい。アイヤ何六郎殿、忠義といひ器量といひ、末頼もしき若武者を、やみ〳〵と先立てて、此兵庫は生存命へるを、卑怯とさみして下さるな」「アヽイヤ死は一旦にして安し、跡に殘つて若君を、守り立つる汝の大役、死するに增る千辛萬苦。其上一人の祕藏子を」「イヤ三代相恩のお主の爲には、我子を殺すも」「ヲヽサ身を捨つるも、ちりほこり共思はね共、君を守立て朝敵を亡して、天下の苦しみを安んぜんと、思ひし事も皆むだ事、時に逢はねば名將も、仇に過行く光陰の、矢口の渡でやみ〳〵と、愚人原があざとき方便に討たれさせ給ひしは、お家の不運か、南朝の衰ふべき時なるか、是非に及ばぬ兵庫殿」「六郎殿」無念〳〵と手を取組み、忠臣義士の溜涙、天に通ぜは銀河、堤も切れて流るらん。御臺所はむせかへり、「我子を捨て命を

忍び、そこや爰やのもらひ乳も、落人の身の心に任せず、東西分ぬ稚子の、飢ゆれば泣出すやんちや聲、飯の取湯や地黄煎で、だましすかして漸と、なつく程猶いぢらしさ、我を親共乳母共、起きふしの上下にも、伯父よ〳〵としたへ共、夜のねざめはいつとても、乳を探つて泣出し、かゝア〳〵といふ時は、子を持たぬ身も骨身にこたへ、嘸かし親の心では、夜の目も合はず慕ふらん、どうぞ手渡しせんものと、漸〳〵此方の在所を聞出し、忍び來る道追手に出合ひ、去年の深手に不自由のからだ、又ぞや深手を負ひながら、何とぞこなたに一目見せ、其上はともかくもと、此家へ辿り付きしかど、跡よりしたふ不敵の曲者、さとられては一大事と、夫れ故にしみ〴〵と、顔も見せざる殘念さ」と、語るを聞いて女房は、「不便の者やいぢらしや、久しう連添ふ夫婦の中、子のない事を苦にやんで、持藥よ灸よ湯治よと、樣々の心遣、夫にかくして佛神に、立願祈願の効有つて、やう〳〵産んだ友千代丸、疱瘡はしかもして取れば、最早樂ぢやと悅んで、袴著寺入讀物は、何から何して斯してと、案じて居たも皆むだ事、三つや四つで死ぬるなら、うまぬがましで有つたか」と、譯も涙に取亂し、きえ入る計に泣きしづむ。兵庫は態と聲はげまし、「とくにも死すべき悴が命、けふ迄もながらへしは、まだしもの仕合、泣くな女房、日比に似ぬ卑怯者、エヽ未練至極」としかられて、女房は猶しやくり上げ、「お役

が謀計にて、矢口のあわときえ給ふ。名有る家の子郎等は、ことごとく討死し、守りがたき新田の城、落城に及びなば、若君の御行方、草を分つてさがすは必定、とやせんかくやと火急の思案、昔唐士趙の國に、程嬰杵臼といふ二人の臣下、主の孤を助けんと、敵を計りし故事を、思出して相談極め」「ヲヽ若君と取代へて、立退いたるは此六郎」「ヲヽサ我は敵へ裏返り、密に若君御養育。夫とは知らず御臺樣、燒野の雉子夜の鶴、子故に迷ふ御旅づかれ、最前入らせ給ひし時、わざとつれなくもてなせしも、若や敵へ洩れんかと、思ひ過しは若君の、御身の爲と思召し、御用捨なされ下さるべし」と、始終くはしき物語、初めてあかす本心の、智略の程ぞ類なき。子細を聞いて人々の、うたがひ晴れても晴れ遣らぬ、涙は瀧をあらそへり。六郎は座を固め、落ちたる刀取上げて、腹にぐつと突き立つる。コハ何故の生害と、驚きすがればにつこと笑ひ、「ハア快や嬉しやなア。助りがたき若君の、お命助け奉り、御臺樣へお渡し申せば、思ひ置く事みぢんもなし。我命ながらへては、邪智深き鎌倉武士、兵庫殿を疑はゞ、若君の御身の大事。殊に數ヶ所の此手にて、助かるべきいはれなし。兼て落城の折から、友千代を殺させて、敵に油斷させんずと、約束にて立退きしが、いかに忠義といへばとて、一人の我子をつき出して、我に渡した兵庫殿の心根を、思ひ計つて惜しからぬ、命をかばひ方々に身を

戴き、必死と定めし御出陣、續く兵六萬餘騎。敵は名におふ足利尊氏、隨ふ軍勢十萬餘騎。兩陣互にいどみ戰ふ。さしもに廣き武藏野の、草より出でて草に入る、優しき詠に引きかへて、月に緣有る弓張や、射る矢亂れて篠芒、枯野の草を踏越え〱、互に恥有る源氏と源氏、天下分めの晴軍、組んづ組まれつ討つつ討たれつ、矢叫の音鯨波、修羅の街に異ならず。固より猛き御大將、追つつまくつつ數ケ度の軍。さしもの尊氏敗軍にて、鎌倉さして引退く。虎にも乘るべき御勢、竹澤が勸にて、跡より追つかけ討取らん、續けや〱と乘出し給ふ」「ヲヽ其勝軍が我夫の、御身の仇で有つたわいの」「イヱ〱〱、いか程はやらせ給ふ共、無理に御留め申しなば」「アイヤそこに如在の有るべきか、拔目なき兵庫殿、さま〲お諫め申されても、勝に乘つたる御大將、御承引ましまさず、いさむるを曲事迚御勘當。ヲヽ主從暇の印迚、投付け給ひしコレ此扇、跡にて見れば御書置。朝廷には佞人多く、君をまどはし奉り、我謀を用ひざれば、思ふ軍の圖をはづし、見苦しき負をせば、我のみならず先祖へたいし、新田の名字をけがさんより、いさぎよく討死せん、汝は跡に生き殘り、六郎と心を合せ、悴を守立てくれよと有り。コレ細々との御筆ずさみ、樣々お諫め申せ共、聞入れ給はぬ日比の御氣質、力及ばずすごすごと、羽なき鳥の心地にて、是非なく古鄕へ立歸り、思案の間もなく竹澤と、江田の判官

跡に殘つた甲斐行つて、重々はうびの種、此趣を注進」と、言捨ててかけ出す、後の障子のすき間より、はつしと打つたる手裏劍に、ぎやつと計に息絶えたり。「コハ何者の仕業ぞ」と、見やる一間に聲高く、「官軍の御大將、新田左兵衛佐義興公の御嫡男、徳壽君御安體にて渡らせ給ふ、御安堵有れ」と呼はつて、傅き出づる兵庫之助。見るより二人は夢に夢、「ヤア徳壽丸は存命へてか」「若君樣にてましますか」と、抱取つたは煎豆に、花の笑顏のにこ〱を、見る目ぞくぞく嬉しさは、何に譬へん方もなし。女房ハット心付き、「若君樣を助けるとは、思ひがけなきお前の忠義、嘸かし深い方便でがなござんせう。したが最前竹澤とやらに首切つて渡したは、何人の子でござんした」「ホヽ夫こそは悴友千代」「ヤアスリヤ此死骸が我子か」ハアはつと計にとうど伏し、前後ふかくに泣出す。御臺所も御涙、「我身の上に引きかへて、夫婦の心根思ひやる。いかに主の爲ぢや迚、我子を殺して此若を、助けてくれる志、家來ではなく、氏神共命の親共、今更に禮は詞に盡くされず。そしてマアいつの間に、友千代と取代へて、此子を助けた其譯が」「ホヽ其子細は六郎が、申上げん」と起直れば、思ひがけなく又悔り、「ヤア殺されたと思ひしそなた」「ハイヤ此六郎は兼てより、命を捨ての謀」「ホヽ忠義はかはらぬ此兵庫、善惡二に引分れし一通、御物語。扨も我君義興公、朝敵を亡せよと勅命を頭に

はなけれ共、德壽丸が面體を見しらざる此監物、燒鳥にへを念の爲、誰ぞ見知りし者や有る、罷出でよ」といふ聲に、以前の馬士おづ〳〵はひ出で、首をとつくと見改め、「今日道にて見付けし悴に、相違はござりませぬ」「ホヽ是にて萬事相濟んだり。尊氏公へ申上げなば嘸御悅喜、褒美は追つて御沙汰有らん」と立上れば、「ハア何分にも御前宜敷。近比御苦勞千萬」と、互のあいさつ竹澤監物、首取持たせ立歸る。此家のさわぎ若君の、御身の上と聞くよりも、有るにもあられず御臺所、湊が介抱漸〳〵と、道よりも引かへし、走りつまづく氣は狂亂、「德壽はいかゞ」「若君樣」「六郎殿はいづくに」と、うろ〳〵きよろ〳〵、兵庫にばつたり。「ムヽコリヤ何ぢや、德壽丸にあひたいか、逢ひたくば逢はせてやらう」と、投出すは首なき死骸。二人ははつと氣もてんどう、「スリヤもう若は殺されたか。コハ何とせん悲しや」と、死骸に取付き泣き沈む。湊は身ぶるひはがみをなし、「ヘエ鬼共蛇共魔王共、名の付け樣のない惡人。コレ申し御臺樣、所詮いうても返らぬ事、サアお覺悟遊しませ」「ヲヽいふにや及ぶ」と用意の懷劒、兩方より突きかゝる。「ヤア及ばぬちよこざいひろぐな」と、腕首摑んで突き飛せば、又突きかゝる一念力、あしらひ兼ねてや兵庫之助、一間をさして這入つたり。「ヤア逃ぐる迚逃がさうか」と、飛び込む襖の小陰より、寢言の長藏跡出で、「こんな事も有らうかと、

呼ばはつて、入來る竹澤監物、「ヤア家來共麁忽の振舞、皆引け〳〵」と追退け、上座に通れば、「ムヽ思ひがけなき御上使とは」「ホヽ上使の趣餘の儀ならず、南瀨六郎德壽丸、最前道にて討ちもらせしと追々の注進、尊氏公聞召され、固より古主の事なれば、兵庫が心底計りがたし、吟味せよとの嚴命。早打にてかけ付けしに、案の如く、貴殿かくし置く條まぎれなし。昔のよしみにかくまふや、又首討つて出さるゝや、手みじかの一口あきなひ、返答いかに」と問ひかくれば、兵庫は何のいらへもなく、傍に有合ふ弓矢追取り、きり〳〵と引しぼり、一間を目當に切つて放せばあやまたず、はつしと手ごたへ血けぶりと、倶に障子を踏みはづし、朱に成つて南瀨六郎、「ヤア卑怯至極の表裏者、あまき詞に我を欺き、飛道具にてしとめんとは、ヤ愚々。是式のへろ〳〵矢、百筋千筋身に立つ共、何程の事有らん。類を以て友とする、奸佞邪智の愚人原、一々首をならべん」と、無二無三に切つてかゝる。心得たりと兵庫助、請けつ流しつ上段下段、尖き太刀筋こなたは手負、心はやたけにはやれ共、切込む刃をうけはづし、左のかた先切付けられ、かつぱと伏せばわつと泣く、若君ばひ取る兵庫がさそく。むつくと起きて六郎が、やらじと縋るを又一太刀、うんとのつけにそり返るを、見むきもやらず若君の、首ちうに打落し、檢使の前に差置けば、竹澤につこと笑を含み、「兼て知つたる貴殿の心底、疑ふ筈

は、獵人も是を取らず」「ハア忝い。命惜しむにあらね共、御一門は皆ちり〴〵、義岑公は御行方知れず、新田の家の御血筋、殘り給ふは若君計。大切の御命、見のがしてさへ下さるれば、御恩は忘れぬ、コレ手を合して拜み申す」と、ゆだんを見すまし近寄つて、只一討と切付くるを、さわがず鍔にてしつかと請け、「ム、、、、迚も及ばぬほでてんがう、其手では參るまい。去ながら、木にも萱にも心置くは落人の習ひ、疑ひは尤至極、コリヤ見遁すといふ其證據」と、刀のこひ口拔きかけて、丁々と金打し、「深手の上に氣をもまずと、おくの一間で養生お仕やれ」「ヘヱ天にくゞまり地にぬき足、思慮分別も愚にかへり、かくなり下る我身の上、弓矢の冥加につきたるか」と、くらむ心を取直し、心ならねどぜひなくも、奥の一間にたどり行く。程もあらせず討手の大勢、ばら〳〵〳〵と亂れ入り、矢ぶすま作つて追取卷く。「コハ何ゆゑの狼籍」と言はせも果てず捕手の頭、「新田の小倅德壽丸、南瀬六郎を付込んだり、御渡し有れ」とのゝしれば、人數の中より馬士の、寢言の長藏ぬつと出で、「コレ親方、金に成る代物を、燒餅坂で取りにがし、追手の衆の手にあまれば、どうでおいらが手ぎはにやおえないと、見えがくれに付けて來て、おくへ入つたをとつくりと見て置いた。四の五のなしに渡さつしやれ」「渡せ〳〵」と大勢が、すきもあらせず詰めかける。折もこそ有れ表の方、上使なりと

なき對面ぢやナア」「愚人に向ひ詞はなし、サア〳〵勝負」と詰めかくれば、「ハヽヽヽ血迷うたるか六郎」「イヤ存外の譫言。所詮助からぬ我命、己が首を冥土の土産」「ムヽヽ血迷うたとはそこの事、ナント尊氏公の御威勢見たか。唐土天竺はいさ知らず、日本の地に在りては、いか程遁れ隱るゝ共、袋の物を探るに等しく、終には尋出されん。そこを計つて此兵庫、手短に降參し、一廉の知行を取れば、コリヤ此通り豐の暮し。彼蟷螂といふ蟲は、己が斧を頼にして、車に向ふまつ其ごとく、汝が武勇を頼にして、鎌倉へ弓引かんとは淺はかな了簡、大きな物には吞まれ、長い物には卷かれるといふ諺の通り。譬いか程働いても、御威勢にて取圍めは、行先々が皆敵。其上にソレ其深手、手向ひはおぼつかない」「ヤア道知らずがぬかしたり、瓦と成つて全からんより、玉と成つて碎けよとは古人の金言、身は醢になるとても、汝がごとき不忠不義、恩を忘るゝ六郎ならず」「ホヽ其理窟は聞えたが、今某と討果さば、ソレ其笈の内なる德壽丸、誰有つて介抱するぞ、サとつくりと分別せよ」と、星を差したる一言に、「イヤサどうで遁れぬ御命、但は汝善心に飜り、かくまひ申す所存なるか」「イヽヤかくまふ程なりや、鎌倉へ降參はせぬはやい。かくまひもせず、本心にも返らね共、高のしれた小忰一匹、鎌倉殿の害にもならねば、見遁してやる分の事さ」「ムヽしかと見遁してくれうや」「窮鳥懷に入る時

搦捕る筈なれ共、女儀の事なりや了簡して、見遁いて進ぜう。足本の明るい中、とつとゝござれ」とにべなき詞、女房は猶せき上げ、「エヽ聞けば聞く程あいそづかし。コレ飼ひ養ふ犬も主を知り、尾を振つてそばえるものを、犬に劣つた人畜生。サア御臺樣お立ち遊ばせ、行著き次第にさんじませう」「ヲヽ時世につるゝ人心、是非もなき世の有樣」と、しを〳〵として立ち給へば、心づよくは言ひながら、流石女の跡や先、笑顏作つて傍に寄り、「コレ兵庫殿、言がかりに言ひはいうたが、アレ御臺樣のお足の痛、殊に夜更けて一寸も、おひろひはなさられまい、座敷にならずば軒の下、木部屋に成り共たつた一夜を」「イヤならぬ」「そんならどうぞ友千代に、ちよつと逢はせて」「猶ならぬ。夫婦でなければ子でもなし。とつととうせう」とあらけなき、詞に湊は身を震はし、「ヘエ御臺樣のお供でなくば、喰ひ付いても此恨、人に報が有るものかないものか、覺えてござれ」と見返り〳〵、御臺所の御手を引き、すご〳〵として出でて行く、心ぞ思ひやられたり。されば其幹摧るゝ時は、枝葉全からずとかや。南瀨六郎宗澄は、數多の追手を切拔けて、忠義一圖に若君を、漸背に笈の内、深手に弱る足たじ〳〵、此家を目當によろほひ來り、「行暮せし旅人なるが、盜賊に出合ひ難儀至極、お家を見懸けお賴み申す、御かくまひ下されよ」と、内へはいれば、「ヤア其方は南瀨六郎」「ムヽ人非人の山良兵庫」「ハレ思ひがけ

妾な人でなし殿、落人と成り給ふ、御臺樣の此お姿、嘸本望でござんしよなう。お前の心一つにて、さま〴〵の御艱難、けふ迄お命續きしは、まだしも神佛の扣へ綱。世を忍ぶ旅なれば、何かに付けて不自由がち、御臺樣のお足の痛。此家作りの結構さ、一夜の無心と來て見れば、どうかおまへの內さうな。かゝる暮しで有りながら、お主の事も女房の事も、忘れ果てたる無得心。エ義理しらず道しらずと、意見いふもよしみだけ、どうぞ本心に立歸り、お家の御先途見屆けて、是迄の恥をすゝぎ、元の女夫に成つてたべ。憎い〳〵と日比の恨、己やれと思うて居たが、顏見れば稚馴染、心が味に成つて來て、恨も漸百分一。友千代は息災なか、流行風など引きはせぬか。かういふ暮しでござるからは、コレ申し、お內儀樣を呼びやなされぬかいな。コレどうぞいうて、聞かせて下され」と、強い樣で女氣の、しどけ涙にくれ居たる、御臺も漸顏を上げ、「殿樣には不慮の御最期、賴に思ふそなたさへ、尊氏へ降參、德壽を連れて立退きし、六郎が行方知れねば、そこや妾やと尋ねても、行先々が敵の中、東の住居叶はねば、脇屋義治殿を賴にして、上方へ志し、迷ひ來たるも盡きせぬ機緣、ならはぬ旅につかれ果て、置所なき露の身の、消えなば消えね兎も角も、よきに賴む」と計にて、跡は詞もないじやくり。「ホヽいたはしき御有樣、お力にと申したいが、マアならぬ。昔は昔今は足利家の祿を食む此兵庫、新田方の落人、

と賓主の禮、上座に直つて江田判官、「先以て今日は御前の首尾も上々吉、此判官も去年の冬、さしも手強き新田義興、手もぬらさず討取りしは、莫大の勳功と、尊氏公御感の餘り、相摸半國を賜り、此上もなき悅び。貴殿は固より義興が舊臣、お疑ひも有らんかと思ひの外のお取立」「ハア御意の通り此兵庫助、新田の家を見限り足利家へ降參、當時斯樣の活計も、貴公と竹澤殿のお取成、御芳志の程言語には述べられず」と、媚諂ひの挨拶に、判官猶も近く差寄り、「夫に付き義興が弟義岑、又忰德壽丸、今において行方知れず、少にても手がかり有らば、古主迚用捨召されな」「ハアイヤ其御念には及ばぬ事、死損ひの新田の一類、捻り殺すに手間隙いらず。夫はさうと判官殿、今宵も最早初夜過なれば、見苦しく共奥の間で、夜と共のお物語」「イヤ／＼拙者も急ぎの道、先今晩は御暇申さう」「ハテサテ夫は殘念千萬」「イヤ我等領分より、鎌倉の往來には丁どよい中休、以後は一寸々々と御尋ね申さう」「然らば其內」「おさらば」と、家來引連れ判官は、己が館へ立歸る。世をうき草のよるべなき、義興の御臺筑波御前、淺一人を力にて、しらぬ夜道をとぼ／＼と、門外にたどり付き、「道踏迷ひし旅の女、一夜のお宿」といふ聲の、ほの聲ゆれば內には不審、手燭携へ歩み寄り、互に見合す顏と顏、思ひ懸なき悔りに、兵庫は流石面ぶせ、入らんとするを女房は、つか／＼と立寄つて、胸づくし取つて引すゑ、「コレ

たる棚尻、ひこつかせてかけ廻れば、「ナウあぶなや」と抱きおろし、「コレ皆の衆、旦那様のお留守ぢや迚、やりばなしに騒がしやるな。若子様をだしにして、面々の慰半分、怪我させましたらどうしなさる。そしてマア有らう事か、大な臀を振廻して、お鍋殿もお鍋殿」「イヤコレ人の七難より我八難、お乳母殿のおゐどぢや迚、餘り小さうもござんすまい。なんぼわつちが棚尻でも、見懸に似ず上つて有ると、どなたでも譽めなさるよ。ナウお松殿、さうぢやないか」「ホヽヽ上つたの下つたのとは、子供の上げる几巾ぢや有るまいし」「イヤコレ／＼其鮹魚は少差合ぢや」と、どつと笑へば、「イヤコレ若子様の今すや／＼、大きな聲よして下され。ほんに愛らしいお子では有るぞ」「サイナ此お子産んだ母御が見たい」「サレバイノ奥様のない此お屋形、寶は身の差合せ、寡暮しの旦那様に、わつちが鮹魚で吸付いたら、身も同前に相果つると、おつしやるで有ろぞいの」「アノお鍋殿とした事が、旦那様は石部金吉、女護が島へやつて置いても、氣遣ひの氣の字もない」「イエ／＼口先でちよびくさいふより、得手堅ざうめがしつ深な、必ず油斷さつしやるな」と、三つ寄すれば姦しい、目口乾きの色咄。折から旦那お歸りと、下部が呼次ぐ聲に連れ、「ソリヤ野等かはいて叱られな。イザ若子様も御一所に」と、皆打連れて入りにける。館の主兵庫助信忠、江田判官景連を同道にて、立歸る我家の內、「イザ先あれへ」

る青蠅めら、此世の暇を取らせん」と、錫杖に仕込みし刀引拔き切拂ふ。こなたは刃物叶はじと、見世の道具の手に當る、茶碗盃煙草盆、投付け〳〵三重打付ける。切拂ひ切拂ふ、劍の下に野中の松、此世の枝葉は枯れうせたり。願西も手は負ひぬ、長藏有合ふ庖丁追取り、立向へど手練の六郎、叶はじと持つたる出刃を、投付くればあやまたず、六郎が膝の口へずつぱと立つ。よろ〳〵とたじろく中、いづく共なく逃げうせたり。六郎は齒がみをなし、「エヽ討もらせしか口惜や」と、庖丁拔捨て下著の裾、引裂いてしつかと卷き、「取迯せしは殘念なれど、大事の〳〵若君の御身の上が大切」と、痛手にくつせず踏みしめ〳〵、歩めどちがちが足曳の、山坂に氣を春の夜の、そこ共分かぬ宵闇に、たどり行くこそ三重是非なけれ。

由良兵庫助信忠は、二張の弓も引きかたの、竹澤が推擧にて、尊氏卿へ宮仕へ、新に所領賜はりて、不義の富貴の夫ぞ共、しらぬ我身の程ケ谷や、十塚の宿に隣りたる、所の名さへ吉田村、傍に目立つ一構、手を盡したる物好の、庭に泉水築山の、木々の梢を漏れ出づる、朧月夜に映ひし、櫻が枝の白妙も、浮べる雲とや詠むらん。鎌倉よりの召に依りて、主兵庫が留守の内、呵人のない腰元共、乳母交りにどつたくた、「サア若子樣のお馬が通る、ハイシイドウ〳〵」高斷、まだぐわんぜなき友千代を、抱き乘せたる四つ這の、生れ付い

統、新田義興公の公達と產まれ給へ共、足利尊氏に世をせばめられ、纔の笈に御身を隱し、お乳の人にも傅にも、付添ふ者は某一人、かく淺間敷御身の上、弓矢神にも天道にも、見離されしか殘念や」と、拳を握り齒がみをなし、無念の涙にしづみしが、「去ながら、稚けれ共源家の公達、此六郎が申す事能くお聞きなされや。今御足の下なる榜示杭は、武藏相摸兩國の境杭、尊氏は相摸の國鎌倉に居を構ふれば、時に取つての足利尊氏、武藏の國は今、敵竹澤監物が領分、二人が軍勢踏破り、武藏相摸を一時に、踏隨へ給ふべき前表、夫を祝せし我寸志。追付尊氏討亡し、目出度御代に飜へさん」と、祝ひ悅ぶ折こそあれ、いつの間にかは寐言の長藏。南無三寶と若君を、手早く笈に抱き入れ、あたふたしめる兩方より、同じく願西野中の松、三人一所に追取卷き、中にも寐言の長藏が、「コレ六部殿、行暮したる追剝ぢや、御報謝に預りたい」「ホウ心安い事ながら、此方も人の情を受けて通る修行の身、貯へ迚は更になし」と、半分言はせず、「ヤア貯へが有る迚も、高の知れた六部の路金、大金に成る其笈が貰ひたい」「ムウ此笈がほしいとは、コリヤ常の盜賊でも有るまい、早速やらうと言ひたけれど、マアならぬ」「ヤア甘ういへば付上る、どうで直ではいかぬ奴、二人共合點か」「ヲヽ合點」と兩方から、組付く首筋引摑み、右と左へもんどり打たせ、寐言が透さず後より、しつかと抱くを腰車、「ヤア面倒な

らかう、エイ、エイ〳〵」「何の事たこいつは〳〵。汝はコリヤ氣違だな、エヽ役にも立たぬ奴等に隙取つた。併只今申渡した、南瀨六郎見付次第搦め取つて、此官藏が旅宿へ連れ來れ、褒美は望次第。ヤア百姓共、次の宿へ案內せよ、早う〳〵」と言渡し、皆々引連れ急ぎ行く。跡に長藏一人笑み、「何と聞いたか二人の者、さつきに跡の松原で、がんばつて置いた金の蔓、褒美は分取、奥でとつくり相談せう。サアこい〳〵」と三人は、打連れ奥に入りにけり。既に其日も入相の、鐘の響もおのづから、寂滅爲樂も西の空、願ふは彌陀の誓願力、六十六部廻國に、姿を略す南瀨六郎、忠義は重き笈の中、錫杖つく〴〵立留り、「實に春の日の長きといへど、急がぬ旅のあてどなし、日が暮れうが夜が明けうが、高が野宿の此身の上、暫くつかれを晴さん」と笈をおろして傍なる、榜示杭打詠め、「フウ何々、是より東武藏の國、是より西相摸の國、扨は爰こそ武藏相摸の國境」と、四方を見廻し笈の戸を、明けて四つの稚子は、義興の若君德壽丸、「サア誰もをりませぬ、御心よう御遊び」と、道の邊の花折取り、「爰迄ござれ、此花しんじよ。サア〳〵御出」と膝に乘せ、撫でつさすりつ六郎が、機嫌取り〴〵道野邊の、草に露吸ふ蝶々の、夢共わかぬ稚子の、餘念はさらになかりけり。せめては是へと榜示杭引拔いて押直し、若君を抱きのせ、御顏つく〴〵打守り、目にもる淚押かくし、「果報はいみじく源氏の正

亭主が罷出で、「イヤ私が所は雲助宿、御氣遣な者は一人もござりませぬ」と、聞くより官藏ぐつとねめ付け、「ヤイ〳〵其雲助が猶不審、此度新田義興の家來南瀨六郎といふ者、義興の忰を連れ此邊を徘徊する由、依て宿々の旅籠やを人改め、己が內の泊人、殘らず是へ呼出せ。マヅ爰に居る坊主め合點が行かぬ。己は何故其ざま、マア生國は何所の者」と、問はれて願西錫杖振立て、祭文「奇妙頂來のら如來、抑わつちが國は上州、幼い時から穴一小博奕、色事覺えて十四で勘當、寺へかけ込み和尙の大黑盜んで駈落、商ひ知らねば喰込計、女房ぐるみに博奕に打込み、夫にもこりずに年まにはまつて、盆ござぐるめにくるむき裸に、坊主にされた。去とは〳〵うるさいこんだにヨウ」說教次は盲の伊勢參、幟片手に聲張上げ、「奧州仙臺お伊勢樣へ、三十三度參りの盲に御報謝」「ヤア己らが樣などう盲に、詮議はない、とつととうせい」ときめ付けられ、「詮議がないとは有がたい、只今のお心ざし、伊勢太神宮樣へ上げますでござります、まめ〳〵〳〵まめ息災延命にようお守りなされて下さりませ」ホヽヽほう〳〵急ぎ出でて行く。扨其次へ出てくるは、是は戶塚の名代物、言はねど皆樣御ぞんじの、狸の睾西、鼓にあらぬたゝき鉦、撞木杖つき漸〳〵と、表をさして出でて行く。次は差詰、野中の松、「アノ私は元角力好、アヽ角力と言ふ物はしやう事もない物、大きにけがを致しました。夫でも角力取ろな

か誠は寢て知れる」と、背中叩けばぐにや〳〵〳〵。「サアさつぱりと埒明いた、此の長藏は近饑、手附にちよつと口々」と、すがり付を湊は押留め、「あなたも私も顔見合せてはどうも恥かしい、互に見えぬ樣に目をふさぎ、めんないちどりかけてなら」「イヤモウどうなりと、君の仰は背きやせぬ。幸爰に帨巾が」「おつとよし〳〵、わしがする樣にならんせ」と、帨巾取つて二人共、湊が手早くめんないちどり、引しめ〳〵、「サア〳〵是からこつちも目隱する、用意の内見まいぞ」と、いへば二人が、「合點だ、支度よくばしらせて」と、心はもぬけのから衣、きつゝ馴にし褄引上げ、湊は御臺に目くばせし、「早う〳〵」の目遣に、赤蛇の口や門口を、拔けて御臺の御手を取り、轉つまろびつ漸〳〵と、行方しらず落ち給ふ。文彌跡に二人は夢現、「サア〳〵女中樣、早う寢たい。聲のせぬはおもたせぶりか、ソリヤ難面ぞえ〳〵。願西よ、どこに居るぞ。最前からだまつてゐるは、わりやきまつたな〳〵」「何を言ふぞいやい、さつきにから盲搜しにさぐつても知れぬぞよ」「ヤア我もさうか、己も知れぬ」「あた面倒な」と帨巾かなぐり傍を見廻し、「ヤア〳〵女めはうせぬか、エヽ腹の立つ撮まれた。遠くは行かじぼつかけよ」「ヲヽ合點」と駈出す向ふへ、竹澤監物が家來犬伏官藏、主の權威を鼻にかけ、供人引連れ歩來る。所の名主が先に立ち、「是々亭主、何か御詮議者が有る迚人吟味、泊の衆も皆是へ」と、いふに

事もよごんしよ、が、ちつと御無心がごはります」「シテ又外に無心とは」「アイお大事の物では有ろけれど、お二人ながら、アノわしら二人を今宵一夜抱いて寢て、乳を飲ませて下さりませ」「エヽ」「アイ出家一人お助けなさるは、いかい功德でござります。跡にも先にもたつた二人、どうぞ取らせてやつてくだありませ」と、思ひがけなき一言に、御臺はとかう詞もなく、ぞつとこはげの胴震ひ、湊も聞いて悔りの、驚く胸を押しづめ、弱みを見せじと膝立直し、「ヤア身の程しらぬ慮外者、女子ぢやと思うてなぶつたらあてが違ふ、長の旅を女の身で主人の介抱、覺がなうて成る物か。殊にれつきとした武士の妻、今一言いふと赦さぬぞ」と、尖き詞に長藏は、「ヘヽヽ、何と聞いたか、こはい事だないかいやい。さう強う出やりやこつちも意地、言ひかよつた色事。コレよう聞かしやれ、戸塚の宿と欺して留めたは、おれが思ひを晴さう計、爰は武藏相摸の國境、燒餠坂といふ立場、一里四方に此家たつた一軒、泣いても詫びても、外に人は一人もない。ナア願西よ」「チヽさうだ、是非いやだといやりや、引縛つて抱いて寐る。サアどうだ〳〵」と二人して、戀の手詰の居催促、聞く程つらき身の難儀、遁がたなき一世の灘、湊は思案し笑顏を作り、「ハテ夫程に迄思うて下さるお心を、何の仇に成る物ぞ、私らも長旅の獨寐、有樣はこつちから」「ヤア〳〵夫は夢ではないか、又有かくのうそではないか」「サア噓

程、世にあぢきない物はなし。一世と連添ふ我夫は、思ひ設けぬ御最期、いとし可愛の我子には生別れ、惜しからぬ命ながらへしも、何卒徳壽を世に立てんと、夫を頼に此艱難、そなたのいかい心遣ひ、あかぬ別を忠義にかへ、男勝りのかひぐ〵敷、長の旅路の介抱、若煩ひでも仕やらうかと、思ひ過して悲しい」と、跡は涙に詞さへ、曇りがちなる御顔ばせ、倶に悲しき涙を隠し、「是はマァお心弱い、其様に思召して、長の旅が成りませうか。義治樣へお前を手渡しする迄は、めつたに風も引く事ぢやござりませぬ。私が夫兵庫助、思ひも寄らぬ二心故、夫を捨ててお前のお供。又南瀬六郎殿は若君を御介抱、何卒尋ね逢うたなら、仕樣模樣もござりませう。暫しの間の御艱難、必ずきなく〵思召さぬがようござります」と、口にはいへど心には、是が新田の奥方の、御有樣かと打しをれ、見かはす顔の花曇。上見ぬ鷲や鵰眼、寢鳥さゝんと、寢言の長藏願西が、二人連にて奥より立出で、「若女中樣嘸お勞れでござりませう」と、いふに恟り泣顔隠し、「そなたはさつきの二人の衆、何ぞ用ばし有つての事か」「アイ用といへば用の樣な物、ナア願西」「ヲヽちつとお前方にアノナアノ、コリヤく〵長藏、おれに計言はせずと汝もいへ」「ハテマアあたま役ぢやわれからいへ」「イヤわれから」「われからく〵」「ム、二人共に言ひにくいといふは、酒でも飲みたい故價をくれといふ事か」「アイまあそんな

の御病氣故、箱根へ湯治に參る者」と言紛らして、「コレ主のお方、奧へ參つても苦しからずばあの一間」「成程々々御念には及ばぬ、サア〳〵是へ」と亭主が案内、湊も訶そこ〳〵に、一間の内へ入る跡に、願西は大欠、「ヤレ〳〵草臥た〳〵。コリヤ長藏、わりや爰を戸塚だ迚女を欺し、爰に留めたは何ぞうまい仕事が有るか、他人にせずと半口のせぬか。ナア野中よ」「ヲヽそれ〳〵、戸塚迄行くを、爰で仕舞ふ仕事故、だまつては居たが、何ぞ是には譯が有らう、聞かせいやい」「イヤサ譯というて高がかうだ、あの竹輿に乘せて來た女に我等首たけ、供といふも女の事、今宵中に一太刀言はせたい思入、夫で戸塚は入込の旅人、聲山立てても遠慮のない樣に、此立場の雲助宿を、戸塚の宿だと欺して連れて來たのだ。何と智惠か〳〵」とうぬ惚の、だみそは鼻に顯れたり。願西手を打ち、「扨もしたり、戀の智惠は又格別。おれは又あの供の女、久しぶりの女犯肉食」「フウわれも其心か、サア二人ながら相談はきまつた〳〵」「コリヤ野中よ、わりや何とする」「イヤおりや女より一ぱいやつてぐつと寐たい」「そんなら前祝ひに、一ぱいづつ己がもめる。サアこい」と、山も見えざるそら祝ひ、實に長はんが當飲や、咽を鳴して入りにけり。御痛はしや筑波御前、見るもいぶせき藁やの軒、湊は障子押明けて、「暫く是にて旅の憂、はらさせ給へ」と進むれば、御臺は思ひの顏を上げ、「ナウ湊、自が身の上

り貰がなさに、新町の宿はづれに晝寢して居たが、何するも錢儲だと、願西と言合はせて、新町から戸塚迄百五十の駄賃、かう急いでは、立場で一ぱいせにやならない。ナア願西」「ヲヽ、じつとしてゐると寒い故、荷を持つてあたゝまるのだ。長藏、汝が雁ぢやが、何と旦那に願うて一ぱい飲ませい」「ヲヽサ何にもいふな爰が泊ぢや。これ〳〵六兵衛殿、お泊のお客を乘せて來た」と、呼ぶに亭主が走り出で、「サア〳〵是へ」と店先へ、湊を馬より抱おろせば、「ヲヽ、思ひの外早い來樣、跡の宿から三里には近い、モウ爰が戸塚とやらいふ所かえ」「イヤ爰は」と、いふを打消す寢言の長藏、「ヤコレ成程〳〵爰が戸塚の宿、御亭主」と目で知らすれば、亭主もさる者、「いかにも爰が戸塚でござります。そしてお連は」「イヤ連といふは私が主人、サア〳〵是へ」と舁寄せさせ、「いざ御出」と介抱に、義興の御臺筑波御前、ならはぬ旅に身もやつれ、立出で給ふ御姿、藁屋の軒に三日月の、みがかれ出づる其風情。長藏は現をぬかし、「何と二人共に見たか、旅やつれでもあの器量、旅籠屋のふんばり共とは、伽羅と甘藷程違つて、美しいもんではないか。あんな物を抱いて寢る男めは、憎い奴ぢやないかいやい」「コリヤ長藏わりや何ぼ所の名ぢや迚いらぬ燒餅だな」「そしてつまはづれといひ物ごしといひ、先お前方はどこからどれへ行かしやります」と、問はれて湊が、「イヤわれ〳〵は武藏の者、賴みしお方

めたな〱」「何をいふぞい、アノおたふく、腕は松の木腰は臼、泣く聲豚に似たりけり」「ヤアいふな〱。夫でも今朝立際に、こそと二百なぜやつた、有様はおれも約束したけれど、おれが所へはうせなんだ」「ムウそこで手前が燒餅か。イヤ夫で思ひ出した、爰の坂を燒餅坂といふげな、なウ御亭主」「イカニモ〱、此坂に付いてきつう謂がござります、お咄し申しましよか」「イヤ〱夫聞いてゐたら日がくれる、あれ〱腹の加減も七つ過、ドリヤ茶代拂ふ」と、一錢二錢錢つく杖つく道者共、別れ〱に急ぎ行く。又も往來の街道筋、歌「おらが殿樣はナア、姫路をとりやるナ、そこで姫路が繁昌するとはナア。エほてつぱらめ、高が十二三貫目の荷を附けながら、埒の明かぬ畜生め」と、鳴わめく雷聲。馬の上から湊は聲かけ、「コレ馬士殿、私は馬にはじめて乘つた、落ちうかと思うて、怖うて〱どうもならぬ、靜な程こつちの勝手、殊に竹輿に召したは大切なわしが御主人、ちつとの間も離れては氣遣、此竹輿の衆はどうぢやぞいなう」「ヲヽ氣遣はござりませぬ、東海道五十三次は言ふに及ばず、奧街道迄を股にかけて居る此長藏、わしが呑込んだ仕事、アレ〱もう爰へ見える。ヲヽイ〱早ううせやがれヤアイ」とどやげば、跡からいきせきと登り坂道、にた山竹輿の雲助共、肩もあたまもちぐはぐに、漸〱と追付いて、「ヤイ〱寢言よ、早う〱と、汝は馬と人間を一つだと思ふかやい。けふはあま

「イヤ〱〱、天にも地にもかけがへなき若君の御供せん。イザ此隙に」と立出づる。手並にこりぬ大勢が、又むら〱と追取卷く。「ヤア性懲もなき蚊とんぼめら」と、當るを幸切立てられ、多勢を頼みの雜兵共、一度にぱつと迯散つたり。六郎も數ヶ所の深手、踏しめ〱たどり行く。城内には諸軍勢、どつと上げたる凱歌を、聞くも無念と立留りしが、「イヤ〱〱、一先此場を立去つて、行方知れざる義岑公、御家門脇屋義治公、和田楠を始として、官軍一味に心を合せ、若君を守立てて、時節を待つて本意を遂げ、今の恥辱をすゝがん」と、無念ながらも出でて行く。阿斗を助けし趙雲が、長板坡の働にも、をさ〱劣らぬ其骨柄、古今獨歩の忠臣やと、感ぜぬ者こそなかりけれ。

第三

東路を登り下りの街道は、武藏相摸の國境、往來の足休め、能き程ヶ谷とつかの間も、たえぬ旅人の馬竹輿も、爰に立場の茶屋が軒、所の名さへ燒餅坂、往來の道者腰打かけ、「コレ茶一つ下され、もう何時ぢやぞ」「イヤモウ七つ過でござりましよ」「ナント川崎迄行かれうかの」「イヤ川崎迄は心元ない、神奈川泊と見えまする」「コリヤ〱太郎左、わりや夕のふとり肉し

し御臺樣、若君樣は六郎殿がお供申せば氣遣ひない。裏道より早う〳〵」と、御臺の手を引き逸參に、いづく共なく落ちて行く。南瀨六郎宗澄は、德壽丸をかき抱き、上に腹帶しつかとしめ、拔身引提げ眼を配り、素肌ながらも一心の、誠は金石鐵のたてづく者もあら氣の若武者、取卷く士卒を蠅虫共、思はぬ心の大丈夫、しんづ〳〵と落ちて行く。一間の内より高聲に、「ヤアヤア六郎、命計は助けてくれん、德壽丸を置いて行け」と、呼びかけられて六郎は、きつと後を見返れば、一間の障子さつと開き、床几にかゝりて竹澤監物、こなたには由良兵庫、鎧兜に身をかため、采配追取りいう〳〵と、さもいかめしき其形相。六郎は齒がみをなし、「チエ新田代々の此城を、朝敵の蹄に懸けられ、叛逆不道の愚人原に、乘取られしは殘念や口惜やナア。あはれ若君のお供でなくば、うぬらを助け置くべきか、命冥加な盜賊共、德壽君は六郎が、懷に入れ奉れば、千騎萬騎のお供も同前、道おつ開いて早通せ」と、あく迄に廣言し、脇目もふらず出でて行く。「ヤア〳〵者共、六郎やるな遁すな」と、下知に隨ふ諸軍勢、右往左往に取圍むを、痿まずさらず切結び、爰をせんどと三重戰へば、敵の大勢たまり兼ね、しどろに成つて引退く。「ヤアきたなし返せ」と呼ばはつて、火雷神の荒れたる勢、流石の二人も底氣味惡く、奥をさして迯げ入れば、「ヤア卑怯至極のうづ蟲めら、目に物見せん」と駈寄りしが振返つて、

女ながらもお家の大事、みす〳〵詠めて居られうか」と、命限り根限り、起きつ轉んづ身をもがき、岩をも通す女の一念、繩にすらるゝ栢の柱、陰陽激して火を生じ、繩は燒切れどつさりと、こけても打ちても厭はゞこそ、「ヘヱ有難し」と一さんに、奥をさしてぞ走り行く。程なく寄來る敵の大將、竹澤監物秀時、眞先に踴出で、「鬼神と呼ばれたる義興さへ討取れば、城の奴原皆殺し、一人も遁さず討取れ」と、込入らんとする所へ、「降參〳〵」と呼ばはつて、立出づる兵庫助、竹澤見るより、「ムヽ心得ぬ汝が降參、其手をたべる監物ならず」「ハア其お疑ひ御尤、論より證據手引して、此城を乘取らせ、拙者が心底見せ申さん」「ムヽ其詞に相違なくば、鎌倉公へ申し上げ、恩賞は望に任せん。去ながら降人の法なれば、ソレ家來共」合點と、兵庫一人を取圍み、透もあらせず亂れ入る。湊は身がるにかひ〴〵敷、長刀小脇にかい込んで、御臺所を先に立て、透間を見て落さんと、心を配る向より、竹澤が家の子笹目兵太、大勢引具しどつと押寄せ、「ソレ遁すな」と下知すれば、心得たりと女房が、くも手かくなは十文字、追立てられて敵の大勢、逸足出して逃行くを、遁さじやらじと追うて行く。跡に御臺はハア〳〵あぶ〳〵、長追無用とあせる内、後へ廻つて笹目の兵太、してやつたりと飛びかゝる。透もあらせず立歸り、斯と見るより湊が早業、長刀に血と一所に兵太が首、ころりと落ちて死してけり。「サア〳〵申

と突き飛ばすを、起直つてしがみ付き、「ホンに飽れて物が言はれぬ、大事の〳〵お主様、御難儀の此時節、命限りお力に成りはせで」「チヽ科なき我を勘當し、諫を用ひずむざ〳〵と、殺されし馬鹿大將、新田の家にあいそが盡きた。勘當請たりや主でもなく家來でなし」「イヽヤ御勘當請たり迚、是迄代々御知行にて、育てられたお前の體、何はともあれ是迄に、一方ならぬ御よしみ。コレ思案仕かへて下さりませ」と、夫思ひの眞實心、取付き歎けば、「エヽめろ〳〵と邪魔ひろぐな」と、突退け刎退け行かんとす。裾を押へて、「コレ待つた待たしやんせ、譬連添ふ夫にもせよ、お主の大事にやかへられぬ。さういふ汚穢お心なら、夫迚用捨はない」「ヤア細言いはずと爰放せ」「イヤ放さぬ」としがみ付く。エヽ面倒なと取つて組伏せ、用意の早繩手ばしかく緣柱にくゝり付け、「汝が夫を見限れば、此方にも飽果てた、夫婦の緣も是限り、女房去つた」と睨み付け、一間の内へ入りにける。跡見送りて女房は、胸迄せきくるうき涙、「けふはいかなる惡日ぞや、殿樣には不慮の御最期、たつた一人の弟を殺し、賴に思ふ夫に去られ、剰へ此繩目、がういふ因果な身の上が、又と世に有らうか」とくどき立て〳〵、どうど倒れて泣き沈む。大手の方には敵の大勢、四方を取卷く責太鼓、鬨をどつとぞ上げにける。湊はすつくと立ち上り、「扨は敵の寄せたるか、御臺樣六郎殿。エヽ此縛め解いてほしいナア。チエ恨めしい我夫。

給ふ。六郎は心せき、「ナニ兵庫殿、固より無勢の此城へ、勝誇つたる竹澤が、大軍を引受ける貴殿の軍慮は何とでござる」「イヤ先貴殿の御工夫は」「此六郎が存ずるには、我君の弔ひ軍、命限り敵を防ぎ、叶はぬ時は城を枕、討死の外思案はござらぬ。シテ又貴殿の御思案は」「此兵庫が存ずるには、寡は衆に敵すべからず、及ばぬ事に犬死せんより、兜を脱ぎ旗を巻き、敵へ降るより外はござるまい」「ム、何敵方へ降參とは、氣が違つたか狼狽たか」「イヽヤ氣も違はず狼狽も致さね共、所詮叶はぬ腕立せんより、降參するが當世かと存ずる。貴殿もとくと分別有れ」と、落付程猶せき立つ六郎「ヤア分別もへちまもいらぬ、身は八つざきに成る迚も、二君に仕ふる六郎ならず」「ハヽヽヽ、夫は近比若氣の至、管仲は敵へ降り、覇王の助と成りし例」「ヤアなまぬるき毛唐人の引事、今敵へ降つては、御臺若君の御身の上、未來の主君へ、どの面さげて御目見えなすべきぞ。卑怯未練の畜生侍、詞をかはすも身の穢、汝が樣なる臆病者は、牛蒡程な尾を振つて、鎌倉武士に犬つくばひ、糠でもねぶつて命を繋げ」と、悪口たら〳〵六郎は、疊蹴立てて入りにけり。何思ひけん兵庫助、ずんど立つて身拵へ、奥をさして入らんとす。出合頭に女房湊、「最前からの競合を聞いて居たが、眞實お前は敵方へ、降參なされるお心かえ」「ヲヽくどい〳〵、尊氏方へ降參の手土産、御臺若君引くゝつて連れて行く、邪魔ひろぐな」

しかど、道にて變の有らんと迄は、思ひ設けぬ御災難。周の昭王漢を濟るに、船人共是を憎み、膠を以て船をかため、川中に至る比、膠蕩けて船砕け、水中にて失ひし、方便に等しき竹澤が謀。某御供するならば、仕樣模樣も有るべきに、エヽしなしたり口惜や」と、無念の拳手の裏へ、爪も通らん風情にて、涙の玉のばら〳〵、空にしられぬ村時雨、餘所の見る目も哀なり。一間の方には女中の聲々、「御家中の内方達、君の御最期面々の、夫の別れを悲しみて、皆々自害致されし」と、聞いて驚く人々より、御臺所は心付き、「ハア死おくれたりさらばぞ」と、守刀を抜放し、自害と見ゆれば湊は押留め、「ヲヽ悲しいはお道理ながら、今お果て遊ばしては、若君樣のお身の上」「イヤ〳〵最早かう成る御運の末、生きてうき目を見んよりは、死せてたも」と爭ふを、六郎刃物もぎ取つて、「エヽ御短慮なる御振舞、お家の事も若君の事も、忘れての御生害ならば御勝手次第」と呵られて、「スリヤ死ぬるにさへも死なれぬは、よく〳〵因果の此身か」と、歎けば湊も諸共に、「お道理樣や」と計にて、又さめ〴〵と泣居たる。かゝる歎の折こそ有れ、物見の軍兵かけ來り、「我々遠見致せし所、遙向ふに高煙、數多の軍勢此城へ、押寄すると相見えたり、御用心候へ」と言捨てて又引返す。「コハそもいかに」と御驚き。兩人騒がず、「扨こそ扨こそ、竹澤が軍勢共押寄すると覺えたり、先々奥へ御入」と、湊が介抱漸と、一間の内へ入り

くにおはせしが、漸く心や付いたりけん、しを〳〵と立ち上り、乳母が膝に居眠りし、若君を抱き取り、「コレ德壽、稚けれ共大將の子、とつくりとよう聞きやや。父上は敵の爲に、はかなくお成りなされたわいの。母も一所に行く程に、そなたは早う大きう成り、敵を討つて父上の、修羅の恨を晴してたも。官軍の總大將義貞樣の孫君、淸和源氏の嫡流と、生るゝ果報は有りながら、二人の親に別れなば、誰を便に成人せん。母が歎も父上の、最期も夢のすや〳〵と、しらぬ寢顏のいぢらしや」と、抱きしめ〳〵、落つる淚と泣聲に、御目を覺し若君は、「いやぢや〳〵聞かぬ〳〵、赤がほしい」と島臺の、舟に取付くわんぱくも、「チヽ數有る臺の其中で、此舟がほしいとは、船の中にて果て給ふ、父上戀しといふ事を、自然と蟲が知らせたか。思へば〳〵淺間しや、場所も多きに船の內、前後の敵に取卷かれ、水におぼれて御生害、文彌此世からなる地獄の責、嘸御無念口惜かろ。さうとは知らずたつた今迄、祝ひざゝめく此島臺、舟と聞くさへ恨めしい。七福神の富榮も、夫に別れ何かせん。鶴龜の千代萬代、齡は嘘か僞りか、高砂住の江相生の、松にも夫婦は有るものを、はかなき我身あぢきなの世の中や。祝は却つて逆樣事、此島臺もいまはしい」と取つて投ほり押碎き、物狂はしき風情にて、流涕こがれ伏し給ふ。六郎も顏ふり上げ、「此度の鎌倉責、其意得ずとは思ひ

ざや白栗毛の、駒に鞭打ち我君は、諸軍に先立ち駈拔けて、彼御舟に召し給ふ。お供に隨ふ武士は、世利田大島井彈正、土肥市河を始として、主從纔十一騎、えい〳〵聲にて押出す。固より名高き玉川の、餘所の時雨に水かさ增り、矢を射るごとき川中にて、兼て仕組の舟子供、怪我のふりにて櫓を取落し、舟底ののみを拔き、水中へ飛入り〳〵、行方しらずくゞり行く。向の岸には江田判官、こなたには竹澤監物、伏勢どつと押寄せて、射る矢は霰舟には水、譬翅の有らば迯、遁れがたなき御有樣、天魔を欺く我君も、叶はじとや思しけん、鎧脫ぐ間もあら無念やと、怒の御聲諸共に、終にあへなく御生害。十人の人々も、思ひ〳〵に腹かき切り、そこはかとなく成行けば、追々馳付味方の軍勢、大將失せさせ給ふ上は、生存命て何かせんと、敵陣へ駈入り〳〵、一人も殘らず討死」と、聞くよりハット人々は、餘りの事に詞も出ず、呆果てたる計なり。一間の內には家中の妻女、聞くに堪へ兼ね聲を上げ、一度にわつと泣出す。八郎は息つぎあへず、「此事お知らせ申さんと、暫時の命ながらへて、君のお供に後れたり、何れもさらば」といふより早く、咽吭をぐつと貫き息たえたり。湊は死骸に取付いて、「コレ八郎、殿樣の御遺言、お尋ね遊ばす御用も有らうに、早まつた此最期。コレなう〳〵」と縋り付き、あなたこなたを思ひやり、かつぱと伏して泣居たる。御臺所は茫然と、歎に心空蟬の、もぬけのごと

そして常ならぬ御顔持、御臺樣のお案じ、どういふ譯かついちよつと、申上げたがよいわいな」と、せけばせく程屈托顔、「何を女の小さし出た、御諫言がお氣に障り、此兵庫を御勘當、御出馬のお供も叶はず、なま面さげて歸つたはやい」「エヽ御勘當とはどういふ譯、何科有つて」と驚く女房、御臺所も御不審顔。六郎は摺寄つて、「御諫言の其子細は」「サレバサ、勝に乘つたる御大將、竹澤が勸にて、鎌倉を責落さんと、逸切つたる御出陣、其意を得ざる御振舞」と、申す詞も終らぬ所へ、間近く聞ゆる轡の音、コハ何事と見る所に、御注進と呼はり〳〵、表御門に馬乘捨て、篠塚八郎重虎、鎧に立矢簑毛と折掛け、眞一文字にかけ付けしが、ハツト計に息切し、悶絶すれば湊は駈寄、「コレ〳〵、氣を慥に持つてたも、八郎なう」と呼生ける。六郎は聲高く、「日頃の勇氣に似合ぬ振舞、後れたるか八郎、卑怯なり重虎」と、呼はる聲の通じてや、むつくと起きれば、「ナウ嬉しや氣が付いたか」と、悦ぶ姉取つて突退けどつかと座し、「深手に弱る八郎ならねど、心せかれし早打に、悶絶せしか口惜や」と、齒がみをなせば六郎は、詰かけ〳〵、「樣子はいかにサ何と〳〵」「されば候我君には、武藏野の御出馬より、勇にいさむ味方の勢、我おとらじと乘拔け〳〵、鎌倉さして責寄する。兼て計りし竹澤監物、江田判官と心を合せ、矢口の渡の舟底に、穴をくり明けのみを差し、今や遲しと待つぞとは、夢にもい

しめてぬる夜の睦言は、つがも内儀の名もおつが辻、家中名うてのぼつとり者。其外お家昵近の、女房娘残りなく、皆それ〳〵の捧物、廣間せましとならべ置き、「勝軍の御壽お目出度存じまする」と、一度に開く口紅や、づらりと竝ぶ裲は、染井の躑躅飛鳥の花、眞間の紅葉に胡枝花寺を、一つに寄せたるごとくにて、花々敷ぞ見えにける。御臺は御機嫌うるはしく、「何れも揃うて綺麗な事、爰では皆も氣が詰らう、奥へいて緩りつと、酒でも呑んでたもやいの。友千代も寢たさうな、乳母も共に」のお詞に、ハツト一度に群鳥の、立つや姿の柳腰、かいどりの裾長廊下、ざゝめき連れて入る跡へ、是ぞお留守の要石、動かぬ胸のしめくゝり、南瀬六郎宗澄、出仕の上下さわやかに、金作の大小も、流石お家の家老職と、言はねどしるき其人品、しづしづと打ち通り、「先以て今日は、勝軍の御祝儀恐悦至極」と相述れば、「ヲヽ六郎か近う〳〵、兵庫が行きやつて其後は、軍の知せはまだないか」「ハア相役の兵庫助、申し上ぐべき子細有つて、軍の場所迄參りしかど、未便も是なし」と、噂取々なる所へ、取次の女中立ち出でて、「武藏野の軍場より、兵庫殿の歸られし」と、いふ間程なく立歸る、由良兵庫助信忠、積る苦勞の黒革縅、差詰りたる胸板や、軍出立を其儘に、しを〳〵として立出でしが、御座を見るより、「ハア、ハア」と計に兩手をつき、指俯むいて詞なし。心ならねば女房湊、「思ひの外早いお歸り、

居る、八幡での働き、流石お家の四天王、伊賀守が子程有る迚、一家中の褒沙汰、ヲ、よい弟を持ちやつた。アレ見や友千代があの氣丈、同い年でも德壽よりは大がらに見えるわいの。兩親の血筋、どちらへ似ても強からう、此若が能い片腕」と、殘る方なき御機嫌に、「ハア有難いお詞。本に夫よ、御家中の内儀達、御祝儀申し上げん迚、お次に控へて居られます」「ヲ、それは皆大儀々々、是へ通せ」のお詞に、お侍女中の案内にて、一家中の妻女達、連て御前へ立ち出づる。思ひ〳〵の島臺や、おとらじと氣を播磨潟、君の御名も高砂や、敵をさつと掃きちらし、首をさらへの尉と姥、五十あまりの年ばいは、流石思案の底深き、井彈正が妻の水木、谷の戸出づる鶯の、笠に縫てふ梅の花、勝色見せし先陣に、心は世利田右馬之助が、宿に殘せし女房お鈴、言はねど薄き辱の、滯なき口上は、立板に水長臺に、富士の裾野の思ひ付、君の名字に仁田四郎、夫も籠れる武藏野に、組んで臥猪の牙よりも、運の月形鎌倉武士、三國一の高名も、時に大島長門が妻、お浪といへど浪風も、治まる武功君が代は、千代に八千代にさゞれ石、巖の上の釣竿は、軍の先生名も高き、太公望といふ人かと、女中は寄つて其譯を、土肥三郎左衛門が、比翼と契る女房お辨、七福神の船遊び、しつかり入れた兵糧を、かつぐ布袋の福祿壽、身をかためたる毘沙門小手、鰕で夷の大敵を、釣寄せて打出の小槌、市河五郎が勇力を、

よ、扇の行方を見屆けん」と、跡をしたうて三重行く空の、上野の國新田の庄義興公の居城とい
つぱ、上は嶮岨の山續き、松の古木の枝たれて、雲なき龍かと疑はれ、下はきり岸峙つて、晴
れざる虹かとあやまたる。塀には矢間透もなく、亂杙逆茂木引渡し、要害堅固に見えにける。
比しも小春中空や、味方の勢の木枯に、敵を木の葉と吹きちらす、武藏野の勝軍御壽有る
べしと、御臺所筑波御前、まだ三歳の德壽丸、乳母が膝にいたいけ盛、お傍の女中立ちかはり、
敵にかち栗熨斗昆布、銚子取々持ち運ぶ。お家の家老由良兵庫助信忠が妻の湊、一子友千代を
乳母に抱かせ、手づから捧げる島臺も、君を祝する鶴龜に、やたけ心の味方の手柄、松に寄せたる
御壽、御前に直ししとやかに、「御勝軍の御祝儀、お目出度存じまする」と、申し上ぐれば御臺
所、「湊か、毎日の出仕大儀々々。殊にけふは勝軍の祝義迚、心の付いた上物。是まで日毎の注
進に、一度も悪い沙汰もなく、十一分の味方の勝、殊に一騎當千の、兵庫助も跡から加勢、氣遣
ふ事はなけれ共、ぐど〳〵思ふは女の常、若や深入し給はんかと、よければようて案じられる」
「イエ〳〵そこはぬからぬ私が夫、勝つて兜の緒をしめる、御用心させませんと、跡から參る程
なれば、殿樣のお身の上、夫の事に案じはなけれど、私が弟の篠塚八郎、まだ年若な氣丈者、仕
損じも有らうかと、是計が心がかり」「イヤ〳〵八郎が手柄の樣子、とくより委しう聞いて

の敵、尊氏を討ずんば、再び生きては歸るまじ。いざ追かけん陣觸せよ」と、勇にいさんで乘出し給ふ向うより、かけ來るは由良兵庫助信忠、かくと見るより引提し、敵の首投捨てて、轡づらをしつかと取り、「コレ殿、最前も此兵庫が、詞を盡し申上げしに、まだ御合點が參りませぬか。エヽ淺間しき御所存、日比に替りし御振舞、天魔が見入れ候な。一旦負し尊氏なれ共、鎌倉へ引籠らば、中々容易責めがたし、一先故郷へ歸らせ給ひ、英氣を養ひ時節を見て、討つて出づるが萬全の謀」と、お馬の口を引返せば、せきにせいたる御大將、「放せ〳〵」とあせれ共、こなたは手强き忠義の一圖。エヽ面倒なと義興公、陣扇にて兵庫が顏、目鼻も分かず丁々丁、打てど擲けど放さばこそ。「ヤア出陣の先を折り、味方の英氣をくじく曲者、敵に一味か二心か、勘當ぢやそこ立され、主從の緣是限り」と、扇を顏へ投付け給へば、「エヽ御勘當とはお情ない、何國迄も御諫」と、又も縋るを鐙にて、蹴飛し〳〵あふり立て、諸軍一度に進み行く。跡に兵庫は呆れ果て、「留めても留まらぬ御若氣、エヽ是非もなき次第や」と、どつかと坐して男泣、譬御勘氣蒙る共、追かけて御諫と、立上がる折こそ有れ、さつと吹き來る飃、木の葉土石を卷上げ〳〵、傍に捨てたる陣扇、倶に虛空へ吹上ぐれば、兵庫は急度眼を付、「アラ心得ぬ此有樣、捨置かれし陣扇、土石と倶に吹上げしは、我君の御身の上、善か惡か何にもせ

なしがたし、一旦の御怒に御身を失ひ給ひなば、誰有つて天子を守護し、朝敵を亡して、公家一統の代となさん。エ、情なき我君や」と、或は怒り或は歎き、詞を盡し理をせむれば、義興公も内裏の首尾、我が胸中を打明けて、物語らんか、いや〳〵、彼に打明け語りなば、行先へ付まとひ、諫めんは必定、所詮決せし覺悟なれば、止めらるゝも六かしと、さあらぬ體にて、「イヤトヨ信忠、夫は皆汝が廻り氣、討死の覺悟とは、思ひも寄らぬ一言、目に餘る敵の大勢、士卒の心を勵さんと、手をおろしたる我働き」「イヤ〳〵いか程に御意有つても、此兵庫が有る内は、一騎立の御働きは金輪際お止め申す。敵陣は此兵庫が、一當當て御目にかけん、君は暫く御休足」と、蓑脱捨て一さんに、敵陣さしてかけり行く。大將の御座所尋ねさがして味方の軍勢、井彈正を始めとして、追々に馳來り、一息ほつとつぐ所へ、己が工を押隱す、惡には智惠の竹澤監物、首二三級引提來り、實檢に備ふれば、大將御覽じ、「ホ、監物、數度の高名手柄々々、軍の樣子はなんと〳〵」「さん候頃日數日の戰にて、勝に乘つたる御勢に、兵庫が荒手差加はり、手ひどき味方の軍配に、勞れ果てたる鎌倉勢、尊氏を始として、鎌倉さして逃のびたり。此虛に乘つて責付給はゞ、敵の大勢皆殺し」と、工を隱す勸めの詞。こなたは固より討死と、覺悟極めし軍なれば、いつの時をか期すべきぞ、「天下の爲には朝敵、我爲には親

馬の尾筒を抓んで引戻せば、「ヤア推參なる曲者、討放さんは易けれど、此義興が乘つたる馬を、引留めんとはしほらしゝ、ならば手柄に留めて見よ」と、一鞭當てて驅出だす。馬は駿足乘人は逹者、踏出す足なみどう〳〵〳〵、鐙の金物から〳〵〳〵、互のかけ聲障泥の音、鎗衘に響く武藏野に、まだ枯れ殘る初冬の、芒刈萱女郎花、亂れ散りてぞ三重もみ合ひしが、きやつもしれ者蹈みとゞめ、引いつ引かれつ爭ふ內、頭巾は脫げて見合す顏、「ヤア其方は我家來、由良兵庫助信忠、ム丶、其意を得ざる今の振舞、南瀨六郞と其方は、我家の政務を任せ、故鄕新田の城を守らせ、妻子を預け置いたるに、城を打捨て來るのみならず、今尊氏を追かけんと、乘出せし此義興が、邪魔せしは所存ばし有つての事か、速に返答せよ」と、以ての外の御怒。兵庫助は義興の、姿を見上げ思はずも、はら〳〵と淚を流し、「君勅命を蒙り給ひ、大將たる御身にて、匹夫の勇を好ませ給ひ、かくかろ〴〵しき御振舞、千斤の弩は鼷鼠の爲に發たずと、申す事は申さず迚もよく御存じ。都て此度の軍の樣子、日々注進の趣にて、とくと思案を廻すに、日比の軍慮に違はせ給へば、必定今度の御出陣は、討死との御覺悟と、睨んだ眼に違ひは有らじ、是非御留め申さんと、御舘には六郞を殘し置き、密に來つて樣子を伺ひ、御所存とくと見定めたり。御氣に障る事有り共、恥を忍び身をこらし、年を重ね日を積まねば、大功は

レサ監物殿、義與が氣を緩すこそ幸、飛かゝつてすつぱりは」「イヤけもない事〳〵、さう早まる故先達ても、吉野で貴樣大しくじり。知る通り力は强し、打物取つては鬼神同前、古今に稀な早業手利」「ハテナウそんなら所詮いけまいか」「サいかぬ所をやるが工夫、釋迦でも喰はせる我等が方便、委しくは此の白紙」と、渡せば取つて不審顏、「何此白紙が思案とは」「ヲヽサ假初ならぬ密事の計略、落ちても人の見ぬ樣に、此白紙に認め置き、水にひたせば皆讀める」「コリヤおそろだ、出來た〳〵上分別」と、點き呀きしめし合はする折からに、又も聞ゆる人馬の音。チツト任せと渡合ひ、二打三打仕組の狂言、迯るをやらじと竹澤監物、返せ戻せと追うて行く。義與公は只一騎、尊氏に近寄つて、一時に勝負を決せんと、駒を早めて駈け給ふ。大將と見るよりも、一度に寄來る鎌倉勢、八方より取圍み、我討取らんと切つてかゝる。「シャ物々しや」と駈向ひ、追かけ追詰切りまくる、神變不思議の太刀風に、吹きちらされし木の葉武者、むら〳〵ぱつと迯げて行く。「ヤア數にもたらぬ雜兵共、うぬらを目懸ける義與ならず、イザ尊氏に見參」と、乘出さんとし給へば、馬は俄に高嘶き、打てどあふれど進まねば、「ムヽ扨は、此しげみに伏勢有りと覺えたり、シャ何程の事有らん」と、進まぬ馬をあふり立て、かけ出し給ふ後より、案に違はず武者一人、鎧の上に蓑打かけ、顏を隱せしがんだう頭巾、馳行く

いかで増るべき、痿まず去らぬ戰に、さしも多勢の鎌倉勢、色めき立つて見えにける。追來る敵を喰留めんと、鎌倉方の侍大將江田判官景連、家の子郎等前後を圍ひ、太刀拔きかざし懸向ひ、手を碎いたる働きに、勝ほこつたる官軍も、少ししらけて見えたる所に、「ヤア卑怯なり方々、竹澤監物秀時是に在り」と呼はつて、判官目懸け討つてかゝれば、家來は主を討たせじと、駈け塞るを竹澤が縱橫無盡に討ちちらせば、叶はぬ赦せと迯げちるを、遁さじやらじと追かけ行く其隙に、江田判官漸々と逃げのびて、味方の加勢を松原に、鎧突して居る所へ、取つて返す竹澤監物、まつしぐらに駈付くれば、判官も駈向ひ、丁々はつしと渡合ひ、暫しが程は戰ひしが、雙方太刀をからりと捨て、互にむんずと引組んで、えいや〳〵と揉合ひしが、傍見廻し起上り、塵打拂ひ小聲になり、「ナウ判官殿其以來は」「サレバ〳〵敵味方と隔たれば、互に書通の取遣計り」「シテ其許の手都合は」「いかにも彌上首尾々々々。初の程は義興めも、中中微塵も氣をゆるさず、サ欺すに手なしと此監物、さま〴〵の忠節顏、今では譜代同前に、心置なく軍の相談」「夫は重疊、兼てしめし合はせし通、いつでも貴樣が討つて出ると、味方は迯る、貴樣は追ふ、手柄にさせて義興に、取入らせんと思ふ故、先程は此判官も、足早に迯げ申した」「イヤモどうもいへぬ迯ぶり、よつ程下地が有りさうな」ハ、、、、とにが笑ひ、「コ

はせて奪うた御矢、主人へ渡せば新田の滅亡。廣言叶く前髪首、さらへ落せ」と切込む刀、柄拳を一握り、「チヽさうぬかせばモウ助けぬ、御矢の盜賊觀念」と、一振ふつて打付けられ、「ソレ遁すな」と下知の下、どつと馳寄る雜人原、引つつかんでは人礫、ばらり〳〵と三重投げちらす。無法不敵の石原逸見、透を伺ひ切りかゝる。身をかはして鐵拳、素頭ぴつしやり、石原藥鑵几あたま、みぢんに碎け逸見傳吾、一度に息はたえにけり。「チヽ氣味よし心地よし。御矢の有所は畠山、都に有らば一大事。かくと樣子を若殿の、御身の上も覺束なし、一先館へ。イヤイヤ〳〵、先づ我君に追付いて、事の次第を申し上げ、思案ぞ有らん」あら金の、土砂踏立つる猛虎の駈、獅子奮迅の勢は、實にも新田の十六騎、其隨一の勇士の擧、父も父たり子も子たり、二代の忠臣篠塚が、武勇を代々に傳へける。

第二

謠月の名所を引きかへて、爰やかしこの鯢波、矢竝繕ふ小手差原、霰たばしる武藏野の、空物凄き氣色かな。新田左兵衛佐義興公、勅命もだし難ければ、今度の合戰は、討死と覺悟極めし軍立、馳違ふ馬煙、太刀の鍔音天地に響き、口を招く魯楊が勢ひ、山を拔く項羽が力も、是には

よく言うた。此所で相果てなば、盗賊の詮議もならず、犬死と成る骸の恥辱、一先此場を立退いて、草を分つて御矢の行方」定めなき身の俄旅、小褄引上げ帶引しめ、身拵する間もなく、引返して二人の牽頭、跡に付添ひ數多の家來、「ソレ討殺せ」と追取卷く。「ヤア合點の行かぬ二人の奴原、扨は御矢を奪取しも、汝等二人に極つたナ。何國の誰に頼れし、サア眞直に白狀せよ」「ヤアちよこざいな詮議だて、引くゝつて主人へ土産。アレ打ち居ゑよ」と聲に連れ、「捕つた」とかゝるを身をかはし、投ずゑ蹴ずゑ踏飛ばし、手をつくして働けど、敵は大勢身は一つ、見るにハア〳〵臺が案じ、助けん方便も女業、群る大勢義岑の、手取り足取り打倒し、既に危き折こそ有れ、篠塚八郎重虎は、主君のお供の後ばせ、かくと見るより飛びかゝり、家來を投退け踏ちらし、「樣子聞く間も足弱連れ、此場を一先落ちさせ給へ、早う〳〵」と見送つて、宮居の前に鳥居立、遁さぬやらぬと家來共、兩足兩腕數十人、押せどしやくれど動かばこそ、にこ〳〵ほや〳〵打笑ひ、「ムヽムヽハヽヽヽうづ蟲めらがほでてんがう、新田の身内に隱れなき、四天王と呼ばれたる、篠塚伊賀守が嫡子八郎重虎、此兩足ははえ拔の、大佛柱を鼯鼠、動かぬ事いかぬ事、助けた迚殺した迚、高の知れたる下﨟共、早く此場をなくなれ〳〵」「ヤア下﨟とは推參なり、畠山入道の郎等、石原丹治逸見傳吾、姿をやつし義岑を、討取る方便の牽頭、一はい喰

物、引たくつて主人へ渡せば、褒美はずつしり。色男でも流石の義岑、あら立てては事の破れ」と、幕を覗いて、「うまいぞ〳〵、例の大酒のとろつぺき、アノ紛れに奪取らん。汝は傍に眼を配れ」「ヲヽサ合點首尾よくせよ」と、小吉は幕へ跡には五作、四方に氣配忍び足、なんなく御矢盗取り、小吉が小聲に、「上首尾々々々。是さへ取れば義岑を、ぶち殺すは手間入らず、片時も早く主人へ手渡し。サアこい」と、逸足出してかけり行く。俄に騒ぐ幕の内、かけ出づる義岑に、取付き縋る臺も倶に、引摺られても放さばこそ、「コレ〳〵申し殿樣、氣相かへてコリヤ何事、なんぞ夢でも御覧じたか、コレ氣を鎭めて下さんせ」「ヤア何事とは、兄義興より預りし、大切の二筋の矢、思ひも寄らぬ紛失。兼て尊氏懇望と聞き、敵方へ奪はれては、味方の不吉我が越度、兄上への申譯」と、差添拔手に取付く臺、「イヤ〳〵放せ」「マヽ、マア持つて下さんせ、ヲヽ道理ぢや〳〵が、コレ、申し、今お果てなされては、誰が殘つて御矢の詮議、兄御樣へ此樣子、申し上げる人もない。もうかう成つた上からは、再び廓へ歸らぬ胸、身を砕いても詮議して、其上で叶はずば、わたしも一所に冥途のお供。死ぬる命は惜しからねど、此御難儀も皆私故、コレ堪忍して暫くの、お命ながらへ野の末、山の奥迄も、夫よ妻よと呼び呼ばれ、一所に居たらわしや本望、思案して下さんせ」と、女心のくど〳〵と、跡や先立つ涙なり。「尤々

やら、はだし參りのかひもなう、けふは出陣なさるゝと、聞いて身も世もあられぬ故、お顏が見たさ逢ひたさに、あの衆賴んで遠い道、來事は來ても大勢の、侍樣方兄御樣の前といひ、物いふ事もならぬ品、どうかかうかと思ふ內、結ぶの神の義興樣、都にお前を殘すとは、粹の上もりヲヽ嬉し。エヽ何ぢやいナ濟まぬ顏して、人の思ふ樣にもない、憎い男」と鎧ごし、「ヲヽいた、つめつても擲いても、こつちの手が痛む計」「コレイナア、エヽそんな機嫌ぢやないわいの。どう思ひ廻しても、一所に行かねば兄上の、御身の上も覺束なし」「アヽ申し〳〵旦那、お前をやつては大夫樣より、此五作がきつい難儀。ヲヽ夫々、大夫樣もよく〳〵に、思召せばこそ傾城の、寐晝ぬ程に思ひ詰、どうぞ今一度お顏が見たいと、屋敷方の女中方が、芝居行か何ぞの樣に、夜の九つからどつさくさ、道は飛ぶやらかけるやら、外八文字も一文字、所にやんだお前の出陣、悅び事の我等が趣向、お敵の旦那を討つてしめる、寄手の大將大夫樣、四方を取卷く此鑓手、亂調に打つ太鼓持、廣げる指の亂杭逆茂木、酒肴兵糧のコレ〳〵〳〵〳〵此提重、幸の幕の內、跡賑はしに呑みかけう、堅い姿のお床入、コレ門出の笑ひ本、サヽヽ作物や乾物ものとは違ふ、生の物を生でお目にかける、サア〳〵お出」と無理やりに、道に弱る色の道、女のよれる神がきに、是非なく引かれ入り給ふ。跡に二人はしたり顏、「兼て望の彼一

共、目出度凱陣待ちまする」「ホヽ聞入有つて滿足々々。今汝にあたへ置く、二筋の矢を心のかため、二張の弓の名を取るな。ヤア〳〵めん〳〵、篠塚八郎重虎は軍勢催促に遣し、此所には有らね共、斯と下知を傳へたれば、追々跡よりかけ付けん。イザ出陣」と仰の內、引出すお召の白栗毛に、ゆらりとめせば義岑は、見上げ見おろす血筋の別れ、武士の盛を吹きちらす、無常の嵐櫻井の、親子の思ひ楠が、名は盤石と堅めたる、義心に劣らぬ義興公、障泥立てたる鐙の鳩胸、隼の翅と駈ける駿足の、跡に隨ふ諸軍勢、飛ぶがごとくにかけり行く。跡に義岑しみじみと、肝にこたゆる同胞の、別に心しを〳〵と、影見ゆる迄伸上り、見送る影も簇の手の、次第次第に遠ざかれば、涙をふくんで立つたる折から、思ひがけなき宮居の陰、どつと上げたる鬨の聲、スハ何者の寄するぞと、傍を睨んで立つたる所に、「ヤア〳〵新田小太郎義岑、見參」と聲かけて、跡を飛ばす駒下駄や、半太夫ゆり上褄の八文字、どんなお敵も弓張の、口元の月や花の顏、戀の臺が寄せかけて、いきとはでとの討手の大將、跡からどや〳〵禿末社、「ヤアそなたは臺、コリヤどうぢや」と、力身し腕も拍子抜け、敵は敵でも憎からず。臺は傍見廻して、「ヲヲあの恂りの顏はいナア。いつぞや廓の別れの時、兄御樣と御一所に、武藏とやらへ軍仕に、いかねばならぬとおつしやつた、聞くと持病の此痞、どうぞいかずと濟むやうと、神々樣へ立願

歸り、禁庭の守護怠るな」と、仰に義岑大に驚き、「コハ兄上の詞、共覺えず、一旦御供申せし某目前怪しき神の御告、彌以て心得ず、片時もお傍を離るゝ事は思ひもよらず、生きるも死ぬるも兄弟一所。但用に立たぬ腰拔と思召しての御事か」と、言はせも果てず、「イヽヤ左にあらず、命を捨つるは君の爲、子孫を殘すは家の爲、先祖源の賴光より傳はりし、水破兵破の二筋の矢、敵足利尊氏も同じ淸和の流なれば、兼て望と聞き及ぶ。參內の折からも、淸忠が支へしかど、君恩の有難さ、某に下し賜はりしは、弓矢の冥加家の譽。戰場に持つならば、若運盡きて兄弟一所、討死せんも計られず、さある時は家の重寶、敵方へ渡さんは先祖へ不孝武名の疵。又心得ぬは坊門淸忠、必定朝敵一味の輩、我々都を出るならば、其虛に乘らん彼等が工、我に替つて君を守護し、必ず忠勤怠るな。天の命數限り有り、若も運命盡き果てて、身は戰場にさらす共、名は末代に暉かさん。汝は都へ立歸り、時節を待つて消殘る、火影のごとく源の、氏の光を暉かせ、南朝世々の忠臣と、末代に武名を上げよ。此詞を用ひずば、未來永々勘當ぞ」と、必死と定めし武士の、口には言はで心には、是今生の別れぞと、さしもゆゝしき御大將、恩愛離別の目の內に、滿つる淚の伏勢を、防ぐ智謀はなかりけり。義岑も勘當との、重き詞に詮方も、淚を抑へて、「ハヽア畏り奉る、勝負は時の運なれば、譬へ敗軍有る迚も、必ず短慮に思さず

の恵を頭に戴き、一戰に討亡し、宸襟やすんじ奉らん爲。ヤアイカニ監物、汝は新參ながら武藏の國の產と聞く、敵地の案内よつく知らん、此度の先陣は汝たるべし、猶も忠勤勵むべし」と、仰に監物頭を下げ、「ハア、有難き御詞、新參の某、大役仰付けらるゝ段、武士の面目身の本望。君の武勇に聞きおぢして、腑腰立たぬ足利勢、味方は一致の逸武者、只一揉に踏破る、味方の勝利疑ひなし。片時も早く御出陣」と、萬卒一度に悦びの、聲に勇の御大將、イザ神前へ御暇賽まうしの柏掌の、音かあらぬか砂煙、ぱつと吹き來る風に連れ、一度に消ゆる燈籠の、皆とこやみの神の告、纔に殘る一燈の、光は薄き武運かと、胸に當りし義興公、所詮勝利はなき身ぞと、極めし上に極める覺悟、心に徹して小太郎も、「あら心得ぬ此不思議、尤火を烈敷なすも風、消ゆるも風とは言ひながら、燈し立てたる萬燈の、一時に消えしは今度の一戰、敗軍との告なるか、御身の上も覺束なし、とくと賢慮を廻らされ、然るべし」と宣へば、竹澤進んで、「コハ義岑公の仰共存ぜず、神力勇者に勝つ事あたはず、何の是式に神の告。今南朝北朝と引分れ、威勢にはびこる尊氏が、峙つたる萬燈を、眞此のごとく、打ち消して、南朝一統の世になさんとの知らせの一燈、目出度奇瑞に候」と、底工有る秀時が、詞を飾つて申しける。義興莞爾と打笑み給ひ、「ホヽよくも祝ひし監物、義興思ふ子細有れば、義岑は只一人、密に都へ立

て行く。いつの間にかはいりけん、障子の內より荒濱軍次、臺を小脇にかい込んで、飛んで出づるを竹澤監物、首筋摑んで引戾し、拔身もぎ取り軍次が首、討落してつゝ立てば、障子開いて義岑公、「ホヽ監物疑ひ晴れた、當座の褒美」と投げ出す一腰、「ハア有難き御惠、昔に替らず御奉公。又も討手の來るは必定、君には早く御歸り、奉公初め路次の御供」「ア、そんならお歸りなさんすかえ、隨分お怪我のない樣に賴みまする」と臺が名殘。「ヲヽ我は裏より密に出でん、監物は表より」「委細は承知仕る」「イケ」「ハア」ハット表をさして三重走り行く。

謠 千早振、神の惠の岩淸水、きねが鼓も聲すめり。新田左兵衛佐義興公、今日出陣の龍頭、鐵形打つたる五枚兜、緋縅の御著長、威有つて猛き御骨柄。同舍弟小太郎義岑、色香爭ふ若武者の、花の姿や小櫻をどし。御供には竹澤監物秀時、其外家の子士卒迄、萬燈の火に映じたる、鎧の金物武の光、實にもゆゝしく見えにける。義興仰出さるゝは、「イカニ旁、此度朝敵足利尊氏、討亡せとの勅諚なれ共、必定今度の一戰は、はか〴〵敷勝利は有るまじ。閫の外は武將の下知、軍の事は臣に任せ、時節の來るを待ち給へと、色々諫め申せ共、親義貞には劣りし器量、卑怯至極と淸忠が惡口、達て諫めば臆するに似たり、先祖の名迄穢さん無念さ。天運未至らず共、正八幡の御利生、源氏を守りましませと、此宮居にあのごとく、神慮を仰ぐ萬燈は、神

を、刃物もぎ取り入道が、縁よりどうど踏落し、「ソレ判官」「心得たり」と刀の背打、骨も砕けとぶち居ゆる。竹澤息もたえ〴〵に、手足をもがき七轉八倒。入道聲懸け、「よい〴〵一思ひに殺さんより、世上の見懲し逆磔、其松に括し付け、夜明けての上成敗せん」「イカニモ左樣」と判官が、ぐつと締上げ猿つなぎ、「夜明けぬ内にいざお歸り、泥坊めは此通、縛つて置けば氣遣なし、仕置は家來に言付けん」「イザ歸らう」と兩人は、したり顏にて出でて行く。始終忍んで立聞く臺、手燭携へ走出で、庭に飛おり漸と、禁解いて耳に口、「竹澤樣監物樣」と呼生ける。息吹返し、「ホヽ臺殿か忝い。我も昔のよしみ有れば、新田方へ奉公せんと、兼々こなたへ頼め共、一旦尊氏へ隨ひし某故、疑ふも尤、一つの功を立てん迚、仕損ぜし殘念や」と、はら〳〵はらとこぼるゝ淚。臺も倶に貰ひ泣、「ヲヽ御無念は御尤、私を娘も同前に、思召して下さります、お心を疑ひて、かういふ時宜は私が科、こらへてやいの」と取縋れば、「コレ〳〵泣いて居る所でない、義岑公お入の事は兩人がけどつたれば、討手の來んも計がたし、早々落し參らせよ」と、詞も終らぬ其所へ、どつと込み入る捕手の大勢、「ヤア〳〵義岑此家に居るをはかり知り、入道殿の下知を請け、荒濱軍次向うたり。恥を思はゞ腹を切れ」と、呼はり〳〵亂れ入る。臺を忍ばせ、竹澤監物、物をも言はずなぎ立つれば、コリヤ叶はぬと大勢が、表をさして逃げ

は義岑が相方、臺と申す女郎をたらし込まんと色々の贈物、樣々に拵へても、こいつち賢き女にて、義岑に心中立、むざと大事も明されず、旁以て難儀至極。其上水破兵破の矢は、武運の守と成る故に、尊氏公も御懇望、これも義興が手に入れば、とかくこつちが皆すかたん。ハテどうかな」と三人が、慾惡無道の思案取々。横手を折つて竹澤監物、「有るぞ〳〵上分別、某は親入道より、新田方の幕下に屬し、方々にて手柄も有りしが、義貞討死の其後は、入道殿の御世話にて、尊氏公へ宮仕、それからの思付」「ムヽ然らばとくと一間にて、示し合さんいざこなたへ」と三人は、打連れ奧へ入りにける。思ひ〳〵の夢結ぶ、座敷々々も子の刻過、一間を出づる義岑公、「ナウ臺、其竹澤監物とやらは、どうしてそなたを其樣に」「サイナ死んだ娘と私が顏が生寫し、娘ぢやと思ふ迚、紋日其外氣を付けて樣々の贈物、とくにもお前へいふ筈なれど、尊氏方の人なれば、どんな方便も計られずと、今迄お耳へ入りませなんだ」「ムヽ今時の人心、むざと氣は赦されず」と、咄の半一間の內、はつたばた付く物音人音、先々こちへと義岑公、障子の陰に立忍ぶ、透間もなく入道道誓、懷劍持ちし竹澤が、腕捻上げ怒の大聲、「我をたらして遊所へ引出し、寢首かゝんず謀、エヽ憎い奴」と捻伏すれば、竹澤無念の齒がみをなし、「汝が首を土產にして、昔のよしみ新田方へ、歸參と工しに、其方便の顯れしは、エヽ殘念や」と起返る

に顯れたり。兩人は近く指寄り、「家内もふせり、娼妓共も寐させ置き、間を隔てたる此座敷、とくとお談じ申し上げん」「ホヽ、兼てより此入道、天下に望み有る故に、坊門清忠と心を合せ、新田足利威を爭ひ、合戰に及ぶ樣に糸を引かせ、楠親子義貞なんども、謀の圖をはづさせ、憤らせて討死させ、尊氏一人に成つたれば、折を見合せ刺殺し、清忠を王位に即け、此入道將軍職、お手前二人を兩執權と思へ共、南朝に有る新田義興、親にも勝る大こはもの、きやつが此世に有る内は、中々大望思ひもよらず、彼楠を湊川へ、無理に追ひやつた其格で、尊氏追討の勅諚ごかし、じれさせて討死さすか、それ迄もなく討取るかと、さま〴〵の計略」「サアそこを存じて此判官、清忠殿としめし合はせ、南朝へ忍び込み、きやつが内裏を出る時、門の上に大石を上げ置き、下には落し穴を仕掛け、踏めば上から落ちる樣に、工夫を以て拵へ置きしに、サアお聞きなされし、兼て義興大力にて、二十五人力有りとの噂故、三十人にて持兼る大石を、あたまの上から落し懸けしに、宙にて請留め剩へ、手鞠か小石を投げる樣に、築地の外へ投出し、此判官が伏勢十三人迄打殺され、近年の大しくじり」「イヤ〳〵そんな事では參るまい。此監物が思ひ付には、弟の義岑め、此廓へ入込みしこそ幸ひ、きやつから取入り一思案」「ヲヽ、其事は此入道も油斷なく、二人の家來を牽頭に仕立てて付置いたり」「ハア此監物

と橋詰迄出て貰ひやんしよ、ちよと下に居て下あれと、此樣なまだるい事で日の短い時の間にや合ぬによ。江戸の喧嘩は、帨巾をかう打懸けて、かう肩を力ませて、何のこんだはつよけめ、人を茶にしあがつた、うぬが樣な癡心漢は、鼻の穴へ鼻緒をすげて、何でも安賣十九文、日和下駄にしてくれべい、いま〱しい置上がれ。ホヽヽヽこんな物だ」と打笑へば、皆一同に打こけて、興を催す計なり。騷の中に中居がさいばい、「とかうする內夜が更けた、モウお休」といふ鹽に、「然らば旦那又明日、大夫樣江戸兵衞樣」「ヲヽ皆大儀だ歸つて休め」「そんならもういなんすかえ」「アイわつちもお暇。お玉殿や、三絃箱頼んますによ」「ヲヽ皆樣ようお出でたさばへ」「アレ小吉ねの又じやうだん、惡事しなさるな」「さるなは妙義の隣なり、りなりの宮へ參らうか、らうかかうかの物案じ、あんじ宜しう頼みやす」と、どよめき連れて立歸れば、義岑公も一間の內、涅槃の床に入り給ふ。一間の內よりぶつつかは、面ふくらせし坊主客、「どいつもこいつも初會だと思つて、餘りむごくし上る。モウ來るか〱と、寢れぬ根附を見る樣に、蒲團の上に待ぼうけ、いま〱しい」と、言ひつゝ傍見廻し〱、相圖のしはぶき二つ三つ。跡より出づる竹澤監物秀時、江田判官景連、有合ふ衾を携へ出で、先々是へと招ずれば、おめず臆せず衾の上、どつかと居りし大入道、尊氏公の執權職、畠山入道道誓とは、言はねど顏

ら取つて、「コレナぬしや詰りんせんよ、わつちが方を打やつて、此中も丁子屋のみな鶴ゐの所へいかんしたを、子供らが見付んしたはナ。見なんし、アノまじめな顔はい。本にあつかましい。餘り馬鹿らしう有りいすによ。ホヽヽヲヽ恥し」と袖覆へば、「ハヽヽコリヤ大夫様出來ました、どうもいへぬ」とそゝり立ち、一度にどつて打笑ふ。「ナント小吉も五作も、閉口か」「イヤモ閉口の段ぢやござりませぬ、閉口次手に此所で、江戸役者の聲色をやりかけ山。江戸兵衛様彈いて下んせ」「是もお江戸に隱れなき、市川の團十郎で申しましよ。市川の三升でせい」「アアコリヤ〳〵、いけもせぬ聲色置にしろ」「南無三寶又付けた。折角つかひ掛けた所をとめられ、痳病にならねばよいが」と、天窓をかけば中居のお玉、「申し江戸兵衛ゐ、お前此中言ひなはつた、きやんとやら、わんとやら、喰付く様な喧嘩の身ぶりが見たいわいな」「ヲヽ又身かへ、久しいもんだよ。私や恥しいによ、モヽヽそんな事たずつと流しさ」「コリヤよからう、所望所望」と口々に、望めば立つて身拵へ、「子供衆、其帨巾取つてくれな」と、いふ間に五作が緣側の、布簾はづして當座の肩衣、「東西々々、此所で京と江戸との喧嘩の身を致し分ます、御神妙に御一覽下さりましよう、其爲のお斷左様に」烟管で枕をかち〳〵。「マア上方の出入はナ、頭巾をかうかぶつて、草履下駄にてかういふ身ぶり、おつな胴聲を出して、コレ〳〵若いの、ちよ

夫様を連まして東山か高尾の紅葉」「イヤ〳〵おれは餘り長逗留、今朝も兄貴義興殿から、大急用をいうて來たれど、またぶら付いて歸らねば、堅い顔で呵つて居やらう」「ハテえいわいな、せめてマア二三日」「コリャ大夫様のが御尤、淋しく成ると歸らうとおつしやる。サアわつさりと酒にしよう。中居衆銚子」と立騒げば、追々出づる中居共、「さつきに言うてやりなはつた、江戸兵衛様が來なはつた、追付爰へ見えるぞ〳〵」都では藝子と名付け、東では踊らぬ時も踊子のすんとして又謙しきは、夫者と町の藍こび茶、物好したる袖裾も引かば轉ばん其風情、義岑公はじろ〳〵と、不思議さうに顔打眺め、「おりや江戸兵衛といふた故、男藝者かと思つて居たりや、コリヤ美しい踊子だ」「サイナ、あの子はナ、此中江戸から登りなはつて、どうすべいかうすべいと、まだ詞が直らぬさかいで、有名は呼ばいで江戸兵衛ねと、仇名計呼ぶはいナ」「ムム夫で聞えた」「ヤ申し旦那、同じ兵衛でも少の事で、助兵衛でなうて仕合でござります」「アイきついおてらしさ。わつちや此間登りいして、まだ勝手を知らないから、江戸詞を言ひやすによ、餘り笑つてくれなさるな」「アイヤおれも上州の新田で育つた故、京の詞はなまけて惡い、ならうなら大夫なども、江戸の詞にしてほしい」「アイお前の折々さう言はんすさかいで、わたしも此間藝子様に江戸詞を習ひやんした、稽古にいうて見やんしよう」と、江戸兵衛が胸ぐ

て十餘人、微塵に成つて死てけり。殘りし者共身の毛立ち、天狗の所爲か魔の業か、こはや〳〵と一同に、跡をも見ずして迯歸る。凡人ならぬ勇猛力、末世に新田大明神と拜れ給ふも　三重　行末は誰が肌ふれん紅の花、案じ過しを枕に語れ。諷ふ一節媚ける、爰ぞ都の色里へ、誰も尋ねて九條の町、井筒が内の居續は、新田小太郎義岑公、遊び勞れし居眠に、大夫の膝を托手の、興を催ほす牽頭の小吉、「コリャ〳〵五作、我小歌ではお目が覺めぬ、昨日の意趣に一番參ろか」「チヲ望ならやりかけう。コレお玉殿、三絃頼む」アイと返事に中居が三絃、しかつべらしく差向ひ、「問ひましよ〳〵」「何でも問はしやれ」「問ひましよ〳〵」「問はしやれ〳〵」「小袖は」「お羽二重」「刀は」「正宗」「坊主は」「鈍才」「お醫者は」「寸伯」「女は」「おもん」「男は」「お安」「ヤア待て〳〵今のは、男にお安とは。サア一盃呑まさにや置かぬ」と、寄つてかゝつてつぎかくれば、「アヽコリヤ〳〵餘り騷ぐな姦しい」と言はれて二人が、「ソリヤコソ旦那のお目が覺めた。コレ大夫樣、お目覺に此大盃で旦那へ一つ上げなされ」「コレ五作子、主樣は風引なさつて、頭痛がするとおつしやつてぢや」「アイヤ〳〵其頭痛の故事來歷、彼慈姑めが、おれよりはお前が毒ぢやといふた格で、風よりは大夫樣。ナウ小吉」「ヲイノ三人に成つて二人が淋しがるといふ、付合の通句の通、人交ずのちん〳〵こつてり。申し旦那、内に計ござらず共、大

殿も叶はず、あくちも切れぬ分際で、矢を望まんとは不敵々々、及ばぬ願」とやり込められ、こたへにこたゆる義興公、無念の眦血をそゝぎ、思ひ詰たる其有様。叡慮何とか思しけん、隆資卿を近く召され、しか〳〵の勅諚有れば、ハット答へて隆資卿、玉座に錺りし二つの矢、恭く敷携へて、階近くおり立ち給ひ、「切なる汝が望に任せ、二つの矢を下し賜はる、有難く頂戴せよ」と、渡し給へば義興公、ハヽヽはつと飛しさり、「家の面目身の冥加、此上や候べき」と、歡び給へば、淸忠は不承々々の佛頂面。君は二人が胸の内、固より知らせ給はねば、「早く朝敵討亡ぼし、宸襟休め奉れ」と、御簾さつとおりければ、諸卿各退出あり。義興公は討死と、思ひ定めし御覺悟、是ぞ内裏の見納と、名殘惜しげに見返り〳〵、猛き心も打しをれ、しづ〳〵御門にさしかゝる。思ひも寄らぬ落穴、踏込み給ふ頭の上、丈に等しき大石の、どうど落つるを身をかため、兩手にしつかと請留めて、エイヤウンと飛上り、「アヽラ心得ぬ此有様、此穴へ踏込めば、とたんの拍子に此石の、上より落つる仕掛の工。扨は此義興を、なき者にせん僞に、佞人共の計よな。ハアをこがましや片腹いたや。譬いかなる磐石たり共、義興が爲には塊同前。去ながらかゝる非常の此石を、内裏に置かんも穢らはし」と、兩手をずつと差しのべて、築地の外へ投げ給ふ。表に扣へし伏勢の、天窓の上へ落かゝれば、何かは以てたまるべき、壓に打れ

皇居を捨て軍を出さば、義詮が京都の軍勢、襲ひ奉らんは必定、其本亂るゝ御大事、此儀は是非に御無用」と、いはせも立てず坊門清忠、「ヤア過言なり義興、官軍少きに似たれ共、和田楠を始として、皇居の守人いくらも有り、汝一人居らぬ迚、御味方事缺くべきか。ム、聞えた〱、軍慮にかこ付け尻込するは、軍が怖いか恐ろしいか、卑怯未練の臆病者。コリヤ綸言は汗のごとし、違背すれば違勅の科、討手に行くか但はいやか、なんと〱」とせつかけ〱、己が工を押隱し、勅諚ごかしのきめ壓狀。義興公胸にすゑかね、軍慮の妨天下の仇、引おろして只一討と、立寄りしが待て暫し、禁裡の騷ぎ君への恐れ。去りながら時節至らぬ今度の討手、拙き負をなすならば、先祖の名をれ家の恥、父義貞伯父義助、楠親子が跡を追ひ、潔く討死し、末代に名を穢さじと、思ひ定めて御前に向ひ、「勅諚の趣畏り奉る、夫について一つの願、先祖頼光より傳はりし、水破兵破の二つの矢、代々源家の重寶たる故、父義貞所持せし所、討死の其後北國より差上げしを、大内に止め給ふよし、何卒下し給はる樣、奏聞願ひ奉る」と、思ひ込で願ふにぞ、清忠卿せゝら笑ひ、「ヤア麁忽なり義興、忝くも二筋の矢は、養由が娘椒女より、汝が先祖頼光へ、夢中に授けし希代の重寶、代々源氏の棟梁たる者是を所持す。汝が父義貞は左中將に任じ、惣軍の大將たる故、矢を所持しても苦しからず。汝は漸く左兵衛佐にて昇

の南朝を見侮り、尊氏押して將軍に任じ、忰義詮を都に差置き、其身は鎌倉に引籠り、四海を幷呑せんず勢、捨置かば御大事、汝を討手に遣すべしと是なる清忠の奏聞、此事勅問有らん爲」と、いとこまやかなる詔。義興はつと袖かき合せ、「同じ清和の流にて、一門ながら朝敵の首領といひ、父の仇にて候へば、尊氏を亡さんと晝夜軍慮を廻せ共、彼が勢四海を覆ひ、味方小勢の此時節、軍を出し候はんは、謀なきに似たり。義興退いて考ふるに、彼が執權畠山入道道誓、高師直師安にも、劣らざる奸曲我儘、己に親しき輩には、功なきに所領をあたへ、疎き者は忠臣をも退ける、是を惡む者多ければ、足利家内亂を生ぜん事遠かるべからず、其時節を考へて楠正儀と心を合せ、京鎌倉を亡さんは、義興が方寸に候。天の時至らざるに只今義興討つて出でなば、御勢少き皇居の守護、心元なく候」と勅答有れば、坊門清忠、「ヤア迂遠き義興が軍慮、足利家の内亂を待つて、謀をなさんなどとは、相手の誤を待たん迚、端の步兵をつく下手象棋、差當つたる理に叶はず。先ずる時は人を制し、後るゝ時は制せらるゝの本文、片時も早く討つて出で、尊氏を亡ぼせよ」と、橫紙破の一言を、聞流して義興公、「ハア詩歌管絃は天上の御玩び、軍の事は武門の職、百戰百勝も、善の善たる物ならず、謀を帷幕の内に廻らし、勝つ事を千里の外に決するは、身不肖なれ共義興が軍慮の奥儀、當時守護の武士少き

神霊矢口渡

楚辭に曰く、身既に死して神以て靈なり、子が魂魄鬼の雄となる。されば國事に死する者、精神強壯武毅長く、百鬼の雄傑たるとかや。遠く古を考ふれば、異國の伯有我朝の、菅家の例目のあたり、武藏國荏原の郡、矢口の村に鎭座まします、新田大明神の御神德、靈驗有共中々に、申すも恐れ大君の、御代傳りて九十九代、後光嚴院のしろし召す、天に二つの日の本や、南北朝と引分れ、都の花の歸り咲、吉野の内裏に座すは、後醍醐帝第七の王子後村上の皇、假の皇居も月移り、爰も雲井の御所作、經營殘る方もなし。附添ひ給ふ公卿には、四條大納言隆資卿、坊門宰相淸忠卿、其外公卿天上人、禮義正しく參列有る。比は延文四つの年菊月半、召に依つて參内と披露して、新田左兵衛佐義興、智仁勇備の御貌、御階の本に平伏す。隆資卿笏取直し、「イカニ義興、汝を召す事餘の儀ならず、父義貞北國に亡び、楠父子討死してより、無勢

神靈矢口渡

庖刀を譏り、祈つて驗無ければ神を誹り、風雨不順なれば天を誹る。誰か能く誹を免れんや。夫が中にも、論語讀を論語讀まずが譏るは、盲人が貧なる目明を如レ誹。盲人にて富貴を取らんか、目明にして貧を取らんか。我は目明の貧を取らんと云ふに、顏氏家訓に學ぶ者牛の如く、成る者は麟角の如しと云へり。誠に學んで行はざるは、論語讀の論語不レ知可レ成。乍レ去古人の狂歌に、

論語讀の論語讀まずはうらやまし論語讀まずのろんごしらずは

宜なる哉學んでならず、九仞の誹を得るとも、牛毛の數にいらまほしき事にこそ。

能なれば穀潰しと譏る。書を讀めば知つた顔とそしり、讀まされば文盲とそしる。根問をすればヘ入るかと誹り、早合點すれば輕はづみと誹る。勤むれば手練者と誹り、勤めざれば氣儘者と誹る。愼めば偏窟者と誹り、不レ愼ば自墮落者と誹る。愛想よければ上手者と誹り、愛想無ければ無愛相と誹り、勇氣なれば一徹者と譏り、柔弱者をばひょり者と誹り、性急なれば我儘者と誹り、性豐かなればあはう者と誹り、利口を口きゝと誹り、言はざれば佞人形氣と誹り、世事賢こければこりこうと誹り、世事疎ければ愚昧者と誹り、淸者をすね者と誹り、濁れる者をばしれものと誹り、富める者を腹ふくれと誹り、貪者を不覺者と誹り、諂ふ者は不忠と誹り、忠を守れば諂ひ者と誹り、孝心なれば贋者と誹り、不孝なれば人非人と誹る。主衰へて從者に被レ譏、親衰へて子に被レ誹、夫貧なれば妻に被レ誹、師懦弱なれば弟子に被レ誹、別當神主に被レ誹、本妻は妾に被レ誹。駕籠舁は乘人を誹り、踊子は女郎を誹り、禿は傾城を譏り、片目が盲を誹り、相撲取は女郎と駕籠舁と川越と後になる見物に被レ誹、大兵大食の罪此時に報ふなり。驛中の馬士は眠る者を誹り、婦人醫者は取揚婆を誹り、天文者は船頭に被レ誹、金借は金かしを誹り、金遣はぬ客は傾城に被レ譏、俳諧師は連歌和歌師に被レ誹、張付師は左官を誹り、淨瑠理語は三味線に被レ譏、謠諷ひは鼓打を誹り、手書が筆を誹り、繪書が紙を誹り、物縫が針を誹り、料理人が

二道の達人と見えて、さしも古今の名將と楠正成も稱美せし、九郎義經を初めとして、源平に名高き良將勇士の戰場の働き、悉く偏く、此軍に何某がかく有りしは武畧に拙し、彼戰に渠が斯る大將と云ひしは文に闇し、斯く曰ふは道に不ㇾ當、斯く計らば必定勝利たるべし抔と、七書の語を引いて、傍若無人に譏れる有樣、恰も張良韓信が肺肝を出でたるが如し。然れども此人治世に生れ合うて、血臭きめに不ㇾ逢、只青表紙を知り、自讃に、疊の上に安坐して大言のみにて、誠の畑水練可ㇾ成。然れども言を工にして誹れば、史記の呂望諸葛を欺く程の元帥と思はるるを、譏る人は皆愚痴蒙士と聞ゆるもをかし。下官が誹草も、彼等が鋪に似たれど、聖賢といへども斯く譏らば譏らるべき哉と、世の能く誹る人に習うて、戯れの筆遊にして、取るに不ㇾ足、文庫の文、見る人目に觸れざれば、野語鄙曲も可ㇾ恥に非ず。元來毀譽褒貶は我黨の常にして、善惡ともに誹らずと云ふ事なし。さればたま〳〵仁義を守れば孔子臭しと誹り、守らざれば物不ㇾ知と譏る。禮讓を守れば空拜みと譏り、守らざれば横柄者と誹る。智を出せば差出物と譏り、謙退すれば不埒者と譏る。信を守れば馬鹿者と譏り、守らざれば不實者と謗り、道理を云へば理窟者と譏り、言はざればうつけものとそしる。廉直を守れば惡堅きと謗る、守らざれば權柄と誹り、儉約を守れば吝嗇と誹り、守らざれば放蕩者と誹る。多能なれば萬能一心とそしり、無

に化けるは、皆狐狸の類なり。釋迦めが魔術をなして仕たるにもあらんか淺まし。勢至上行の二菩薩いらざる由緣も無き日本の人を化さんと、法然又は日蓮と化けて、念佛題目を弘めん爲に思慮を費し勞せしは、末世の坊主共に、不骨折金儲けをさすれば、自然と祖師と末々迄敬はるゝと云ふのみなり。是を濟度と見込し仕事なり。右二菩薩共嗔恚を燃し、互ひに地獄の種を誹り合ふは無益なり。彼を見是を見れば、佛菩薩共に種々の世話有りて、極樂に往生して佛に成り、無量の樂しみを極めんと思ふより、我等はやはり馴染婆がよし。極樂の抹香嗅いは誠の穢なり、何ぞ名聞になづんで極樂の榮花望なし。淨土の七寶莊嚴臺も、安んずる所は膝を容るゝに不過。豈膝を容るゝの易きより、一味の爲に佛と成つて、衆生濟度の苦を求めて、此身を苦しめんや。

(四十) 論語讀

伯夷が淸なるも、淸に僻する譏あり、柳下惠が廉なるも、自己に僻する誹あり、柴は愚に參は魯に、師は僻に由は喭なる、皆其僻する所に謗有りと見えたり。況んや庸人に於てをや、誰か譏なからんや。愚老或時、平家物語の評判せし書を見るに、何人か定かならず。然れ共、文武

淨にして穢無きを神璽の潔白にたとへ、所說不レ可レ得　皆從ニ因果一生といふを、神劍の決斷に比せり。尤能く折合たる理も在るか。如レ斯突合せしならば、何れが佛說か神託か、埒も無き事なり。今と違ひ、昔は坊主が商ひ上手にて、日本の神の道を天竺の佛道に交ぜて、兩部抔と習合して恣にしても、坊主は神の罰も當らず、神職の人何と心得て居るや、大べらぼう。神道は其昔、高の知れたる神代の卷或は日本紀、皆鼻の先計り書いたる日本の恥辱の書なり。佛が社の亭主にて神は出店なり、別當が本店、神主は如ニ出店一心得、別當を尊敬して神主を賤しむは尤なり。實は神道は馬鹿々々敷なり。祈念祈禱も珠數に奪はれ、幣帛は塵拂の如く、名計り大造なる中臣の祓を讀みて門々に立つ。神道者鉦叩き、同心者に叩き立てられ、可ニ口惜一併佛者の如レ說、誠に佛衆生利益の爲、神に成り又僧に生れて、所緣由緒も無き日本人を世話にしてやるは、佛には似合し所行ならんか。佛の法力にて衆生を濟度するこそ本意ならめ、神に化て神威を借り、金儲けを仕樣とは、坊主程大膽なる者は有るまじ。凡神代より已來、人に生れたるも不レ聞、勿論神の佛に化て、佛威を借りて神道を照す例もなし。是等は少し神道は正直な振をして誑すなれ共、他を犯し或道とするの邪曲に勝るべし。元來神は神の道あり、佛は佛の道あり、人は人の道あり。我道に非ざる事をなすは正道には不レ可レ有。況んや佛の神に化け又は人

所にも無き謂れなるべし。然れば題目の神明を書き加ふる事憎有るべし。殊に日蓮も神國に生れたれば、神の御末ならんに、先祖代々の氏神を捨て釋氏に入りたれば、せめて神恩を忘れ間敷が爲に、題目に神號を書き入れたるか。公朝僧正は、日域無縁の身を尊んで、本朝相應の像を輕んずべからず迚、淨衣を著し幣を以て神を拜せしと云へり。日蓮も公朝僧正も同氣を求むるか。併しながら佛者の說に、天照太神宮は、本地勢州安濃津國府の阿彌陀なりと云へり、然れば日蓮宗とは仲違ひの筋なるべし。佛家には、佛は本地神は垂跡にて、佛が神と成つて衆生を利益すと、說法に本地の說あれど、强て牽合附會の妄說なるべし。實に天照太神阿彌陀ならば、神代に佛法を弘め可ㇾ給に、其沙汰無きは、彼賣主坊主の工みなる事明らけし。されば慈鎭和尙は本地垂跡の說をば不ㇾ用、迹を垂るとは何故いふと詠ぜしとかや。神家の書に、六根淸淨といふ物は、常盤大連の說にして、後人の作なる事無ㇾ疑にや。六根淸淨の四文字、先佛語なる事明らかなり。且此祓の天照太神の詫は、大倭姬命傳へ給ひし埒もなき事なり。且舊事記にあり。則ち神詫を釋したる祓なれば、諸法影と形の如しと云ふより以下、皆從二因果一生ずと云ふ迄の二十字は、金剛界禮讃の文の偈にして、不定三藏の作とかや。たはけたる物なり。然るを不ㇾ辨、此偈の中を三種の神器の理と當て解する人あり。諸法影像と云ふを神鏡の理とし、淸

髭と合點して、鬼子母神の千人の子も、鯡の子と云ふ魚の類と心得、子育の利生と云ふも、千人の子を育つる程の功者なれば不レ可レ疑。但鬼子母神は、男女配偶の利益有りと云ふは不審。却つて佛に緣結びの祈願をなす女、貞なるは稀なり。元來男女配偶の事は、父母の計らひ勿論なり。然れ共浮薄淫風の女、兼て思ひを懸し男子に添ひ度願、或は父母の目を掠めて密契せし男と、夫婦に成り度き邪の願も、神佛に祈る事、愚昧の婬婦なれば論ずるに不レ足。元來神佛非禮非義を受け給はず、鬼子母神は邪願を納受するや。殊に邪婬は佛の重き禁戒なれば、鬼子母神私かに佛の制法を犯して、婬風の邪に利益を與ふるか。尤不幸にして緣遠き女抔の願ひは、納受する品に見えて、鬼子母神の堂に、願ほどきの爲に奉納したる女の細工物、且子育の願に上げたる小兒の小袖紅の猿如レ山、又百度參りの男女絕ゆる時なし。何事のおはしますかは知らねども、流行事をかし。近來は堀の內の木偶人も流行事盛んなり。尤觀音不動の木偶人ども、何れも無二差別一、諸願納受祈禱護符護摩、大笑の事共なり。釋迦の思ひ入は如何あらん。夫が中に髭題目に、天照太神宮を始めとして、三十番神を書き加ふる事いかにぞや。元來太神宮は佛法を禁じ給ひ、宗廟に僧尼を禁じ給ふ。然るに題目に神號を書き入れしは甚非禮なり、神明を不レ恐に似たり。但兩部習合の社は、別當僧なれば勿論僧尼を不レ忌、是は肝心の神明なれば、宗廟幾

ずるも陽氣溢るゝも、皆陰陽自然の理なりと云へり。天竺の人迚道理は不レ可レ違。然し鬼子母神長生にて、四十九歳にて陰道不レ絶とあらば、年子にても有るまじ、懐胎十月に不レ足生るゝは常にして、七月八月にて產るゝも希なれば、年子といふにも有るまじ。一產に二子三子產むはまゝあり。四子五子七子を產めるも古記にも見ゆれば、道理とも可レ云。若又鬼子母神禽獸魚蟲の如く、一產に十子廿子產みけるや。若佛家の常語の神通力方便抔と云はゞ、鬼子母神其時未だ神ならず、五道大臣の婦にて凡身なり。縱へ神に成つたり共、神佛に淫欲は不レ可レ有、いかにして千人の子を設けたるにや。鬼子母神夫婦、多子を設くる程の荒淫にて、陰虛火動の無二沙汰一は、無類の大腎張と被レ思ていとをかし。尤千人の子を育つるに、千人の嫗千人の子守抔無くては養育成るまじ。家居も廣からずば、數千人の住居不レ可レ成。尤五道大臣なれば、富貴高祿の族、榮花の人可レ成。鬼子母神子を育て兼ねて、人の子を取つて其肉にて養ひけるは如何にぞや。釋迦の托鉢修行の掌に乘つて持ちし鉢の子なれば、大抵しれた物なり。どうして小兒を鉢に入れしにや。若佛の通力にて、怪しき放品玉の業しぬるや。皆是僞りなり。佛說の怪しきは虛のうそ、神通方便或は過去の因緣抔と、つらまらぬ樣に逃口上斗りなり。方便はいかなる術ぞ、因果因緣はいかなる事ぞと問ひに入りほがに落つれば、一休和尙の言の葉に、隅の月代石の

の內殊に寵愛の末子を捕へ、鉢の底へ隱し給ふ。然るに鬼子母神、千人子あれ共壹人失ひたるを歎き、我今より人の子を不ㇾ殺、却つて守りとならんと誓ひて、釋尊に子を返し給はりねと詫ければ、則ち返し與へ給ふに、訶利帝母迚小兒の守りに懸る、則ち鬼子母神の一名と云へり。由來を聞けば子育の利生あらん左もあらん、千人の子有りとは疑ひ無きに非ず。凡世に子福者と云はるゝ者、十人の子有るは稀なり。貴人に多く有り共、廿人に過るは腹皆替り、一腹一生に非ず。晉の姚才仲は子四拾貳人有り、吐谷渾は六十人有れ共、妾腹にして一腹にはあらず。顏之推賦に、魏の嫗何多、一孕四十、中山何夥、有㆓子百二十㆒といへり。古今稀成る事なりと、五雜俎に見えたり。又博物志に云へる賢都千佛の說は、怪談に近し、信ならず。然るに鬼子母神の千人の子有るは、年子にして千年の長壽あらば設けらるべし。假令長生なりとも、男女交合の道は年齡に限り可ㇾ有。或良醫の云へるは、凡男は陽氣を以て生るれば陽計りにては不ㇾ立、故に中に少し陰氣を含んで、少陰の數にて、八月にして齒を生じ、八歲にして腎氣を生じ齒替り、十六歲にして陽氣盛んに溢れ、交合すれば子を設け、八々六十四歲にして陽道絕ゆ。女は陰氣を含む故、小陽の數にして、七つを以て七月にして齒を生じ、七歲にして腎氣盛に成つて齒替り、二七十四歲にして月水通じ、交合すれば子を生ず、七々四十九歲にして陰道絕ゆ。月水通

米も、飯に炊いて日數を經て、腐れて蛆と云ふ虫わくなり。其如く佛法も澆季に成つて、天仰如きの蛆湧いたり。是歎かはしき事なりと云ひけるに、實に天仰が如き賣僧、佛法を旬り打擲する、惡魔外道の談義を聞いて、共に地獄の釜入となられんよりは、豆藏がおどけ咄しを笑ひ貌する内こそ、卽身の彌陀唯身の淨土可レ成。元來地獄極樂爰を去る事不レ遠と、釋迦の制法十戒を守り、十惡を愼む者は、現世の極樂淨土に安坐し、十惡を犯す者は、現世の地獄に墮落する事無レ疑。然らば十萬億土の、遠き極樂へ往生して金色の佛に成り、不レ耕して百味の飮食に飽き、織らずして綾羅錦繡を衣にし、斧を不レ取して七寶莊嚴の臺に坐し、無量の樂を極めんと願ふ心あらば、大欲にして却つて墮落の基たるべし。依レ之我は、あながち佛に成りたし共、あたはぬ欲をば不レ願、念佛をも不レ執、又題目をもよみせず、兩宗ともに最屓せぬは言迄もなし。時に硯石翁白眼にして曰く、油煙公何ぞ言を食むや、念佛題目の兩派最屓も無しと宣ふといへ共、天仰を誹り給ふは日蓮に荷擔するに非ずや。尤も天仰如き、關通の詞の如き、佛德の蛆虫なれど、渠が類は諸家にも多かるべし。下官或時日蓮宗の信者へ、鬼子母神は子育の神、旁利生有る事を問ひけるに、信者曰く、鬼子母神は佛在世の時、五道大臣の妻にして千人の子有り、是を育つるに、人の子を取りて其肉を以て育てり。釋尊是を悲しみ給ひ、懲らしめんと、千人

佛共法共不レ辨、職分に不似合、あばれ者なり。釋門の徒として菩薩を打擲する事、佛敵とや云はん。佛身より血を出すは五逆の罪の一にして、鬼畜の業外道の所行可レ成。傳へ聞く龍樹菩薩は引正太子に失はれ、伽留陀夷は舍衛商人に被レ殺、目蓮尊者は竹枝外道に亡さる、皆是宿罪怨憎の報なりと云へり。上行菩薩いかなる宿罪ありて、天仰如き外道の爲に、佛體を被レ穢恥を受け給ふや。凡夫ならば直に怨を可レ報に、佛は大慈大悲にして、怨憎嗔恚の惡念有る事無ければ、冥罰を當て給はざるは、天仰が幸ひ可レ成。されども日蓮宗の俗共是を憤りて、天仰が說法の高座へ礫を打つ事如レ雨。天仰が頭に疵を蒙り、辛うじて迯去るといへ共、止む事を不レ得金銀を貪り、於二他所一說法初めし所、已前にも不レ懲、日蓮の像を詈り打擲なせば、又爰にても日蓮宗の輩礫を打ち、或は喧嘩口論に及び、果は公邊の沙汰に成りて、寺院騷動に及びし事、予若年の時見聞せり。斯くて邪僧を招き誤義を說かせ、佛像安置の道場を、天魔波旬の街となす、住僧の心の程こそ拙けれ。當時も天仰が流の水汲談義僧、往々有りと聞きけれ共、未だ日蓮宗の談義僧、法然の木像を打擲したる沙汰の無きは、せめてもの殊勝なり。是を以て淨土宗の談義僧可レ恥事なり。一年尾州より、闕通と云へる淨土宗の僧江戸に來り、本所邊にて說法せしが、當世談義僧も大しやれて、佛は愚痴人を教化する最上の法にて、五穀に比すれば米なり、最上の

基可レ成勿論、念佛の流行ても題目の妨にも不レ成、題目が繁昌すれ共念佛の害にも不レ成、如何なれば妬みそねみ確執に及ぶや。愚痴暗昧の凡俗は論ずるに不レ足、然るに僧の身としては、甚可レ恥事に非ずや。最佛法の本意に違ひ、勢至上行の二菩薩の冥慮にも不レ可レ有と歎かはし。定めて四老の中にも、兩宗の信者も可レ有、今より自讃他毀の邪念を飜へして、彼我の隔て無く、念佛題目雪や氷と名は異なれ共、解くれば同じ谷川の水と、此の如く和順して、念佛なり題目なり共口に任せて唱へ、勢至上行二菩薩に便り、手を引きて寂光淨土に往生し給へと。

時に油煙公莞爾として曰く、誠に先生の宣ふ如く、日蓮淨土の二宗は、犬と猿智恵の族、良もすればいがみ合うて、口業の罪を犯し、地獄の種を植うるこそ悲しけれ。夫が中にも殊に甚敷は、先年天仰と云へる僧、日蓮宗を誹るを以て名を照し、高座の上に日蓮の木像を置いて、小僧と呼ばはり、飽く迄詈り恥しめ、剰へ扇を以て打擲する有樣、提婆達多が釋迦を打ちけるも斯くやあらんと、身の毛竪ちて淺ましく、心有る輩は爪彈して憎みけり。元より天仰が談義は、衆生濟度の爲ならず、賽錢備米を貪り、徒らに後家を引き入る術とは乍レ言、三衣を著し高座に上りて、虚にも佛の眞似を大盜人坊主、佛戒を犯し惡言を吐くのみならず、凡僧の身を以て菩薩の化身と詐り、尊者の木像なま擲する事、上下尊卑の禮を不レ辨、放逸無慚の惡僧なり。諺の

を能く呑込み、器に隨つて法を說き、近道からだまし込み、彌陀の名を唱へたり、又は法華經の題目を唱ふれば、罪業悉く消滅し、現世にては祈禱となり、病厄を除き壽福無量にして、來世は極樂淨土に生れて、紫摩黃金の佛と成り、九品蓮臺に安座し、伽陵頻迦の舞遊を見物して、思ふ事なく泣く事無く、常に名に負ふ極樂世界に往生する事、念佛題目の功力に寄る抔と、無跡方偽りにて、姥嚊の耳に入り安く、然も六字七字にして、覺え安く唱へ安く、馬士船頭競ひ組の愚知無智の大べらぼう、婬れ歌の替りに謳ひ、腕に彫物して、自然と念佛の緣となり、托鉢乞食の者と成り、皆念佛と題目の德に浴して世を渡る者、幾百萬ぞや。依て去兩宗に歸依の大馬鹿共、草に風を加ふる如くなり。是を以て日本六十餘州、淨土の寺拾四萬廿ケ寺、日蓮宗の寺八萬三千廿ケ寺、餘宗は兩宗の十が一にも不及と云へり。以て念佛題目廣大無邊の、たはけ者あれば有るものなり。斯くて一派の宗門開きつ、法然は勢至菩薩とやらの再生、日蓮は上行菩薩の化身として、倶に衆生濟度の方便に、穢土に生れて愚痴無智の凡夫を思ふ儘にだまし、無造作に念佛題目の弘まりしは、兩坊主の働きなり。然るに兩宗の僧侶共に、只念佛題目を唱へさへすれば佛と成ると心得、惡を止め善を修する事を外にして、佛の禁戒に背き、互に仇敵の如く誹り、甚だ我慢偏執にして、勢至上行の面穢しなり。然れば此族も誹謗の罪あれば、堕獄の

自讃他毀は佛の十重禁戒の制法と聞えしに、いかなれば淨土宗日蓮宗、互に念佛題目の勝劣を論じ、倶に誹謗の罪を犯すや。元來佛法の源は釋迦の一統にして、同じ流の法水を汲みながら、水波の論あらんや。古歌に、

分け登る麓の道は多けれど同じ雲井の月をこそ見れ

雨あられ雪や氷とへだつれど落つれば同じ谷川の水

愚老元來佛法の甚深微妙は知らざれ共、此歌の心を推量するに、分登る麓の道は多けれどと云ふは、八宗十宗と分れたれ共、至れる所は彌陀の淨土可レ成。最此唯心の淨土に赴く近道、甚難所にして容易に越ゆる事難し。即ち佛の四十二章經に說き給ふ、殺生偸盗邪淫妄語綺語惡口兩舌貪欲嗔恚愚痴十惡の難所なり。此嶮難切所を能く愼しみ凌ぐこと無レ恙越えざれば、唯心の淨土に至る事決して不レ叶。衆生は此嶮難に行き惱み、跌いて此惡穴に陷る者不レ少。唐の白樂天行路難の詩に、

行路難非レ水非レ山。只在二人情反覆間一。

と云ひしも、此難所可レ成。依レ之諸宗元祖たるもの、惡道に陷る凡夫を導き、唯心の淨土に至らしめんと思ひしが、道披き取々に教化する中に、法然と日蓮と云ふ馬鹿坊主、末の衆生俗性

め戦死しけるは、長命の甲斐あり。彼の小角、葛城山にて松葉を食し、密呪を持して幻術を顯すと雖も、正直中道の神國に不二相應一、終に日本を去り異國に渡る。喜撰法師は宇治山に入りしが、終に雲に乘り飛び去るの類は佛者の僞なり。能因法師が歌にて雨を降らせ、菅公の御歌に梅の飛びたるは、誠に天地の動したる僞なり。總て奇妙は皆僞なり、是を可ㇾ知。只奇妙々々と云うて俗を誑すのみなり。つら〳〵思ふに、和漢仙術流行せしと見えたり、今捨てられて、世一統錢術を學ぶなり。去れば仙家の子母錢も、日濟貸の錢術に落ち、壺公が壺中の樓觀も、飴賣のからくりとなり、西王母が桃も、棒手振の籠に在り。松江の鱸も南樓の鯉も、肴賣の生洲荷に有り、錢術を以てすれば忽ち爰に來る。其外唐物の品日本にあらざれ共、錢術を以てすればㇾ不至といふ事なし。浦島が契りし蓬萊の仙女も、女肆に有り、魚鶴仙が鶴より早き四ッ手あり、張伯鶴が浮木より早き猪牙舟あり、是皆錢術なり。白晝に人の腰に附きし巾著を切るは橋の錢術なり、賽を投げて乞目を出すは博奕打の錢術なり。其外四民色々の錢術有り、算ふるに無ㇾ暇。彼王質が類は、途中にて狐にばかされたる心地ならんとは可ㇾ笑。

(卅九)　宗論八

一局の碁終らざるに、王質が持ちし斧の柄朽ちしかば、驚きて家に歸れば、已に七世を過ぎしといへり。盧生が黄粱一睡の夢よりも敢果なき有樣可レ憐、されば古詩に、

人說仙家日月遲　仙家日月轉堪レ悲　誰將二百歳人間事一

唯換二山中一局碁一

誠に王質仙境に入りて、千年を經て閑をなすは、長生甲斐可レ有に、只一局の碁を見る内に七世を經たりしは、長生をせしには非ず、壽命を縮むるに等し。浦島が蓬萊に入りて、七日經るといふ間に七世を送る、剩へ仙女に貰ひし玉手箱を開きて、忽ち老衰して、百年の齡を只七日に促したる、王質同日の趣にて、いと哀なる有樣なり。七世とはいへ共、大略卅年を一世といへば、王質浦島が世は凡貳百拾年なるべし。武内大臣の三百貳拾餘歳は、然も身體健にして、六朝に仕へたるは、生ながらの仙と可レ云。仙法の靈藥を服したる沙汰をも不レ聞。趙の廉頗は、年八十歳に及びて、米一斗程肉十斤を喰ひければ、天下の諸侯是を恐れて、敢て趙の界を不レ犯と云へり。然れ共仙藥を服したる無二沙汰一。元來命の修短身體の强弱は天性にあり、假令仙道を學んで長壽を保つ共、武内廉頗が如く天下に功無きは、王質浦島の如く、馬鹿に名を擧げて益なし。三浦大助八十九歳にて、賴朝の爲に討死し、齋藤別當實盛は、七十歳にて鬢髭を墨にて染

も、豈神仙とならんや。博物志に曰く、丹水石穴は蝙蝠の大なるもの例多し、百歳なる物の集る時は倒れ懸る、腦重きが故なり。是を取つて乾干にして、末にして是を服すれば神仙ならしむと云へり。是又大なる僞にて信ずるに不レ足。書言故事に、塵世の外におこり出るを神仙なりと昔人云へる事有り。世に豈仙人あらんや、悉く妖妄耳と云へり。然れば山林に遁れて名利を避けて、喜怒哀樂の情無く、思按に勞せず、疎食を喰ひ色情を絶し、思ふ事無く、晝は草木を友とし、夜は鶴下に見ぬ世の人を友とし、光陰の移るをも不レ知、如レ斯の境涯とならば、自ら長壽可レ成。され共莊子、上壽百歳中壽八十歳下壽六十歳、病疲死喪憂患を除き、其中口を開きて笑ふは、一月の中三四度に不レ過のみと云へる如し。山庄の樂し共苦し共、色替らぬ松風の音無きにしも非ず、商山の四皓も終に塵世に歸り、松葉茯苓を服し、霞を飲み氣を呑み、飛騰する術有りし一角仙人も、旃陀羅女に被レ欺通力を失ひ、後漢の費長房も、壺公の仙道を授くるの術を得るといへ共、彼一ッの病難レ止。久米の仙人も女の脛に忽ち墮落し、四海の龍神を禁錮一ッの符を得て、是を以て人に祟をなす百鬼を制服せしが、其後鬼の僞に其符を盜まれ、却つて百鬼に被レ殺しと云へり。是仙は德を修せざるのみならず、方便も未練の仙ならん、いとをかし。殊に可二一笑一は、晉の王質と云ふ樵夫、山中に入り、仙人の碁を圍むを見て居たるに、未だ

いて至らしむ、一ツの木の根と成る、師大いに喜んで火に投じ是を薫ず、未だ熟せず、たま〳〵糧盡きて山より下りて米と化す。師門より出ると、水大に漲りて還る事を不ㇾ得、徒飢うる事甚し。烹る所の氣を聞けば香美なり、徒終に是を食ふ、三日にして食ひ盡しぬ。時に水落ちて師還る、其徒已に飛昇す。又維楊と云ふ所に壹人の老叟有り、常に衆の酒食を擾る。一日衆を邀へ具を治む、丐者等手に盤を持ちて至る、蒸せる小兒と蒸せる犬也。衆嘔噦して不ㇾ食。道士懇ろに請へ共不ㇾ從。則ち歎息して自ら是を食ひ、既に盡して、其餘りを諸丐者に分ち與へて食はしむ。衆に謂つて曰く、是千歲の人參枸杞なり、求むる事甚だ難し。是を食ふ者白日に天に登る。諸公の延遇を感ず。依つて相報ず。然るに食せず、信なる哉仙方の難き事と、云ひ終つて、群丐化して令童玉女と成つて、道士を擁んで上天す。夫此二事、或は是にあへども知る事能はず、又は是を知れ共食ふ事あたはず。弟子及び丐者、心無きを以て是を得たり、豈命に非ずやと云へり。尤も人參枸杞は良藥にして、千年を經ぬれば、是を食して生を養ひ、壽命を可ㇾ延事不ㇾ可ㇾ疑。此二物を食して弟子登仙し、丐者令童玉女に成つて、天に昇るといへる類は怪談なり。葛洪が抱朴子に曰く、仙の要は忠孝和順に、信を以て本とすべし、君德を不ㇾ修して仙法術を務むるは、長生する事を不ㇾ得と云へり。然れば無德の丐者、千年の人參枸杞を食したりと

り劣るべし。費文程が鶴を舞すも、鼠の三番叟より劣り、琴高が鯉に乗り、呉猛が車に乗りて海を渡るも、女に乗りて子を拵へるよりは次なり。張□が雞を切りて蝶になし、初平が石を打ちて羊となすも、豆藏品玉に同じ。仙術何ぞ怪しむに足らんや。長生又益なし。彭祖が八百年生きる間に、四拾九人の妾五拾四人の子を失ひ、愁に逢ひしは、長命故恥多しと、莊子が云ひしも宜ならずや。顏回不幸短命なりと雖も、德行彭祖が下に出でず。然れば身死して英名不レ朽を仙と可レ言か。釋名に、老いて不レ死を仙と言ふといへ共、豈老いて不レ死者あらんや。元來生あれば死有り、孔子も死生命ありと宣へり。命は天數にして、强ひて長壽を不レ可レ求。されば長生の仙藥を服して、却つて紅鉛金石の毒を發し、非業に死する者無きに非ず。凡仙法を學ぶ者穀を不レ食、木の實草の根を食し、或は霞を喰ひ氣を呑んで、生を保つと云ふは異むに足らず。世に五穀を不レ食、菓を食し水斗りを呑んで命を保つ者、往々ありと云へり。蛇蛙三冬は土中に蟄居して、氣を食して不レ死、況んや仙人韜息胎食の術、導引の修養、外丹内丹の良藥を服せば、長生もすべし。五雜俎に、千年の人參の根は人の形となり、千歲の枸杞の根は狗の形をなす、中夜の時出でて遊戲す、煮て是を食へば必ず地仙と成る、然れ共二物固に逢ひ難しと傳ふ。女道士師弟二人、深山の中に居る、其徒出て井畔に汲む、道に一の嬰兒を見る、其師に語る、師抱

赫々として萬世に朽ちず。是を以て離倫絶類の英雄たる事を可知。巧言は德の賊なり、邪僻の見を以て猥に譏る事勿れ。

（卅八） 僊人

昔唐土に仙人と云ふ者有りて、無限齡を保ち、奇妙なる術をなしたるを、書に著はし畫に書きて翫ぶを見るに、或は鶴に乘りて空中を翔り、劒に乘りて海を渡り、鯉に乘つて瀧に登り、或は形を吹き出し、又は瓢簞に駒を出し、石を打ちて羊を出し、羅を切りて蝶とし、水を洒とする、其術尤奇なりといへども、戯術に似たり。人是を學んで、或時は御咎有つて身を亡す。彼は狐狸の妖怪にして、毛虫の仙とや云はんか。されば世に狐を使令して、則ち術を行ふ者あり、俗に是を飯綱と云ふ。座敷を忽ち海となし、源平西海の軍船の形勢を顯はし、矢叫び鬨の聲を發す。壺中の天地も奇なりとするに不足。或は跣にて猛火を蹈み刃を渡るは、上利劍のつるぎに乘つて海を渡るも難しとせず。或は紙に乘りて虚空を翔り、天の川の魚を取つて歸るは、黃鶴仙人が鶴に乘りて空を翔るも微笑すべし。又は形を變じて鼠となり、鐵拐己が形を吹出すも物の數ならず。況んや張果老が瓢簞より駒を出すは、見せ物にするならば、馬の籠抜よ

大木と成るに及んで、斧柯を用ふるに勞して無レ功、終に討死せしは誰が爲ぞや。子孫の爲と云ひ、不忠不義勿論なり。彼稻葉氏が堀田正俊を刺殺せしは、身の爲子孫の爲に非ず、忠義一途にて、戰死よりは猶難き忠死なり、是至忠勇猛の振舞なり。依レ之是を見れば、正成稻葉氏に不レ及、嗚呼忠臣なる哉稻葉氏、あゝ惜しい哉正成、功なく討死して、多年の忠孝一時に失ひけるこそ遺恨なれと歎息すれば、樗皮子忽然として曰く、油煙公の正成を誹るは、莫邪を鈍とし鈍刀を利とするが如く、正成衆に先んじ官軍に屬し、僅の城郭に楯籠り、小勢を以て東國の大軍を欺きたる勢ひに誘はれて、官軍に屬する者廣大なり。尤も義貞は朝敵の根を斷つといへども、源は正成なり。既に漢の高祖の三傑、張良蕭何韓信を一つにせし元帥たる事、云ふに不レ及。元より君を見限りて、淸忠を怨み討死せしと云ふは、甚だ僻事なり。士は可レ死時に死せざれば、死に勝る恥有りと云へり。正成討死して、武名益高からざれば、君不德にして、淸忠外を亂し准后內を破り、聖運終に傾かん事歷然たり。正成討死せずんば、義貞の如く君に被レ捨て、百戰の功忽ち空しくすべし。正成可レ死時を知つて討死を遂げしは、智有り勇有り。元來最期に臨んで、嫡子正行へ遺言に、至忠金鐵の志は日を貫く事、太平記を讀んで感涙に咽ばずと云ふ事なし。德を子孫に殘して三代の節義を守る。然らば正成死すといへ共不レ死、湊川の石碑に、武德精忠

の身にかゝりて、至つて重き身なり。藤房世を遁れて、鼎足一ッ缺けたりといへ共、新田楠の兩足全うして君安泰なりしに、正成討死して、官軍は流に棹を失ひたる心地して、終に帝吉野に潜幸有り、義貞は北越の鬼となり、尊氏は巷に落ちたる物を拾ひし如く天下を掌握せり。楠存命ならば、豈尊氏に天下を奪はれんや、いと口惜しゝ。凡討死は、敗軍の味方を助けん爲に、或は君の命に替らんが爲に、一人踏止り討死するは古今勇士の本意とせり。されば佐藤繼信同忠信が、義經の爲に忠死し、上山六郎左衛門、師直が爲に討死せし類は、一死を以て大功を立てたる忠臣義士なり。正成が討死は、清忠を恨み君を見限り、可レ死時と覺悟して、常に替り血氣の勇を振ひ、敵味方の目を驚かし、花々敷討死を遂げたるのみにて、尊氏兄弟の中、壹人なりとも討取らざれば、君の爲に忠死に非ず、却つて味方の弱りとなりたる、不忠の討死と云はんか。正成笠置にては、合戰の習にて候へば、一旦の勝敗は必ずしも御覽ぜらるべからず、正成壹人存命と聞召されなば、聖運を開かせらるべしと思召し候へと云ひしに違ひ、君を捨てて一死を輕んじけるは、言を食みたるに非ずや。又太平記の評には、正成兼て尊氏が朝敵と可レ成事を未然に悟りたりと云へり。然らば正成尊氏と會しける時、謀略を廻らして討果し、兩葉にして朝敵の根を斷つべき事なるに、空しく默止たるは、死を顧みて忠義を忘れたるか。果して

倉を亡し、忽ち天下泰平に歸しける故、帝船上より還幸ありて、再び御位に卽かせ給ふ。然ればは是又正成が言を失ひたるに非ずや。又楠が釣塀藁人形等の謀、古今の美談なりと雖も、良將の好んで可爲に非ず。小敵をも不侮と云へり、況んや大敵をや。是敵を愚にする謀にして、必勝の良策に非ず。殊に藁人形の謀は、唐土にて敵を欺きし謀にて、新に正成が肺肝より出でしに非ず、然らば奇とするに不足。又建武に、尊氏筑紫より大軍を引率して帝都へ攻め上る。天皇正成を召して、急ぎ兵庫へ馳向ひ、義貞と力を合せ防戰すべし、と勅定ありしに、正成奏しけるは、小勢を以て機に乘つて懸る大軍と戰はゞ、必定味方可討負と奏しける所に、坊門宰相淸忠に被拒、忠言を不被用を憤り討死せしは、私の怒に公を忘れたるには非ずや。元來淸忠は軍慮に闇く、管見を以て、したり顏に僻事を司るを知りながら、正成再應の諫奏せざるはいかにぞや。淸忠如きの人に掠められ、口を閉ぢしは無勇。剩へ藥に遮られて、怒に堪へず討死せしは勇なし。少しきに忍びざる時は、大謀を亂ると云へり。大將は恥を忍び難きを避け、命を全うして終の勝利を本意とする計事を不辨正成には非ず。帝不德にして忠諫を用ひ給はず、小人の言に迷ひ給ひ、聖運開き給はざる事は、今始めて見えたる事に非ず、既に藤房諫奏をして退きたり。元來藤房正成義貞は宮方の三傑也、如鼎足朝家の存亡は此三人

（卅七）正成

正成は、卅一代敏達天皇五代の後胤、井手の左大臣諸兄公廿四代の孫、橘正遠が次男なり。宅邊に楠樹あり、仍つて姓とす。志貴の毘沙門の申し子たるに因つて、楠多門兵衛と名乘る。後に河内守に任ず。性寛仁にして武徳誠忠、凡日本開闢より古今獨歩の元帥たり。其戰功擧げて不レ可レ計、末世の諸葛孔明と被レ稱、湊川の石碑に英名を照し、千歳不朽誰是を誹らんやと、不レ覺感涙を催しければ、油煙公微笑して、先生も楠公贔屓なるや。尤も正成は古今絶倫の良將なりと雖も、聖賢の誹を以て誹る、學の趣意たり、何ぞ渠を洩らさんやと、云ひて申しけるは、正成初めて、後醍醐帝笠置の皇居へ被レ召し時奏しけるは、天下の草創の功は、武略と智謀との二ツにて候、若勢を以て戰はゞ、日本六十餘州の兵を以て、武藏相摸の兩國と戰ふ共、勝つ事を難レ得と云ひしか共、義貞小勢を以て、僅廿日の間に鎌倉を攻め亡し、然も奇計妙策を用ひたる沙汰も不レ聞、然らば正成言を失ひけるに非ずや。又奏しけるは、合戰の間にて候へば、一旦の勝負調ひ難しと御覽ぜられ候べし。正成一人未だ存命と聞し召されば、聖運を可レ被レ開と思召候へと云ひしは、高慢自賛の詞にして、然も後醍醐帝聖運を開きしは、楠が功には非ず、義貞鎌

尊氏が爲に亡びたるは、兩將の至忠天の照覽に洩れたるが如し、神明何ぞ冥助あらずや。若神明の明鑑に洩れなば、佛何ぞ利益あらざるや。若佛の兩眼に洩れなば、何ぞ閻羅王尊氏を掴んで無間地獄へ投入れざるやと訇る時、兎毛先生莞爾として云はく、顏回不幸短命にして、盜跖富みて長壽なり。倩々世間を觀るに、世に善人と云へる人の、生涯貧にして窮し、飢寒に苦しみ、或は不圖災來り、不慮の辱を見、或は子を先立、或は親族に別れ、然も短命にして、剰へ難病を受け、風雨雷電して、世俗に業人と誹らるゝ者あり。義貞正成は此類ならんか。又世に惡人と呼ばれて、一生富貴にして歡樂に誇り、惡をなせ共災に逢はず、又酒色に耽れども無病にして年を終り、然も臨終正しく、葬送の時に後生人と褒めらるゝあり、尊氏此類か。されば尊氏は暴惡を以て、一旦天に勝つといへども、積惡の餘殃子孫に及びて、武將の名のみにして武威を臣下に奪はれ、或は弑せられ、又は追はれて邊土にさまよひ、天下一日も穩かならず。終に天誅此に至つて亡びたり。義貞正成不幸本意を遂げずといへども、積善の餘慶子孫に及んで、今正成の血脈列國の諸侯たり。元より義貞の英名連綿として四海を照らし、萬代不易の御代と共に、盡る期あるべからず。是豈天私あらんや。尊氏が功を遂げしは、柔よく剛を制するの謂ならん。

して聞召されけん、御遊のをりからに、義貞を召されて天盃を賜はり、勾當内侍を此盃に付けて勅諚ありしかば、義貞日頃の志を遂げて限なく悦びしが、頓て迎取りて寵愛淺からず。是よりして軍慮に怠り、尊氏に勝つべき軍の圖を外せし事數度に及びしも、内侍に暫の別を惜みける故とかや。是偏に帝叡慮淺うして、大將に美女を賜はり、傾城傾國の禍を招せ給ふこそうたてけれ。然しながら義貞、好色なれども其惡き事を知らば、何ぞ色欲に身を果さんや。しからば、義貞を亡せしは、尊氏に非ずして勾當の内侍なるべし。古語に、美女は命を斷つ斧なりといひけんも、宜なる哉。恐るべし愼むべし。

（卅六）、尊氏

尊氏は清和源氏の嫡流、足利讃岐守貞氏の次男にして、尊氏の功は清盛頼朝より輕くして、罪は又相均と云へり。其罪悉く士武太平記に記せし事顯然たり、因りて是を略す。大塔宮を弑し奉る一事を以て、其惡を知るべし。元來尊氏は、性柔弱にして智勇なし、舍弟直義が邪智姦計を以て、准后を迷はし帝を欺く功を以て重賞を貪り、朝廷の衰運に乘じて己が逆意を企て、自然に膝下へ轉び掛りたる天下を取りて、然も家名十三代相續ぎて、忠臣義貞正成は、却つて逆臣

越後守に任じ給ふとかや。然ば義貞功にほこらず功を施し、事を積みて其賞を求めずと、本文の心に叶ひたる、至忠の武臣なり。されば官軍に屬せしより已來、始終忠義の志うごかず。尊氏朝敵となつて逆威を振ふに及んで、義貞節刀を賜はり、官軍の總大將として、數萬の軍兵を引卒して、專ら忠戰を勵むといへども、後醍醐天皇不德に因りて、天下の武士朝家を怨んで、尊氏が逆意に與して、凶徒益強大にして、官軍は日々に減じ、剩へ帝は尊氏の詭謀に欺かれしかば、義貞數戰の功忽ちむなしく成りて、遂に帝都を發して北越に落行きしが、猶も忠義金鐵の如く、朝敵退治の謀に心を委ね、尊氏が黨類と數々戰ひて、武勇を振ふといへども、天運時至らずして、延元二年七月、越前國黑丸の戰に、流失の爲に落命せらる、時に生年三十七歲なり、嗚呼命なる哉。さしも頼みし宮方の柱石碎けて、官軍闇夜に燈の消えたる心ちして、涕泣せざるものなし。惜しい哉義貞、蓋世の智謀有りといへども、其行一失の瑕瑕、末代の譏を遁れず。去れば建武の始に、義貞大内守護の折から、勾當の内侍を垣間見しより、戀慕深くして已む事を得ず、媒を求めて一首の歌を贈る、

　我袖の涙にやどる影だにも知らで雲井に月やすむらん

内侍此歌を見て、いと哀なる氣色に見えながら、叡聞を憚りて手にだにふれざりけるに、如何

世良田の領主にて、一族郎等皆々小身にして、其勢僅百五十騎に過ぎず。是を以て鎌倉の大敵を挫かんと思ひ立ちしは、古今無雙の勇將なり。尤さつそく越後國の一族、二千餘人にて馳せ來り、續きて甲斐信濃の源氏、其外近國の武士、馳せ加りて多勢となり、是に依つて義貞は龍の水を得たる如く、大に武威を振ひて、不日に鎌倉を焦土となしぬ。是を以て見れば、賴義父子の東夷を平らげ、義經兄弟の平家を亡したる功は、物の數ならず。然れば義貞は先祖に勝れし名將、忠臣英雄と云つべし。然るに後醍醐天皇、諸將に忠賞を行はれけるに、足利尊氏六波羅を亡せしを第一の功として、武藏下總常陸三ケ國を賜はり、同舍弟直義に遠州を賜はる。是兼て尊氏、帝御寵愛の准后に賄賂を贈り、內奏して恩賞を貪りしとかや。次に義貞は、鎌倉を亡したるを、第二の功として、上野播磨兩州を賜はり、舍弟義助には駿河國を賜はる。勿論軍功の賞其功に當らざれば、義貞の老臣共甚だ憤り罵りけるは、尊氏が僅に籠の如くなる、六波羅の探題を討ちしと、當家の小勢を以て、鎌倉の強敵を亡したると、同樣に忠賞有らんさへ口惜しかるべきに、尊氏を以て第一の功とし給ふは何事ぞやと、口々に申しけるを、義貞聞きて、元來我に不義なし、他家の不義は云ふに及ばず、後代取沙汰有るべしと、更に愁の氣色なし。帝此由を聞し召され、義貞に一理有りとて、子息義顯を召して越後國を賜はり、則ち

れば、一向善く遁るなるべし。

(卅五) 義貞

義貞は淸和天皇の正統にして、新田六郎太夫朝氏の子、氏光の嫡男なり。幼年小太郎と號す。元弘の亂に官軍に屬して、大塔の宮の令旨を賜はり、朝敵追討の旗を上げて、大に武威を振ひ、北條高時を始め、一族郎等悉く鏖にしける其有樣、雪に湯するが如く、火に水を投ずるが如く、兼て楠正成と示し合せ、日本六十餘州の兵を集めて武藏相摸の兩州に對すと云へ共勝つ事を得難しと云ひし鎌倉の强敵を、僅二十日の間に攻め亡し、忽ち天下泰平に歸せしめ、後醍醐天皇伯耆國船上より還幸あり、再び帝位に卽き給ふ。是を以て鑑るに、むかし伊豫守賴義の嫡子、八幡太郎義家、奥州の貞任宗任を征伐有りしも、九年を經て亡し、武衡家衡を討ちしも、三年を經て平らげ、蒲冠者範賴判官義經平家追討も、二年を經て功を遂げたり。元より東夷は少奥州羽州、兩所に威を振ふ逆賊なり、平家は西海の浪に漂ふ落人なり。去れ共容易に亡びずして數年を經たり。況んや高時は、時政が代より數年天下の權を執りて、武威を振ひ四海を呑んで、一族郎等皆關八州に蟠く。然も各弓馬劍術に達したる勇士なり。義貞は僅に上州

ては則ち君に忠あり、退いては佛に忠有りと云へるも宜なる哉と、しきりに感歎しければ、見石翁から〳〵と笑ひ、先生また藤房を贔屓し給ふや。藤房忠臣なりといへども、君を諫めて善道に歸らしめずして、終に身退きしは、本分に叶へるのみにして、眞忠の振舞に非ず。往昔甲府宰相綱重卿の近臣、根津宇右衛門、君を諫めて手討になるといへども、猶も忠臣の英魂死しても滅せず、其夜より平日の如く小袖上下を著し、御前近く顯はれ、諫言數日に及びければ、さしも猛勇の綱重卿も、其忠烈を感じ給ひ、善道に歸したまひ、根津が靈魂を神と崇め給ふ。則ち根津權現是なり。且宇右衛門諫言して、君を善道にせしめしは、誠に古今無雙の忠臣なり。藤房何ぞ死を以て深く諫め、君を善道に歸せしめざるや。傾くを見ながら、扶けはせで身を遁れしは、一己を安んずるのみにて眞忠にあらず。隱逸傳に、藤房進みては則ち君に忠有りといへるは許すべし、退いては佛に忠有りと云へるは、藤房においては本意にあらず。元より神國に生れて、神の御末の朝廷に仕へて、黄門侍郎の位に居る身を、釋門に入り、先祖數代の血脈を絕し、釋迦の氏族となりしは、不孝の甚しきに非ずや、あゝ惜しい哉。藤房さばかり賢才有りて、忠孝を無にして何の益か有らんや。され共能く名利を避けて隱れしは、今の世の盜人坊主とは甚しき分ちあり。今の僧は女を犯すを第一とし、世を貪るは俗よりつよし。彼等から見

へじと世を遁るゝは、良岑の宗貞、顯基の中納言、吉田兼好が類なり。色欲に迷ひ、一念發起して遁るゝは、遠藤武者盛遠、齋藤瀧口、北條時頼が類是なり。或は最愛の女に別れて世を遁るゝは、花山法皇、大江定基が類是なり。或は男に別れて世を遁るゝは、大磯の虎千代、熊野勾當内侍、或は男に捨てられ世を遁れしは、室の遊女宮城、祇王祇女横笛が類なり。或は父母に別れて世を遁るゝは、平三郎貞近、白拍子微妙の類是なり。或は名利を厭ひ世を遁るゝは、開城皇子、藤房高光、(脱文)後長門新文、佐藤憲清が類是なり。或は世に捨てられて世を遁るゝは、惟喬親王、建禮門院、平判官康頼が類是なり。或は恥を見て世を遁るゝは、信濃前司行長、若狹少將勝俊が類是なり。殊勝なる振舞と云はんか。然しながら無住禪師の歌に、

遁世の遁も時代に書き替へんむかしは遁る今は貪る

實に宜なる哉。遁世者の遍照が元慶寺の坐主と成り、僧正に補せられ輦をゆるされ、又文覺が神護寺の住職と成り、上人と唱へられし類は、實にや世を貪る盗人僧なるべし。花山法皇の四の君に通ひ給ひ、兼好が成忠が女と密契せしは、淫を貪るなるべし。其外にも遁世の名のみにて、和歌に迷ひ藝に迷ひ遊び、世上に浮游して專ら名に走り奢る輩、枚擧すべからず。藤房のごとく遁れ、再び世を顧ず、山林に隱れて生涯を終りたるは希なり。扶桑隱逸傳に、藤房進み

數度に及ぶといへども、曾て聞屆け給はず。藤房諫むべからざる事を知つて身退き、洛外北山の石倉に趣き薙髮せり。此處も猶都近しとて、一首をのこして行方しれず、

住み捨つる山も浮世の人訪はゞあらしや庭の松もこたへん

其後藤房の在所を知る人なかりし所に、暦應の頃、新田義貞の臣畑六郎左衛門時能、越前國鷹巢山にて、藤房に似たる桑門を見て歸り來り、斯と語りければ、一條少將行尹、時能を作ひ、彼所へ行きて見るに、いつしか跡を隱して、石上に和歌を殘せり、

こゝもまた浮世の人の訪ひくれば空行く雲に宿もとめてん

少將是を見て、疑ひもなく藤房の手跡なりと、落涙しけるとかや。其後藤房は、和州芳野を逋り、便りを求めて洞院實世に書を寄する中に、

君が住む宿のあたりを來て見ればむかしに濡す墨染のそで

實世是を見て、是藤房の筆なり迚、叡聞に達しければ、勅して近國を尋ね求むるといへども、知れずとかや。世に貧賤にして老衰し餘命なく、或は病身にして出世の頼みなき身だに、捨てがたき浮世なるに、況んや官祿等倫に過ぎ、才德人に超え、齡もいまだ不レ逮レ盈人の、父母妻子を捨てたる事情むべし。是を以て古今桑門の有樣を見るに、或は恩遇の君に別れて、二君に仕

房は常州へ配せらる。正慶に朝敵高時亡びて、建武に主上復位し給ひ、藤房も歸洛せり。四海の逆浪忽ち鎭りて、公家一統の世に返りて、京都靜謐になりしかば、いつしか主上華奢逸遊に耽り給ひ、先づ大內裏造營有るべしとて、諸國の地頭へ二十分一の功課を懸けられ、或は鳳闕の西二條高倉に、馬場殿とて離宮を建てられ、常に御幸ありて、歌舞蹴鞠の間には、弓馬の達者を召されて、競馬笠懸を叡覽有つて興じ給ひ、政事向は准后の口入にて、賞罰正しからず。斯くて元享以來戰功有る輩へ、忠賞を行はるべしとて、洞院左衛門督實世を上卿に定められけるに、忠有るは功を賴みて諂はず、又忠なきは媚を以て上聞を掠めければ、事正統に非ずとて、頓て召返されて、上卿を改めて藤房にぞ命ぜられければ、忠否を糺し淺深を分けて、廉直に沙汰せんとしけれ共、准后に便りて、內奏祕計によつて、只今まで朝敵たりし者共、安堵を賜はりて、忠なきも數ヶ所の所領を賜はりければ、藤房諫めかね、病と稱して奉行を辭みけり。其頃雲州の住人、鹽谷判官高貞が方より、希代の駿馬を進奏す。主上則ち叡覽有りて、我朝には天馬の出たる例を聞かず、朕が代に當りて、求めざるに此良馬出來る、吉凶いかにと御尋有りしに、洞院相國公賢申しけるは、是吉事にあらず、房星の精馬と化して天の心を蕩かすと申せば、吉事に非ずと奏聞す。此時主上逆鱗の御氣色付きて、御遊も止まりける。其後猶直言

太平記等に見えたり。誠に古今稀なる廉士なり。去れども東鑑には、青砥左衛門が事曾て見えず、左ばかり善政を行ひし名臣、實錄に洩るゝこそ怨なれ。然しながら青砥が、十文永く滑川に朽ちん事を歎きしは、程子の賢慮に同じき振舞と云へども、日本六十餘州にて、日々六道錢とかで土中に朽ち、或は國々の靈窟に參詣の者、賽錢に投げ捨つる錢幾ばくならん。青砥是を制禁せざるは、彼大佛を鑄崩して世を賑したる、松平伊豆守信綱の大智より見ては、滑川の十文は瑣細の沙汰にして、唯世俗の耳目を感ぜしめ、一己の譽を得るのみにて、天下の爲には大功ならず。然ば青砥、信綱の賢才には及ぶべからず。去れども大庄八ヶ所賜はりても請けず、三百貫の賄賂を返したる潔白の振舞は、上古末代比類なき善なるべし。か樣の善行東鑑に記さゞるは、青砥が不祥と云ふべし、惜しい哉。

（卅四）藤房

藤房は萬里小路大納言宣房の長男にして、後醍醐天皇の寵臣なり。性忠純にして志節あり、博學强記にして、正四位中納言に進む。元弘に主上東夷の難を避けて、山州笠置の城に籠らせ給ふ。藤房及び舍弟季房等隨ひ奉りしが、終に逆臣の爲に落城して、主上は隱州へ流され給ひ、藤

らざる青砥左衞門を賞翫すべしと示さるゝと見て夢覺めたり。時賴則ち近國の大庄園八ヶ所、自筆に補任を書いて青砥に與ふ。藤綱見て大に驚き、今何事もなくして、萬貫に及ぶ大庄園を賜はりけるやと問ひければ、夢想によつて宛行ふ由を答へしかば、青砥聞きて、然らば一所をも得こそ賜はるべからず、且は御意の所歎き入り候。若し某が首を刎ねよと云ふ夢を御覽候はゞ、咎なくも夢の如く行はれんや。今報國の忠薄うして、生涯の賞を蒙らん事、是に過ぎたる國賊や候まじとて、則ち補任を返しける。又或時、德宗領に沙汰出來て、地下の公文と相摸守と訴陳に番ふ事あり、理非辨論して、公文が申す處道理なりければ、奉行頭人等、德宗領に憚りて公文を負しけるを、青砥一人權門にも恐れず、理の當る所を委細に申し立て、終に相摸守を負しけり。公文不慮に利を得て安堵しければ、其恩を報ぜんとや思ひけん、錢三百貫文を俵に納めて、後の山より潛に青砥の邸の內へぞ入れにけり。青砥走つて是を見て大にいかり、沙汰の理非を申し付くるは、相摸守殿を思ひ奉る故なり、全く地下の公文を引くにあらず。若し引出物を取るべくは、上の惡名を申し留ければ、相摸守殿よりこそ悅びはし給ふべきなり、沙汰に勝ちたる公文が、引出物をすべき樣なしとて、一錢も用ひず、悉く持返させて遣しける。自餘の奉行頭人も此事を聞き、おのれを恥ぢける故に、聊も理に背きたる事なし。既に時賴記

にて尿をせば、少しなりとも潤ふべきに、水の餘りて流るゝ川中にて尿せしは無益なり。去れば先日守殿の御法事に、鎌倉中の智徳備はりたる名僧、身貧にして飢寒に苦しむ輩数多有りしに、彼等には供養し給はず、無智無徳にして金銀米錢に飽き滿ちたる、破戒の坊主共に供養有りしは、眞實の佛事に非ず、川中にて尿せし牛に同じからずやと申しければ、各感じて時賴に達しければ、申す所道理なり、奥床しき男なりとて、頓て召出して、評定所の引付の列とし、靑砥左衛門と申しける。或時藤綱夜中に出仕しけるに、火打袋に入れたる錢十文を滑川へ取落し、大きに周章て、其邊の土民を雇ひ、五十文の錢を出し、松明十把求めて、是を點して終に十文の錢を尋ね得たり。後日に是を聞く人、十文の錢を尋ねんとて、又五十文の錢にて松明を買ひしは、小利大損なりと笑ひければ、藤綱聞いて、夫ぞ愚なり、世の費を知らず民を惠むの心なき人々なり。墜す所の錢十文は、只今尋ねずば、滑川の底にて朽ものとなるべし。某が松明を買はせし五十文の錢は、永く民の家に留まりて失ふ事なし。我が損は民の利なり、彼と我と何ぞ差別が有らんや。彼此六十文の錢を一をも失はず、豈是天下の利ならずやと云ひければ、始笑ひし面々、舌を屈めて感じけるとかや。又或時時賴鶴ケ岡八幡に通夜したる曉の夢に、衣冠正しき老翁枕に立ちて、政道を直くして世を久しく保たんと思はゞ、心私なく理に闇か

壹人連れて、三年の間諸國を廻ると云へり。去れども此事東鑑には見えず。然るに北條時賴記太平記等に記して、婦人兒童の能く知りて世の美談とす、勿論正說なるべし。誠にさばかり政事に心を委しは、類希なる賢臣なり。然しながら大學に、君子は家を出ずして敎を國になすと有れば、時賴賢德あらば、自然と其德四海に及ぶべし。何ぞ執權の重職を負ひながら、遠山波濤を只二人步行しは危し、是も又過不及の振舞なるべし。

（卅三）藤綱

藤綱は上總の國青砥の鄕主、大場十郎近鄕が末孫、青砥左衞門藤滿が末子にして、妾腹の子なれば、父の寵愛も兄に劣りしかば、出家にせんと、十一歲の時眞言宗の寺に遣し、弟子と成りしが、如何なる旨にやありけん、二十歲の年還俗して、青砥孫三郎藤綱と號す。行印法印と云ひけるを師とし學問しけり。斯くて藤綱二十八歲の時、北條相摸守時賴、豆州三島明神へ參詣せし折から、彼藤綱、片瀨川にて牛の水中に尿しけるを見て、あはれおのれ、守殿の御法事の風情したる牛かなと笑ひけるを、時賴の士是を聞いて、いかにさは申さるゝやと尋ぬれば、青砥答へていはく、此日數日雨降らず、田畑枯れて百姓のかなしむ折からなれば、あの田畑の邊

興じけるとかや。質素儉約を專ら行ふとはいへども、天下の執權たる者には、過不及の振舞なるべし。此とき時頼致仕の身といへども、政務に口入し、將軍家も最明寺の第へ度々渡御有りし事、東鑑に見ゆれば、さばかりかすかなる住居とも見えず、元より夫々の役を勤むる家人もあまた有るべし。然らば時頼自ら銚子土器携へずとも、近臣に命ずべきことにや。殊に宣時を呼びに遣したる下部あり、何ぞ夫に命じて肴を求めさせざるや。宵の間にも有れば、下々の熟睡すべき時分にもあらず。平日は兎もあれ、今宵は主人の方へ客來あれば、各起きて用事を承るべき事なり。皆々寐て搆はざるは、主人を蔑にせし不屆ものなり。夫を時頼、却つて彼等を勞はり、呼び起さゞるは、慈仁と云はんか婦人の仁と云はんか。當時武家は勿論町家にても、人を召仕ふ程の者は、夫々主從の禮は亂さず。時頼の家風の如き不作法なる振舞は有るまじ。且又其節、時頼隱居といへども、政事に拘はる重き身なり、夜陰の折とて、客と差向に有らんは、安に居て危を忘るゝとや云はん。宣時無二の心友たりとも、義時が近臣の爲に横死しける事、近くは北條光明、三浦光村が如きの變往々あり、愼むべき事ならずや。諸人に儉約を示す爲にもあれ、天下の執權北條時頼、斯る振舞はいかにぞや。其上諸國を廻り、隱れたる惡を尋ね埋れたる善を糺し、理世安民の政を行はんと、廻國修行を思ひ立ち、二階堂信濃前司

權たり。母松下禪尼は賢女の譽あり、時頼若かりし時、禪尼の許へ行かるゝ事有りしに、禪尼は煤けたりし明障子の、破れたる所計を自ら切張し、即ち時頼に儉約を示されし事、北條時頼記徒然草等に見えたり。去れば母の賢徳を受繼ぎ、專ら儉約を元とし奢を禁じ、善道を行ひければ、世擧つて賢人なりと稱せり。建久八年十一月廿三日、最明寺において落飾して、法名覺了坊道崇と號す、戒師は宋朝の道隆禪師なり。時に三十歲。此時剃髮の者多し、是時頼に無二の志を顯はすなるべし。時頼の子幼稚ゆゑ、北條武藏守長時名代として、執權の事を勤め、北條左馬頭政村連判す。然りといへども、皆時頼が旨を請けずといふ事なし。斯くて弘長三年十一月廿二日未の刻、時頼最明寺の北亭において卒す、時に三十七歲。此時にも哀傷止みがたく、髮を切除けしも多し。依レ之國々の口々へも出家制止の觸あり。時頼執權十一年、落髮の後七年、都べて十八年、政道正しく天下無爲なり。誠に世に類なき賢佐なり。然しながら徒然草にいへるは、時頼宵の間に大佛宣時を招けるに、武藏守參りぬ。時頼手づから銚子杯を持出でて、此酒を獨飲まんも殘念なれば招きたり。肴こそなき、他人は靜に寐たらん、さりぬべき物や有る、尋ね給へと有りければ、宣時紙燭を燈したづねけるに、臺所の棚に小器に、味噌少し有りしを見出し、是ぞ尋ね得たると申しければ、事足りなんと、心よく數獻に及び

て參り給ふ御體を見れば、高年の白髮の俗形にましまし、御裝束は分明ならず、御前に畏みて侍べり給ひしに、御髮長く白くして、御丈長と同じかりけり。又御殿の内よりも前の御聲にて、世の中亂れなんとす、暫く時政が子と成りて世を治むべしと仰せ出されければ、唯と稱して御座ぞと思ふ枕に、夢は覺めにけり。此事を思ふに、義時は彼の化身にや、其子泰時迄も凡人にあらずといへり。是一笑するに堪へたり。元來八幡大神は應仁天皇におはしませば、御子孫の皇祚をこそ守らせ給ふべけれ、何ぞ武内大臣をして、御子孫の天子を惱まし奉る、逆臣義時に再生なさしめんや。論ずるに足らず。妄言を吐きしは、北條に媚び諂ふ奸愚の族の所行と見えたり。然るに著聞の作者是を記して、後世を迷はし僞を傳ふるはいかにぞや。又泰時が歌に、

　世の中に麻は跡なくなりにけりこゝろのまゝの蓬のみして

是荀子觀學の篇、蓬麻中に生ずれば扶けずして直しと云へる詞に、同じく詠じたる歌なり。泰時が心を麻として、世人を蓬と見しはいとをかし。誠に巧言徳を亂すの聖言の如くなるべし。

(卅二)　時頼

時頼は泰時が二男、北條修理亮時代の二男にして、相摸守に任じて、頼嗣宗尊二代の將軍の執

綱を遣され、防禦の方便致すべきに、信僞を問はず向ひ給ふは甚だ不可なり。以來如斯の事有るにおいては、殆ど亂世の基なるべし。又世の誹を招くべしと申しければ、泰時答へて曰く、申す處然るべし。但し人の世に有るは親類を思ふが故なり。眼前に兄弟を殺害せられん事、豈人の誹を招くに非ずや。其時には定めて重職詮なからん。武道には爭でか人品に依らんや。唯今朝時敵に圍まれん事を聞き、他人は小事に處するが、兄の思ふ所は建曆承久の大敵に逢ふべからずと云ひければ、是を聞く者皆感涙を流し、盛綱が諫言泰時が陳謝、其理何れの方にかおらんやのよし、是を決せずと云へり。是又我僻見を以て論ぜば、盛綱が諫言理ならんか。泰時が執政の重き身として、兄弟の小事にあわたゞしく評定所を明けて、卒爾に馳せ行きしは輕忽なり。泰時斯くて非常の事あらん時は、柳營を守護し、諸士の騷動を鎭めて下知を致すべき身なり、何ぞや、弟の小事に公の事を忘るゝは不忠なり。盛綱に諫められて、人の世に有るは親類を思ふ故なりと云ひしは、私を重んじ君の事を思はざる不忠の志、既に詞に顯れたり。是を以て泰時が日頃の善行は、皆私の爲にして、聊も君に忠なき表裏の佞人と知るべし。然るに古今著聞集に云はく、誰と聞き侍りしやらん名を忘れたれど、一人八幡に參りて通夜しけるに、夢中御殿の御戸帳を押しひらかせ給ひて、誠にけだかき御聲にて、武内と召されしかば、畏まり

有のものに米を借るに、泰時法を出しけるは、來年世上豐年ならば、本物計を借し主に返納すべし、利分は我添へて返すべしと定め、面々の借狀を取置きて、所領有る人には約束の如く本物を返させ、我方より利分を添へて遣し、貧者又病人には皆免して、我所領の米にて借し主へ返しけるとかや。是を以て世俗は泰時を賢人と稱しけるとかや。然れ共過讃なるべし。兄弟家督配分するに、惣領少し取り舍弟に多く與ふるは、民間にまゝあり、是を爲すに何ぞ難からんや。又飢饉の時、富家の米穀を貧者に借りさせ、泰時利分を出し、或は本物ともに我方より返し遣したる事も、凶年に飢民を救ふは、國主領主の常なり、若し泰時己が所爲の善事を、將軍家の仁德より出でたりと披露して、諸人に君恩を忝うさせば、誠に賢人なるべきが、將軍家を蔑にして、己が慈仁の名を顯して諸人の心を取り、その恩に感じさせて我に歸伏させ、益威を强うし家を榮えさすべき爲に、小利を捨てて大利を得る方便にして、君の爲になす善事にあらず。豈泰時賢人ならんや、佞人と云ふべし。又或時泰時が弟朝時が館に、惡黨押入りて騷動しけるよし、泰時聞くとひとしく、評定の座より直に彼所に走向ひし所に、朝時は他行して、留守居の士惡黨を搦捕りて無事に鎭りければ、泰時路次より歸りたる時に、盛綱諫めて曰く、重職を帶し給ふ身なり、たとひ敵國たりとも、まづ使を以て其左右を聞き計り給ふべき事か、盛

なければ聞くきけば都の戀しさに此里出でよ山ほとゝぎす

斯く御製ありしより、此所には郭公鳴かざるよし。又葛田の池の邊に御遊の折から、松風吹きて蛙の聲かしましければ、

かはづなく葛田の池の夕たゝみきくまじものは松風の音

斯く詠じさせ給ひけるより、此所蛙の聲も發せずと云へり。情なき鳥蟲すら、天子の御歌に感じて聲を發せず。泰時御歌に感ぜざるは、鳥蟲にだにも劣れり。是をもつて鏡月が歌に感じて命を助けしといふは、慈仁の意を賣る佞謀たる事明らかなり。實朝横死の後、義時が計にて、左大臣道家の三男賴經を鎌倉へ請じ、將軍と仰ぎけるが、賴經少二歳なれば、政子名代として政事を聽くと云へども、天下の大小の事共、皆義時が心の儘に計りけり。是よりして北條代々、儲王攝家の幼主を以て將軍とし、成長に及んでは、事を左右に寄せて是を廢し、又幼弱なるを代として、北條一人威を恣にせり。かくて義時積惡の餘殃終に身に報い、近臣深見三郎といふ者に刺殺されたりとかや。泰時は父に似ず、其性無欲にて專ら善政を行ひしかば、世人賢人と稱す。去れば義時横死して、家督を配分しけるに、舍弟朝時重時以下に、多く所領を與へて、泰時は僅に末子の分限ほど領せり。其後寛元元年天下飢饉の時、諸人借書を調へ判形を書き、富

ひ、生捕られて既に誅せらるべき所に、
勅なれば身をば寄せてき武士のやそ宇治川の瀬にはたゞねど
斯く詠じければ、泰時大きに感じ、死罪を宥めて遠島に流しけり。然れば歌にて罪を遁るべく
ば、歌人は何程も詠ずべし。殊に彼は僧の身として戰場に趣きしは、破戒の悪僧なり、何ぞ速
に誅せざらんや。是偏に泰時世俗の耳を感ぜしめ、慈仁の名を賣る手段と見えたり。實に泰時
和歌を感じて惻隱の心有らば、何ぞ後鳥羽院の御歌に感ぜざるや。配所へ趣き給ふ折から、雲
州大濱港に著御し給ひ、供奉の勇士に暇賜はり、歸路の折から、御歌を國母七條院、并女院修
明門院へ贈らせ給ふ、
たらち女の消えやらでまつ露の身を風よりさきにいかでとはまし
知るらめやうきめを三穂の浦千鳥なく〳〵しぼる袖のけしきを
誠にいと哀なる御歌なり。いきとし生けるもの、親子夫婦の間程わりなきものはあらじ。況ん
や一天の君として、御母御后に別れ給ひ、萬里の波濤にさすらひ給ふ、御心の内思ひやられて、
恐れながら御いたましく、感涙を止め難し。泰時御歌に感ぜざるは、誠に鬼畜木石也。又後鳥
羽院、配所より郭公の御歌に、

再三違勅の逆臣なり。普天の下何れ王土にあらずと云ふ事なし、縦令頼朝軍功の賞に與へられし所領なりとも、夫は私なり、勅命あらば先渡すべき事勿論なり。義時が暴惡は論ずるに足らずといへども、泰時世に賢人と稱せり、何ぞ父を諫めて王命に隨はしめざるや。若故なく長江倉橋の地頭を立たしむるに忍びずんば、先達て和田畠山が所領、其外仁田梶原等の功臣を盡して、其領地闕所の地と號して、義時父子是を領す。然らば其領地の内を配分して龜菊に與へて、院の叡慮を宥め奉り、父の逆意を鎭めなば、忠孝全き賢人たるべきに、爰に至つて賢人の振舞を知らず。剩へ父義時が逆意に隨ひ、院の討手として上洛し、大軍を以て官軍を亡し、其上一院後鳥羽院を隱岐國へ流し、土御門院を土佐國へ移し、新院順德院を佐渡國へ配し、一院の御子雅成親王を但馬國へ流し、頼仁親王を備前國へ流し、その外公卿數多、或は誅し或は流し、當今順德院の御子懷成親王の御位を下し、高倉院の御孫守貞親王の御子、茂仁親王を卽位せしめしなり。是義時が計らひなり。斯る惡逆無道の振舞は、上古末代其例を聞かず。其むかし平相國清盛惡逆といへども、後白河法皇を鳥羽の離宮へ押籠奉るのみにて、遠島にはうつさず。元より後鳥羽院を始め奉り、何れも桀紂が如きの惡逆にもあらず、何ぞ武臣として斯る惡逆の振舞せしぞや。然るに此節生捕多き中に、淸水寺の住侶鏡月法師、官軍に屬して宇治の手へむか

依つて後鳥羽院御在位の時より、北條が天下の權を取りて恣の振舞、王位の衰ふるをも憚らず、よつて主上逆鱗ましまし、鎌倉をおとし給はんと思召立たれ、北面の士の外に西面の士を置き、勇士を召集め給ひしに、其頃信州の住人仁科次郎盛遠父子、宿願ありて紀州の熊野へ詣でける折から、後鳥羽院も御參籠有りて、盛遠父子を叡覽有つて、西面の士になされしを、義時傳へ聞き、關東恩顧の者として、許されもなく院中に仕ふる事心得ずと、大に忿つて仁科が所領を悉く沒收せり。盛遠迷惑して甚だ歎きしかば、院より義時方へ院宣を以て、返し與ふべきよし仰せ下さるゝといへども、義時曾て承諾せず。是偏に己が理窟を立て、君を蔑にする違勅の罪人なり。其上攝州長江倉橋等二ケ庄を、召仕はるゝ龜菊といふ白拍子に賜はりけるを、彼庄の地頭是を渡さず。院又義時方へ院宣を以て、相渡すべき由を兩度迄仰せ下されける所に、義時申しけるは、諸國庄園地頭の事、上代はなかりしを、後白河法皇、賴朝平家追討の軍賞に、日本總追捕使になされし時、諸軍勢其功によりて得たる懸命の地を、さして科なきに、今義時が計ひとして、開け退けとは得こそ申すまじ迚、更に聞き入れざりければ、院益〻逆鱗有つて、終に北條退治の御企に及び、承久の亂となれり。尤院妓女に所領を賜はるは、甚だ僻事にして、義時が申す所理ありといへ共、これたゞ己が爲に諸士を謀る奸曲にして、益〻君を蔑にしたる

山重忠父子を殺したる、獸心の所行を始めとして、大惡十四ヶ條、太平記の評に見えたり。其外佞奸邪曲の振舞計るべからず、誠に前代未聞の逆臣たり。始め賴朝を聟にして、賴朝といふ良犬に、平家の狡兎を獵し盡させて、終に時政天下の權を奪ひ取るべき奸謀を深く胸中に祕し、口に甜言を吐き、腹に劍を研きけるは、牡丹花下の睡猫の、意舞蝶に有りと聯ねし詩の風情、いと怖ろし。

（卅一）泰時

泰時は北條遠江守時政が嫡孫にして、北條右京太夫江馬小四郎義時の長男なり、武藏守と號す。時政蟄居して義時執權たり。元來父時政に似て、兩面二舌の佞臣にして、不善の行ひ多き中にも、賴家の子鶴ヶ岡の別當公曉を謀つて、實朝を殺させ、又公曉をば卽時に殺して、其上賴朝の弟阿野法橋全盛の子、阿野冠者時元をも誅戮せり。時元の母は時政が女なり。然れば義時には子に同じき甥を亡し、賴朝父子三代にして、源氏の根を斷ち葉をからしけるは、禽獸の所行なり。實朝横死の後は、旣に賴朝の後室政子、法名二位の禪尼如實、簾中に政事を聽けり。是に因つて世俗尼將軍と號す。義時益武威を振うて、天下の事大小となく恣に計ひけり。是に

て自殺しけるは義士なり。世俗強ひて惡人と云ふは非なり。古今絕類の惡人は時政なり。既に賴朝伊東が難を避けて、時政を賴みて居たりけるが、又彼が娘政子と密通せり。然るに時政在京して歸國の折から、路次にて此事を聞くといへども、知らざる體にもてなし、兼て政子を伊豆の目代八牧判官義隆に嫁すべき兼約なりしゆゑ、急ぎ婚禮を整へけるに、政子は賴朝に志深くて八牧が館を逦げ出で、賴朝の許に隱れ居けるを、時政是を知りながら、穩便にして差置きける。八牧に對して不義といひ、平家の後聞を憚らざる振舞、甚だ無道なり。是偏に時政兼て賴朝の潛龍の氣有るを見て、源氏の世を興すべき器量ぞと、末を思うて、娘が不義を幸として聟にして、平家追討の兵をすゝめ、力を合せて專ら志を盡しけるは、賴朝が驥尾に付いて、己が家を興すべき佞謀にして、曾て眞實の忠義にあらず。されば賴朝薨じて、賴家武將に備るといへども、僅か五年にして、時政奸計を以て殺害し、二男實朝を副としける。時に時政が後妻牧の方、腹に出生しける娘が聟、平賀右衛門佐を武將にせんと謀反を企て、既に實朝を殺さんと計り、忽ち露顯して、せん方なく落髮して、牧の方と共に豆州北條へ行きて蟄居せり。凡賴朝薨じて時政天下の權を奪ひ、恣に振舞ひ、慈愛深かるべき孫賴家を殺し、其以前御臺若君、并外戚比企判官能員を殺し、其上牧の方が讒を信じて、時政前妻の腹に出生したる娘の聟、畠

と號し、後遠江守に任ず。其性甚だ奸佞にして惡行多し。然るに世俗、時政は賴朝を聟にせしを以て、賴朝に忠有りと稱して、時政を善士と唱ふ。伊東次郎祐親は、賴朝へ敵對しけるゆゑ、祐親を惡人といふは甚だ非なり。尤祐親はむかし舊好の源氏と云ふとも、平治の亂に義朝亡びて、時政を始として源家恩顧の關東武士、悉く平家に隨へり。中にも祐親殊に平家の恩深きゆゑ、無二の忠臣と成りけり。是に依つて賴朝が娘と密通し、男子を一人設けしを、平家の聞えを憚り、彼男子を殺して賴朝を計らんとしけるは、曾て祐親が僻事にあらず。賴朝流人の身として、世を憚らず、渠が娘と密通せしは甚だ義に背けり。縱令尋常の者なりとも、密通罪すべきにあらずや。況んや賴朝は、祐親平家より預りたる囚人なり、娘と不義せしを穩便に差置いては、平家へ不忠なり。是によつて彼兒を殺し、賴朝を計らんとせしは至極道理なり。元來祐親は義士なり、治承の亂に、小松中將維盛に屬して、賴朝を襲はんと計りしが、豆州鯉名の浦において、天野藤內遠景に生捕られて、聟三浦義澄に預けらる。義澄賞に代へて祐親が命乞しければ、賴朝彼を免して謁見せんと有りしに、祐親則ち義を守りて自殺せり。其頃關東武士の有樣を見るに、源平兩家の色を見て、運を兩端に伺ひ、朝に味方と成り夕に敵となれり。其中に祐親一人、一旦平家に隨ひ恩を受けたれば、始終こゝろざしを變せずして、賴朝に降らずし

し。然るに義經一應の辭退もなく、伊豫守に成りしは、賴朝に憚らず、天下を我儘に計ふ事、自立の志疑ひなしと、甚だ忿り強かりし折から、梶原讒言して、燃ゆる火に薪を添へければ、終に連枝の因を絶ちて、衣川の泡と消えしは、淺ましき事なり。然しながら或説に、義經は實は生害せず、秀衡存生の内示し置いたる密事にまかせ、潛に國を遁れ蝦夷へ落ち行き、身を全うせしと云へり。是正説なればいとかしこき謀なり。又或説に、西海にて建禮門院を擒にして歸路の折から、船中にて密通せしと云へり。此女院は清盛が女といへども、正しく高倉院の后にして、安德天皇の國母なり。義經いかなれば、王位を恐れず世を憚らず、斯る絶倫のふるまひ有るぞや。尤も此説とるに足らずといへども、義經は牛若丸といふ時より、好色婬風の聞えなきにしもあらず、又更に妄説にもあらざらん。義經才智有りながら、かゝる無道を行ひしは、諺の猿智惠にて、信の智はなき人にや。俗に義經は向ふ齒反りて猿眼といへば、自立して天下を執らんと欲せしは、正眞の猿猴が月ならん。

（三十）時政

時政は桓武天皇の後胤、上野介直方より五代の孫、北條四郎太夫時家が嫡男にして、北條四郎

範頼の下知をも顧ず、さしもはげしき軍中にて、取あへず一首の秀歌を詠じ、猶も進んで戰ひしは、文武二道の勇士にあらずや。兄源太景季、一枝の梅花を箙にさし、三十餘騎に取籠られ事ともせず、落花微塵に切りちらし、菊池三郎と組んで首取りたる武勇は猶更、箙の梅の風流を、平家方にも梶原が花箙と感賞しけるとかや。父の平三景時五百餘人にて、平家の二千餘人と戰ひしが、無勢なれば、下手へ廻りて颯々と引きけるが、源太が生死如何と、又二百餘騎にて敵中へ駈け入り、大きに武勇を振ひ、梶原が生田の森の二度がけと、末代に譽れを殘せり。是を以て見る時は、何とて梶原が義經の勇猛に劣るべき、誠に一人當千の剛の者と稱すべし。然れども世人は、義經を讒しけるを憎みて其美を擧げず、彼を毒虫に比して忌み惡む。義經も又罪なきにあらず、頼朝元より口に蜜あり腹に劍あり、兼て義經武略に長ぜしを心中に忌み惡む所に、朝敵亡びて京都靜謐に治り、天下安堵の思ひをなして、義經の武德を稱し、殊に後白川法皇御覺いみじく、殿上人を始として、洛中の老若男女、哀れ判官殿の世にてあれかしと云ひあへる由、頼朝傳へ聞いて心中快よからず。其上義經は、平家の一族平大納言時忠の聟となりしは、世を憚らざる振舞、存じの外なりと憤り深かりしに、伊豫守に任ぜしは猶安からず。伊豫守は、源家の先祖頼義朝臣是に任ぜられしより以來、源氏代々是を重んじて任ぜらるゝ人な

て謀臣亡ぶる例を顧ず、身を保つの謀なきは如何ぞや。客四友先生不覺の落涙しければ、是を見て油煙公から〱と笑つて、先生も諺の判官贔屓にや、豈義經古今無雙の英雄ならんや。世擧つて梶原が、逆櫓の遺恨によつて義經を讒言せしを憎むといへ共、逆櫓の論も景時が道理にして、義經の僻事なり。されば駈けべき時にかけ、引くべき時に引退き、身命を全うして敵を亡すこそ良將なるべけれ、一己の高名せんと危きを顧ずば、暴虎馮河の類ひなり。左によつて梶原は、舟軍の駈引自由を得ん爲に、逆櫓を立つる工夫を廻らし、適れ能き智惠なりと、定めて自讃心にて談じけるを、義經は古老の異見を無にして、迯支度と嘲りしは甚だ無道なり。平三景時辱められ、爭でか忿り思はざらんや。然し計を以て敵を討取らんと、隙を知らざるは猪武者と嘲りて、非禮の詞を放つゆゑ、既に珍事に及ぶべき所、三浦畠山等無事に納めたり。元より平家追討の宣旨を蒙りたる義經、無益の論に大義を忘れ、梶原を討果して犬死せば、天子に不忠と云ひ、兄賴朝に不義と云ひ、敵味方の笑草と成りて、尸の上の耻辱たるべし。其上壇の浦にて、梶原景季と先陣を爭ひしは、大將の器にあらず。おもふに義經は其身の武勇にほこり、梶原を侮りて、先陣の望を片腹痛く思ひしが、梶原元來尋常の侍にあらず、既に生田の森の一軍に、梶原父子三人、武勇を振ひし有樣は鬼神の如し。又平次景高一陣に進んで、大將

舍兄頼朝平家追討の義兵を上ぐると聞いて、奥州より發向して、駿州黄瀬川において頼朝に謁す。頼朝甚だ悦び、則ち將軍として木曾義仲を誅し、次に平家を討たしむ。元來義經武略に長じて、奇計妙術を廻らし、大敵を亡し、其勢普く天下の口實にあり。依つて元曆元年五月六日、從五位下左衛門尉に叙し、則ち平家追討使の宣旨を蒙り、九郎判官と號す。是一の谷戰功の賞と聞えり。同十一月十一日院參の節、昇殿を許さる。同二年平家悉く滅亡して、四月廿五日神鏡神璽西海より還幸、朝廷に入御し給ふ。則ち義經供奉有つて、同廿七日院の御廐別當に補し、同八月伊豫守に任ぜらる。段々の昇進は、朝敵退治の忠賞と聞えけり。宜なる哉、さしもの平家の強敵を、二年の間に掌になし、天子の宸襟を安んじ奉り、父の仇を報じ、廢れたる源氏の家名を起し、忠孝を全くし功を遂げしは、誠に古今無雙の英雄と云ふべし。舍兄頼朝は、居ながら日本の惣追捕使と成りて、天下の權を執りしも、全くは義經の軍功によれり。然るにさばかり朝家に忠有りて兄に孝なる義經、讒者の偽に亡びしは命なる哉、かなしむに堪へたり。奸臣は梶原景時なり。去れば末代の今に至り、兒女幼童に至る迄、梶原が讒言を憎んで、既に景時々々と嘲る。一向義經を哀悼して、諺に判官贔屓と稱するも、理義の仁心を感ぜしむる處にして、是則ち義經の陰德ならずや。嗚呼痛ましい哉義經、狡兎盡きて良犬烹られ、敵國定り

なし。賴朝奸計を以て天下を掌握するといへども、纔か二十年にして薨じ、嫡子賴家武將に任じ、僅か五年にして、時政が奸計を以て、伊豆の修善寺に於いて害せられ、次男實朝世を取つて、十七年にして、惡禪師公曉の爲に、鶴ケ岡において橫死す、是また北條が奸計なり。斯て賴朝父子三人、僅か四十餘年にして家名斷絕して、天下の權は北條の掌に落ちたり。是ひとへに賴朝の積惡の宿執にあらずや。林氏七武に云はく、賴朝口に蜜あり腹に劍あり、而して忍ぶ人なり、其功淸盛より大にして、其罪淸盛より重しと云へり。賴朝口に蜜あり腹に劍あるは、唐の林甫の類なり、峰飼のものが見ば甚だ愛すべし。

(廿九) 義經

義經は左馬頭義朝の末男にして、母は九條院の雜色の女常盤なり。義經は稚名は牛若と號し、平治の亂に義朝敗軍して、長田忠致が爲に生害して、一族悉く亡び、牛若いまだ襁褓の內に有りて、母の常盤容色勝れし故、淸盛に寵せられ、是によつて牛若刑戮を免れ、漸く成長し、鞍馬山東光坊に身を寓せて勤學せしが、常に報讐の志ありて出家を厭ひ、兵術に心を委ね、十六歲にして潛に鞍馬を出で、奧州に至り、藤原秀衡を賴み、首服して九郎義經と號し、治承四年、

悅ぶといへども、何の返答もせざりしは、我身の吉夢を沙汰し、平家へ聞えば、身の爲惡しかりなんと遠慮と見えたり。賴朝此時十四歲、いまだ幼弱の身として斯る賢慮、誠に凡人にあらず。然れども伊東次郎祐親入道が館に在りし時、祐親が娘と密通して男子を設けたるは、平家の後聞を恐れざる振舞、以前の遠慮とは大に違ひなり。去ればこそ、果して身の大事に成りしを、伊東九郎祐淸が情によつて危難を遁れ、北條時政に身を寄せけるが、爰にても時政が娘と密通しけるが、前非に懲りざる危き振舞なりしが、深き奸計有つて、僥倖にして禍を免れたるべし。思ふに賴朝は、甚だ好色淫風の人と見えたり。去れば賴朝、兄惡源太義平の妻は、新田大炊介義重の娘なり。義平落命の後は、父義重の許に有りしを、賴朝懸想して、伏見冠者廣綱を以て艷書を贈りけるに、許容せざれば、父義重に申し入れらるゝ。義重元來思慮深きゆゑ、賴朝の御臺の後聞を憚り、俄に彼娘を師六郎に嫁しけり。是に依つて義重は、賴朝の氣色を傷りける由、東鑑に見えたり。賴朝の心に、兄嫁をもとつて我妻にせんと欲するは、親兄の禮を失ひ、兄を辱しめ、骨肉同胞の肉を絕やしけるは、人倫の振舞に非ず。此一事を以て賴朝の心中を知るべし。斯くて無道の心より、舍弟範賴義經を始め、親しき一族を亡して、事を欺き天下の權を奪ひ、讒を信じて忠臣を罪し、譏を後代に殘せり。去れば賴朝の不仁不義の行跡、算ふるに暇

制すといふ兵法に叶ひ、自然と元帥の器なり。既に合戰に及び、敵二騎打取り、壹騎に手を負せ、進んで駈けけるが、終に軍利なくして、義朝に隨ひて東國へ落ちけるに、終日の軍に疲れて、馬疲れて義朝におくれ、唯一騎落ちける處に、江州守山の驛にて、雜人數多落人を生捕らんと、大勢にて取込しに、源内兵衛と云ふもの、賴朝を馬より引き下さんとする處を、眞向二つに割付け、猶も返寄る雜人ばらを切散しける、勇猛の振舞感ずべし。斯て爰かしこ漂泊して、江州淺井郡の民家に隱れ、身を全うしけるは、誠に賢き振舞なり。然れども、終に平家の侍彌平兵衛宗淸に生捕られ、誅せらるべき所に、淸盛の繼母池の禪尼、愛子家盛を先立て常に歎きしが、賴朝の容貌を見て、家盛の稚立に能く似たるよしにて、哀れに思ひ、淸盛へ命乞せらるゝよし、賴朝聞いて、先立ちたる父母兄弟の爲と稱して、手づから卒都婆を作りし事を、禪尼聞き及びて、いよ〳〵あはれに思はれしとかや。是偏に池の禪尼の心をとる謀とかや、恐ろしよ。案の如く禪尼此のよしを聞き、哀憐いやまして、頻に命乞有りければ、淸盛止む事を得ずして死罪を宥め、伊豆の國へ流しけり。然るに東國へ下向の路次において、近江國建部明神へ通夜しけるに、都より從ひ來りし上野源吾盛安、其夜あらたなる靈夢を蒙りしは、賴朝天下の主將と成るべき瑞夢なりければ、甚だ悅びて、翌朝賴朝へ夢物語しけるに、賴朝心中には

（廿八）頼朝

頼朝は左馬頭義朝の三男にして、母は尾州熱田の大宮司、散位藤原季範が女なり。然るに頼朝稚名を鬼武者と號し、又同國幡屋と云ふ處にて生れし故、幡屋の武者王とも云へり。稚かりし時より凡人に非ず。其頃出羽郡に源高能と云ふ者、武者王が容貌を見て、其氣相尋常ならず、此幼童必ず天下の權を取るべしと云ひし事有り。然るに武者王丸六歳に成りし時、佐々木源藏秀義見參せし折から、若君に玩具を參らせんが、御望の物あらば宣ふべしと云ひけるに、武者王聞いて、いやとよ、もてあそびは望にあらず、能き家人こそほしけれと答へられければ、秀義大いに感じて、此若公は天晴武將の器なり、末頼母しと悅びけるとかや。誠に松は寸にして棟梁の機ありと云へり。去れば子を見る事父にしかず、義朝も牛を食ふ氣あるを見て、生長して武家の棟梁と成るべきものなりとて、武者王と名付け、源家累代の重寶、源太が產衣の鎧と、髭切といふ名劍を、嫡子源太義平には讓らずして、武者王に與へ、元服して則ち右兵衛佐に任じ、頼朝と號せり。然るに平治合戰の時十三歳にて出陣し、義朝にむかひて、平家は早向ひ候はん、人に先をせられんより、先づ六波羅へ押寄ずべしと云ひしは、先んずる時は人を

ありしと見えたり。本より神は非禮を受けず、熊野權現何ぞ親に先立つ不孝の祈願を納受し給ふべきや。然るに重盛惡瘡を病み、權現の納受と思ひしは甚だ愚なり。清盛が賴朝の爲に首を討たれたる夢を見て、平家の滅亡せん事を考へ、賴朝を早速に亡すべきを、却つて我命を縮め、父母兄弟親族を、悉く賴朝に殺さるゝを顧みざるは、豺狼の類にして、妄を信じけるは小人なり。然るに重盛は日本の賢人なりと稱して、源平盛衰記に襃美したるは、其行を見るに、相國入道が、法皇を犯し奉らんとせしを諫めたる外には、皆寂滅の教に迷ひて、婦人愚夫の振舞にひとしく、夫が中に燈籠の大臣と、拙き異名を呼ばるゝこそ、末代の恥辱なれ。古語に聲色の愼むべきを謂ひて、名は體を顯すの德ありと云へり、宜なる哉。見ぬ世の人の異名を聞き、其顏かたち志も、推量なす心地せり。去ば關白道長は御堂を建立して、御堂の關白と呼ばるゝ事は、名聞苦しき後世を願ひて、金銀を無量に費したる奢ものと思はれて、いと淺まし。空海が、左右の手と足と口とに筆を採りて、曲書して五筆和尚と呼ばるゝは、先年見せ物に出でたる、島金太夫といふかたはものが、足手に筆を持ちて文字を書きたるに同じ。名僧には似氣なき事なり。永緣和尚がほとゝぎすの秀歌に仍つて、初音の僧正と呼ばるゝはいとやさし。返す返すも、重盛が燈籠の大臣と拙き異名を取つて、一生の德を失ひけるぞ恨なれと、歎息。

歎くに堪へたり。彼遊客の醫師に見ゆるを恥づべき程にて、此恥を思はざるや。察するに重盛は、平家亡びて源氏の代とならば、跡弔らふものも有るまじと、唐へ黄金を贈り、まさなき事をせしと見えしが、せめて父母親族の菩提の爲にと云はゞ、孝の端とも云ふべきに、父母には曾て頓著なく、我身計り永く菩提を弔らはれんとは、不孝不義の志悃むに堪へたり。凡菩提を弔ふ人は、此世にて善根なく、地獄の苦しみを受くるを、追善の功徳によつて免れ、佛に成る事と見えたり。然らば賢人と云はれし重盛も、地獄の苦を受くべき覺え有りて、罪を遁れん爲に、育王山にて永く菩提を弔らはれんと計りしか。實に重盛命を縮め祈願をなして、親に先立ちし不孝の罪によつて、地獄の苦を遁れまじ。文盲無智の者さへ、親に先立つ事を悲しみ、身を全うして父母の終を見屆け度と平生心懸するは、自然の恩愛の情なり。去れば往昔、小式部の内侍病重く、人の面を見分難き程になりて、賴なく見えければ、母の和泉式部、額をおさへ淚を流しけるに、小式部目を少しひらきて、母の顏つくぐ\と見て息の下に、

いかにせん行くべき方もおもほえず親に先立つ道を知らねば

斯く弱りたる聲にて吟じければ、天井の上に聲して、あら哀れと云ひけるが、夫より病心よく本服しけるとかや。是偏に小式部が親に先立つ事を悲しみ詠歌せしを、神明感應ありて擁護

用ひ給ふべからず。然れ共恥ぢ給はねばこそ、今に至るまで、唐の良醫の著したる醫書を以て療治し、藥種も唐物を貴しとす。其外諸道具よろづの物、多く異國より來るなり。然れば重盛、異國の醫の療治なりとて、存命したればとて、何の日本の恥ならんや。既に昔唐の帝の后、惡瘡を病んで諸醫の力に及ばず、日本の典藥の頭雅忠を、名醫と聞傳へて招きける由、是唐にても、醫なきに似たりと恥ぢずと見えたり。凡三公の位に居て、異國浮遊の來客を見ん事、國の恥家の瑕と云ひしは其意を得ず。重盛三公の職は、世に埋れ居る人にても、賢能さへ有らば、たとへ下賤の者たり共、其德を尊みて君に吹擧し、國家の寶とすと見えたり。況んや醫師は、縱令異國のものにもせよ、良醫ならば擧げて用ひ、君に進め奉りて、日本の寶とすべきを、却つて渠に見ゆるを國の恥辱なりといふは、三公の職を忘れたるなり。但必死の覺悟ゆゑ、療治を辭せられしか、當座遁れにせしか。去ればこそ重盛は、異國より來りし妙典といふ船頭を賴み、唐へ砂金三千兩を渡して、宋朝の帝幷育王山の衆徒に送り、我爲に育王山に堂を建て、供米所を寄進し、永く重盛が菩提を弔ひ給はるべしと、檜の良材壹艘を運送せり。妙典歸國して、重盛の詞の如く計ひければ、宋帝幷育王山の僧侶甚隨喜して、彼山に堂を建て供米所を寄進し、永く重盛の冥福を修しけるとかや。是偏に愚夫愚婦の所行にして、國の恥身の恥を唐へ顯す振舞、

よつて、平家の滅亡遠からぬを悟り、憖じひに永らへて成行を見んよりは、熊野權現へ命を縮むる祈誓しけるは、孝道の本意にて有るまじ。既に虞舜は、父の瞽叟頑に、母嚚しくて然も繼母なり、腹替りの弟象は奢りて無禮なり、舜よく是に仕へて至孝なりと云へり。然るにやゝもすれば舜を殺さんと計りしを、舜又方便を以て危難を遁れ、身を全うして益孝を盡し、終に父母共に善に化せしめけるとかや。清盛惡人と云へども、瞽叟の如く重盛を憎まず、子ながらも恥ぢて、惡行を思ひ止る事有之と見えたり。然らば重盛身を全うして父を諫め、舜の如く父清盛を善に化せしめ、朝家を安んじ奉り、平家長久の謀をなさば、是誠に忠孝全き賢人なるべし。平家の後榮たのみなきを見限りて、主上を始め奉り、父母妻子兄弟一族郎等を見捨て先だち、親族の歎きを顧ず、跡は野となれ山となれと思うて頓著なきは、君臣父子夫婦兄弟の實義は微塵もなく、不忠不孝不仁不義の甚しきにあらずや。其上清盛の慈愛の志に背き、異國醫師の治術にて存命せば、本朝に醫道なきに似たりと云ひしは心得ず。日本の醫道は、神代には大己貴命と少彦名命と、醫業を民に施し給ふといへども、醫書は傳らず、二神の醫術を傳へたる人もなし。今世行るゝ醫道は、欽明帝の御宇に、百濟國より醫の博士幷採藥師來朝して、醫師を日本へ傳授す。此時欽明帝、異國の醫術を用ひ給へば、日本の醫道なきに似たりと恥ぢ給はゞ、

せ、色欲を媒としけるは、善事には有らで惡種なるべし。殊に三公の位に昇り、日本朝臣の重職を汚し、其上に燈籠の大臣と異名を呼ばるゝは、博奕打又は山師の類に劣りし大たはけ、甚歎はしき事にあらずや。又重盛の老父清盛、頼朝の爲に首討たるゝぞと夢見て、平家の末覺束なしと、今生の事を思ひ、偏に後世の事を祈り、紀州熊野山に參籠して祈りけるは、父清盛の惡逆を飜へして、天下安全を得せしめ給へ。若平家の榮耀一期を限り、後日恥を得ば、重盛が運命を縮めて來世の苦患を助け給へと、丹精を碎き、祈念再拜して下向しける。歸京の後、幾程もなく惡疾を病みて、追々頼なきよし聞えければ、清盛甚だ歎き、越中次郎兵衞盛次を使として申しけるは、何とて今迄療治なきぞや、老たる父母に先立は不孝なり。此頃もろこしより名醫渡りて、今津にあり、召寄せて療治すべしと有りければ、重盛は盛次に對面して、我此病を受くる事は、熊野權現宿願納受疑なし、親に先立つは重盛一人に限らず、必ず歎き給ふべきにあらず。若異國の治術にて存命せば、本朝醫道なきに似たり、若又彼が醫術驗なくば、面謁詮なし。殊に我三公の位に居て、異國浮遊の來客に見えん事、且は國の恥辱を顧ざらんや。彼是以て其義に及ぶべからずと返事有りて、頓て出家を遂げて、後世の勤他事無りしが、程なく終に四十三歲にて去り給ふとかや。是又賢人には似氣なき振舞なるべし。重盛父の惡逆に

重盛急いで家に歸り、兵を集め法皇を守護せんとて、清盛を驚しければ、清盛恐れて怒を解き、忽ち騒動鎭り、法皇危難を遁れ給ふは、重盛の謀畧にして、清盛が暴逆を抑へ、朝廷を安んじ奉る、誠に日本の賢人なるべし。しかしながら、忠義の爲に謀とは云ひながら、兵を集めて父に敵すべき體を見せ駭かし、威を以て父に勝ちしは、勝母の里を過らざる孝子の心にはあらず。然れば忠孝全く成し得たるとは云はれまじ。又重盛は後世の苦を悲しみて、來世の營他事なく、常に住みける所に、四方十二間の家を建て、四方に四十八間を點じ、一方の十二間に、十二光佛を一體宛立てたりければ、四方に四十八體の十二光佛あり、其前毎に常燈を點じければ、四十八の燈籠星の如く、年十七より二十歳迄の美女四十八人、常燈一ツに壹人宛付いて、油をそへ燈をかゝげさせ、日沒になりぬれば、衣裳花を飾り蘭麝を薫じて、禮讃念佛して、鼓銅拍子を囃し今樣を諷ひ、四十八間を廻らしけり。重盛は中段に座して是を聽聞す。依つて重盛の異名を、燈籠の大臣と云ひしとかや。是又賢人に似ざる花美風流の振舞はいかなるぞや。今の世に日蓮宗の僧俗會式、又一向宗の御講とやらの如し。戯れたる事にて諸人寄集る、大たはけ也。心ある人は爪彈をせり。況んや賢人と呼ばるゝ重盛、文盲無智の所業は何事ぞや。元より聖賢甚だ好色を惡み、佛も尙戒しむ。重盛後世の營に、美女を集め今樣を唄ひ、人の心を蕩か

憤り深く、天下の亂をなさんは必定なりと。爰を以て賴朝を助け、然も國も多きに、態と伊豆の國へ流せしは、關東武士の憤りを宥める謀なり。然して重盛仁德を以て、東國の武士に恩を施し、平家へ歸服させ、能き時節を計つて賴朝をば失ふべきとの密計なり。去るによつて、東國の諸武士、追々に平家へ歸服し、伊東祐親長井實盛等、平家無二の忠臣となれり。然れ共短命にして、此謀略空しくなりしと云へり。此說强て重盛の非を防ぐに似たり、恐らくは妄說ならん。重盛下知して賴朝を殺せば、東國の士憤りて亂に及ぶ事を思はゞ、初より東國の方へ流人の沙汰有るべきや。朝敵義朝の子なれば、助くべき道理にあらず。死罪に決したるを、池の禪尼の歎き默止がたくして、助けし事あきらけし。若重盛斯の如きの謀あらば、賴朝數年流人の間、祐親に示し合せて、不意闇討毒殺抔の祕計有るべきに、其事なきは重盛の怠りか。せめては病中に此謀を、嫡子維盛を始め、一族郎從にむかひ遺言して、死後になりとも謀成就なさしむべきなり。然るに其沙汰なきはいかにぞや。然る時は此說妄說なる事必せり。以前治承の始、後白川法皇の寵臣新大納言成親、淸盛が逆意を憎んで黨を催し、平家を討たんと計りしに、露顯して、成親を始め數十人、或は死刑又は流罪せしが、尙法皇を駭かし奉らんと、淸盛甲冑を帶し軍兵を催すよし、重盛聞いて入り來り、淸盛を諫めけれども聞き入れず。依つて

(廿七)　重盛

小松内大臣重盛は、相國入道清盛の嫡男なり。其性寛仁にして、文武忠孝の朝臣なり。依て此人を尊び、日本の賢人と稱しけり。併我が謗草の偏見を以て論ぜば、重盛を日本の賢人とは、甚褒め過ぎたる詞なり。去ば平治の亂に、平家へ頼朝を生捕り、誅せず東國へ流せし事は、重盛の誤りなり。縱令池の禪尼の仁心に默止がたく助くるとも、重盛彼呉王夫差が、越王勾踐に亡されし例を顧み、清盛を諫めて速に頼朝を誅せざるは智なし。諺にも、敵の末は根を斷ちて葉を枯らすといへば、誅すべきに、果して頼朝、平家追討の義兵を揚げし時、大庭三郎景能、早馬を以て福原へ注進しければ、清盛大に驚き、東國の諸士頼朝に附屬すべし、元來家人なり、いかでかむかしの好みを忘るべきか。然るに頼朝を東國へ流しけるは、八ヶ國の家人に頼朝を守護し、清盛を亡せと云ふが如し。盜人に鍵を預け、千里の野に虎を放せしが如しと、座にもたまらず踊り上り踊り上り、悔まれしとかや。か様の事、是偏に重盛遠き慮なき過失なり。然るに或說に、平家にて頼朝を助けしは、重盛の誤りにあらず、却つて深き賢慮なり。其子細は、東國の諸士は皆源氏舊好の家人なれば、平家頼朝を殺して源氏の根葉を絕ちなば、東國の諸士

輿前にあり屬車後にあり、我獨千里の騎馬に乘つて何國へか行かんやと云うて、其馬を返されしと云へり。吉に行くは巡行祭禮をいふ、凶に行くとは兵を出す事をいふ。實や名馬に乘つて我獨先駈したり共、續く兵なければ危し。但し迯るには調法なるべし。周の穆王八疋の駿馬を愛して、王業衰へたりと云へば、仲綱木の下鹿毛も、房星の精なるか。賴政私の宿意に仍つて、高倉宮に御謀反を勸めしは、元より忠義に非ず。其上云がひなき僧法師を味方に賴みて、强敵の平家を討たんとしけるは、迂濶とや云はん。去ればこそ山門の衆徒心替りて軍利なく、終に宮をも失ひ家をも亡しけるこそ口惜しけれ。然れ共最期の有樣勇にして、辭世に、

うもれ木の花咲く事もなかりしに身のなる果は哀れなりけり

斯く詠ぜしは、流石日頃嗜みし道とて、斯る時節秀歌を讀むは、哀れに優なる振舞なり。或說に賴政辭世に、身のなる果はあはれなりけるとつらねしは、哀にあらず天晴なり。賴政は源家の正統にして時に遇はず、一生涯空しく埋れ居たるに、今高倉の宮の爲に討死するは、天晴勇士の本意なりといへる心にて、詠じたる歌なりと云へり。我元より歌道にくらければ、そしるべき言葉もあらず。

懐の歌を讀みて昇殿をゆるされ、或は三位に進みたるは、和歌の功は去る事なれ共、我身の功を君の御見だしなきことを恨み、述懐し、歌を以て君の御誤りを糺して官位に進みしは、上を犯すの罪に似て、武臣の本意にあらざるべし。保元平治の忠戰といへども、天下の耳目を驚かす程の功もなし。然るを僅の功に便りて、恨述懐の歌を以て官位を貪りしは、いと拙し。彼九郎義經、朝敵退治の大功によつて、昇殿を許され官位昇進しけることは、武門の名譽と云ふべし。和歌を只よみて己の欲をなす、歌の上手は骨折らずして、願望心の儘に成るべきや。賴政武將として、武を以て稱せられず、詞花言葉のもてあそびを以て賞を遂げしは、歌道にては譽ならめ、武道においては本意にあるまじきか。仁平應保には、天子を惱し奉る化鳥を、鳴絃を以て退けしは、先祖に恥ぢざる功、是ぞ武門の眉目たるべし。然るに賴政の嫡子伊豆守仲綱が祕藏しける木の下鹿毛といふ名馬の事に依つて、平宗盛に憤りを挾み、平家を亡さんとの志を起し、高倉の宮に御謀反をすゝめ參らせ、卒爾に大義を思ひ立つて、其志をとげず、皆世の煩ひ諸人の歎、身の爲には家を失ひ、宮にも生害なさしめ、身を亡したるは本意なるまじ。仲綱彼の馬ををしみけるによつて、宗盛に恥しめられしとかや。昔漢の文帝の時、一日に千里づつ行く馬を獻ずるもの有りしに、文帝笑つて、我吉行には三十里、凶行には五十里にして、鸞

頓阪返事に、米はなし錢少しといふ事を讀めり、

夜もうしねたるわがせこはてはこずなほざりにだにしばしとはませ

是等の振舞、風雅なる所爲と云はん。たゞし口上にても濟むべきを、好む事の仕かたといはん。頓阿が使を待たせて返歌をあんじけるも、いとわづらはしからめ。

(廿六) 賴政

賴政は兵庫頭源仲正の男なり。射藝に達し和歌を能くす。保元平治の亂に軍功有りしか共、させる恩賞にも預らず。仍て怨を含みながら、大内守護にて年久しく勤仕ありけれども、昇殿を許されざりし故、述懷の和歌を詠ず、

人知らぬ大内山のやまもりは木隱れてのみ月を見るかな

此歌によりて昇殿を許され、正四位の下にて有りしが、猶三位を心がけて、

登るべきたよりなき身の木の元にしひをひろうて世をわたるかな

斯く詠じて、七拾五歲にして三位に敍せられ、專途を遂げぬとて、薙髮して源三位入道賴圓と名乘る。其外和歌の譽數多にて計るべからず、誠に文武兼備の良將といふべし。然しながら、述

染むれば染まるものにして、彼草紙の、萬いみじくとも色好まざる男は、いとさう〴〵しくて玉の巵にそこなき心地ぞせらるゝと書けるは、人をして好色に導く詞にあらずや。尤末に至りて、色を能く戒めて書きたれども、凡貴きも賤きも、色を好まざるは稀にして、人情惣て好む方には染り易きものなれば、斯く色欲妖艶の詞を書ける事は、甚人の害なり。思ふに兼好は、元來好色婬風の士と見えたり。去れば高師直が、鹽屋高貞の妻の許へおくる不義の艶書を、兼好師直に代りて書きし事、太平記に見えたり。此事を林子の本朝遯史に、信に一生の過端なり、慨惜すべしと云へり。此一事をさへ一生の過ちと惜まれしに、或說に、兼好遁世の後、從弟の伊賀守成忠に招かれ、伊賀國へ立越え住ひしける比、成忠が妻に密書をおくりしと云へり。此事駿臺雜話にも見えたり。又兼好物語といふ雙紙には、勢州桑名の住人伊賀守保吉が女、辨の君と云へるに密通せし事を記せり。薙染の身として、破戒無慙の罪人なるべし。是を以て見れば、兼好も正しき法師にては有るべからず。誠に桑門も飲食男女の大欲には忍び難きものにや。兼好東山に遁れて、松丸に命じ、花筵を織り閑居の便としけるは、內證逼迫と見えし。頓阿法師の許へ時借の無心に、米賜へ錢もほしと云ふ事を、句に讀みて遣しける、

夜もすゞし寢ざめのかりほ手枕もま袖も秋にへだてなき風

上人めが影ぼうしを障子に映せしは、愚者を欺く手づまならずや。

（廿五）兼好

兼好姓は卜部、吉田兼顯が子なり。左衛門督兼好と號す。後宇多院の北面にして、文才有り和歌を能くす。往昔頓阿慶運淨辨兼好を、和歌の四天王と稱す。後宇多院崩御の後遁世して、法名を直に兼好と號す。洛陽東山吉田に閑居し、今に其舊跡殘れり。兼好元來神道は其家に習ひ、歌の道は二條の門弟にて詠歌多く、代々撰集に入れり。且天台の學に達し儒經を學び、殊に老莊の道を好めり。和語の雙紙を作りて徒然草と名付く。和文の好書なるに依つて、世々の才人註解して稱美せり、誠に兼好か夢後の幸と云ふべし。併兼好神道の家にして佛道に入るは、長明と同じき白癡者なり。たとひ世を遁るゝとも、家風の神道を守りて、其道の教となるべき書を著し、或は天下國家の政道に益ある事を記し置かば、誠に大功なるべきに、詞花言葉を飾り、無常變易の理をのみ旨とする書は、神國の罪人なり。或說に、徒然草は人の心持を能く列ねたるものなり。但し兼好時代は亂世にして、自然の句の中に述懷を含めり、長明が書にも然り。常に翫ぶ人、自然と述懷の心を生ぜり、惜しむべしと云へり。實に人の心は、白糸の

(廿四) 圓觀

後醍醐天皇、北條相摸守平高時入道宗鑑を御征伐の、御隱謀露顯しける折ふし、法性寺の圓觀上人、勅を承りて、高時を調伏せし罪に依つて召捕はれ、鎌倉へ引かれて、水火の責に及ぶべき所を、圓觀の影ぼうし障子に移りしに、不動明王の尊影を顯しけるを、人々奇異の思ひをなし、其旨斯と申しければ、高時も前夜の夢想に示現有りし故、感歎して拷問を宥めしとかや。高時入道が闇愚は論ずるに足らず、圓觀誠に不動の化身ならば、高時を調伏するに及ばず、明王と顯れ降魔の利劍を以て、高時を始め敵の衆類を、悉く鏖にしてなりとも、天子の宸襟を安んじ、萬民の愁を救はんこそ、神佛の大慈なるべきに、調伏と云ふは、祈つて人を亡すには非ず、其心を調伏するといふて、人の惡しき意をよく教戒して、我に隨はしむるを云ふなり。元より佛は殺生を戒め、神は非禮を請け給はず、さればこそ不動の化身たる利生なり。圓觀囚となり、曾て佛力も顯れず、影ぼうしを見せて拷問を遁れしは、不動には言甲斐なき心なり。彼圓觀上人の影ぼうしの事、太平記の評にいへるは、圓觀鼻高く頰骨高く痩せて口廣し。灯の影にて障子にうつりしは、誠に怖しく見えつらん。但不動と言ひしはいぶかし。按ずるに、圓觀

渠一朝の憤りに因りて遁世せしは、眞實の發心にあらず、元より佛も嗔恚を戒め置きたれば、佛意にも叶はず、日野の方丈室の巧なる所爲も、桑門の本意にはあらず。むかし佛頂和尚、野州雲寺の奥に庵を結びて、

竪横の九尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば

誠に桑門の栖は、雨だに漏らずは足りぬべし。何ぞやむつかしき室を作りて、彼是持ち運ぶは煩はしかるべし。元より一所不住の境涯なれば、心の止まらざる所をば、庵を捨て去るべきに、持ち運ぶとは桑門には似合ね所行なり。渠の方丈記に、麓に柴の戸あり、則ち是山守の居所なり。彼に小童あり、時々來りて訪ふ。然る時は渠を友として遊び歩行く。渠は十六歳我は六十歳なり。齡は殊の外なれども、心を慰むる事は相同じと云へり。或説に、此小童は長明が若衆なりと云へり。是又俗説にて取るに足らず。然共諺に、灰にならねば止まざるは色欲なりと云へり。渠元來一旦の憤りに仍りて世を捨てぬれば、成道堅固覺束なし。いはれざる名聞の望に仍りて、公を恨みて山籠りすといへども、苔の色替松風の音を讃せし、古歌の風情にやありけん。

られける。一旦加茂の社務職を望みし所に、勅免なきゆゑ、恨み憤りて薙髪し、蓮胤と稱して洛外大原に退遁す。土御門院の御宇建仁元年、後鳥羽院上皇和歌所を置かれ、寄人に辟されしが、幾程もなく辭して退去す。其後又舊職に復すべしと勅ありしに、辭して出でず。和歌を詠じ志を述べ、東南北越の間にさすらひ、建永承元の間、幽居を日野の外山に移して一室を造る、縱橫僅十笏、高サ七尺に盈たず、鈎鎖自在にして、東西南北意の適ふ所に隨うて移す。其具纔に兩車に載する計なり。外山に石床あり、方丈石と名づく、或は仙人石といふ、高サ貳丈計、其上平にして十八人座するに易しといふ。凡長明著す所の書、無名抄四季物語伊勢紀行、鎌倉道の記は仁治三年の秋、郢曲の好士關東へ下向せし路次の紀なり。海道記も貞應二年の集にて、長明が遺稿に非ず。或說に、海道の記は藤原光行が作書にして、此記の歌ども、夫木集彼此數首、皆光行が東行の歌なりと云へり。彼外山の石床には、後鳥羽上皇二度御幸有りしとかや。誠に稀有の事に覺ゆるなり。然しながら長明、社務職を望んで、叶はざるを憤り遁世せしは、公を非とし己を是とし、世を謗るの振舞、不義非道の罪ならんか。殊に神職の身として佛道に入りしは、神明を蔑にするの罪、且先祖數代の家職を捨つる不孝の罪、又後鳥羽上皇和歌所の寄人に居られしを、程なく辭して去り、重ねて舊職に復されしを諾せざるは、違勅の罪に非ずや。

めんか、君然らずんば物議に不レ背、天意に叶ふべきならん。是をせん事いかゞやと書きたり。此狀則ち東鑑に見えたり。是を以て見れば、尾陽公の蓮生が木像を辱しめ給ふも理なり。元來直實は、一朝の忿に忍びずして遁世しければ、誠の道にはあらず、去れ共生得律義にて、西方阿彌陀佛の居る事とだまされて一生くらしつ、卽ち歌に、

淨土にも剛のものとや沙汰しけんにしにむかひて後見せねば

斯く讀みて、馬上にても西をいとひ、逆馬に乘りて往來せし馬鹿なり。逆馬は左もあれ、步行には嘸をかしからん。又蓮生歌に

いにしへの鎧にまさる紙ごろも風の射る矢もとほらざりけり

誠に殊勝なる歌なり。されども此法師は、やゝもすれば昔の勇氣を出し、物あらき振舞ありしとかや。大原問答の時、鉈を引提出でしは、殺生戒を犯す覺悟、いと淺ましと思へども、木樵り水汲み師に仕へし、雪山童子の例に倣ひ、薪水の勤に携へし鉈ならん、罪ゆるすべし。

(廿三) 長明

長明は加茂の禰宜長繼が子なり、南太夫或は菊太夫と號す。和歌管絃の道に長じ、世に稱揚せ

大江廣元曰く、兼て死期を知る事、權化のものにあらずんば疑ひあるに似たりといへども、彼蓮生は、塵世を遁るゝの後淨土を欣求し、願所堅固にして修行を薫修す、よつて信すべきと云へり。仝十月一日、東平太重胤京都より歸參して、卽ち御所に召さる、洛中の事共を申す。先熊谷次郎直實入道、九月十四日未の刻を、終焉の期たるべきよし相觸るの間、當日に至つて、結緣の道俗東山を圍繞す。時刻に袈裟を著し禮盤に登り、端座して合掌し、高聲に念佛を唱へて執終す、兼て聊も病氣なしと云へり。果して廣元が詞の如し。然らば蓮生は權化者か、尊むべし。然るに往古尾陽の太守、武州熊谷の驛を通り給ふ時、熊谷寺に立寄り給ひ、蓮生の木像を見給ひ、汝戰國に生れ、武を捨てて遁世す、勇士の本意にあらず、卑怯者なりと、扇を持ちて木像の頭を打ち給ひしとかや。日本一の者、賴朝公の稱美に預りし熊谷が、死後の恥辱是非もなし。誠に直實遁世逐電の節、走湯山の住持專光坊、海道において直實に行逢ひて、書狀を以て諫言しける、其略に曰く、貴殿出家の後、道を起し遁世有るべきよし、其聞あり、此條冥慮を道するに似たりといへども、頗る主命に背く。凡そ武の家たる、弓馬にたづさはる身の習、身を殺す事を痛まず、偏に死に就かん事を思ふは勇士の取る所なり。今入道せしめば、仁義禮に違ひ、累年の本意を失はんが如し。出家遁世の義有りといふ共、元の如く本性に還らし

時、直光を引援するの間、兼日道理を申し入るゝ故か。今直實頻に下問に預るもの也。御成敗の所、直光定めて眉を開くべし。其上に理運の文章要なし、左右に不レ能と稱し、尋決いまだ終らざるに、調度文書等を巻いて御壺中に投入る。庭を立ち、忽ち忿怒に堪へず、遠侍において、自ら刀を取り髪を拂ひ、南門より走り出で、歸宅に不レ及逐電す。將軍殊に驚き給ひけり。或説に、彼京都の方へ趣くべしと、則ち雜色等を遣し、伊豆箱根走湯山等において、直實が前途を遮り留めて、遁世の事を止むべきの由、御家人及衆徒等へ仰せ遣しける云々。斯くて直實は、洛陽東黑谷の法然上人を頼み、弟子となりて、法名は法力坊蓮生と號しける。又一説に、直實が法名蓮生にはあらず、蓮西と唱ふべし、祕傳抄漢語燈錄親鸞上人傳記に見えたり。舊書には蓮西と書きしもあり。此法師法然上人へ手紙共數通、今に嵯峨の棲霞寺に有り、假名文にて皆蓮せいと書いたり。粟津の光明寺の一世道空上人の夢に、我は熊谷蓮西と召されしと、夢の記に見えたり。蓮生とは宇都宮彌三郎朝綱入道法名也、熊谷蓮生と云ひ習はせしは誤り也と云へり。又世に、蓮生は武州熊谷にて卒去せしと云ふは非也。則ち東鑑に、承元二年戊辰歲九月三日、熊谷小次郎直家上洛す、是は父入道、來る十四日東山の麓に於いて、執終すべしと示し下す間、是を見訪はんが爲といふ。進發の後、此事御所中に披露す、珍重の由沙汰有り。然るに

て、多くの人を害せり。直貞少くして勇氣あり、弓を携へて熊を射る。熊は矢を負ひながら直貞に飛びかゝる、直貞刀を拔いて終に熊を切殺す、一族幷郷民等大に感嘆し且喜びけり。爰に於いて其所を熊谷といふ、則ち熊谷を姓とせり。直實二歳の時、父直貞大番として在京しけるが、違勅の罪に依つて誅せらる。直實も誅せられべきを、忠盛潛に助けて、直實が伯父聟、久下權頭直光方へ遣はしけり。斯くて彼の養育に依つて成長し、熊谷次郎直實と名乘りける。左馬頭義朝に屬し、平治の亂に、惡源太義平に隨つて郁芳門を守る、十六騎の一人なり。義朝亡びて後平家に屬し、中納言知盛に隨つて多年を送りしが、賴朝義兵を揚ぐる時、平家の味方として敵しけるが、頓て賴朝に屬して、常州佐竹の役に武勇を振ひ、攝州一の谷の合戰に先驅し、敦盛を討つて軍功を顯し、賴朝日本の功の者と稱せられ、武名を天下に輝かせり。然るに世俗、直實は敦盛を手に掛け、無常を觀じて出家せしと云へるは非なり。實は久下權頭の所領の堺を論じ、理の立たざるを憤り、遁世しけると見えたり。則ち東鑑に、建久三年十一月廿五日早旦に、熊谷二郎直實、久下權頭直光と、御前において一決を遂ぐる。是武州熊谷久下堺相論の事也。直實武勇においては壹人當千の名を顯すといへども、對決に至りては再往知斗の方に足らず、頗る御不審を蒙るによつて、將軍度々尋問し給ふ事あり。時に直實申して曰く、此事梶原平三景

を、遁世者には似合ざる振舞なりと惡み謗り、渠に出合なば擊破らんと云ひけるが、或時西行高雄山に來りて、文覺が坊に一宿を乞ひければ、文覺日來の素懷を遂げんと、拳を握りて待ちけるが、西行をつく〴〵見て、拳を隱し上座に請じ、久敷貴僧の芳名を承り、唯今面會を遂ぐる事甚祝著せりと、終夜物語りして、翌朝齋を進めて歸したり。文覺が弟子、日來の詞に相違したりと不審しければ、文覺答へて、汝らは西行が眼光を見ずや、彼豈我に擊たれんや。返つて我を打つべき者なりと云ひしとかや。是等は人を知り己を知るの智と云ふべし。六代御前に謀反を進めて、鎌倉を亡し、再び平家の世に成さんとの企てをなせしは、時を知らざる無分別にして、一生の行曾て出家の振舞にあらず。尤譏るに足らざる族なれ共、女童も其名を知りて世に隱れなき惡僧なれば、謗草の薗に植うるのみ。すべて出家は俗人に後世を勸むるを本意とすべきに、賴朝に義兵を勸め、六代御前に謀反を勸め、世を覆して修羅の巷と成さんと計りしは、誠に天魔ならん。

(廿二) 蓮生

蓮生は俗名熊谷次郎直實といふ、桓武天皇の末流、平直貞が子なり。其住する邑に猛き熊有り

助けしとかや。文覺は不動尊と入魂と見えたり。但、例の賣僧の妄言ならんか。大聖不動明王、何ぞ文覺如きの悪僧に加護あらんや、不審。然るに文覺、神護寺修造勸進として、仙洞御所へ推參しけるに、御遊の折節なるに依つて奏聞せざれば、文覺大きに忿つて、甚だ悪口狼藉に及ぶ。懷劍を以て狂ひ廻り、安藤右馬太夫祐宗に搦捕られしが、猶も悪口しければ、平家の沙汰として、伊豆國へ流されけるが、船路の間も放逸の我儘は狂人の如し。然るに平家の計として流罪せられしを憤り、いかにもして平家を亡し、思ふ儘に神護寺を修造せんと思ひ立ち、蛭が小島の流人右兵衛佐源頼朝へ、頻に平家追討の義兵を勸めて、終に平家の一族を亡させ、願の如く神護寺を再興して住し、世に高雄の文覺上人と稱せられけり。佛は殺生を戒め給ふに、僧の身として私の宿意にて餘多の人を亡させけるは、極悪心の罪人なり。然るに平家亡びて後に、小松中將惟盛の公達、鎌倉へ虜と成りて、既に誅せらるべき所に、文覺命を乞請し助くる事は、せめて衣を著したる甲斐有りと云ふべきか。一旦平家を恨みて、頼朝に亡ほさせし心とは、裏腹の仕かた。察するに六代御前の男色に愛でて、斯る前後相違の振舞をしけるにや、いぶかし。惣じて此法師は始終心定まらず、腹悪く物狂はしき我儘ものといへり。擔光坊と途中に於て角力を取りしなり。上人とも云はるゝ人品には似合ず。且文覺、日比西行が和歌を嗜みける

と書きて、奥にさまをこそと書き侍れ。然れ共心はつれなくと書き侍り。見るに泪そゞろに袂をしぼり、さもいみじき遊女にも侍りけると云へり。尚西行撰集抄に委しく見えたり。法師の身として遊女の宿に宿れるは、甚だ不屆なる振舞なり。又其後も消息を取りかはしけるこそ猶罪深し。瓜田に沓を納れず、李下に冠を正さずとは、文選の詞に非ずや。西行が嫌疑は避け難からんか。嗚呼惜い哉、さしも道心の聞えありし西行、此事に至りて玉の瑕とや云はん。

(廿一) 文覺

文覺は渡邊黨、遠藤左近將監成光が子なり。遠藤武者盛遠と號し、上西門院の北面の士なり。十八の時、一族源左衛門尉亘が妻袈裟御前に思を懸け、あやまりて殺害し、忽ち發心して盛阿彌と號し、後改めて文覺といふ。諸國を修行して至らざる靈地なし。兼て高尾の神護寺を修造すべき願望に依つて、熊野山那智の瀧に七ケ日打たれ、斷食して荒行を修しけり。比しも臘月半の事なるに、三重百丈の瀧、氷柱と成つて膚を裂き、惣身破れて紅と成り、誠に紅蓮地獄も斯くやと知られて、堪ふべくもあらず見えけるが、三日に當る日既に息絶え、死人の如く成りけるに、不動明王の使として、こんがらせいたか二童子來現して、文覺が左右の手を取りて

是其時詠める歌なりと云へり。尤俗説なれども、一體歌の樣は左もあらんやと疑はし。又或說に、西行或時長月の頃、江口と云ふ所を過ぎけるに、折しも時雨しければ、遊女の家に立寄り晴間を待つ程に、宿かりける主の遊女いなみければ、只何となく、

　世の中をいとふまでこそかたからめかりの宿を惜しむ君かな

と詠みければ、あるじの遊女うち笑うて、

　世をいとふ人ぞと聞けば假の宿に心とむなとおもふばかりぞ

斯く返歌して急ぎ内に入りけり。唯村雨のほど、暫しの宿と思ひしに、此返歌のいと面白きに、一夜臥所とせり。遊女は四拾計にもや成らん、姥ながらもさもあてやかに艶しく侍りき。終夜何となき事共語りて、夜明ぬれば、名殘は惜しけれども、再び逢ふ事を契りて別れけり。其後約束の月尋ぬべくと思ひしに、打紛るゝ事有りて過ぎける夜に、便りの人有りて、消息を認めて送りける、

　かりそめの世には思ひを殘す哉きゝし言の葉わすれをもせず

遊女が方よりも、便りに付けて事有り、

　忘れじとまづ聞くからに袖ぬれてわが身もいとふ夢の世の中

願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ

果して建久九年二月十五日に卒す。平日自分の和歌を記して山家集と云ふ(又は西行歌集)。草紙九巻を著して撰集抄と號す。又御裳濯川歌合、色川歌合貳巻皆世に行はれり。生涯の行狀普く都鄙の口碑に有り、或は其形を畫彫刻し、或は型の像にしてあれば、嬰兒も其形を見て其名を知る。誠に古今桑門多しといへども、西行如きの有徳の法師は稀なるべし。西行の和歌は禪定の修行なり、我歌に仍て佛法を行ひたりと、專ら翫びしが、東國に有りけるを、大内に和歌撰集の事有りと聞き、我和歌も入りぬべしと都へ赴きける路次、登蓮法師に行き逢ひ、此度撰集に、我和歌の鴫立澤の歌入れしやと問ひけるに、登蓮聞きて、其歌は撰者失念しけるにや、撰に入らざる由答へければ、西行聞きて、然らば其撰集見るに足らずとて都へ行かず、直に東國へ趣きけりと云へり。是兼て鴫立澤の詠歌自賛なりしが、此度撰集に入らざるゆゑ、不興して歸りしと見えたり。僧の身としてさばかり和歌に執心し、殊に自讃の行跡何事ぞや。是を以て見れば、此法師も一向の桑門にはあらず。或説に、西行法師が遁世は、鳥羽院の后に執心深く、浮名立ちて世を遁れしと云へり。其時渠が歌に、

思ひきや不二の高根に一夜寐て雲の上なる月を見んとは

も取殺され給ひしとかや。僧として佛戒法嗔恚殺生を犯しける也、無頼の悪僧なり。去れば終に憤死して、一念鐵鼠と成りて、佛像佛閣經論書籍を喰ひ破りけるとかや。斯く迄主上を恨み奉りて鐵鼠と成るならば、直に内裏へ走り行き、主上の御手足の爪なりともかぢらざるや。又は虎か獅子に成りて、主上を喰ひ殺し奉りて、恨を晴すべきに、鼠と成りて、恨もなき人の、大切にしける經論書籍を喰ひ破りて迷惑させしは、うろたへたる仕方なり。鐵鼠は猫に喰はるゝ氣遣ひは有るまじけれども、手足の働は出來ぬ筈、迚もなるならば、坊主に似合しき牛になればよいに、鼠とは餘り小さき思付なり。

（二十）西行

西行法師は藤原秀郷の末葉にして、左衛門尉康清が子なり。母は監物源清經の女なり。俗名佐藤左衛門尉憲清というて、鳥羽院の北面なり。若くして書を讀み管絃を習ひ、弓馬に委しく和歌に達せり。元來籠出の心あり、保延三年終に志を遂げ、法名圓位大寶坊、或は大法坊、又西行と號す。諸人其德を尊んで上人と稱しけり。天下に周遊して至らずと云ふ所なく、常に佛涅槃の日、花の下において死なん事を詠ず、

に映りて、忿怒の相を顯したり。今の世に角大師是なりとかや。僧として女に浮名立ち、忿怒して鬼の姿を顯しぬれば、慈惠僧正は佛に成るまじと慈心坊了簡して、淸盛に生れたりと、平家へ追從に言ひふらしたる妄言を書き記し、佛法の本意に違ふ振舞、嘸や釋迦も憎み給ふらん。

（十九）賴豪

白川院御在位の時、后の御腹に皇子おはしまさず。仍て貴僧の聞え有る、三井寺の實相坊賴豪阿闍梨を召され、汝皇子の誕生を祈らんや、驗あらば賞は乞に依るべしと仰有りければ、賴豪畏て、年來深き望有り、勅定相違なくば、皇子誕生勿論の事なりと奏しければ、主上大に悅ひ思召して、賞は乞に任すべしと、重ねて勅定あり。賴豪悅んで退出し、肝膽を碎きて祈りければ、中宮御懷姙有りて、月滿ちければ皇子御誕生あり。主上叡感斜ならずして、恩賞の御沙汰有りければ、賴豪願ひけるは、此度の賞は、三井寺に戒壇を立て、寺門年來の本意を遂げんと奏しける。此事叡慮にも任せず、園城寺に戒壇を許しなば、山門憤りて合戰に及ぶべし、然る時は天台の佛法も亡ぶべしと、賴豪が望勅定なければ、賴豪大に怒り、勅約變じ給ふ上は、皇子は我參らせたれば、取返し奉るべし迚、飮食を斷ちて祈死に死しければ、終に皇子

化現方便を廻らして、實業の衆生を利益せん爲に、造罪招苦の旨を示し、盛者必滅の理を顯はし給ふにやと、源平盛衰記著聞集等に見えたり。さばかり尊き慈惠僧正、清盛に生れて萬乘の天子を惱し奉り、萬民を苦しめ多くの人を殺し、無益の暴惡をなしたるは、觀音の垂跡には請合がたし。たとへ清盛慈惠僧正の再生にもせよ、古今無雙の惡人を、閻王いかなれば日に三度禮せらるゝか、笑止なり。さばかり慈惠僧正を尊敬せば、慈惠僧正にて有りし時禮拜すべきを、曾て御沙汰なし。惡人清盛に生れたるを拜するは、閻王には物好なる事なり。思ふに此慈心坊尊慶といふ法師、己が名に慈惠の二字を顯したるは、慈惠僧正の德をあげて、世に名を照さんと思ひ、あらぬ虛言を言觸して、さしも名高き慈惠僧正に汚名を蒙らしめたるは、俗にいふ贔屓の引倒しなるべし。但圓融の御時、慈惠僧正大內へ參り給ひ、宮女に五濟の證文を、いと尊う講じ給ふ折から、御簾の內より或女房の申し出されしは、

有漏地より有漏地に通ふ釋迦だにも羅喉羅が母の有りとこそきけ

と讀みし時、僧正返歌に、

いなやいなむきても見べきいがぐりの笑めば一度落ちもこそすれ

と詠じ給ふ故にや、僧正浮名立ちて、山門に勸鐘の起請を書き初め給へり。此時僧正の影障子

なり。

（十八）慈心

攝津國清澄寺と云ふ山寺に、慈心坊尊慶と云ふ老僧あり、本は叡山の學院にて、多年法花の持者なりしが、住山を厭ひ此山に來りて住みけり。或時法華經を讀みけるに、夢現ともなく白張の立烏帽子を著たる男、草鞋をはきけるが、竪文を持ち來れり。慈心坊いかなる人ぞと尋ぬれば、閻魔王宮よりの御使なりと答ふ。則竪文をひらき見るに、來る十八日閻魔の廳において、十萬人の持經を以て、十萬部の法華經を轉讀せらるべき間、參勤すべきとの召狀なり。慈心いなみ難く、領掌の文を書きて奉ると見て、夢覺めける。十八日酉の刻息絕えて、閻魔の廳に行きけるに、閻魔樣々の物語有りて曰く、日本の將軍太政入道淸盛は凡人にはあらず、慈惠僧正の化身なり、依レ之我每日三度呪を誦して淸盛を禮拜す、其文に曰く、

敬禮慈惠大僧正　天台佛法擁護者
示現最勝將軍身　惡業衆生同利益

汝此文を淸盛に參らすべしと宣ひけり。案ずるに慈惠僧正は觀音の垂跡なり。今は大權者の

もなし。第五の科とは、日本の正法をいみじき事に思ひて、人間に執心深き科とは何の囈言、日本の正法をいみじきと云ふを咎とせば、佛も我法をいみじきと思ひ、我を信ずる輩は、現世にては福を授け、來世は必ず成佛させんとは、高慢の言葉にあらずや。元來日本の王位をいみじく思ふは、足る事を知るゆゑなり。足る事を知らずして、此上にも天帝に成度抔と思はゞ、咎ともいはん、勿論人間に執著心の深き科ならば、孔子は仁義に執心して聖人となり、釋迦は佛道に執著して佛と稱せられ、凡士農工商の四民共に、皆夫々に家業に執心せざれば、身を修め家を齊ふる事能はず、況んや天子として人間に著心せず、今の世は假の宿抔と捨鞭を打ち、政道に怠りては國治まり難し。隨分人間に執著心深く、津々浦々迄も政道行はるゝ様に思慮を廻らさねばならぬ、天子の職分なれば、延喜帝も別して人間に執著心深く、寒夜の民の寒からん事を思召やらせ給ひ、重ねの御衣を脱がせられ、民の寒苦を御身に思し知られ、一向萬民法樂の政事を行ひ給ひ、天下泰平によつて、三十三年にして崩じ給ふ故、其年數の久敷に依つて、延喜帝と稱せられ、醍醐邊に葬り奉るによつて醍醐天皇と號し奉れり。今の世迄も豐なる世の例には、延喜帝の御代と稱し、或は延喜聖主と仰ぎ奉るなり。さほど帝德貴き賢主を、妄言を以て辱しめ奉る、是偏に口藏鐵堀地獄に堕ちなば、獄卒に命じて、釘貫を以て舌を拔かせ度惡僧

潤の潜膚受の愬に迷はせ給ふも道理也。孔子も、吾言を以て人を取るに、是を宰予に失すと宣へり。大聖孔子すら、人を見違ふの失あり。况んや延喜帝、徳孔子に及び給はず、殊に幼弱にましませば、菅丞相の賢徳を見違ひ、佞臣時平が讒を信じ、罪の實否を糺させ給はず、是又尤なり。然共讒臣に迷はせ給ふ、一事の御誤りを以て、日藏の悪僧めが妖言の僞に、末代に至る迄、悪人の口舌に御名を汚し給へば、主たる人、讒臣に極まらば遠く避けべきもの也。第三の怨敵と號して、他の衆生を損害し給ふ科とは心得ず、惣じて天下を知る人は、逆臣有つて國を亂す時は、早速退治して民の患を救ひ、國法を犯すものをば罪科に當行ひ、諸人の見懲にして、天下を靜謐に治むるは、國王の職なれば、曾て科にあらず。第四の月中の齋日に本尊を開かぬ科とは、其意を得ず。日本神國にして、神武天皇より代々、天子神明を拜し給ひ、民百姓も神を敬ひ、國安泰に治り、元より佛法の沙汰もなければ、本尊抔云ふものは古鐵店にも見えず。去ども世々天皇を始め、萬民死して冥途と云ふ所へ行き、月中の齋日に本尊を開かざる科とて、鬼にせめられたる沙汰もなければ、舊記にも見えず。聖徳太子日本へ佛法を流行せしめ、内裏にも佛像を安置せられ、二間の本尊抔と稱せらるれども、元來佛像は西戎の人の像なれば、天照太神の御末たる、天子の御身には穢らしきものなれば、本尊もなければ、開かぬとても科

種の科により地獄に墮ちたり。第一には父寛平法皇の命を背き、久しく庭上に見下せし科、二ツには讒言に迷ひ、罪なき道眞を流罪せし科、三ツには自ら怨敵と號して、他の衆生を損害したる科、四ツには月中の齋日に本尊を開かぬ科、五ツには日本の帝位をいみじき事と思ひて、人間執心の深き科、此五ツを根元として、自餘の罪業無量なり。是を以て苦しみを受くる事盡きず、願はくは上人朕が爲に善根を修し、諸國に壹萬本の卒都婆を建て、大極殿にて佛名懺悔の法を修すべしと宣ひければ、日藏泪と倶に歸ると覺えて蘇りけり。誠に掌を打つて一笑するに堪へたり。斯る妄語を吐きしを、愚盲の族傳へて書に記し、さしも聖主の譽有りし延喜帝に、無實の汚名を蒙らしむる事、日藏こそ憎むに絶えたる、以の外の惡僧なれ。渠が云へる延喜帝五種の科、第一御父寛平法皇の命を背き、久しく庭上に見下せし科とは、菅丞相を遠流の時、寛平法皇は遠流の罪を宥めんとて參内有りしに、衛士門を開かず、終夜禁門の外に彳み給ふと云へり。奏聞する人なければ、法皇空しく還幸有りける由。元來帝は、法皇の參内し給ふをば曾てしろしめされず。是は讒臣時平が威に恐れて、衛士ども禁門を開かず、奏聞する人なければ也と、舊記に見えたれば、強ち帝の御科とも云ふべからず。第二讒言に迷はせ給ひ、罪なき菅公を流し給ふは　不明の謗有りといへども、帝其時はいまだ十七歲に成らせ給へば、時平の浸

（十七） 日藏

和州笙窟の日藏上人は、承平四年八月朔日午の尅に頓死して、十三日を經たり。其間夢現ともなく、金剛藏主の善巧方便にて、三界流轉の間、六道死生の栖を見けるに、等活地獄の別所鐵堀地獄と云ふ所に、火焰うづまき黑雲掩ひ、鐵の觜の鳥罪人の眼をつゝき、又鐵の牙の犬罪人を喰ひ付き、獄卒聲をいからし、振ふ事雷の如く、虎狼罪人の肉を裂き、其中に燒炭の如くなる罪人四人有り、其叫ぶ聲を聞けば、忝くも延喜帝にておはしましける。日藏ふしぎに思ひ、立寄つて子細を尋ぬれば、獄卒答へて曰く、一人は是延喜帝なり、殘り三人は臣下なりと云うて、鉾に貫き、焰の中へ投げ入れける有樣は、業果法の現とは云ひながら、餘りに心うく思ひ、日藏頓て立寄り龍顏を拜し、本國へ歸り給へと度々云ひければ、獄卒聞いて、痛はしきかなと、鉾に貫き焰の中より投出し、十丈計り差上げ地へ打付くれば、燒炭の如き御形散々に碎けて、其形見え給はず。獄卒又走り寄つて、是を投げて一所に蹴集むる。樣々にして活々と云ひければ、又常の御姿顯れ給ふ。帝宣ひけるは、汝心我を敬ふ事なかれ、冥途にては貴賤上下を論ぜず、罪業なきを以て尊しとす。朕元來民を痛はり私の道を用ひざれども、今五

を師とすと云へり。去れば歌道に名譽有りて、一首の歌にて雨を降らせし功、古今の美談なり。帶刀節信と云ふ者、能因に逢うて互に感緒あり。能因が曰く、見參の引出物に見すべきもの侍りとて、懷中より錢の袋を取り出しけるに、其中に鉋屑一筋ありて曰く、是は吾重寶なり、長柄の橋を作る時の鉋屑といひければ、節信甚喜悅して、懷中より紙に包みし物を取出し、是をひらき見るにかわきたる蛙也。是は井出の蛙なりと云ひて、倶に感歎して、各懷中し退散せしとかや。是を以て見れば、能因は强て風雅の名譽を賣らんと欲する、浮世者と見えたり。古語に、物を翫べば志を亂ると云へり。況んや法師の身として、斯る振舞甚だ見苦し。其上能因或時の歌に、

　みやこをば霞とともに立ちしかど秋風ぞふく白川のせき

此歌を秀歌なりと自讃して、是を都に居ながら披露せんもいと口惜しと、潛に片田舍に籠り居て、面を日に照し色を黑くし、陸奧の方へ久しく修行の序に詠みたる由、披露せしとかや。歌に著するさへ、法師に似氣なき振舞なるに、佛の戒め給ふ妄語戒を犯して、强て名聲を求むる事甚だ罪深し。歌人は歌道に甚だ志深しと歎美すべきが、佛者は嘸憎がるべし。

（十五）　喜撰

喜撰法師は世系定かならず。佐々木高秀古今抄に、喜撰は橘諸兄公の孫、奈良麿の子、醍醐法師といへり。古今榮雅抄に見えしは、奈良麿の子、周防守良德の子也と云へり。窺撰と稱しけるが、古今撰集に入れられしを悅びて、喜撰法師と改めける也。光孝天皇の勅に依つて和歌を作り、世を遁れて醍醐山へ登りける故、醍醐法師といふ。後に宇治山に隱れて密呪を持し、穀を辭し松葉を喰ひ仙道を得、一日一峯に登りて雲に乘じて去れり。御室戸の奧の喜撰の舊跡に、後人庵を結んで喜撰庵と號す。喜撰嶽あり、此所にて登仙したりと云へり。僧の身として厭離穢土欣求淨土の本意にあらず、長生を願ひ仙人と成りしは、釋氏の罪人たるべし。然れ共此法師、名利には耽らざるか。其頃も宇治の螢見は有りけん、借し座敷の思ひ付なきは殊勝なり。

（十六）　能因

能因は橘諸兄公十代の孫にて、肥後守元愷が子也。永愷と號し、文章生に補し、肥後進士と號し、後に世を遁れ能因と改む、古曾部入道とも號す。昔より和歌の師匠なし、能因始めて長能

して詠ず、

　名にめでて折れるばかりぞ女郎花我落ちにきと人に語るな

又小野小町清水寺に詣でける時に、遍照此寺に有りと聞きて、いと寒きとて、衣一ッ暫し借し給へとて、

　岩の上に旅寐をすればいと寒しこけの衣をわれにかさなん

斯く云ひやりければ、遍照返歌に、

　世をそむく苔の衣は只一重かさねば疎しいざふたりねん

と詠めり。是等の二首俗にまさり、詞に破戒の罪あらん歟。去れば、僧の身戀歌を詠じ、戀の情を能く云ひ叶へ、秀歌に譽を得て、撰集に入れし(錯簡あるべし)歌人の馬鹿共、此僧と同じ罪なり。戯れといへども、思ひ内に有れば色外に顯ると云へり、恥づべき事ならんか。彼慈惠僧正は、官女の歌の返歌して、浮名立ちたる例有れば、恐るべし愼むべし。或説に、遍照が遁世は、仁明帝に別れ奉り出家せしにはあらず、嵯峨帝の后に浮名立ちて、世を遁れしと云へり。是尤俗説なるべきか。元來色道に溺れぬれば、斯る虚名もおのづから受くるなり。兎角此坊主、心は俗の上手を越すならん。

ら奢る、賓公是を愁ひて、心を石泉に凝し跡を烟霞に晦すといへり。誠に玄賓の如き道徳の僧は、古今稀なるべし、誰か是を譏らんや。然しながら山田を守りて鹿鳥を驚すは、殺生戒を犯さゞれども、いさゝか忍ばざる心やあらんと、いと疑はしく、そゞろに袖を濡しけり。

（十四）遍照

僧正遍照は、大納言良岑安世の子也。俗名を良岑宗貞といふ。仁明天皇の寵臣にして、少將藏人頭也、故に良少將と呼ぶ。仁明帝崩じ給ひて、御葬の夜より世を厭ひ、叡山に登りて、慈惠僧正の室にをりて薙髪し、遍照と號す。仁明帝崩御次の年、皆人御服脱ぎ、官位を賜はり悦びけるを聞きて咏ず、

みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ

斯くて元慶三年權僧正となり、仁和元年僧正と成り、同二年封百戸を給ひて、則ち元慶寺の座主と成りて、輦を免され、仁王殿において賀を賜ふ。元慶寺は花山にある故、花山僧正とも號し、或は視中院の僧正とも呼ぶとかや。甚だ世に時めける有樣、玄賓が見ば爪彈をして憚るべし。元より俗にて有りし時、名におふ好色ゆゑ、僧になりても色情止まざるなり。嵯峨野にて落馬

三輪川の清き流にすゝぎてしころもの袖をまたはけがさじ

斯く詠ぜられしと云へり。一說に、嵯峨帝玄賓の道德を尊み給ひ、僧都になし給ひしを辭して、位記を木の枝に挾み、和歌を書き付け置きて、

外津國の水草清し事しげきみやこのうちはすまぬまされり

斯く潜に遁れて、備中湯川と云へる所の山寺に行きて、德を隱し、賤しき僧の體にて士民に身をよせ、夜は山田を守り鹿を驚かし、晝は稻抔を刈りて日月を過し、秋も過ぎて業もなかりしかば、

山田守る僧都の身こそ悲しけれ秋はてぬれば問ふ人もなし

と詠ぜり。是よりして鹿おどしを僧都といへるよし。然ば元亨釋書に、玄賓の跡を民家の奴にくらまし、田に有る稻を守り鳥雀を追ふを勤とす。日域今に至りて、鳥雀を驚せる芻靈、僧都を以て名に銘するものは、玄賓に起れりといへり。芻靈は草をくゝり人の形を作り、田の邊に置きて鹿鳥を驚かすものなり。山田の案山子と云ふもの是なり。玄賓の傳委しくは扶桑隱逸傳に見えたり。その濫猥不軌を繩すを以て也。此事は扶桑隱逸傳の賛にあり。推古帝始めて觀勒を僧正とし、德積を僧都とし給ふ、蓋し止む事を得ず。澆季の緇侶、德を立てず虛名をもつて自

畜生同前の、遊女川竹の女と生れ給ひ、餘多の凡夫に枕をかはし、佛體を穢し、多くの衆生を色に迷はせ給ふはいかにぞや。普賢も遊女に生れ給ふは、よからぬ事と思ひ給ひてや、性空上人に、此事必ず口外へ出すべからずと口留し給ひしに、上人口さがなくして、諸人にもらしけると見えたり。此事猿樂の謠ひ物には、西行法師江口の君が許に宿りし時、江口の君普賢菩薩と現じ、船は白象と成りて白雲に打ち乘り、西の空へ飛び給ふと諸に謳へり。大慈大悲の佛菩薩の御身として、情なくもいまだ年も明けざるに、普賢菩薩に成りて西の空へ飛び行き、親方迄も大きに損をかけ給ふは、甚むごき仕方なるべし。

(十三) 玄賓

玄賓僧都は弓削氏にして、阿州の人なり。山階寺に住せり。性世塵を厭ひ、法師の僧官に營するを愁ひて、更に寺院の交りを好まず、密に伯耆國の山に隱れたり。然るに桓武天皇御惱に依つて、召して冥助を乞はしめ給ふ。玄賓遁れ難く又都に入りて、帝の御惱平愈し給ひ、辭して山に歸るといへり。又或說に、玄賓世をいとひ、三輪川の邊に幽かなる庵を結びて住せり。平城帝の御時、僧正に成し給ひしを辭して、

見奉り度と思はゞ、神崎の遊女長者を見るべきよしにて夢覺めぬ。上人奇異の思ひをなして彼所に至り、長者が家に著き給ひ見給へば、遊女亂舞の體なり。長者は横座に居て、皷を打つて亂拍子に次第を取り、其詞に曰く、周防むろづみの中なるみだり井に、風は吹かねどもさゞ波立つとなり。上人閑居し給へり。此時忽ち普賢菩薩の形を現はし、六牙の白象に乘りて、眉間より光明を放ちて、通俗貴賤男女を照らし、卽ち微妙の聲を出して、實相無漏大海に、五塵六欲の風は吹かねども、隨緣眞如の浪立つ時なしと。上人感涙を押へ難くして、眼をひらき見れば、又元の如く女人の姿に成つて、周防むろづみの言葉を出す。眼を閉づる時は、菩薩の形と變じ法問を演べ給ふ。形の如く度々敬禮して、泣々歸り給ふ時、長者俄に座を立つて、間道より上人の許へ來て、此事口外に出すべからずと云ひ終つて、則ち俄に死す。異香空に充滿して甚だ香ばしく、長者頓滅のあひだ、遊宴興さめて、悲泣する事限なく、上人益悲涙に溺れ、歸路に迷ひけりとなん。彼長者女人は好色の類なれば、誰か是を權者の化作と知らん。佛菩薩の悲願、衆生濟度の方便によつて、形を樣々に化けて樂しみ給ふ道迄も、貴き賤しきには寄らざる事を、か樣の例にて心得べしと見えたり。此事西行撰集抄に書けり。普賢菩薩衆生濟度の方便ならば、遊女と生れ給はずとも、いか程も能き方便も有るべきに、菩薩の御身として、

人の妻に奸淫する事、甚しき不義なり。朧月夜の内侍は、源氏の御先帝寵愛有りしに、源氏内侍と密通したり。是等は人倫の行跡にあらず。又女三の宮は、源氏の御先帝の姫君なれば、源氏の爲には姪なりしに、源氏是と契りしは、婬亂絶倫なり。此類は親子兄弟の中にて語るに忍びざる草紙なり。斯の類を始として、五倫五常の道に違ひたる事のみ多く見えたり。然れ共源氏物語を見る者、能く味ひぬれば、好色淫風の事より、仁義の道に便りありと云へり。去れども善に移る事は難く、悪には進み易し、殊に好色の欲は、老いたるも若きも智も愚も、迷ふ時は亂に及び命に及ぶなり。源氏物語の意味深き事は悟り難く、好色淫亂にばかり心移り、道ならぬ行跡をするもの多かるべし。然るに觀音の化身たる紫式部、斯る淫亂不義の作り物語を書いて、佛の身には似合ざる、邪淫妄語の戒を破り、衆生を色道に導き給ふは、いと淺ましき觀音の志にこそあれ。

（十二） 神崎遊女

十訓抄に曰く、書寫山の性空上人、生身の普賢菩薩を見奉るべきよしを、祈誓し給ひけるに、或夜讀經に疲れて、經を握りながら脇息に寄掛り、しばしまどろみける夢に、生身の普賢菩薩を

云へり。式部源氏物語を作りし起りは、大齋院選子內親王より上東門院へ、珍らかなる物語や侍るかと、御所望有りしゆゑに、うつほ竹取樣の物語は目なれたれば、新しく撰び奉るべき由、式部に仰付られ、式部石山寺に通夜して此事をいのりしに、折しも八月十五日の夜、月湖水に映りて澄み渡る儘に、物語の風情心に浮みければ、まづ須磨明石の兩卷を書留たり。是によりて須磨の卷に、今宵は十五夜なりとおぼし出てと書きたり。其後次第に書き加へ、五十四帖となれり。大概莊子が寓言に本づきて書き作る物語なり。式部は博學廣才にして、儒學も史記漢書に通じ、佛道も天台一心三觀の血脉を繼ぎたる由、最凡人にあらず、觀音の化身なりといへり。物語の詞の花、歌道の助と成り、騷人墨客の翫の種と成るといへども、國を治め家を齊へ身を修むる益には成らず、是を讀む者却つて好色のいたづらものと成る。去れば源氏一部、悉く好色妖艶の事のみにして、人倫の道に違ふ事甚し。まづ光源氏は、桐壺の帝更衣を寵愛して設け給ふ若宮なり、母の更衣病によりて身まかりし後、又藤壺の女御を愛し給ふ。然るに源氏藤壺に戀慕し給ひ、命婦を賴みて密通し、藤壺源氏のたねを懷姙して若宮を生めり。藤壺は源氏の爲には繼母なり、父帝の御目を掠めて繼母と密通する事、人倫の道には有るまじき事なり。又源氏の方違の爲に、紀伊守中川の家に宿し、渠が親伊豫守が妻に、一夜の契有りしとかや。

身ならば、業平死して辭世の歌とて、終に行く道へゆくべきに、住吉明神となりて此世に止りしは、色道に輪廻したるや。淺しき觀音の心ぞや。

（十一）紫式部

紫式部、父は越前守藤原爲時といふ。母は攝津守爲信の娘賢子。其始御堂關白の御女彰子に仕ふ。彰子入内有つて一條院の后と成り、上東門院と號す。式部も相續いて上東門院に陪侍す。後右衛門佐宣孝に嫁して、大弐三位辨内侍を生めり。式部始は藤式部と云ひしが、源氏物語の內、若紫の卷殊に勝れて書きなしたる故、藤式部の名を改めて紫式部と呼べり。又一說に、道長の北の方、式部を上東門院へまゐらるゝに、我由緣のものなり、哀と思し召せと申さしめ給ふ故、紫式部と申す、是に依つて古歌に、

　紫の一もとゆゑに武藏野のくさはみながらあはれとぞ見る

此歌によりての名なりとかや。又一說に、藤式部の名幽玄ならずとて、藤の花のゆかりをかりて、紫の字に改めしと云へり。又日本紀の局と呼ぶは、一條院源氏物語を御覽有りて、式部は日本紀をよくこそ見たりと宣ふ時、左衛門内侍此綸言を妬しと思ひ、日本紀の局と號しけると

歌に、

　なきあとのしるしは爰に在原や塚のかたちは船のなりひら

今神に祝ひて、業平天神と號するは此所なり。賣僧の所爲なるべし。去れば雜の拾遺に曰く、伊勢物語の注に、都木といふあり、此書の中に、業平一代の内に戯るゝ女、三千餘人有りとあり、其上諸國を廻りしとは非なり、東山に籠居して、都の事を他國になぞらへし故、都木と云ふとなり。但此書は異說なり、普通の歌道者は嫌ひ侍れど、本文をあげて注せし間、さのみ捨つべきにもあらずと見えたり。或說に、業平は極樂世界歌舞の菩薩、正觀音の化身なり、凡三千三百三十三人の女に契りて、一人も犯さず、則ち業平の歌に、

　知るらめや我にあふみの世の人の暗きにゆかぬ便ありとは

是我に契りたる所の女を、悉く佛果に至らせんとの詠歌なりと云へり。觀音衆生を濟度せんと思はゞ、卽ち釋迦の如き道德の出家に生れ、凡夫を善道に引き入るゝがよし。色々ばけらるゝ身で、淫亂不義なりし業平と化し、佛の身にて邪淫を犯して、たとひ三千人と契りて壹人も犯さずと、へらず口を云はるゝが、何も慥な證據人なければ、急度した證據は猶なし。いかなればさばかり非義非禮の淫亂たる業平を、神よ佛よと有られぬ僞りを傳へけるにや。實觀音の化

き、もしや業平に逢ふ事もやと、住吉に行きて、此處かしこと歩行しかども、岸打波の音松の音のみにて面影もなく、空しく歸らんとせしに、其夜の夢に業平打笑みて、

　思ひ出し神代の事も忘れじなむかしながらの我身なりせば

夫よりして、世俗皆業平を住吉明神なりと思ひけり。業平在世の時、住吉にて歌を讀み、明神感納有りて神詠有りしと有れば、業平を住吉大明神といふ事いぶかし。豈神明業平に化現して、淫亂不義の振舞し給はんや。元來業平神仙にならざると見えて、伊勢物語に辭世の歌など見えたり。大和國石山在原寺は、業平の菩提所にて、業平の墓業平の像ありといへり。從三位爲子在原寺にて讀める歌、玉葉集に見えたり、

　影ばかりその名殘りて在原のむかしの跡を見るもなつかし

加茂岩本の社は、神體業平といへども、業平神に成りしにはあらず、後人の馬鹿共が神に祝ひたりと也。慈鎭和尚の歌に、

　月を愛で花を詠めしいにしへのやさしき人はこゝに在はら

俗說に、業平は東に下りて身まかり、下總牛島といふ所に、業平塚といへる古塚あり、業平は隅田川にて、舟より落ちて空しくなれりとて、船の形に塚を築きたりと云ひならはせり。則ち

よめり、

我見ても久しくなりぬ住吉のきしの姫松いく世經ぬらむ

此時に住吉大明神、宮の扉をひらき、出現ありて詠じ玉ふ、

むつまじと君はしらずや瑞籬の久しき世より契りそめけん

此歌伊勢物語に見えたり。古今集にも雜歌の部にあれども、讀人知らずと見えたり、子細ある事にや。元より神は非禮をうけ給はず、何ぞ淫亂不義の業平の歌に、神明愛で給ひ出現し給はんや、いぶかしょ。世に業平は死せずして、神仙に成りしといふ說あり。神社考にいはく、世に傳ふ、業平は容貌嫺雅にして和歌を善くし、一旦吉野の川上に入つて、終る所を知らずと云へり。又本朝地理志にも、業平は和歌の仙なり、吉野川上に入つて行方を知らずと見えたり。然れども三代實錄に、元慶四年五月五日病を發し、同二十八日子の刻に、生年五十六歲にして卒す。滋春遺詞に任せ、東山吉田の奧に送り納めて廟を建つ。同九月十三日、宇治中納言藤原朝政熊野詣の時、和泉國大鳥郡を通りしに、業平青地衣を著し、黑き馬に乘り、供奉の人十人計前後に隨へ見えたり。朝政夢の如く覺えて、いかに亡人と聞けるものをといひければ、業平答へて、當時は住吉にこそと云うて、かきけす如く失せにけりと。中納言行平此事を傳へ聞

大内に仕へし官女ながら、賤しき遊女賣女に劣りたる婬亂、公卿も又遊女と云ふものの如く、猥りに出會して、君を恐れず世を憚らず放埒の事、帝も是を咎めざるゆゑ、互に取替したる戀歌を、撰集に入れらるゝ抔は、寬仁大度危政とや云はん(脫誤あらん)忽ち死刑遠流は免るまじ。中にも出家たる身にて、人の妻に密通するを、俗におち坊主と呼ぶ、道命を權輿とすべし。唐土にては、妻を持ちたる僧を火宅と云ふよし。去ば道命が、式部と一車に乘りてあるきけるも、火宅とやいはん。

(十)　業平

右近衞權中將在原業平、平城天皇の御子、彈正尹阿保親王の五男、母は桓武天皇の皇女伊登内親王、姓在原にして五男故、在五中將といふ。容貌嫺雅なる故、閑麗翁とも云へり。三代實錄に、業平朝臣は容貌嫺麗にして(脫誤あらん)學才はなき人にや。其行跡正しからず、生涯好色に耽り、淫佚亂行の人なり。委細は伊勢物語に顯然たり。今の世に、業平如きの不行跡ものあらば、忽ち罪科に行はるべし。然るに世俗、業平は神明の化身抔と尊み、佛の再來と崇敬するは如何ぞや。或說に、天安元年正月二十八日、文德天皇住吉に御幸あり、業平供奉して和歌を

て讀み給ふ時は、梵天帝釋を始として、諸菩薩影向して聽聞せさせ給へば、我々抔は中々近付事叶はざるに、今宵女人を犯して、沐浴もなく穢れ給ふ、諸菩薩も影向し給はず、依つてゆるゆる聽聞し侍ると云うて歸りぬ。後に考へ見れば、此老人は道命が父に仕へしものなるが、道命惡名あまり沙汰あるによつて、道命が幼稚の時別れし故、顏も覺えずなれば、氣の毒さにかやう計らひしならん。古より名僧智識と聞えしは、千人に千ながら、女淫を犯す事は、表向愼むふりにて、少々餘人が聞き知りたりとても、少しもひるまず、俗といふものはやぼなものぢやと嘲るなり。女犯は少しも穢れたるものに非ず、ゆゑに我々も此世に生じて、俗を誑り金銀を貪り女を犯す事、俗のたはけは却つて少し抔と、世人を笑ひ誹る事、皆僧の今日にする所なり。又和泉式部と同じ車に乘り往來しけるとかや。保昌はくそだはけ、今の武士ならば、道命と式部を一刀に四ッにすべきに、保昌は鼻の下の長き男と見えたり。式部が婬佚も詞及ばず。惣じて女ほど油斷のなり難きものはなし。去るによつて昔より諺に、七人の子を持つとも、女に心をゆるすべからずとなり。兎角夫が通人と云はれ善人といはれたがる故、女はのし上るものなり。今の女抔は別けて邪なり。遊女賣女の類、世間に多くかた付き、人の妻となるゆゑ、外の女も自然と斯亂らになり、五人や六人に肌をふるゝは、何の物かはとも覺えず。式部抔は

保元年雲居寺に於いて、七十四歳にして死す、誠に古今未曾有の惡僧也。出家の身として、邪婬戒を犯して佛罰を受けず、却つて行法尙おとろへずとはいといぶかし。佛何ぞや墮落の僧に加護あらんや。誠に淨藏は世俗を惑するの大惡僧なり。かたもなき妄語を云ひ置きしを、一ツ穴の賣僧ども世に云ひ傳へしを、後世の芋堀坊主ども、道理に闇くして書に著し、末世の坊主を、彌惡道へ引き入るゝこそ淺ましけれ。されば今の世に、女犯肉食せざる僧を、淸僧とて用ひるもをかしけれ。思ふに婬佚の僧法師の、眠藏に梵嫐を安置する、濫觴は淨藏ならん。

（九）　道命

天王寺の別當道命阿闍梨は、法興院攝政道綱の息男なり。僧として色に耽る事俗に過ぎたり。兼て平井保昌が妻和泉式部が密夫なり。其外うるはしく讀經するに、妙成る音聲あり。或夜和泉式部が許に宿し、目覺めて經を讀み、八軸讀み終つて側を見れば、八十計の老夫、感を催して讀經を聞き居たり。道命、如何なる人ぞと問ひけるに、我は五條西洞院の邊に住むものなるが、此御經を今宵承りし事、生々世々わすれがたく候と云ひければ、道命、法華經を讀誦するは常の事なり、など今宵計左は云はるゝ哉と尋ねければ、老人答へて曰く、御身潔齋し

正しからざる生質と見えたり。去れば時平は、菅公を讒言しけるは言ふに及ばず、叔父大納言國綱の室を奪ひ取りたる事　舊記に見えたり。斯る暴惡無道の時平が娘なれば、婦の道に違ひ、元良親王と密通して顯れし時、元良親王が、わびぬればの歌を讀みて、御息所へ遣したるよし、多く書に見えたり。斯る婬婦なる故にや、朝觀上人不義を仕懸たるにて有るべし。手を取りかはせし計にはあるまじ。

（八）　淨藏

淨藏は貴所といふ、又大德といふは、淨藏を貴ぶ稱名なり。三好朝臣淸行が八男にして、日藏が兄也、洛陽の人、母は嵯峨天皇の皇孫女也。淨藏四歲の時千字文を讀む、一を聞いて二を知る、聰明絕倫なり。十二歲にして叡山に登り、出家して玄照の弟子と成り、中齡にして雲居寺を草創し、後年平中興が娘を妻として、雙子を生めり、布施伊能の兩氏今に子孫あり。墮落の後行力衰へず、加茂川の水を祈りて逆樣に流し、八坂の塔を祈つて傾かす、奇靈甚しき事數へがたし。學は內外を兼ね顯密をわたり、悉く天文易經醫卜管絃音律技藝文章、皆貫攝抜萃して、康

志賀寺の朝觀は、行學勤修の聖才有りと云へる名僧なりしが、或時京極御息所、志賀花園の春の景色を見給ひて歸るさ、車の物見を明けられたるに、朝觀上人計らず目を見合ひ、覺えず心迷ひ魂うかれ、戀慕の情頻にして止む事を得ず、御息所の御前に行き、鞠の坪の掛りの許に、二日半夜佇みければ、御息所御簾の内より遙に見給ひ、哀とや思しけん、彼心を慰めんと御所へ召して、御簾の内より御手を出し給ひければ、上人則ち御手を取つて、

　はつ春の初子のけふの玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒

と云へる古歌を吟じければ、御息所とりあへたまはず、

　極樂の玉の臺のはちす葉にわれをいざなへゆらぐ玉の緒

と返歌し給ひて、上人を慰め給ふとかや。さばかり行學勤修の老僧、人目も恥ぢず御息所の手を取りて、あつかましく古歌を吟じたる心を、思ひやられていと淺ましき振舞、言語に絶えたる惡僧なり。女の手より物をとれば、五百生の間手のなき者に生るゝと、釋迦めがぬかし置いたと佛語に在り。去れば古の禮にも、男女親ら授けずと云へり。御息所も又、朝觀と手を取りかはし返歌有りしは、甚だ貞に違へり。此息所は、本院の大臣藤原時平の女褒子といふ。宇多天皇に愛せられ、雅明親王載明親王を生む。主有る身として斯る不貞の振舞は、父時平に似て、

師を恥しめ、宗門を穢したる出家餘多有り。斯る非道を世に弘め、罪なき兒童を苦しめ、僧として惡道に陷る、弘法こそは實に非道の惡僧成るべし。去れ共破戒の比丘の爲には、莫大の功德にして、誠に菩薩の大慈悲ならん。

(六)　眞濟

柿本紀僧正眞濟は、空海阿闍梨の弟子にして、有驗の高僧と呼ばれしが、五十五代文德天皇の后、染殿の后と密通、露顯して伊豆の國へ流されしが、后を戀ひ慕ひ、手自松を栽ゑて、后に准らへ愛しけるが、枝葉都の方へなびきけるゆゑ、都松とも云ひ、或は染殿松とも號して、後世に殘れり。眞濟死して、執心紺青鬼と云へる鬼に成りたる由。然れども此說定かならず。淸和天皇の御后も、東光寺の善祐法師と密通し、顯れて后は位をすべり、善祐は伊豆の國に流されしを、染殿と眞濟密通せしと誤り傳へたるよし。されども眞濟が斯る浮名立ちしは、行跡正しからざる故と見えければ、虛實を論ぜず、兩僧ともに無賴の惡僧なれ。

(七)　朝觀

名付けて大布施といふ、又以身施ともいへり。

(五) 弘法

弘法大師、父は讃州多度郡の人、佐伯氏田公、母は阿刀氏、稚名貴物と云へり。出家して空海と號して、勤操僧正の弟子と成り、博學能書の譽有り。承和二年三月廿一日、高野山に入定して、弘法と諡を賜ひ、大師號を賜ふ。佛者の說に、龍樹菩薩の後身なりと云へり。去ばにや、空海と云ひし時入唐して、青龍寺の慧果和尚に隨ひて法を極め、歸朝して本朝に弘めしは大功なり。然るに男色の戲れは、弘法唐土にて傳受して、日本に弘めしと云へり。貝原氏が和事始にも、此戲れは弘法以來の事なりと見えたり。然らば空海は、少童の爲には非道を弘めし大極罪人にして、菩薩の後身には不埒なる僧なり。元來出家は女犯の禁戒あれば、世の譏りを恥ぢ人目を忍ぶといへども、男色は出家の犯すべきと云ふは、元來我儘勝手なり。小姓を抱へ野郎に戲れ、淫佚に溺るゝ事其罪深し。故に古人も、男色は陰陽の亂れたりと云へり。或は亂風と名け非道と呼ぶ、佛豈非道の邪淫を許し給はんや。男色も女色も婬欲の情に替る事なし、然れば破戒の罪は遁るべからず。女犯肉食は勿論、諸惡自ら生ずべし。去ば男色に惑溺し、身を亡し

て、衆生を濟度し給はんと、廻り遠き思案なり。やはり其儘正身の紫摩黄金の肌の千手觀音にて、久しい物なれども彼紫雲に乗り、歌舞の菩薩めに、音樂か時行歌でも唄はせ、靈香を薫じ花を降らせて顯れ、白毫の光りをかき立て、妙なる聲色にて、甚深微妙の說法なりと、てつぼう咄しなりと奇妙をなし、神通方便大小便でもたらしたらば、衆生も膽を潰して、隨喜の涙ははらはらと流し、忽ち佛道に歸依して、娑婆世界に惡人はあるまじきに、玄昉と云ふ邪僧に生れ、光明皇后に墮落し、思はぬ邪婬を侵し、廣嗣が怨靈に首を拔かれしと云へば、佛は餘程たはけなるものなり。併し玄昉實に千手觀音の化身ならば、やみ〳〵と廣嗣が怨靈に首を拔かれんや。既に坂上田村麿、勢州鈴鹿山惡賊退治の時、淸水寺の千手觀音擁護をなし給ひ、惡賊悉く亡びし事、猿樂どもの謠物に諷ひ、三歲の兒童も能く知れる所なり。況んや千手觀音の化身、玄昉などが佛力を以て、廣嗣が怨靈を降伏せざるは、論ずるにたらざる妄言なるを、書に記し佛に汚名を蒙らしむるこそ歎かはしけれ。元來(脫誤あるべし)玄昉共に觀音の姿を顯せしは、正直一遍の聖武帝の、鼻毛を數へし奸計なるべし。されば光明皇后は不比等の女にして、聖武帝は不比等の聟といひ、外戚の威勢甚しく、帝恐れて、皇后の不義を知らず顏にて過し給へ共、玄昉をば止む事を得ずして、此節筑紫へ流せしと見えたり。或書に、婬僧に婬佚を恣にするを、

の后、光明皇后に深く歸依せられ、常に玉簾の内に召されけるに、潛に玄昉と皇后と、枕を並べて婚遊し給ふを、太宰少貳藤原廣嗣是を窺ひ見て、天皇に斯と奏しければ、帝忍びて御幸あり、御簾の隙より叡覽ありけるに、皇后は十一面觀音、玄昉は千手觀音と顯はれ、ともに慈悲の御顏をならべて、同じく濟度の方便を語り給へり。帝叡信を發し給ひて、廣嗣は國家を亂すべき徒なり、一天の國師たりし貴僧を讒せし條、罪科深しとて、西海の浪に流し者と成ると、源平盛衰記に見えたり。又日本王代一覽には、天平十二年八月、太宰少貳藤原廣嗣上書して、時の政事の得失を申す。下道眞備と玄昉僧正世を亂すの間、是を除かんと言上して、九月終に筑紫において反を謀る。是に依つて大野東人を大將軍とし、紀飯麿を副將軍として、諸國の官兵壹萬七千餘人を以て、廣嗣を討たしめ給ふ。廣嗣終に戰負けて、安倍黑麿に生捕られて首を討たる。玄昉僧正は同十八年災死す。沙門の行ひに非る事有るによつて、筑紫に流されしが、廣嗣が怨靈に引きさかれしと云へり。又盛衰記に、太宰府の觀音堂造立あり、其供養に玄昉僧正は道師たり、依つて高座に上りて敬白しけるに、俄に空かき曇り雷鳴して、高座の上に黑雲舞下りて、玄昉を握りて天に上り、次の年六月、彼僧正が生首を興福山の南大門に落して、咄と笑ふ聲したりと。廣嗣が怨靈玄昉を怨みて、斯しつるこそ恐しけれ。然るに千手觀音玄昉に生れ

く成りぬ、堪忍すべくもあらねど、癩病人の背を撫でて垢を流し給ふに、此病人の曰く、我病を愁ふる事年久しく、然るに良醫の言に、人にうみを吸はせなば病必ず愈べしと云ふ。然りといへども大慈悲の人なければ、空しく打ち過ぎぬ。我聞く、皇后は無比の哀憐を行ひ給ふとかや、希くは我を救ひ給はんやといふ。皇后止む事を得ずして、終に癩瘡の膿を吸ひ給ふに、其癩人大光明を放つて、我は阿閦佛なりと宣ひて、終に見えざるとなり。皇后隨喜の思ひをなし、則ち其所に大伽藍を建て、阿閦寺と名付給へり。天子の后として、湯風呂屋の賤女の如く、下賤匹夫に近づき、御身を穢し給ふ事、古今其例を聞かず、元より皇后は名にあふ大婬婦にて、浴事に事よせて諸人に近づき、婬事を恣にせん爲に浴室を設け給ふと云へり。斯る穢らはしき行跡を、聖武帝も制し給はざるや。淡海公抔と云へる賢臣も、是を諫めざるは不審。其上皇后は十一面觀音の化身とあれば、阿閦佛とは佛仲間なれば、癩病人と成つて皇后の心をためし見るに及ぶまじ。兎角佛道はあさはかな振舞なり。但此阿閦佛といふも、玄昉僧正が類にや。

（四）　玄昉

玄昉僧正は、神叡とも號せり、俗姓は阿刀氏なり。靈龜二年入唐して、智識の名高く、聖武帝

聖德太子を尊ぶ事神明の如し。殊に木を取扱ふ輩を始め、諸職人信心する事甚し。工木の族信心して、工程の巧を祈るは、唐土にて公輸、日本にては飛驒抔をこそ祈るべきに、太子を祈るはいかゞと問ふに、俗說に、太子攝政の時、諸職人受領せし其恩を謝する爲に信仰するとかや。今太平の御代に生れて、衣食住に安んじ、其程の樂しみを極むるは、恐れながら東照宮を始め奉り、御代々の大君の御恩澤なり。何ぞや近きを思はずして、遠きに迷ふは俗の常なり。我いまだ聖德太子の工巧を守つて、譽を得しものを聞かず。

(三) 光明皇后

皇后は聖武帝の御后なり。父は太政大臣藤原不比等、母は藤原夫人宮子と云ふ。光明皇后容貌美麗にて照り輝ける故、光明子と號す。十一面觀音の化身のよし、源平盛衰記に見えたり。去るによつて甚だ佛道に歸依し給ひ、南都の興福寺西令堂、國分寺東大寺等、みな皇后帝にすゝめ參らせて建立し給ふ。或說に、皇后功德の爲にとて浴室を建て、誓つて貴賤を選ばず、人の垢を洗ひ淸めんと、自分人の垢を洗ひおとし給ふ。九百九十九人に至り、今一人は癩風の病人にて、身たゞれ腐つて惡臭き事甚し、面を向くべき樣もなし。是を嫌うて去らんには、願空し

（二一）　聖德太子

聖德太子は用明天皇の皇子なり。御誕生の時に、母后厩の邊にやすらひて產み給ふゆゑ、厩戶の皇子といふ。御父帝、是を愛して內裏の宮に置き給ふ故に、上宮太子共云へり。生質聰明故に、聖德太子といふ。又八人して奏するを、一度に聞いて決する故、八耳王子ともいふ。太子傳に、聖德太子は正法明如來と云へり。去ればこそ聰明叡智におはしける。惡人蘇我の馬子と心を合せ、忠臣の守屋を討ち給ひしはいかゞぞや。三十三代崇峻天皇は、用明帝の弟におはしませば、太子の御ためには叔父なり。馬子が計ひにて、御位に卽き給ふ。依つて馬子甚威を振ひしゆゑ、天皇是を憎み給ふ。或時猪を獻じけるに、天皇是を御覽じ、いつか此猪頭を切る如く、我嫌ふ人を切るべしと宣ふ。然るに聖德太子も、此時御前に居給ふとかや。宮女の寵衰へて、天皇を恨るものあり、此事を馬子に告げければ、馬子恐れて、勇士東漢直駒と云ふ者を語らひ、御寢所に入つて天皇を弑し奉るとかや。天皇は太子の爲に御叔父君なれば、馬子とは倶に天を戴かざるの讎なり、速に討伐し給ふべきに、却つて逆賊をかたらひ給ふは、不忠不孝のいたり、如來にしては不仁不義の大罪人なるべし。然るに世俗斯る委しき事を知らずして、

生戒を犯し給ふはいかにぞや。然るに源平盛衰記に、守屋大臣死しても佛法を破滅させんと、一念鳥と化し、寺々をつゝき壞らんとせし故、此鳥を寺つゝきと名付しとかや。守屋さばかり佛法を破滅させんと思はゞ、太子に生れて佛法を禁斷すれば、さのみ骨を折らずして忽ち埒明くべきに、鳥類に生れて寺をつゝき壞さん抔とは、若輩なる振舞、守屋には似合ず。但し守屋は地藏菩薩の化身にて、日本へ佛法を弘めん爲め、佛敵と生れて亡び給ふと有れは、誓願の如く佛法繁昌する故喜ぶべきに、又鳥と化生して、佛法を破滅せんと寺々をつゝくと云ふは、前後相違の振舞なり。地藏尊には物に狂ひ給ふか。貝原好古が和事始に、世俗妄に佛氏の誣誑を信じ、終に守屋をして逆臣とす。守屋は是君の非を諫める忠臣にして、正を崇ぶ端士なる事を知らずと書けるもむべなる哉。去れば淸輔朝臣の袋草紙に、雲井寺の上人瞻西、或所にて說法の間、雨降りて袂にかゝりければ、高座より下るとて、袂を打拂うて詠ず、

いにしへも今も傳へて語るにも守屋は法の敵なりけり

嗚呼守屋、時の不祥にあへり、さしもに直明の譽有つて、世俗の爲に佛敵とやらん、いとあやしき名を呼ばるゝこそ悲しけれ。

位の始め、物部守屋を大連として、蘇我稻目が子馬子を大臣とす。此時亦、百濟國と新羅國より佛像經論を奉る。しかれ共、天皇は文史を好んで佛道を信じ給はず。天皇の御甥太子、蘇我馬子等、甚だ好みて崇敬して、馬子が石川の宅に於て佛殿を修治す。此時又諸國に疫病流行、民死するもの多し。守屋奏聞しけるは、是偏に馬子が佛法を信ずるの祟なり、早々佛法を斷絕すべしと申す。天皇然るべしと宣ふ故、守屋自分にて寺に趣き、堂塔を破却し佛像を燒捨て、其灰を難波の堀江に流し、僧尼の衣を剝ぎて追放す。馬子涕泣す。其後馬子病氣に侵され奏聞しけるは、臣が病は、佛力にあらずんば命助り難しと申す。天皇聞召て、汝一人佛法を信ずべしと許し給ふ。馬子爰に於て、また佛法を再興し、此處闕文あり　三十二代用明天皇、在位二年にして崩じ給ふ。守屋計つて、天皇の御弟穴穗の皇子を位に卽けんとす。馬子不レ隨して、穴穗の皇子を殺して、聖德太子を語らひ、軍を起して終に守屋を亡しけり。或說に、守屋は地藏菩薩の化身にて、日本へ佛法を弘むべき方便に、態と佛敵と成り、聖德太子に亡され、佛法の威德を輝しけると。此事既に聖德太子傳にも見えたり。此說實正ならば、地藏菩薩には似合ざる始末なり。日本に佛法を弘めたく思ひ給ふにおいては、菩薩の妙智力を以て、外にいくらも能き手便も有るべきに、守屋に生れて聖德太子と軍して、數多の人を殺し、大慈薩埵の御身として殺

そしり草

（一）　守屋

守屋姓は物部、氏は弓削、名は守屋といふ。父は物部の大連尾輿といふ。大連と云ふ事は、昔大臣の別稱也。人王三十代、欽明天皇十三年十月、百濟國の聖明王より使を遣はし、釋迦佛の像并に幡天蓋等、其外經論を奉る、天皇悅び給ふ。大臣蘇我稻目、是を拜し給へと勸めける。然るに物部大連尾輿、中臣の連鎌子共に奏して曰く、本朝は神國なれば、異國の佛像を拜せんや、恐らくは我朝の神の忿を請けんと奏す。是に依つて天皇拜し給はず、其像を稻目に給はる。稻目悅んで則ち小墾田の家に安置し、向原の家を淸めて寺を作り、則ち向原寺と號す。是日本に佛法の渡りて、伽藍を作りし始なり。斯て幾程なく、諸國疫癘流行しければ、物部尾輿中臣鎌子、是偏に佛の祟なりと申すに依つて、佛像を大和國高市郡難波堀江に投じて寺を燒亡したり。欽明天皇在位三十二年にして崩じ給ひ、太子卽位有つて在位十四年、敏達天皇と號し、卽

そしり草

寄せらる。予卒業て曰く、嗚呼此法師何人ぞや、摩訶迦葉の拈華を悟るに非ずんば、薬山禪師の山月を拜するならん、吾此人と共に笑ふに非ずして、誰と共にかせん。終に笑つて卷末に書す、また笑を大方に取るに足れり。于時寶暦未の冬、洛東わらひの岡、しい茸干瓢子、筆を精進齋中に採る。

跋

笑の由つて來ること倘し。千早振神代の昔、皇孫この豐秋津洲に降臨ましく〱ける時、猿田彦の大神、天の八衢にしてみゆきの路を遮り給ふ。爰に天鈿女命 胸乳をあらはし、帶を臍の下におし垂れて立ちむかひ給ひければ、さしもの大神、七咫の鼻をひこつかせ、赤酸醬の眼を細めて、初めて掌を抵つて笑ひ、相共にみゆきを迎へ奉る。末の世に俳優をなして人を笑はしむる 緣 なるべし。予はやくより陸雲が癖ありて、春は霞める山の端と共に笑ひ初め、花に雪に餅に酒に、喰へば喉につまる程笑はれ、飲めば津にむせるばかりをかしけれども、笑ふ門に來るてふ福の神はいづちいにけん、西の宮の冥助もなく、笑ひ佛の護念にも、洩れてさす四壁の月冷じき師走の終に、無い物おこせといふ掛乞に腹を抱ふ。親しき友諌むるに古文眞寶の理窟を以てすれば、褎如充耳、あはれ虎溪近くは三笑の仲間にも加はり、譙周在らば獨笑に伴はん事を思ふ。頃關東に一奇人あり、予既に其名を聞きて笑ふ、恨むらくはいまだ其面を見て笑はざることを。友人風來子これが傳作りて遠く

とゝんとんとんと大坂關が原打ちをさめたる萬世の聲

志道軒無一艸

程なく淺之進が右の手にとゞまりたるを能く見れば、木にて作りたる松茸の形せし物にてぞ有りける。其時仙人ゑみを含み、汝が其手に持ちたるこそ、昔景清が難儀の時、清水の觀世音身替に立ち給ふがごとく、其方女護が島にて、大勢の唐人どもと一度に死すべき命なりしを、淺草の觀音木の松茸と變じ給ひ、汝が身替に立ち給へり。此御恩を報ぜんため、是よりはやく國に歸り、道に志すと云ふ文字を取りて、志道軒と名を改め、淺草の地内において、おどけ咄に人を集め、浮世の穴をいひ盡して、隨分人を戒むべし。汝が咄を聞く内にも、女あれば人の氣浮かれ、坊主は慢心あるものなれば、坊主と女の毒を云うて、暫時の内に追ひまくるべし。イザかく來れよとて飛び去るを、黎の杖をとらへて仙人に隨ひ行くぞと見えしが、淺草の地内にて、芦簾かこひし床の上に、茫然として坐し居ければ、參の老若立ちつどひ、床几に腰を打ちかくれば、彼松茸にて机をたゝき、トン〳〵〳〵〳〵トトントン〳〵、とんだ咄の始り〳〵。

驚すこと、かたはら痛き事なり。其位に在らざれば其政をはからずと云ふ聖人の敎を忘れて、聖人の道を說き出すは、相撲取のふんどしを忘れて土俵入をするがごとし。其外浮世の口過學者、管の孔から天をのぞき、火吹竹で釣鐘を鑄るやうな偏見を說き出し、我身も薯蕷が鰻鱺になるやうに、尻の方から二三寸程を出來合の聖人に成りかゝりたれば、麒麟鳳凰に星入のひけ物でも出さうなものと、自負する學者も世に多し。聖人の敎でさへ、其道にとらかされし屁ぴり儒者の手に渡れば、人をまよはす事多し、まして其外の事においては、なづむ時は大に害あり。汝人情を知らんがため、諸國をめぐる其內にも、唐土にて宮中に入り、官女の色に溺れしゆゑ、羽扇を燒かれて難儀をせり。又人の樂は色慾に上なしと、汝常々思ひし故、女護が島へ遣して遊男をこしらへ、色慾のあぢきなく人の命をそこなふ事を目のあたりに是をしめす。只浮世は夢のごとし、汝若しと思はんが、うかうか諸國をあるく內、はや七十餘年の星霜を經たり。いざや汝にしめさんとて、鏡を取つて指しむくれば、彼浦島が昔にはあらで、今まで若かりし淺之進、八十ばかりの翁と變じ、からだには肉薄く、顏は皺のみにして頷長く、鬢髭も皆ぬけて、おのづから法體の姿をあらはしければ、我身ながらもあきれはて、あたりをうろうろ見廻せば、不思議や虛空に音樂聞え、光明赫灼とかゞやき、紫雲に乘つて降るものあり、

に醫藥あり。唐の風俗は日本と違うて、天子が渡り者も同然にて、氣に入らねば取替へて、天下は一人の天下にあらず、天下の天下なりとへらず口をいひちらして、主の天下をひつたくる不埒千萬なる國ゆゑ、聖人出でて教へ給ふ。日本は自然に仁義を守る國故、聖人出ずしても太平をなす。唐は文化にとらかされて國を韃靼にせしめられ、四百餘州が罌粟坊主に成つても、みづから大清の人と覺えて、鼻をねぶつて居る樣な大腰ぬけのべらぼうどもなり。日本にも昔より清盛高時がごとき惡人有りても、天子に成らうとは思はず、日本で天子を疎略にすると、慮外ながら三尺の童子もだまつて居ぬ氣に成るといふは、忠義正しき國ゆゑなり。夫故にこそ天子の天子たるものは世界中に雙ぶ國なし。唐の法が皆あしきにはあらず、されども風俗に應じて教へざれば又却つて害あり、日本人は小人島を虫のごとく思へば、また大人は日本人を見せものにし、穿胸國にては全き人をかたはと心得、手長足長のふつり合なること、皆是土地の風俗なり。天竺の右肩合掌、日本の小笠原、其仕うちは替れども、禮といへば皆禮なり。只聖人のすみかねにて、普請は家内の人數によつて、長くも短くも大にも小にも變に應じて作るべし、經濟の道は、風俗を正し足らざるを補ひしげきをはぶく事、時に隨ひ變に應ず。柱に膠し酌子を以て定木とはしがたし。然るに近世の先生達、畑で水練を習ふ樣な經濟の書を作りて俗人を

り。汝こそ世界中の國々島々をめぐりて能く見覺えつらん、何れの國に至りても、君臣父子夫婦兄弟朋友の五の道にもるゝ事なし。人のみにはかぎらず、蜜蜂の飛ぶに君臣あり、烏の反哺鳩の三枝に父子の禮備はれり、鷄羽をさげて雌を愛し、猫の不遠慮にさかるも夫婦の道なり、鼠は十露盤に乘る兄弟あり、犬の尾をふつて集り、鰯すばしりの海にかたまるも、皆朋友の道なり。さればこそ天地の間を引くるめて、聖人の敎に上こすものなし。夫故に伊藤先生論語は宇宙第一の書といふ事、尤至極のことにあらずや。其論語の中にさへ、また時の宜きに隨ふべき事あり。沽酒市脯くらはずとはいへども、越後の鹽引周防の鯖、串石決明海參の類、學者もどぶへ捨てた事なく、祭の醴より外に、內で酒を作りたる先生もなし。是唐には池田伊丹といふ名物の酒屋もなく、又海に遠き國故、鹽引類の旨い事を知らず、狗や猪を食ふ故に、其敎もまた異なり。薑を捨てずして食ふとはいへども、鱠のけんは食はぬと云ふが又日本の禮なり。井戸で育つた蛙學者が、めつたに唐贔屓に成つて、我生れた日本を東夷と稱し、天照太神は吳の大伯に違はないと、附會の說をいひちらし、文武の道を表にかざり、ちんぷんかんの屁をひつても、知行の米を周の升ではかり切つて渡されなば、其時却つて聖人を恨むべし。誰やらが、制札の多きを見て國の治らざるを知りたりと云ふがごとく、亂れて後に敎は出來、病有つて後

は、進退の時を知りたる古今に類なき智者の手本、また千里の馬たりとも、伯樂を得ざる時強て功を立てんとするは、夏日に氷を求むるに似たり。譬へわづかに出來たりとも、室咲の梅の色香薄く、しかも盛り久しからざるがごとし。或はまた君を得るとも、其身に鷹の能あるもの、擂餌蒔餌にて畜はんとせば、籠を離れて飛び去るべし。雲に入るの勢ありとも、其身餓に至りなば、却つてすりゑにて事足れりとする雀天告子にもおとるべし。鷹は死すとも穂はつまず、主の目はぬき食ふべからず、速に世をのがるべし。但山林に隱るゝばかりを隱るゝとは云ふべからず、大隱は市中にあり、其かくるゝ事一にあらず。賣卜にかくれ醫に隱れ、詩にかくれ歌に隱れ、東方朔は世を金馬門にのがる。我汝に教ふるも、世界の人情を知りたる上にて、世を滑稽の間にさけよと敎へしに、汝物にふれて心動きし故、却つて難儀なる事度々に及べり。人の浮世にまじはることは、只錢湯に入るがごとし。穢れし中へはいる事は、其穢を清めん爲にあらず、けがれを以て穢を落し、掛湯をして出でたる時、我身はいつも清淨なり。此理を以て世に交らば、我側に袒裼裸裎すとも何ぞ我をけがさんや。汚泥の蓮花を染めざるは、涅にすれども緇まざるの理なり。しかるに世の人、物の爲にとらかさるゝが故に、我身をそこなひ家を破る、遊女狂ひにとらかさるゝばかりを、とらかさるゝとは云ふべからず。何事もなづめば害あ

も立たぬ内に、色青く痩せおとろへ、こつ〲と咳の出るを相圖にして、無常の戀風にさそはれ、百餘人の遊男ども、西方淨土へくらがへす。ア丶悲きかな生者必滅のことわり、人の命のはかなき事は露のごとく、またいなびかりのごとしと、佛の敎も此事になん。國中の女客は、一かたならぬかなしみの涙に袂をしぼりつゝ、我にこそ末かけてといひし言葉もありしなんど、くらきより暗きに迷ふ戀路の習ひ、思ひの煙立ち登る返魂香はくゆれども、門々多き事なれば、幽靈さへも出でやらず。しかるに淺之進は如何しけん、煩ひも出でざれば只一人生き殘りけるに、外の客も皆淺之進一人を目當にして通ひければ、後には晝夜を五十程に切つて幾度ともなく勤むれど、體金鐵にてや有りけん、少も元氣おとろへざりけり。淺之進もつく〲と我身の上を觀ずれば、かく一人生き殘れども、身請せらるゝ事もなく、一生勤死にしても末のつまらぬ事なり、日頃面白かりし色遊も、常になりてはうるさきものと、女郎治郎の身の上までを思ひやり、あじきなき世の有様と思ひつゞけて居眠る折から、何國ともなく風來仙人忽然とあらはれ出で、藜の杖を以て淺之進を打ちすゑれば、淺之進誤り入り、面目もなくひれ伏しけり。其時仙人聲をあげ、それ人世の中に有りては、功成り名遂げて身しりぞくは、春夏にさかえし草木の秋冬にしほむがごとく、是卽天の道なり。范蠡が五湖にのがれ、張子房が赤松子に托せし

水

うしさんちや、下唐人は河岸へ追ひやり、引ぱりみせまで出しけり。衣類も様々工夫しけるが、兎角日本の風俗が女の氣に入りたりとて、唐人共も元服させ、捲上鬢に長羽織、紅白粉にて形を粧ひ、黄昏も過ぐる頃、鈴の音聞ゆるを相圖に、づらりと店に居並びて、燈くわつと照り渡れば、待ちまうけたる女客、格子に顔をおしあてて、何れあやめと引きぞわづらふ。其内に、二階に上る客もあり、又は茶屋付揚屋入、對の禿に日がらかさ、羽織のえりもしどけなく、つかみからげの八文字、押しわけられぬ人だかり、此國開けてこのかた咄にも聞かざれば、まして見る事は猶初なり。遊男を買ひて遊ばんとて、上を下へとこみ合ひて、押もきらぬ女客、初會も程なくなじみとなり、貰ひのもめ、もの日の約束、いつしか客も粋に成つて、立ひきいきはり退く切るの氣味合事まで、さして替れる事もなし。只世上の女郎に異なる事は、袖とめかね付の世話なきのみにてぞ有りける。淺之進を初め唐人どもは、始の程は面白き事いふばかりなく、天上の榮花も是にはしかじと、古郷の事も打忘れてたのしみけるが、いつとなう事足りたる樣に思へば、おのづから秋風の身にしみて、雨のふる夜も雪の夜も、本につとめはまゝならぬ、後には客を見るもうるさく、氣に入らぬ客はふつて見ても、男のふらるゝと違ひ、義理外聞もかまはず、夜中取りつき恨み歎けば、そう〳〵はふる事もならず、晝夜をわかず勤めければ、半年

けて、男を返し給ふべし、左もなくば此城一ツ責め破りて目に物見せん。彼日本に名の高き巴板額にはあらずとも、女の念力岩をもとほすと聲々に呼ばはりて、恨の氣天地に滿つれば、帝も大いにもてあまし、如何せんと評定ありしを、淺之進申しけるは、所詮百人ばりの男にては、國中の者爭ひて、上へ取れば下うらみ、下へ行けば上恨みなば、是亂世のもとゐなるべし。我に一ツの工夫有り、唐にても日本にても女郎屋といふ事あれば、此上は私共百餘人の者申し合せ、女郎のごとく店を出し、情の道を商ふべし。しかる時は此國の人、貴賤上下のわかちなく、金次第にて來るべければ、互に恨そねみもなし。此儀如何と申しければ、是はよろしかるべしとて、それより其旨ふれければ、いづれも大いに得心して、國中の女ども閑を解いて引き退く。扨都の北に當りてしかるべき土地を見立て、四方には堀をほり、茶屋揚屋より諸商人の家々まで不足なく建てならべ、一方の入口には大門を拵へて、廓中の男は外へ出ざる爲にとて、關所のごとくに番人を付け置き、淺之進を始として彼百餘人の唐人を、五人十人引きわけて家家に店を出す。されば女なれば女郎といひ、また遊女などといへども、是は男の傾城なれば、其名を男郎と呼び、また遊男とも名づけ、又年の寄りたるはやりての役を勤むれども、是も男の事なれば、其名を呼んでとりてとなん改めつゝ、其外は何事も皆吉原を學びて、太夫よりか

も日を重ねて、糧も水も盡きんとすれば、生たる心もあら海の、向を見れば一の島あり。初めて蘇生たる心地にて、島を目あてに漕ぎ寄すれば、此島は女護が島とて、男は一人もなくして女ばかり住める國なり。子を產まんと思ふ時は、日本の方に向ひて帯をとき風を請くれば、懐胎して又女子を產む。王もあれども皆女なり。此島の掟にて、外より流れ來る人あれば、船より陸へ上る時、國中の女立ち出でて、磯邊に草履を直し置き、其草履をはきたる者と夫婦となる法なれども、はるかへだてし島なれば、是まで人の流れ來る事もなきに、此度船の漂着せしは天のあたへと悦びいさみ、皆々濱邊に立ち出でて、前後をあらそひ草履を直せば、淺之進を始として百餘人の唐人ども、面々草履をはきつれて、陸珍らしく立ち出づれば、はかれし者は取りすがりて、こんなえにしが唐にもあろかと、なれ〲しく悦びいさみ、はづれしものは浦山しく、聲々にさわぎければ、此國の帝王より役人來りて、御用なるよし、百餘人の者どもを一人も殘らず竹輿に乗せ、城内へ連れ行きければ、大勢の女共は闇夜にへそをぬかれしごとく、うつとりとして居たりしが、打ち寄りて相談しけるは、此島にそだつ者、上つ方も下ざまも、男のほしきは同じ事なり。いかに御威光なればとて、殘らずお上へ取り上げ給ふは、扨々つれなきなされ方。我々生きて何かせんと、皆一同に連判して、國中の者一人も殘らず城外へ詰めか

なり、肴屋は稻田安康、餅屋は佐藤養閑と名乘り、あめ賣は雨井堯仙と改名し、氣のしれぬ麻布木庵が類なれば、はやらぬ時はほうろくはもとの土とぞ成りにけりにて、餓ゑ死すべきには至らされば、瑣細の事は打ち捨てて、唐船日本におもむかば、雨風の神精力を盡し、霰の神雹の神もとも〲に力をそへ、戸板にごろつく豆のごとく、暫時の間に吹きくだくべしと、はげしき仰蒙りて、雨風霰雹の神は、雲を起して降つて行く。唐人どもはかゝる事とはいざ白波を凌ぎつゝ、順風に帆をあげて、日本間近くなりける時、待ちまうけたる事なれば、黒雲八方より覆ひかゝり、方角さらに知れざれば、數百人の唐人ども、うろたへまはる折からに、雨風はげしく吹き來り、三十萬艘の唐船を一ッ所へ吹き寄せて、只一もみにもみくだけば、數十萬人の唐人共、海中に飛び入つて、水練祕術を盡せども、三十萬艘の大船に積置きたる粘と紙、一度に海へ入りたれば、さしもに廣き洋海も、紙漉の箱を見るがごとく、とろり〲とねばりければ、もちに著きたる蠅のごとく、皆あら波に打ち込まれ、數もかぎらぬ唐人ども、白あへとなりて死したるは、むざんなりける事どもなり。爰に一ッの不思議あり、淺之進が乘りたる船は、日本人のありし故にや、かゝる風雨の中にても、船は少しのいたみもなく、何ちともなく吹き流され、ゆらり〲と大船の、思ひ賴まん方もなく、風にまかせてたゞよひしが、覺えず

風流志道軒傳　卷之五

抑不二權現と申し奉るは、駿州有度の郡に鎭座まします、祭るところ大山祇命の女、木花開耶媛にて、是を淺間の社と申し奉る。されば神の靈妙はかるべからず、異國より不二山をはりぬきの用意ある事、忽ちしろしめされければ、我守護の名山を唐土へ寫されては日本の恥なりとて、愛鷹の明神に御内談ましまして、曾我兄弟の神を早使にて、伊勢八幡の兩社へ御注進ありければ、卽時に諸國へ觸をまはし、則ち不二山の絕頂へ八百萬の神々、神〻つどひにつどひ給ひて、樣々評定ありけるが、昔蒙古より責め來りし時の先例に任すべしとて、雨の神風の神に命じて、急ぎちくらが沖に待ち請けて、唐の船を吹きくだけよと有りければ、風の神申されけるは、私共一族殘らずちくらが沖へ出張をなさば、其跡にては日本に風をひくもの一人もなくんば、醫者ども渡世に難儀たるべく思ほゆれば、少々は跡に殘りなんと伺ひければ、諸神以ての外怒らせ給ひ、若不二山をはりぬかれなば、日本末代の恥辱なり、何ぞや醫者の難儀ぐらゐに替ふべきや。其上近年生れつきたる醫者は少く、家業にうときのら者ども、靑菜賣は淺漬宅庵と

日本人の智惠なるかな、いそぎ其用意せよとて、唐土中へ觸をなし、紙と粘とを集むる事山のごとく、大船三十萬艘を寄せて追々に積立て、經師屋の類はいふに及ばず、素人までも小細工のきゝたる者は召出し、淺之進にも樣々の賜ありて、不二山張拔太夫といへる官を給はり、日和を見定め、三十萬艘一度に出船ありけるは、目ざましかりし次第なり。

御役儀を承りて不二山成就したりとも、目利者に見付けられ、爰の所は不出來なり、此岩は付物なんどと、似せ物師の名を請けん事末代の恥辱なれば、一まづ日本へ立ち歸り、不二山の雛形を取り歸るべし。しかし其雛形も外に仕方も有らざるべければ、唐土中の紙と粘とを取集め、不二山をはりぬきにして、此方にて築きし山にすつぽりと打ちきすれば、其違明白ならんと、いはせも立てず宰相かぶりを打ちふりて、昔秦の始皇の時、徐福といへる大山師が、蓬萊山に至つて不死の藥を求めんとて、おこはにかけしためしも有れば、うくわつには呑み込まれず。其上かゝる大山をはりぬきにするは、紙代等も御時節がらには大そうなれば、出來兼山の子規、外に仕方は有るまじきやと、冠をかたぶけ思案あれば、淺之進すゝみ出で、此事氣遣ひ給ふべからず、船に乘つて行く人は皆王の臣下なれば、中々一人の私にて迯げかくれはなるべからず。又不二山をはりぬく事は、我に一ツの仙術あり、紙と粘は御入用までもなく、唐土中の郡縣へ公役をかけば大方には揃ふべし。もし不足なる時は、我日の本の戀風や、其扇屋の夕霧より、藤屋伊左衛門へ贈りたる文をもとめてはりぬきにし、叡覽に備へ奉らん事、本に正直日天を掛けて少しも違ひこれなしと、辯舌をふるうて申し上ぐれば、帝をはじめ皆々大に感心あり、今に始めぬ

諸國めぐりたる物語をなす事日をかさねければ、諸國の人物鳥獸山海の樣子まで、委しく物語りければ、帝甚だ叡感あり、世界廣しとはいへども、我唐土の五岳につゞける大山は有るまじきと有りければ、淺之進申しけるは、仰の通り、諸國の山の内にては、まづ五岳が隨一なれども、我故鄕の日本には不二といへる名山あり、其大いさ五岳にもはるかまさり、八葉の峰そばだちて四時に雪の消ゆることなく、いづれの國より是を見ても、白扇さかしまに懸ると詩にも作り、なか〳〵にいふ言の葉もなかりけり、不二の白雪〳〵、なんどと歌にも詠じ、風は人穴を出でて三千世界を涼うし、雪は麓に落ちて白酒と成つて旨がらす。五岳なんどのごときは草履取にも不足なりと申しければ、帝大に驚き給ひ、昔日本の畫工雪舟といへる者我國に來り、彼山を畫きしより、唐土人も三保の原、氣も浮島の風景も、我は其意を繪そら言にて、五岳には及ぶまじと今迄は思ひしが、汝が詞を聞きしより、初めて不二の萬國の山にまさりたるを知れり。我も四百餘州をたもてば、何に不足もなけれども、不二山ばかり日本にまけたる事、無念類は中橋なれば、是より諸國へ申し付け、多くの人歩を呼び寄せて、不二山を築かせて後世に名を殘すべし。汝は彼山を能く見覺えつらんなれば、科をゆるして奉行となすべし。五岳の内いづれの山にても、見立次第基として、不日に不二山を築くべしとの勅命。淺之進謹んで、私

手にいましめて帝の前に引き出す。されば樂極つて悲生ずるとは、かゝる事をや云ふなるべし。宮中にては、ひそかに契りて淺之進が身の上を知りたる官女は、扨もむざんの事なりと、忍び涙に袂をしぼり、又事あらはれなばいかなる目にか逢ひなんと、心安からざるも多かりけり。帝王は淺之進を御覽ありて、彼が人となりを見るに、其容貌賤しからざる者の、何故かゝる術をなして、我後宮へ忍び入りたりやと尋ね給へば、其時淺之進頭を振り上げ、我は日本江戸の者にて、深井淺之進と申す者なるが、我師風來仙人の教にまかせ、諸國の人情を知らんがため、有りとあらゆる國々をなん見廻りけるに、此城中の後宮に忍び入り、思はずも官女の美なるに心まよひて、我本心を失ひし故、師の仙人のとがめにや、仙術をこめられし羽扇を燒かれて術を失ひ、今ぞ我身を有頂天、かくのごとくの丸裸、馬鹿のむき身と笑はれて、異國に恥を殘さん事、是非に及ばぬ次第なれば、とく〳〵刑に行はるべしと、詞すゞしく申し上ぐれば、其時帝も群臣も、扨々珍しき事かなとて、猶諸國をめぐり見たる事なんどくはしく申し上ぐべきため、繩をゆるし衣類をあたへ、樣々酒肴をもてなして、帝太子を始として、百官百寮席をつらね、後の方には后よりもろ〳〵の女官達、日本人の寐言にあらぬ珍じき事聞かんとて、翠簾の間に紙なんどはさみつゝ、ひそかにのぞきて聞き居給ふ。淺之進も漸う心落ち著きて、夫より

を知らず、後宮の隅にかくれて、夜な〳〵官女の閨へぞ忍びけるが、いつとなく其噂聞えければ、いかさま變化の所爲ならんと、宰相以下打集りて評定あり。四方八方燈をてらし、寓直の武士嚴重なれども、何事も目にさへぎらず。されどもかゝる事などは猶やまざりければ、扨は魑魅魍魎のしわざか、又は日本にてはやると聞く、姫路にをさかべ赤手のごひ、狸のきん玉八疊敷、狐が三疋尾が七ッの類ならば、打ちものわざにてかなふまじ、貴僧高僧に命じて御祈あるべしなんど、評議一決せざる處に、宰相申されけるは、都て魑魅鬼神の類ならば、足跡はなきはずなるに、御庭のところ〴〵人の足跡殘れるはいぶかしゝ。是にこそてだて段々有馬山、油斷する所にあらずと、間ごとの入口に細なる砂を散らし置き、寓直の武士懐中火把を持つて忍びてなん窺ひ居ける。淺之進はかゝる事とは露白波の、戀の關守うちもねななんとつぶやきて、彼羽扇にて身を隱し、一間なる所へ忍び行くに、容はさらに見えざれども、散らし置きたる砂の上、足跡の付くをめどにして、忍び居たる寓直の武士、彼火把をなげかくれば、飛ばんとする間もあらむざんや、惣身に火付いて燃え上がれば、淺之進すべき樣なく、急ぎ帶を引きほどきつゝ、裸になりて飛び出る內、羽扇も小袖も一時にみな〳〵灰とぞ成りたりければ、丸裸の淺之進が姿忽然とあらはれて、始めて人目にかゝりければ、寓直の武士おり重り、高手小

り來りし者にわうへいをいへば能い事と心得、しつぶかくして女郎にきらはれ、陰で笑はるゝを知らざる程愚なる國なり。又いかさま國となんいへる所に至れば、此國の人寄り集り、舟に乘つて漕ぎ出だし、樗蒲一島といふ島へ連れ行き、目の一より六ツある猛獸に喰ひ付かせて裸にせんと謀りければ　淺之進も早々にぞ迯げ歸りけり。かく樣々の苦勞艱難、世界中の國々島々殘る所なく廻りければ、羽扇の妙ありとはいへども、元氣も足も勞れければ、朝鮮に至つて人參のざふするを喰ふ事二月ばかり。又足を休めんに屈竟のことありとて、夜國に寐ること半年餘にして、草臥も直りければ、また羽扇に打ち乘つて唐土へとこゝろざし、淸朝の主乾隆帝の住み給ふ北京になん至りけるに、廣き事類なく、繁華詞にも及ぶべからず。いざや城中に入つてながめんとて、彼羽扇を背に負へば、忽ちに影ほうしもなく水鏡も見えざれば、しすましたりと笑を含みて、大門より白晝に入れども人是を知る者なし。それより足にまかせて數多の宮殿殘る方なく見めぐりけるが、後宮に至つて打ちながむれば、三千人の官女紅粉をいろどり、雲のびんづら靄の眉、玉をつらねし美人の粧。昔久米の仙人は物洗ふ女の木綿湯具のぴらつきて、脛の白く見えしにさへ通を失ひしためしもあり、かく數多ある美人の中に至りなば、釋迦も黃金の涎をながし、達磨の目玉も絹糸のごとくなるべし。淺之進も心亂れて城外に出る事

塔刺浡泥百兒齋亞莫斯哥米亞琶牛亞刺敢亞爾默尼亞天竺阿蘭陀を始として、其外の國々には、家業をしらぬうてんつ國、髪は本田に銀ぎせる、短羽織に日和下駄、じやうるり三絃座敷藝、お花といへる地色に打ち込み、只遊ぶ事を第一とす。しかるに此國折々は大水出て、親の代より讓り請けし家業株、町屋敷諸道具衣類なんどを押し流され、火の降ること度々なり。又其隣國にきやん島といへるあり、神儒佛の教もなく、からだはしぼり染のごとく、はりこみといふ網にて、あくたいと云ふ魚を取て肴にし、大酒を呑んできほひ歩行を業とす。又おそろしき國あり、其名を愚醫國といひ、又藪醫國ともいふ。此國の人皆頭を丸め、折に惣髪なるもあり、學問を表にかざり、人の病を直す事を業とすれども、近年甚だ下こんになり、書物を見れば目の先くらみ、尻の下より火焔もえ出で、暫時も學問する事ならず、只世間功者にとばかり心懸け、輕薄を常とし、てれんつるしようの妙術をきはめ、羽織は小袖より長く、竹輿のすだれはいき杖よりもふとし。幸頭 媒 屋敷の賣買、天窓をふり立てかけまはり、見え第一の藥箱も銀かなぐはかゞやけども、中の藥は吟味もせず、牛膝は牛の膝と覺え、鶴虱には鶴のしらみを尋ぬるといふ、古人の詞に違ひなき、笑止千萬なる國にぞ有りける。又四角四面なる國あり、其名をぶざ國といひ、又しんござ國とも云ふ。此國の人、面大にして國なまりをいひちらし、他國よ

へんと、群臣をも呼び集めてさま〴〵評定有りけるが、大王の勅命といひ、姫宮の戀人なれば、皆然るべしと萬歳を唱へ、いそぎ淺之進をむかへ、裝束を改めんとて、多くの官女達立ちつどひ、一間なる所へ伴ひ行き、いろ〳〵の綾錦に金玉を以て餝りたる天子の裝束を臺に載せ、官女達とり〴〵に淺之進が帶をとき、裝束を著せ替へんとして胸を見れば穴なし。みな〳〵大いに肝を潰し、裝束打ち捨て迯げ入りけるが、一間の方かしましく、能き男とは云ひながら、貌容に引きかへて思ひの外なるかたはもの、胸に穴さへなき形にて、此國の主には存じもよらず、大王ゐへも姫宮ゐへも此由奏聞有るべしと、つぶやく聲々聞えければ、淺之進もあきれ居たる所へ、此國の大臣來りて淺之進に向つて曰く、汝が容勝れたれば、大王迎へて子とせんと宣旨ありしかども、只今官女が申すにては、胸に穴なきかたはなるよし。都て此國にては智惠あるものは胸の穴廣く、智惠なき者は穴せまし、故に穴せまき者なんどは高位には登りがたし。況んや穴なきもの、天子にはなしがたければ、是までの約束變改あり、早く國境より追拂へと、大王の勅命なれば、此上何と穿胸國に一日も逗留叶はず、いざござなしに早立ちのけと、下部はわり竹たゝき立つれば、初の契引きかへて、妹脊の緣も淺之進は、我胸をさぐり見れども元より少しもあなうたてやと、例の羽扇に打ち乘つて、蝦夷琉球はいふに及ばず、莫臥爾占城　蘇門

ば、手長どもはほうノ\に高ばひをして迯げ去れども、足長はたふれる時は自ら起きる事ならざるものゆゑ、皆腰に太皷を付けて、こけれぱ其太皷をたゝくに、常は外より人來つて、大船の帆柱たてるごとく轆轤にてまきおこせども、みなノ\たふれし事なれば、只其儘にあがく體、捨て置かば餓死なんとて、羽扇を以てぱつとあふげば、たふれ居たる數萬の足長、一度にすつくと立ちあがり、茫然たるを見捨てつゝ、四五千里も飛び行きけるが、また大なる國あり。此國は穿胸國とて、男女とも押しなべて皆胸に穴あり、貴人他所へ行くにも竹輿乘物はなくして、其胸の穴へ棒を通してかきありけどもいたまず。辻々には賤き者ども、棒をたづさへて通りを待ち、人を見れば棒やらうノ\となんいへる事、日本のかごやらうといふがことし。淺之進もかゝれて見んとは思へども、胸に穴なければすべきやうなく、段々奥へ行くに隨ひて、家居も多く賑なれども、流石夷國にて人がらは皆賤きさまなれば、淺之進を見て上下男女立ちつどひ、扨も珍しき風俗、かゝる男の又あるべきにやと、引きもきらずの人だかり。日を經るに隨ひて國中此沙汰かくれなければ、此國の主大孔王の耳に入り、官人を以て淺之進を召されけるに、朝廷の群臣皆淺之進が容貌の美なるをぞ感じける。此大王に男子なく、當年十六歳の姫宮一人ましましけるが、淺之進が器量を見給ひ、姫君も大王も此者を婿と定め此國を譲りあた

の長擘國といへるは、手の長さ一丈四五尺にて、常に盜を事とすれば、此者どもをかたらひて、羽扇を奪ひ取らんとぞ計ひける。此事淺之進は夢にも知らず、川渡の難儀に勞れければ、道の邊の茶店に立ち寄り、座敷を借りて屛風引つ立て、前後も覺えず臥し居たりしが、何かは知らず物音にふと目覺して打ち見れば、上なる引窓より、其長さ丈にあまれる細き腕を指し入れて、羽扇をつかんで引き上ぐる。スハ曲者ごさんなれ、扨は鳥羽繪の茨木童子、中々羽扇は渡邊の綱が昔もまつかうと、懷劒をぬきはなち、腕を丁と切り落せば、夫より四方さわがしく、責鼓鯨波、天地も崩るゝばかりなれば、スハヤ大事と身をかため、走り出でて見渡せば、數十萬の足長ども、手長人をせなに負へば、手も長く足も長く、其高さ三丈ばかりも有る者ども、十重廿重に取り巻いて、稻麻竹葦と居並べば、譬羽扇の妙ありとも、中々悪く飛ばんとせば、宙にて引抓まれんは定なれば、身の一大事此時と、心の内に仙人を念じ、つか〱と馳せ寄つて、彼すね長が向ふずね羽扇を以て打つて廻れば、只さへ長き足なるに、手長人を背負たれば、竿をたふすがごとくにて、かたはしより打ちたふせば、殘る者も一同に、大手をひろげて取らんとすれど、めつたに長きばかりにて、振廻し不調法なる腕なれば、左へくゞり右へぬけ、終に敷萬の手長足長、一人も殘さず打ちたふし、淺之進は羽扇に打ち乘り、雲間に入りて見おろせ

風流志道軒傳　巻之四

扨それよりも淺之進は、羽扇にまかせ飛び廻りて、北より南へ流れたる大河の邊におり立ちけるが、草木の形も見なれざるもの多く、川水の色も異なるさまになん見ゆれば、歸國の咄の種にもなるべし、いざや歩行渡して見んとは思ひながら、深き淺きのそこさへ知らぬ國の川なれば、人の渡りを松が根に腰打ち懸けて、向ふをはるかに見渡せば、川の半に人四五人歩行渡りの體なるが、水は腰にも至らざれば、見懸にも似ず淺き川にぞ有りけるとて、裳をかゝげて渡りけるに、其深さ丈にあまれる川なれば、はかなく押し流され、浮きつ沈みつ苦みて、既に命も危ふかりしが、其時また羽扇を取つてさかまく水をかきわくれば、水は八方へ退きて、さながら平地を行くがごとく、向の岸にぞ著いたりけり。去るにても彼渡りし人はいかゞなりつらんと打ち見れば、此國は長脚國とて、體は日本人程なれども、足の長さ一丈四五尺なれば、此川水には流れざるも理なり。扨また彼足長どもは、川中にて淺之進が羽扇の妙ある事を見て、何とぞして奪ひ取らんと打寄つて評定をなんしけるが、中々卒爾には取りがたしとて、其隣國

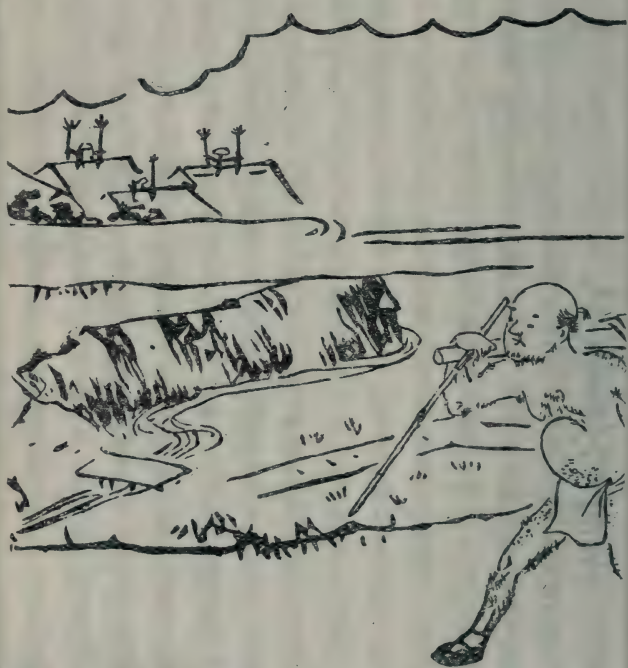
りなんなど、評定しても埒明かず。夫よりも淺之進は、羽扇にまかせ飛びけるが、かすかに島の見えければ、其所へぞおり居たりける。此處は小人島にて、人の大いさ一尺二三寸に過ぎず、一人行歩ば鶴に取らるゝ故、四五人連にてあらざれば通り得ざる程小さき國にて有りければ、淺之進を見てみな〳〵恐れおのゝき、戸を閉ぢて出でざれば、見すごしてなん通りけるに、次第に奥へ行く程猶更に人小く、五寸三寸の人ありけるが、奥小人島に至れば、其大いさ豆人形程ぞ有りける。かゝる國にもそれ〴〵の主ありて、さしも奇麗に作りたる城なんどの邊には、大勢の小人ども、登城下城の袖をつらね、さも嚴重なる其内にも、やんごとなき姫君の輿に乘りて出づる體、淺之進は指にてちよつと引つまんで、印籠の中へぞ入れたりけるに、附々俄にさわぎ立ち、西よ東よはせちがふ。輿に附きたる奥家老とおぼしき男、うろたへまはる體なりければ、淺之進また引つまんで、此度は印籠の下の重へぞ入れたりける。半日ばかりも過ぎて出し見るに、彼奥家老は姫君を奪はれて、云ひわけなしとや思ひけん、ういらうに腰打懸け、腹十文字にかき切つてうつぶしにぞ伏したりけり。かゝる小さき人にてさへ、君臣の義理あればこそと、涙ながらに彼姫を取り出し、もとの處へ歸しける。扨々むざんの事かなと、それよりも又羽扇に打ち乘り、あてどもなしに飛び行きけり。

ば、何れも身の長二丈あまり、背におふたる子の形も日本人より大なれば、是こそ名におふ大人國ならんとは思へども、一向に詞通ぜざれば、互に手を出し口を教へなんど、樣々の仕方してもわかつべうもあらざれば、淺之進心付きて彼羽扇を耳に當つれば、大人の詞も通じ、口にあてて物をいへばまた合點するさまなりければ、其後は互に詞の通じ合、我は日本の者なりなんど語りけるに、樣々馳走に大人のもてなし、二三日も程經て後、遊山に出よと、竹輿に乘せて人立多き處に、芦簾にて四方をかこみたる假屋の內へ作ひ行き、臺の上に淺之進を乘せ置き、をかしき形せし笛太皷のなりものにて拍子取り、生きた日本人の見せもの、手に入れて這はす樣なちつぼけな美男、作物こしらへものとは違うて、生の物を生で見せる、御評判々々と高聲に呼ばはれば、老若男女おし合せり合、引きもきらぬ人群集、皆々指ざし笑ふ體、淺之進うるさく思ひ、如何はせんと案じけるが、爰にこそ彼羽扇ならんと、天に向つて仙人を拜し、羽扇を以て飛び立てば、小屋の屋根をつき破つて、雲井はるかに飛びされば、大人どもは月夜に釜、ぬか悅の口々に、是まで日本人の飛行する事聞及ばず、是は定めて日本に澤山なる天狗にてやあらんといへば、さればこそ羽扇を持ちたり、しかし鼻は小さかりしなど、思ひ〳〵の取沙汰、一人の大人が曰く、諸國を廻る天狗なれば、どこぞの色里にて鼻は落したるにぞ有

まり、何としやうまん一家には、七里けんはい八軒屋、我身の難波新屋敷、れいふ尼寺眞田山、浮名をかぶる編笠茶屋、穴に間近き臍が茶屋、六十四文あり合町、ぜうゆうじ福ぜんじ、裏々に住む夜發の繁昌、そうぢや堺に千守より、奈良の木辻に登り詰めては身代をたゝき込み、撞木町から墨染の、花なき枝の柴屋町、室津の泊鞆をのみち、みたらひからうと上の關、行いせ來いせのなまりには、さりとは安藝の宮島に、太夫の全盛後から、指懸けられし鵲の、渡せる橋におく下の關、戀に跡先しらぬ火の、つくしに遊ぶ浦々は、博多鳴子に馬の庄、異國の人にもまるれば、角のとれたる丸山に、ちんぷん寒國ふりつもる、雪のはだへをあらそうて、三國新潟出雲崎、敦賀今町金澤より、出羽には坂田かうやの濱、津輕に青森やすかた町、陸奥にもとめや八丁の目、松前のえさしまで、諸國の風流をながめつくせば、淺之進はいざさらば、是より外國を廻り見んとて、彼仙人より授りし、羽扇を以て海中に入れ、其上に坐しけるに、左ながら大船に乗りたるごとく、蒼海漫々として浪は白馬の走るがごとくなれども、羽扇の妙あれば海水すこしも衣をぬらさず、數日食せざれとも餓ゑず、いづくともなく行きけるが、とある島にぞ著きたりければ、羽扇を取つて陸にあがり、そこよこゝよとさまよひけるに、いと大いなる家の見ゆるを目あてにしてたどり付けば、淺之進を見付けて多くの人立ち出づるを見れ

してしやべりちらせば、大象も能くつながれ秋の鹿も必ずよる。されば道中宿屋の女をおじやれと名付けし其いはれは、旅人其家に泊つてつれ〴〵にたへかねて、晩に伽におじやれといへばこそ〳〵と寐に來る故、其名をおじやれとなんいへる。おじやれといふは、來いと云ふとお出といふの間にて、來やれといふより三四文がた慇懃なる詞なりと、業平東下の記虚言八百卷目に見えたり。金川大磯御油赤坂、吉田岡崎二丁町、古市山田は云ふに及ばず、浦賀下田鳥羽あのり、長島田部印南には、腰掛加太の立柱、色の湊多き中にも、出口の柳こきまぜし、花の都の島原より、祇園の氣色宮川町、繩手に我身をしばられて、跡の紋日の請合も、約束かたき石垣町、おられぬ内野新地より、さわぎに北野七間の、隱れ所は藪の下、鳴かでこがるゝ螢茶屋、尻の方から灯す火も暮るゝ頃より今出川、濁らぬ水の清水坂、二條七條八坂の前、またも遊びにかうだい寺、嵐になびく柳風呂、壬生天龍寺御靈の前、西石垣のはてまでも、其よし蘆は難波津に、今を春べと盛りなる、松梅の全盛は新町に色香をあらはし、白人藝子の今様めけるは南北に風情をたゝかはす。ねたみ曾根崎島の内、戀の坂町登り詰め隱せど出づるいろは茶や、ちりぬる客をつり寄する、目もとの鹽町こつぼりと、たまらぬ味の安治川に、深くはまりし堀江大露地、次第に高津新地より、我を忘れて神明前、何ほど廣きのど町でも、柳小路と身はせ

護が島の辻番かと思ほゆる、看板に僞有磯海、深川のぴんしやんも度重れば飴のごとし。和で齒に付かぬ大根畑の居つゞけには地黄丸の功を失ひ、鮫が橋へ走つては親つぶのにらみをうく。轜のつまる鐘撞堂、借つた跡での板橋より、千住といへば觀音めける萬福寺の戀無常、朝鮮長屋の異國くさき、いろはぢゞ谷世尊院、人を引き出すおたんす町、八まんたまらぬお旅のさわぎ、三味の音じめの音羽町、かたり明かして夜を根津の、東の空も赤城より、暗きに迷ふ藪の下、通ふ足音高いなり、愛敬稻荷の狐より、化ぞこなひの市兵衞町、水の氷川の寒空は、ふるうて通ふ胴坊町、丸山の丸寐姿、新大橋のながく〵しき、三十三間どうよくに、又も一座を直助屋敷、出る舟あれば入舟町、石場につくだけころばし、踏み返したる丸太の名物、立てうとふせうと錢次第、舟饅頭に餡もなく、夜鷹に羽はなけれども、みなそれ〴〵のすぎはひは、鳶飛んで天にいたり、魚淵にをどり子の氣色まで、殘る方なくながめ盡せば、淺之進はそれよりも、諸國をめぐり遊ばんとて、旅の用意するにもあらず、其身其儘出で立つて、行きつき次第の一人旅、たくはへなければ盜人の氣掛りもなく、勞るれば休みやすめば行き、物うき旅の忘草、宿屋の出女がふすぼり顏に、葛とうどん紛の七分まじつた下り白粉を所まだらに打ちぬり、頰紅はまん丸にて、那須の與市に見せたらば、日の丸かと心得てよつぴき兵とはなつべき顏つき出

もやうは事古にたればいはず、二度目に行くを裏返すとなんいへるは、塗工よりいひ出し、賣りかへるを鞍がへなどは、古き詞もあるなんめれども、只伯樂の詞に似たり。二度よりは三度、五度よりは七度、段々に面白く、顧愷之が甘蔗にはあらで、漸く佳境に入りたるを粹といひ、又通り者といふ。されば女郎買と灰吹は青い内が賞翫とは、近松が名言なりと、淺之進は吉原を立ち出で、男色を試みんとて、それより堺町へ至りけるに、是又別世界の一風流、金剛が挑灯には名代の紋を先にてらし、大振袖の羽織、戀風に翩翻とひるがへり、見し編笠の内ぞゆかしき紫帽子は、舞臺へ出るゆるしの色となん。人の物好は面の異なるがごとくなればこそ、稚きあり長しきあれども、それ〴〵の相手あるが中にも、四十過ぎての振袖、頬髭の跡青ざめたるも見ゆ。是等を翫ぶ人は好の至れるなりと、自から味噌は上ぐれども、火吹竹のあへものは筍の和なるにはしかじ。木挽町に引かるゝ客は、身代は大鋸屑のごとく、神明參の歸足は、本地垂跡の兩道になづむ。湯島の二階は千里の目を極め、英町の向側は隣よりもまた近し。よごれをふくかやば町、眇眼もまじる神田の明神、外になければ市ケ谷の八幡前、天滿神のあたり近き室咲の梅手折らんと、麴町には寐るをたのしむ。土氣の取れぬ土橋より、一ツ目山猫なんどいへるは、左ながら化物の名に近し。莠の苗を亂り紫の朱を奪ふ。所かはれば品川の風流、女

上げる。コリヤサ〳〵の掛聲は、さわたる雁か洋漕ぐ船、ふらり〳〵と居眠の、寐耳へはいる暮六つも、鐘は上野か淺草を、過ぐる間もなき千里一はね、是も偏に通ふ神の、竹輿よりおりてすそ打ちはらひ、少し繕ふ衣紋坂、まだ知る人も中の町、茶屋が内に著きければ、夫婦は槌でにはかのもてなし、ソレお茶よ煙草盆、今日初めての客なれば、どんな加減か白魚の吸物に、柚子の匂ひはかはらねど、外よりは何となう酒も一入味よく、亭主は機嫌取肴に、みせの出るを待合の辻、色の上下の境町、見るも殊更、京町から新町より河岸の邊まで、ぐるりと廻りてすみ町は、遊びの時を江戸町と、口合まじりに見渡せば、行きかふ提灯下駄の音、格子の内の燈は、晝よりも照りかゞやける、縫箔の伊達もやう、銘々たばこ盆に指向ひ、思ひの烟くゆらせつ、または文なんど書ける體、えりの白きにいたづら髮のふりかゝれるもおくゆかしく、何かは知らず隣どちの囁き合ひたるも心にくし。人の心を引き立つる三絃の、いとかしましくは思へども、何となう心うかれ、此界の人ともおもほえず、雲の通路吹きとぢて、天津乙女の姿ならんと、何れを見てもみにくきはなく、又それと定めんと思へば、是ぞと思ふわいだめのなきは、目のうつろひならんと、後には却つてそこ〳〵に見極むる、一夜流の緣結は、出雲の神の帳付くるにも、さぞいそがしくや有るらん。遊びの趣向閨の振舞、手くだこんたんやりくりの

風流志道軒傳　巻之二

天神七代の始は、男女の道を知らざれば、男色ばかりをたのしみて、甚だ窮屈なる世界なりしが、伊弉諾伊弉冊の二神、天の瓊矛を指下して、めつたむしやうに滄海を探りしかば、其矛の鋒より滴瀝れる潮凝りて燒鹽となる。是よりしてからき浮世といふ事始りける。此時始めて合交せんとするに其術をしらず。時に鶺鴒飛び來つて其尾をぴこ〳〵搖すを、味噌豆に研槌擂皿、始めて交の道を得たりと。今時そんな野夫な事にはあらず、書物のとぢ目に生ずる白魚、肌著の縫合の花見虱まで、いきとし生けるもの皆陰陽の形あり、形有つて後此交をなすこと、天然自然の道理なれば、其後の若ィ者はつがもない、脊令ぐらゐを先生には賴まず。去る程に淺之進は駿河臺の庵を立ち出で、何心なう通りけるに　かたへより竹輿やらう〳〵の聲々を聞き流して打ち通れば、跡から頰かぶりせし男ちよこ〳〵走にて追掛け、小聲に成つて、旦那土手までやりませうとなんいへるに心付きて、名にしおふ吉原のさんや堤の土手ならば、渡に舟と打ちうなづき、乘らうの乃の字を半分聞くと、ソレ棒組といふ間もなく、竹輿すゐる乘るかき

る鬼ならば、來りたりともまた何事をかなさん。やく拂の西の海は十二文の、惡事災難有つたとて邪魔にもならじ。惡夢を喰ふとは云ひ傳ふれども、獏の糞を見た者なく、家々に敷きては寐れども、寶船に船大工もなし。思ひ付に形を畫きて、身勝手ばかりの心やりなり。一年の内には千變萬化の世渡りも、つまる處は金といふ一字に歸し、人慾の私に使はるゝが故なりと、淺之進羽扇をなぐれば、有りし駿河臺の庵の内に、焚き懸けし飯のいまだ熟せざる内なりければ、益羽扇の妙を感じ、彼風來仙人の敎にまかせ、是より日本はいふに及ばす、唐天竺より諸の外國までを廻り見んとぞ思ひ立ちけり。

拂のさう〴〵しき、布子の上に單なるを引はり、常は事たらぬ道具なれども、かゝる時は多きやうに覺ゆるを、手々に持ちはこびて、御祓は屛風の内に鎭座ましまし、持拂は半櫃の上に來迎あり。用にも立たず捨つるにもをしかりしものなんども澁紙に包み込まれ、久しく見えざりし器など物のそこより出でたるも嬉しく、または全き道具を持ちはこぶとて損じたるを、我は知らぬなんどゝ、下部はとがをゆづり合ひ、疊のごみもたゝき仕舞うて諸道具も片付たるさま、左ながら淸らには見ゆれども、からだを見れば手足も銅の底なんどのごとく、日計きよろつきて鼻の下の一しほ黑きもをかしく、追々湯に入りて後、初てもとの人間になりたる樣にぞ覺ゆ。次第に曆も人の心もせまりて、道行く人の足も跡から追來る人も有るやと見ゆるばかり、町々には賣物の山草折敷ほんだはらはご板、何やかやかちぐり、淺草市の人だかり、節季ぞろのせはしなく、餅つきのかしましき中にも、親しき出合の年忘、拳酒の九十、めつたに手をひろげても義太夫ぶしの五段目、大三十日までかたりつめては、八人藝でも間に合はず。ソリヤ獅子も浮いて來ず、掛乞は皮財布を膝に敷きて達磨のやうな目をむき出し、九年面壁の居催促、あてはなくてもまだ寄らぬとの一寸のがれ。此時に至つては、愚なるも富める者はさかしく見え、賢きも貧しきは愚なるが如し。節分の狗骨鰮の頭も信仰がらとはいへども、豆に迯ぐ

ぬ、本田組の一むれが、まけぬ氣の河東ぶし。聲の響は山彦のばち音も清見八景、皆こがれよる船の内、人の心も浮ぶ瀬に、里神樂三番叟、目出度鈴をまるらせうと、臺の葡萄に牽頭が口合、客の羽織を萩の花、芒のやうな目はすれども、心の慾の穗に出る花車、やりて若イ者さまざま口を菊月には、九日の節句後の雛、十三夜の月見には我朝の風流を增し、中菊の盛なるには、澁谷の隱居が物好を傳ふ。目黑の餅花神明の生姜市、亥猪十夜の時も過ぐれば、御影講の餝物は錢とらぬ見せもののごとく、惠美壽講の百萬兩は商人の虛言をかざる。顏見せの先ぶれは番附賣八方へ散じ、芝居の挑灯はそれ〴〵の紋を照す。帶解のすそ長々しく、報恩講の尻もつたて、おの字を千ほど云ひならべる口切、ふいごまつりなんども事終つて、乙子の餅祝ふ頃より、雪霰なんどしげ〴〵にふりまさりて、風は身をそぐがごとくなれば、富める人々は冬籠の巨燵に藥喰の用心するさへ、手水鉢の檜杓も氷にとぢられ、軒の氷柱は劍を逆に植ゑたるがごとくなれば、おのづから寒氣にあてらるゝに、其日のいとなみ事しげき者は、さま〴〵の業に雪氷をもいとはず、西を東南を北と立さわぎ、手足にはひゞあかぎれ、我身を損ずるをもいとはず、或はつよき力わざする者なんどは、かゝる寒き時にさへ肌をあらはし汗をながし、わづかの價の爲に使はるゝ下ざまの世渡を、貴き人は思ひはかるべき事にぞ有りける。わけて煤

毛氈の虹道にたなびき、掛香の匂は草に殘る。鋲乘物のしとやかに、繋ぎ馬の不遠慮なる、聲色淨瑠理のかまびすしき、なま醉の腕まくりと、未熟なる詩歌發句に、あたら櫻を穢さんよりは、只友どち打ちむれて、靜なる所に酒酌みかはしたるぞ、越なう奥ゆかしと見ゆ。或は其日も暮方の、朧月夜に敷ものもなく、獨樂の樽枕に、いかなる夢を結ぶかは知らず、いびきの聲の聞ゆるは、もぎだうにてまたをかし。御影供の參を賴に、江戸の田舍の片ほとりにも、煮賣店の立ちつゞく大師河原のにぎはひ、世は空海とぞ知られたり。程なく卯月は衣更、佛の產湯の時も過ぎ、初松魚の賣聲高く、子規啼くや五尺のあやめふく餝兜幟の氣色、空には五色の雲ひるがへり、粽柏餅のおとづれに、蒔繪の重箱はせちがひ、夏の氣色を荷ひ出す、はんじ團扇澁團扇、あふげばいよ〳〵高荷の蚊や賣、水雞のたゝく頃より五月雨の降りつゞきて、衣類に黴もみな月の氷餅氷室の使、不二祭の群集の足にごみ踏み立つれば、麥藁龍も雲を起すかと疑はれ、花火の盛は兩國を照し、船は水をかくし人は地を覆ふ。空にも戀は天の川、星の手向のいとしをらしく、琴の爪音かきならす。十三日より盂蘭盆の苧がら蓮の葉瓜茄子に、懸乞の入りみだれ、聖靈祭生身魂、廓には燈籠にさま〴〵の美を盡し、八朔の白妙に、約束の客待宵より月見のさわぎ、すがゝきの上づり、客人がらには人形まはし。隣の趣向もうそなら

のひゞきにあらはれ、太夫元の手まはしは幕の間の遅速に知らる。故きをたづねて新しき、八百屋お七に取りまぜし、曾我兄弟が敵討、くどう云はねど其由來は、葛見宇佐美河津の庄、三ケ日から七日の賑ひ、飯焚に笑ひ出されて、七種の拍子を違へ、帳とぢの祝には錐を嚢に入れた様な番頭も活氣を出し、大盃の醉が廻り、上書の大福入が三十程に見えるはまうけの有る前表と、なんぼ醉うても數は忘れぬどう慾なくだ巻舌に同じ事を幾度か。十五日は綱引粥杖爆竹の煙空にきえて、行衞もしらぬ奉公人も、やぶ入小袖の花やかなるに、裏店の露路かゞやけば、風流の若イ者は魂のをり所を知らず、コリヤマタ組がはり込もいま〳〵しい程美しいと、云はれぬ世話をやき餅も歯にこたへて來る時分は、もうのらつきも二十日正月、柳は色を含み梅は香を吐出す、鳥の囀りさわやかに、東風吹く空の長閑なるを、ふりさけ三輪の神ならで、いとゆう〳〵と吹きすさむ几巾の數々は天をいろどり、垣根には薺蒲公英の花盛なるに、隣の姥様もうかれ出し、涅槃參の珠數袋に、臍くり金の底をたゝき、彼岸といへば只だんごとのみ覺えたるもをかし。白酒賣の聲春めきて、十軒店のわたりどよみ出せば、菱餅のこしらへいそがしく、鷄合の人だかり、汐干の蛤まだふみも見ぬ尼法師まで、梅若參り、我一と、まつさきの田樂も燒野の雉子ほろゝ打ち、昨日今日と移り行く飛鳥山の花盛に、染井のつゝじ色を爭ひ、

行く、振袖のなまめける手鞠歌、一イ二ウ三イ四ウ、いつも變らぬ道中雙六、上下男女入り亂れ、福引の錢かけ鯛にはぜ賣の聲わかちなく、門口から辰巳上り、物まう、どれ、大黑屋槌右衞門、惠美壽屋鯛兵衞、年始の御祝儀申し入れますと、さんとめの綿入著て尻はせをりたるでつちが差出す扇子箱も、禮に來べきゆかりある紫紙の似皮を、まづ諂の先走り、夕べまでは借金にせつかれ、欠落せうか首くゝらうかとくつたくを持ち越して、雜煮の膳にはすわりながら、餅はまだ咽を通さず、上置のこぶや牛房をかぢつて、五六十年の歳を一度に寄つて片息になつて居る亭主をとらへて、お若うおなりなされましたと、虚言八百の正月詞、門松飾竹の千代萬代と壽くも、元が根のなきこしらへもの故、常盤の色も請合ひがたし。其外俗の嘉例などには、をかしき事も多かんめれど、害なき事はくるしからず。但古人の詞にも、一日の計は朝にあり、一年の計は元日にありとは、其本亂れて末をさまりがたきをいふ。わけて初春は一しほに心を改め、惡しき事はなすまじきことなるに、正月といへば童までが寶引穴一の類をする事と心得て、親々も寶引せねば蚊がくふとやら、馬鹿律儀におぼえこむにはあらねども、人人の好む所より埒もなき理を付けて、稚き時より見習へば、成人するに隨つて、御器用なる御子息達、勘當帳につく事は、皆親々のあやまちなり。二日からは初芝居、金元の勢は屋倉太皷

で、髪結床に至つて元服しつゝ、住むべき處求めんと、方々とさまよひあるきけるが、駿河臺のわたり小高き所に、まばらなる庵の有りけるを、主に賴みものしつゝ、此處に假に居にけり。淺之進は庵にありて四方の氣色を打ちながむれども、立ちつゞきたる家居の數々、ひきゝは高きにおほはれ、或は雲烟のたなびきて、さやかには見え分かず、爰にてぞ彼羽扇ならんと取り出だしつゝ映し見るに、南は品川北は板橋、西は四ツ谷東は千住の外までも、手に取るごとく見えわたり、しらみの足音蟻の呀くまで聞ゆれば、初めて羽扇の妙なる事を知り、猶また一ト年のありさまを見んと暫く心に觀すれば、忽ちに氣色かはりて、吹來る風もいと寒く、道の邊は凍てかへりて、土とも石ともわきがたきに、霜いたくふり渡り、師走闇の心なく暗きも、くだかけの聲せはしく、烏の飛びかふにつれて東に横雲たなびき、あかねさす初日影のさし出づれば、彼神代の昔にはあらねども、物の形もしろ〳〵と見えわたり、家々にはしめ引はへ、松竹飾りたる間より、行きちがふ人の數々、國々の大小名はけふを晴と出立ち、裝束の袖春風に吹きそらし、馬の蹄竹輿の足音、其こだま十里にひゞき、見つけ〳〵もきらびやかに、下馬先の禮おごそかなり。公の事はいふもさらなり、町は家々戸をさしていとしづかなるに、鳥追大黒舞の拍子面白く、皆出で立ちて三河の萬歲、春立ち返るあしたより、嵐に迯ぐる羽子を追ひ

蓮根、南無阿彌豆腐の油揚にて、中々心にたらざれば、柔和にんにく葱ざふするゐ、むき玉子松魚の雉燒、厭離江戸前大かば燒、鯵本不生の早鮓を、じんばら腹のはれる程に取り込み、八功德水のあつがんを引つかけ、雜修自力の心をふり捨て、只一心に女郎狂ひ、妙法戀慕の闇に迷ひ、弘誓の船の四ッ手竹輿、内には念被觀音力、刀刃段々通へども、本來無一物の客なれば、女郎は見立花はくれなゐと、若イ者にもうるさがられ、或は藥師の瑠璃の壺入、おん・ころ〳〵と蹴ころばし、眞如の月のまん丸な、比丘尼の頭巾うば玉の、闇より闇に迷ひ入る。それも若きはまだしもなれども、額に歳の波をよせ、眉に八字の霜、天に登りつめたる老僧の、寺内に弟子は多けれど、魂廓に入りぬれば、一人もともなふものぞなき。されば世の諺にも、落ちさうで落ちぬものは二十坊主と牛のきんたま、落ちそもなくて落ちるものは五十坊主に鹿の角。是はまた足利時代の譬にて、今は只老いたるも若きも貴きも賤きも、野分の枝の熟柿にて、一ッも落ちぬはなかりけり。たとへ堅固に守りたりとも、頭陀の行乞食に似たりと、淺之進は悟をひらき、かたへに有り合ふ筆をとりて、

のがれんと思ひし道のくらければもとの浮世に有明の月

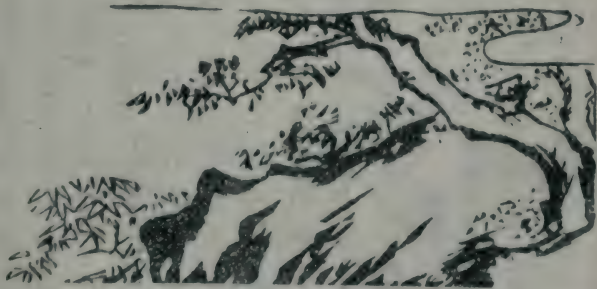
と墨くろ〴〵と障子に書き付け、彼仙人より授りし羽扇ばかりをたづさへて、光明院を忍び出

風流志道軒傳　巻之二

淺之進は、光明院に有りてつく〴〵思ひめぐらすに、彼風來仙人が教の詞、一として理にあたらざる事なく、其上暫く寺に居て、諸家の風儀を試るに、何れの出家も表をかざり、錦繍を身にまとひ、人もなげに高座に登り、口に說くところは衆生を導き往生の素懷をとげしめんと、極樂の店請にも立つやうに說きちらせば、愚痴文盲の同行どもは、わた持の如來樣と信仰し、金銀財寶をなげ打てば、御殊勝にとばかりにて、忝しともいはねども、心の內には笑を含み、金つかふ胸算用はすれども、佛の恩さへ思はず。あけ法事頼んで來れば、名聞の盛物も人の見る方は餝れども、佛には卷藁ばかりをかざませ、剩へむしがへしをくらはせ、朝晩の勤も隨分外へ聞える樣に鉦も高くは叩けども、砂かむよりはじゆつない念佛。金持は金遣はず、鐺もちは鐺遣はず、髮結我髮結はず、辨當もち先へ喰はず、とりあげ婆子を產まず、風呂焚は垢だらけ、けんどん屋飯を喰ひ、箕賣は笠でひると、醫者の不養生坊主の不信心、昔よりして然り。出家もと木のまたからも出ず、旨い物の旨いと、面白い物の面白いは皆同じ事なり。椎茸干瓢長芋

には世を捨つるか世に捨てらるゝの外には出でざるべければ、只東方朔が昔を追ひ、滑稽を以て人を近寄せ、よく近く譬をとりて俗人を導くべしと。此時淺之進進出でて申しけるは、謹んで先生の教へを受く。しかれども我若年にして人情に精しからず、此事如何してかしかるべき。其時風來仙人手に持ちし羽扇をあたへて曰く、是は我仙術の奧義をこめし團扇なり。抑此團扇を以てあふげば、暑き時は涼しき風出で、寒き時は暖なる風を生じ、飛ばんと思へば羽ともなり、海川にては船ともなり、遠近を知り幽微を見る。身をかくさんと思へば忽ちに見えざる、奇妙奇代の重寶なり。是を以て天地の間を往來し、諸國の人情を知るべし。只人情の至る處は色慾を第一とすれば、諸國の色里なんどをも遊行すべし。諸國を經る内には面白き事かなしき事幾度も有るべけれども、必ず〳〵苦しとばし思ふべからず。汝が修行成就して再び此土へ歸りし時、また對面をなすべし。さらば〳〵といふ聲は、障子に殘る風の音、淺之進は恍然と、光明院の窓の内に、寐るともなく覺るともなく、机にかゝりてもとのごとく坐し居たるに、側を見れば、彼の夢中に授かりし、羽扇ばかりぞ殘りける。

ことを知らず、北條梶原に傳なきものは位に進む事あたはず、大江秩父なんどの賢諸侯ありといへども、近寄らんとすれば左右の俗士賢をいむこと甚しく、其餘和田佐々木土肥千葉以下は、自ら紅白粉をぬりて狂言綺語の戲、イヨ市川の殿樣、とほめられ、或は大磯小磯より女妓なんど召抱へ、晝夜を分たずサッサオセ〳〵、おせゝのかば燒ぬつぺりとして和な、讒諂面諛の者にあらざれば左右に近付く事なく、種々のおごり日々に長じ、內證はいすかの觜、悔いて返らぬ家老用人、輿も明日もさめるに早い藥鑵天窓を打ちふつて、三人寄れば文珠の智惠、百人寄つても出ぬは金なり。さすが人がらぶつて、おとなげなく無間の鐘もつかれず、お出入の金貰橘次に塵をひねつて賴のしるし、一の谷屋島の軍に命を的として奉公したる譜代の家來も、格式有つてめつたには貰はれぬ、虎の威を借る定紋付を、狐狸が著すれば、左ながら上下のわかちも見えず。其時代に流行ものは、坊主金もち女の子、三絃じやうるりたいこもちの類なれば、和氏が璧の夜光なるは知らじと、我もそれより世を遁れ山林に隱れ、木の實を食して餓をしのぎけるが、いつとなく仙術を得て飛行自在の身となり、風に任するからだなれば、自ら風來仙人と號して、五百餘年の星霜を經たり。今の世の風俗は知らねども、汝出家を止めたりとも、必ず必ず藝能を以てほこる事なかれ。また誠の道を以てするとも、却つて俗人近寄らざれば、後

是さへ教あしき時は迂儒學究とて、上下を著て井戸をさらへ、火打箱で甘藷を燒き、唐の反古にしばられて、我身が我自由にならぬ、具足の虫に見るごとく、四角八面に喰ひしばつても、ない智恵は出でざれば、却つて世間なみの者にもおとれり。是を名付けて腐儒といひ、また屁ッぴり儒者ともいふ。されば味噌のみそくさきと、學者の學者くさきは、さん〴〵のものなりとて、又是を見破りたる先生たち、宋儒の頭巾氣ととなへ出だせし卓見も、角を直さんとて牛を殺す、其末流の木の葉儒者には、猪牙に乘つてひちりきを吹き、三絃に唐音を乘せ、甚しきに至つては、天下を運す掌の内にお花とやらをめぐらする、言語道斷の學者も有るよし。是皆中庸を知らざると、鼻毛をぬかざるより起りたるたはけなり。唐は唐日本は日本、昔は昔今は今なり。三代といへども禮樂は同じからず、立つて拱するが禮なりとて、今貴人の前で立たれもせず、聖人の政なりとて、井田の法を行はゞ、百姓どもには安本丹の親玉にせられなん。しかれども不學無術にてはもとより行くべきにあらず、只墨かねを能く覺えて、手の利きたる大工と鍛のよい刀を能く研ぎたるにあらずんば、大功はなしがたし。我もまたなまくらならねば、鎌倉に至つて人間の益をなさんと、裏店の淵に身をひそめ、鰻鱺泥鰌と同じ樣にぬらりくらりと世を渡りつゝ、つら〳〵世上を窺ふに、平家西海に沉みて後、上下太平の化にほこり、賢者あれども登庸

んどに千金をつひやして、四疊半の氣づまりに手づからにじり込の草履をつかむ事、大丈夫の業にあらず。立花は一瓶の中に千草萬木の趣をこむるといへども、釘にて打ち付けはりがねにてため直す事、自然の風景にあらず。碁を打つものはならべて崩しくづして並べ、其智三百六十目の外に出でず。此人死しては西の河原へ行きて、一日打つては父戀し、二日打つては母戀しと、地藏菩薩の袖にすがりて、獄卒の鐵の棒をうらむとかや。將棊は軍のかけ引なりといへども、韓信孔明將棊をさしたる噂も聞えず。今試に將棊の上手に採配とらせて軍させば、敵の龍馬に踏殺され、桂馬の高飛歩兵の餌食となるべし。香を聞くものは鼻を以て天下を治むるがごとき顔をしかめ、沈外息脉の極祕を極め、聞香悉能知と高ぶるとも、高が無用の翫び、六國なんどと文盲第一の名目を立つる事、片腹痛きことなり。楊弓は百射て五百中りたりとも鼠を射る足にもならず、鞠が上手なりとて、腹の減ると金出して色よき裝束著るより外に能なし。尺八の名人が、女郎の屁に蒔繪置きたるがごときやさしき音を吹き出しても、敵討に出る用意より外何の役にも立たざれば、齒のぬけるだけの損なり。皷のヤッハア、太皷のテレックスッテン〱、とんと上手に成おほせても、耳へ入りてぬける間の樂にて、名の不朽に傳ふべきにあらず。其外俗の藝と云ふは皆小兒の戲なり。只人の學ぶべきは學問と詩歌と書畫の外に出でず、

金を泥中へ抛つがごとし、我是を救はんがため汝を爰にまねけり。それ佛法は寂滅を教とし、地獄極樂なんど名を付けて、愚痴無智の姥嚊を教ふる方便にして、智ある人を導くべき教にはあらず。人は陰陽の二つを以て體をなす、譬へば石と金ときしり合ひて火を生ずるがごとし。火の薪ある内は人の一生のごとし、火消ゆる時跡に殘る所の炭は卽ち死骸なり。其時消えたる火地獄へ行くや極樂へ行くや。汝此行衞を知らば、地獄極樂有りとすべしと。淺之進手を拍つて大に悟りて曰く、先生の教を受けて、是までの迷豁然として夢の覺めたるがごとし。今より出家の志を止むべし。しかれども人世の中にありて、只草木と共に朽ち果てんは本意ならず、願くは先生我に業とすべき道を教へよ。其時仙人羽扇をあげて曰く、汝能く我言を信ず、我身の上と汝が生涯を示さん。我は其昔元暦年中の生れにして、源平の戰なんどは稚心の耳に殘り、漸く天下治りて鎌倉將軍政を專らにし、諸人太平の化をたのしむ。我は片田舍に長けるが、つくづくと思ひめぐらすに、高祖は三尺の劍を提げ漢朝四百年の基をひらき、將相豈種あらんやとは楚の陳涉が詞なり。今諸國の大小名を見るに、賴朝義經の驥尾について、匹夫よりして家を起すもの少からず、我は治世に育ちたれは、劍戟を起さんは天にさかふの罪あり、然らば藝を以て家を起さん事を思ふ。しかはあれども、世の俗人の藝と稱する茶の湯は、古茶碗竹べらな

廊下を傳ひ行きて、一間なる所へ請じ入れけり。數多の美女立ちかはり茶の給仕しつゝ、樣々の菓子なんど出すを見れば、何も初め卵の中より出でたる女にもまさりてあてやかなるに、思ひ思ひの繡して、いときらびやかなる衣類をかざり、立ちかはり入り替りて出る度に、酒肴の數々善盡し美つくし、今樣をうたひかなで、或は美なる女の來て、手を取り足をさすりつゝ、ひとかたならぬもてなし。淺之進は興に乘じ、思はずも酒をすごして美女の膝に打ちもたれ、とろ〳〵とまどろみけるが、暫して目を覺しあたりを見れば、今まで有りつる美女の姿も酒肴も宮殿もなし、扨は夢にて有りけるかと打ち見れば、松柏は枝をつらね、岩にくだくる溪水の音のみして、我住みし寺内の體にもあらず。扨は狐狸の爲にまどはされしかと、茫然としてながめ居たる處に、一むれの雲下りて、中よりあやしき姿せしもの、木の葉を以て衣とし、頭には巾をいたゞき、左に藜の杖をつき、右に羽扇を持つて淺之進をさしまねき、善哉々々、汝教ふべき事ありて、我仙術を以て招き寄せたり、少しもあやしむべからずとて、近寄るを見れば、形は左ながら老人めけども、顏色は玉のごとく、年の頃三十歲に過ぎず、髪黑く髭長く、日の中さわやかにして、威有つて猛からざる姿なれば、淺之進はひざまづきて是を拜す。其時仙人告げて曰く、汝元來生れつき衆人に勝れたるに、父母佛法にとらかされ出家させんとする事、

竹採の翁が、竹の中より取り得たる、赫奕姫の類ならんかと打ち守りて居る内に、すく〳〵とおほきになりまさりて、忽ち能き程の人になりて、其形のけそうなる事世に類なく、玉の顏綠の眉、三十二相の形を備へ、淺之進を見てゑみを含めば、覺えずも心とろけて醉へるがごとく、彼美女はしづ〳〵と庭に立ち出で、顧て淺之進をさしまねく。淺之進も庭におりたちけるに、彼女手をたづさへ、いとしづかに假山のあたりへ歩み行き、咲き亂れたる桃花の下、石なんどのありて其中に小き穴の有りけるが、其穴の中へ伴ひ行きたり。此穴上より見たる時は、わづか五六寸の穴なりけるが、行く時はまた、人の身の通ふべき程の道とぞ成りたり。行くこと十間あまりになれば、其内平にして犬鷄の聲なんどのほの聞えて、さま〴〵の木草生ひしげり、梅が枝に木傳ふ鶯あれば、かたへには卯の花の垣根いと白く、雲井には子規のおとづれ、紅葉に鳴く小男鹿の聲、或はまた川風さむみ千鳥のむれ居て、雪の降りしく處もあり。四時の花實時をあらそひ、砂の色も常ならず、行く水の音までも、其淸々たる事また有るべきにもあらず。それより遙歩み行けば、えならぬ匂ひの薰り來て、管絃の聲ほの聞えつつ、玉をかざれる樓閣あり、金銀の砂を敷き渡し、瑠璃の階、馬腦の欄干、また譬ふるにものなし。淺之進は此處に至りて少し猶豫し居たれば、彼美女かく來れとて先に立ち、幾間ともなく、

といひ、又かく人に勝れて發明なる子は、必ず短命なるものなり。其後は不思議にも二男三男の出來たるこそ幸ひなれば、何とぞ此子を出家させば自ら長命なるべく、また先祖の菩提をも問はせんと、其よしかくと告げければ、左のみ望にはあらざれども、父母の命もだしがたく、それより世々の旦那寺なれば、光明院といへる寺へぞ遣しける。淺之進は稚心に思ふ樣、我好んで出家せんとにはあらざれども、父母のかく宣ふは、偏に佛緣のなす處なれば、此上は一筋に佛法の奧義を極め、天下の名僧と成つて衆生を濟度せんものと、日夜朝暮佛經に眼をさらし、行往坐臥の勤めおこたらず、學問の外餘の交は、夏の夜の花火見に誘れても、俗人のたのしみまさに電光石火のごとしと悟り、春は飛鳥山の花盛もむれつゝ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがには有りけりとつぶやきて、雪を寄せ螢を集るこそ古人の心なんめりと、獨竹窓のもとに日ぐらし硯にむかひて、見ぬ世の人を友とし、四方の氣色うらゝかに春しり顏に咲き亂れたる庭前の桃の盛なるに、仙境の趣を思ひ出でつゝ餘念もなき折から、軒に巢をくふ燕の、窓より內に飛び入りつゝ、机の上におり居たり。淺之進は、身を動かば燕の驚かんかと、ひそまりて見る內に、彼燕机の上に卵を一ッ產落して、何ちともなく飛び行きけり。淺之進は卵を取り上げ、巢もあらば入れなんと思ふ內、彼卵二ッに破れて、中より人の形したるものぞ出でたりける。昔

の障子にも、此親父が形を畫き、すばしりの頭松茸を見ても志道軒を思ひ出してをかしくなるは、誠に目出度親父なり。此人何が故にかゝる事をなしけると、其源を尋ぬるに、元來此志道軒が親はさる屋敷の用人を勤めて、其志淺からぬ深井甚五左衞門といへる、筋目正しき人にてぞ有りける。此甚五左衞門四十に及びて男子なき事を深く憂ひ、夫婦一所に淺草の觀音へ三七日の通夜籠をなんして祈りけるに、滿ずる夜の曉、南の方より金色の松茸臍の中へ飛び入ると見て懷胎し、男子出生有りしは即ち此志道軒なり。夫婦は悅びのあまり、淺草觀音のまうし子なればとて稚名を淺之進と號け、蝶よ花よといつきかしづき、初春祝ふ破魔弓も、千年を我子へゆずりはと、人ももちひの鏡より、幟畫の尉と姥も、猶いつまでかいきの松、是も久しき親心のまよひなるべし。或は髮置袴著なんど、光陰は鐵炮のごとし。淺之進七八歲の頃より寺入の初清書、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ闇に眞黑な、牛の角文字ゆがみなりも、器用な手筋と譽めそやし、早そろ〱と大學は孔氏の遺書にして、初學德に入るにも出るにも人を付け置き、なほざりならぬ養育に、また生性勝れたれば、人心付く頃より洒掃應對進退の節も年よりはおとなしく、弓馬の道は云ふもさらなり、立花茶の湯鞠揚弓詩歌連誹を始めとして、其餘の藝能ぬけめなく、十五歲に成りければ、父母つく〲と思ふやう、佛に祈つて產みたる子

風流志道軒傳

巻之一

爰に江戸淺草の地内に、志道軒といへるえせものあり、軍談を以て人を集め、木にて作りたる松茸の形したるをかしきものを以て節を撃つて、諸人の臍を宿がへさせる猥雜滑稽、耳を抓んで尻のごふ程、取つても付かぬ齒なしの口をくひしばり、そこらだらけが皺だらけなる顏打ちふり、或は白眼にして他の世上の人を味噌八百のめつぽふ矢八、九十に近き痩親父にて、女形の身ぶり聲色まで、其趣を寫すこと、誠に妙を得たりと云ふべし。其說くところは神儒佛のざくざく汁、老荘の芥子ぬた、氷の吸物稻光の油あげ、跡も形もないて居る子も笑ひ出し、草履つかむやつこらさまでが、何やら坊といへば志道軒としる程の、古今無雙の坊主なり。されば江戸に二人の名物あり、市川海老藏と此志道軒親父なり。然るに柏莚は世を去つて、今殘る處の志道軒、江戸に一人の名物といふべし。故に一枚繪今戸燒を始めとして、祭りのあんど髮結床

自序

夫馬鹿の名曰一ならず、阿房あり雲津久あり、部羅坊ありたはけあり、また安本丹の親玉あり。但同じ詞にて、兄ィといへば少しやさしく、利口にないといへば人めつたに腹を立てねど、つまる處は引きくるめて、たはけは同じたはけなり。爰に志道軒といへる大たはけあり、浮世の人を馬鹿にするがの不二よりも其名高きは、誠にたはけの親玉となんいふべし。しかはあれどもまた其たはけに頤を落し、淺草の地內から腹をかゝへて出る雲津久ども、日に幾人といふ數を知らず、世にはたはけも多きものなり。我また產れた時ぎやつと云ふからのたはけなれば、今彼が傳五卷を著す、安本丹にあらずして又何ぞや。或は是を書し是を畫するの雲津久あれば、梓にちりばめんといふべら坊あり、若し此書を取つてしかつべらしく讀むものあらば、それこそ眞のたはけにあらずや。紙鳶堂風來山人、一名天竺浪人、浮世三分五厘店の寓居に書す。

右志道軒自筆

叙

吾友風來山人。栖栖市門數年矣。其發興所著。詼達多端洸洋自恣。蓋有微意云。此册成矣。余與客讀之。客據案而歎曰。辯哉辯哉。假令在於六國之時。目如輝星。舌如電光。與蘇張范蔡之徒周旋於中原者。其在斯人歟。余曰。否若山人之才。文之以禮樂。令太史謂非龍非虎。而未可知也。而戰國術士。豈爲山人願之乎。客嘿而去。人或責以非法言不敢言。蓋以此概山人固非也。以此病山人又非也。士苟學焉成志。何必銖銖寸寸。若膠柱刻舟哉。今題數語聊爲山人解嘲。雖獲阿好之謗。所不辭也。癸未冬日。

獨鈷山人撰

風流志道軒傳

有りて、童子を相おもふ道をしらず。是を思へば、今艶冶の情をすてて、僻事なりあらぬ外道なりとそしる輩は、人の面は有りながら獣の心なりといはゞいかゞはせん。あに人として鳥にしかざるべけんや。

明和戊子のしはす、足をそらにする夜、來春をはま町のやどりに、大藏千文しるす。

なすのらりくらりの遊びの道は、ながいも有ればみじかいも、百たらぬ八百屋の緣の下より多く、寶引の糸の千條にわかれ、紋付の數の百箇に替ふるが如く、坪皿のそこはかなく二乘をくひ、瓜造りにはあらぬ獨樂の詐も有るめれど、是等はみなうまざけの蜜をねぶらせて、終にはうつはぎに剝ぎとられ、裸兎のきりめに鼴のしむうきめ見んよりは、しかじ此道の左祖して、春はやう〳〵曙白くなり行く頃より評判記を待ち受け、品定の九品十體の月旦評に、二の替三の替の未來記を思ひ量り、顏見せにお取越の正月して、時ならぬ花を咲かせたるは、玉だれの小瓶の中の乾坤もかうかしらず、三千世界に外にはないぞや。古人のいへる、狂言綺語も法の聲と、空海師の蒼海よりひろき眞言祕密のをしへ、在原の朝臣の童すがたになづみし岩つゝじの和歌什を初として、代々の歌集に選み入れられしも、松帆物語の見るにゆかしき、みな此道の器なるをや。先に根無草の册子の、行く河の水のまに〳〵大邦に流行しに、今續いて出る物は、衆妙門の教にもとづけるなるべし。今に見るべし、あら金の地を走る犬じもの、久方の天をかける鳥の類ひは、雌雄相交る心のみ

跋

鷄が鳴く吾妻はやと、千早振る神の敎の和事より、相聞の根に通ひ、由縁ある江戸紫の冶郎帽子は、ことにその色香も深からずや。とりわき此道の聖とあふぐ市川瀨川の兩流は、その源遠くその末廣くして、流をくみ取る人多ければ、浪速のみつと聞くとにつけて、蘆町のよしあしをいはず、花房町のあだなる散りのわかれには、湯島のわきかへる胸をこがし、底倉の湯泉のそこひなき淵に身を沈むるともと、思ひ入りたる意氣地のをゝしさ、男氣のいきはり有る、是に增る情やはある。はしきやし郎女のなからひは、久方のひさしいもので、舊衣の事ふりにたれば、朝夕の飯を調ふるが如く、是を包丁の人料理の家とはいかでかいはん、山鳥の尾の長々しき、河漏麪の淡薄をめで、隼人の薩摩なる、金粟酒の酷烈をもてはやすこそは、風流のしわざなるべき。學びの窓に氣を屈めて古文をよみ、鳥几の上に筆を曲めて篆隷を書くを、文人書家といふも、みな是なりがたきを樂みとして、醴の如きをすてて水の如きにしたがふならずや。今や時太平に治まる御代の春しごと、遊魚

の淨心寺に石の印いちじるく、最屓の參詣絶間なし。嗚呼時なる哉命なる哉。さしも名高き栢車薪水、二年の内に故人となり、劇場も何か物足らぬ風情にて、いかほの沼のいかにせんと、世上のいさみうすかりしが、楓葉衰へて盧橘花發く習ひにて、當顔見せの入替りより、若手の役者新下り、花を競べ色を爭ひ、木戸の大入り世上の評判、一時の煙となりたりし吉原も建てつづき、日々に繁昌いやまして、美麗昔に十倍せり。人間萬事塞翁が、うまれた時は裸にて、又死ぬ時もはだかなり。飲めや謠へや、一寸先は闇の夜に、鳴かぬ烏の聲聞けば、拾はぬ先の金ぞ戀ひしき。かやうのたはけ世に多きも、實に太平の御代の春、事もおろかやかゝる世に、住める民とて豐なる、君の惠ぞありがたき〳〵。

縁を語り聞かさん。汝が父彦三郎、四十に及びて子なきことを愁へ、隅田川の龍神にたんせいをぬきんでて祈るといへども、天より授けし子種なき故、龍神の力にも叶はず、去りながらあまり切なる志にめで、龍神自ら形をわかち、汝が母の胎内にやどり、出生せし子は其方なり。去るによつて汝が體は、隅田川の龍神とは一體分身の姿なり。栢車が夢中に知らせし如く、隅田川の龍神無失の罪にしづみ、其科のがれがたき事あり、是龍神の飛行自在大小變化の妙術も、死すべき時節はまぬかれがたく、去る四月五日の夜、天人の五衰とて、多くの天人甍をならべ、作り立てたる家々の、忽ち一時の灰燼となる其砌、龍神も烟に卷かれ燒死んで其尸世に殘り、龍の頭と評判せしは、閻王の命にそむき、路考が代に八重桐を連行きし、水虎が科のとばしり故に相果てし、隅田川の龍神の遺骨なりと思ふべし。龍神死しては程もなく、汝が命終るべきは、極れる命數なりと、いふかと思へば忽ちに、かき消すごとく失せ給ふ。薪水はばう然と、元の病の床の内、夢ともなく現とも、思ひ掛けなき教を請け、心のまよひ晴れ行けば、病の苦痛はなけれども、とても必死の症なれば、次第々々におとろへて、辭世一句、

　艶なるや我はめいどへ花あやめ

明和五つ戊子の歲五月四日の曉に、終に空しく成りにけり。戒名は妙果院薪水日成と、深川

人家の垣根に咲く時は、風塵埃の爲によごれ、煙にふすぶり灰に穢さる。息にて拂ひ水にて洗へば、本の白きにかへれども、願はくは初めよりよごさぬやうに氣を付くれば、穢れを拂ふ煩ひなし。よごれを拂ふを頼みにして、よごるゝをかまはぬ故、スハといへば狼狽まはり、ソリヤ御祈禱よ立願よと、せつない時の神だゝき、地黄を頼みの不養生、袖の梅を楯について内損をするがごとし。彼觀音の力を念ぜば、火阬變成池刀刃段々壞と說かれしは釋尊一時の方便にて、實の觀音を說くにあらず。正法に奇特なし、飯綱放下の類にはあらず、何ぞや業慾無慙の祈禱者の、言を巧み僞りをまうけ、謝禮をむさぼる族を頼みて、凶事を祈り病を退けんとするは、開帳場にて巾著切に紙入を預けるに似たり。又人の名をなし事をなすは、草木の花さき實のるにひとし。牙ある者には角なく、重瓣の花に實少きは、造化といへる作當の入合せたる算用なり。汝が花は二葉より人に優れる榮名ありしは、早く咲けば早く散る花の譬と思ふべし。さきに栢車が病中に我を念ずること切なりし故、浮世のはかなき有樣をしめし、生死の道を悟らしめんと、閻王だも煩惱のまよひまぬかれがたきを知らせ、人の樂しみ多き中に、虚を賣り實を買ふ、吉原堺町の面白きこと世にならぶべきものなく、人の心をとらかせども、皆是一睡の夢の樂しみなることを示し、栢車がよみぢの迷ひをはらせり。いざや薪水、汝が命久しからざる因

の思ひをなし、ふりさけ見れば大空より、浅草の觀音忽然として顯はれ給ひ、これへ〳〵と招き給へば、薪水夢の心地にて、病の床を立ち出づれば、自然と病苦も覺えずして、行くともなく歩むともなく、とある所に隨ひ行く。菩薩御手をのべ給ひ、かたへなる卯の花の、雪にまがふを手折らせ給ひ、それ世の人の口ずさみに、我大悲の力にては、枯れたる木に花咲くとのみ一筋に覺えたるは、皆凡俗の迷ひなり。生ずべき時節に生じ枯れべき時節に枯るゝことは、天地自然定れる數にて、破鏡重ねて照らさず落花枝に上りがたし。釋迦達磨顏回孔子、深山烏も白鷺も、のがれがたきは此道なり。悟れば安く迷へばくらき、生死二つの道にうとく、私の法を立て、得手勝手の教をまうけ、皆己が田へ水をひく、不埒の族多き故、世上の俗人益愚にして、箸のこけたも神子山伏、屁を放つたるにも加持祈禱、奇妙の呪咀卜筮人、一犬吠えて萬犬吠え、應くといへばきくかと思ひ、祈禱を頼みの不養生より、身を失ひ家を亡す。心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らんとの教の歌は、丘之禱久矣といふ、孔子の詞に符合せり。人は天地の靈なれども、私の雲に覆はれ、人欲の雨風はげしき故、災を生じ病を生ず。事に臨んで祈るといふは、人欲の私をしりぞけ、浮雲を拂つて晴天を望む、これ一心の誠より其本にかへるなり。譬へば此卯の花の白きは花の持まへにて、天より授かる色なれども、

生きらるべき病とも覺えねば、後世の營みおこたらず、兼てより聞けるにも、佛出世の本懐を妙法蓮華經と名づけ、法華の八軸は八葉を表し、四要品の中には普門品を咽喉とし、觀音薩埵の妙智力、三十三身無量の容を標し、南方於常庭古天の廣小路、補陀落の切通しにて、種々の手づまをはじめ給ふ。就中聖觀音は餓鬼道にての化主の助と呼ばれ、衆生濟度の方便には豆と德利の妙をやらかし、一紙半錢の手の内には、むしやらくしやらの大明神己孔乏ほ丸礼えとなへて、掌より甘露をふらし、餓鬼趣に施し給ふ故、大慈觀世音と申すなり。金龍山淺草寺に安置し給ふ因緣は、推古天皇の御宇に當つて、檜熊濱成武成とて兄弟の漁父有りけり。憂き世渡りの網の中より顯はれ給ふ尊像にして、古今の靈驗いちじるく、日頃念じ奉れば、ましてかゝる時節なれば、普門品を念誦して、懇情少しも怠慢なし。頃しも皐月初めつかた、いとゞ短き終夜、寐る隙もなきなが／＼の看病に勞れ果て、妻をはじめ病家の人々、眠らじとは思ひながら、皆それなりに打ちこけて、跡の樣子は白川の、夜舟艚ぐてふ鼾の音に、薪水は目を覺まし、讀みかけし經にかゝり、一心稱名觀世音菩薩、卽時觀其音聲皆得解脫と念じつゝ、信心おこたることぞなき。されば水晶太陽の火をよび、水淸うして月影をうつす、氣にむかへ心にまねき、思ひ思ひて止まざれば、鬼神告ぐるの習ひにて、異香四方に薰じ音樂の聲聞え渡れば、薪水不思議

根無草 後編 五之巻

萬のことはたのむべからずと、吉田の法師が筆の跡、頼みにならぬ娑婆世界、さしも日頃健なりし市川栢車世を去れば、世上の驚き大かたならず、遠近親疎の差別なく、或は惜しみ或は歎き、わけて贔屓の婦人なんどは、思ひ亂れて泣く涙、雨とふらなん渡り川、水まさりなばかへり來るがに、などとかこてども、三途の川に川留めなく、死出の關の戸閉さねば、反魂香の烟さへ、仇に立ち行く月と日の、七日〳〵の訪弔ひ、諸事薪水が身に引請け、事故なく取りまかなひ、殊に忰雛藏は、父栢車が稚立にひとしく、怜悧なる生質にて、育も賤しからざれば、先祖の家名を繼がせんとて、父の傳へし業を止めさせ、賴母しき人引きとりて、教訓殘る方もなし。其外稚き娘なんども、所緣の方に宮仕、天道人を殺さずにて、皆それ〴〵にかた付きけり。されば南山雲起れば北山雨下るの習ひにて、翌年の春の頃より、薪水も氣のかたにて、どこ惡しきとも覺えねども、只何となう心重く、次第に形容瘦せおとろへ、盜汗朝熱痰咳に、藥よ鍼よ四花患門、祈禱立願殘る方なく、さま〴〵に養生すれども、中々快氣の體にも見えず。其身も所詮

て人となし、父の名字をつがせんと、思ひし事も水の泡、是ぞよみぢの障りぞと、泪と共に物語れば、妻や子供はしやくり上げ、とかうの詞も出でざれば、薪水は力を付け、尤も病は輕からねど、死ぬるといふにも極まるまじ、藥の効佛神の力を賴み給ひつゝ、心しづかに養生あれ。譬へお命終るとも、我らかくて有るからは、跡の案じはし給ふまじと、念頃に力をそふれば、いと嬉しげにうなづきて、何かいはんともがけども、舌強ばりて聲出です、漸くに筆をとりて辭世の一首かく計り、

終にゆく道とは知れど子規なきつる方にむかふ極樂

市川栢車と書き終り、四十四歳を一期として、明和四年亥四月中の二日子の下刻、眠るがごとき臨終に、人々夢の心地にて、前後不覺の歎きの體、目もあてられぬ次第なり。扨有るべきにしもあらざれば、野邊の送りを取りおこなひ、所縁ある菩提所なれば、下谷の常林寺に葬りて、蓮華院詠行信士と書きしるす。印の石は朽ちせねど、贔屓の人の涙の雨、朽ちぬ袂はなかりけり。

龍神を後りあゆみ出で、暫く〳〵と聲を掛け、ずつと出て獄卒を取つてつきのけはりとばし、龍神を後にかこひ、閻魔王をはつたと白眼、東夷南蠻北狄西戎四夷八荒天地乾坤の其間、あるべき者の知らざらんや。長病にて痩せたれども、海老が讓りの暫役、天幸まがひの閻魔殿、鬼瓦からつりを取り、あてこともないしやつ面で、身の程知らない色ぜんさく、傍から見る目かぐ鼻の、いはれぬちよこざい出かしだて、おらが若衆の産神の、龍神までを呼び出いて、いぢめる所へぴつかりと、ひかりに出掛かけた雷藏が、ぐわた〳〵鳴りの荒事に、うぬらが臍の用心しろと、飛掛つて大王の、がんづか抓んで投付くれば、ソレのがすなと取巻くを、取つてはなげのけつかんでは、十王みぢんの鬼つぶて、當るを幸ひ踏みちらし、すつくと立ちし夢覺めて、雷藏は病の床、冷汗流してうなさる聲、妻をはじめ病家の人々、樣々に介抱すれば、漸々正氣と成り、いとくるしげなる息をつぎ、我長病のつかれにて、まどろむともなき其内に、不思議なる夢を見しとて、始終の樣子物語り、これぞ正しく我命の終るべき時至り、閻魔の廳に至るといふ佛の告と覺えたり。知る通り幼少より、うき艱難の世の中を、渡りくらべて知るといふ、阿波の鳴戸のなみ〳〵ならぬしんぼうしとげ、世の人の贔屓に預り、世話に成りし恩もおくらで果てんこと、返す〴〵も口惜しょ。二つには兼てより、我は此身で朽果つるとも、悴を守り立

き入りたる諸分の功者、辻もの事に御坊を頼み、路考を迎ひに遣はすべし。早々用意とせかせ給へば、倶生神かぶり打ふり、イヤ〳〵それは宜しからず、かゝる名代の若衆好を、路考が迎ひに遣はされんは、燒鼠を狐に預け、猫に佳蘇魚の番とやらにて、必定しくじりの基なり。既に以て先達て龍神に勅定ありしに、若衆好の水虎めを迎ひにやりし不調法故、あつたら玉を取りにがし、只今に至るまで地獄のさわぎと成りたること、前車の覆へるをみす〳〵も、教法を遣はされんは以ての外の誤なり。只今大師申す通り、天下に一人の器量にて、四角四面の大王さへ戀ひこがれ給ふからは、誰をやりても忽ち惚れ、木乃伊取るとて木乃伊と成るは、億萬劫をふるとても、容易く御手に入るまじければ、此以後の懲しめの爲め、龍神を呼び寄せて罪に行ひ給はずんば、閻王の政道暗きに似たり。卽水中の惣司難陀龍王の幕下、此淺草の川上隅田川の龍神を召し給ひて、急度御吟味あるべし。ソレ〳〵との早使、足疾鬼に引立てられ、隅田川の龍神參內あれば、閻王怒りの御聲高く、先達て路考が事難陀龍王に申し付けしに、不吟味なる取計ひ故水虎めが大しくじり、汝此川筋を守りながら、知らず顏にて打ち過ぎしは、言語道斷の仕かたなれば、其罪汝一人に歸す、早く刑罰に處すべしと、仰の下より獄卒共、鐵の棒をふり立て〳〵龍神を取りまはし、既にかうよと見えければ、傍に居合はす雷職が、緣側よ

優童の實は義より出づ。鳳凰孔雀雉雞、雌は雄の見事なるにしかず、朕子女妓町屋形、女は男娼の美なるに及ばず。まして二丁町の他に勝れる、花の都の錦を分けては、柳櫻の艷なるを選び、浪花江に身をつくしては、よしあしの品をさがす。千人の中より百人をすぐり、百人より又一人を出す。名代の小倡古今絕えず、此地の繁花四時をわかたず、二月の瓜九月の獨活、寒中の筍には孟宗のお袋小言を云ひやみ、四方が仕似せの沃泉水には美濃の孝子も荷囊をたゝく。福山の河漏虎屋の菓子、家橘盛府が油店、雷藏おこし鹿子餅、月々に流行り日々に弘まる。うかれては暮るゝを覺えず、騷いでは明くるを知らず、元氣を引立て積鬱を散ず、不老延年の藥たりとも、いかでかこれに勝るべけんや。彼利に入りし娼妓買の、陰症の傷寒に類せると、日を同じうして語るべからず。かゝる繁花の其中に、三ケの津にて一人と呼ばれし菊之丞が其容貌、譽むるにも詞なく、譬へんとするに物なし。餻のお仙小指をくはへ、銀杏のおかんはだしにて逃げ、雪溪が花鳥も色を失ひ、春信も筆を捨つ。帽子に瀨川の名目あれば、染物に路考茶あり、路考娘弓町路考、似たるに名付け美しきに譬ふ。我此一派開基以來、かゝる器量は見初めなれば、閻王のこがれ給ふもゆめ〱僻事と思ふべからずと、教法大師の辯說に、一座も大いに感心し、大王猶しもうかれ給ひ、扨々餅は餅匠とやら、さすが男倡の祖師程ありて、驚

言曾我祭、土用休み秋狂言、又顏見世の入替り、環の端なきがごとく、年々歲々人同じからず。茶屋の混雜勝手の騷ぎ、下女飛んで八百屋に至り、魚ながしに踊る。かまどに陽炎もえ出れば、擂盆地下に雷を發し、刳刀に電光あれば、いり鳥鍋に液雨の聲あり。四季の氣色目前にあらはれ、はからずして仙境に入るかと疑ふ。二階はれやかにして間取無造作に、割正しくして器物潔し。茶屋のむかひ迭りの提灯、編笠面を覆ひ振袖地を拂ふ。綠の髮雪の脛、小袖きらびやかにして往來の目を驚かし、足音しとやかにして待つ人の胸に響く。追々に來り程々に座す。氣どりは旭の昇るがごとく、風情は若竹のうるはしきに似たり。小歌勇みありて三絃俗ならず、酒はづみ興闌にして、舞の身ぶり狂言のおもむき、旃檀は二葉より香しく、蛇は一寸にして其氣を得る。ぼんぼち火まはし道具まはし、八兵衛〳〵八兵衛、地口どゞわんす羅漢舞、陰綺聲色中返り、男は女は獅子ちよきりちよ、投壺の矢數拳の變化、蛇は蛞蝓にまけ、里長は狐に誑る。我を忘れ人を忘れ、童に還り愚に及ぶ。臨機應變千變萬化、遊の廾齡に入り騷ぎの妙所に至る。或は通ひ或は馴染、こつそりと逢ひしめやかに語る。いやみなくいちやつかず、意氣地あり拍子あり、己を立つるの計策少く、末を契るの慾もなし。傾城は甘きこと蜜の如く、串童は淡きこと水のごとし。甘きものは味盡き、淡きは無味の味を生ず。娼妓の實は慾より出で、

簾太夫新格子、場所の善惡手筋を求め、茶屋の云込み前後を競ふ。毛氈の紅葉衣裝の花、羅漢の人は俵のごとく重り、舞臺の透間は蠅のごとくたかる。向棧敷土間棧敷、切落し追込みなんど、分に應じ好みにしたがふ。膝と膝肩と肩、人氣蒸し火繩くゆり、番附つらね新淨瑠璃、饅頭煎茶おこし米、蜜柑辨當酒肴、無遠慮に越え大股にまたぎ、割込は近所の膝を痛め、烟草は隣の羽織をこがす。袖と袖との色事にはあたりのやきもち騷々敷く、足を踏まれし喧嘩には、留場來りてかつぎ出す。しらせの拍子木替名の讀立、幕明いてより殊更にどよみ、花道の出端手打の祝儀、下り役者の謁見にはひろめの取なし贔屓を願ひ、座附の口上玉を連ぬ。家々の藝得手々々の所作、頭の物好天下に流れ、衣裝の仕出し都鄙に傳ふ。音曲は呂律を極め、鳴物は拍子を盡す。作者の趣向道具の見え、故きを溫ね新しきを工み、或は勇み成は戲れ、或は笑ひ或は愁ふ。諸見物の心々響の聲に應ずるがごとく、りきめばりきみ泣けば泣き、私に感じ顯に譽め、はづみのかけ聲人竝のヤンヤ、鼻毛延び涎流る。しつぽりのぬれ事には女中の上氣耳を熱がり、老女も昔に還らまほしと思ふ。著替へては媚を爭ひ、のべ鏡は化粧を補ふ。東の上はてらてらと輝き、西のうづらは興を催す。舞臺の出這入ちよんの間盃、手折れる花のあたりに目立ち、水の月影所を定めず、追々に跡出てより程なく正月二の替り、嘉例の曾我に種々の持込み、春狂

世界定めはなし初、讀初稽古惣ざらへ、下りの乘込一座のさわぎ、酒酒を飲み人人にたかる。雪霜の夜の寒きを忘れ、一陽來復先づ此地より初る。紋看板には甲乙を顯し、繪姿競のあらましを知らしむ。提灯連つて定紋まばゆく、行燈爭つて趣向を盡す。左右の埒鮓のごとく押し、前後の群集桃を盛るに似たり。行かんとすれども人分らず、退かんとすれども顚るに隙なく、押されて動き、もまれて止り、氣頭に登り足地を踏まず。贔屓のきほひ手打の連中、ひろめの帨巾歪にかぶり、我慢の弓張筋違に提げ、虎のごとく翔り狼のごとく叫び、十里の谽谺ヨイ〳〵〳〵と響き、歸りの禮義お目出度と騷ぐ。積物峨々として山よりも高く、張札翩翻として雪のごとく飄へる。迎ひの提灯烈缺を欺き、二階のさわぎは雷の落つるかと疑ふ。どぶ板厚うして足音高く、拔露地狹うして小便流る。東西の街南北の道筋碁盤のごとく、又蜘手に似たり。來る人行く人止る人、貨食者は煮るにいとまなく、賣擯子は逵にむらがる。橋は群集の人にたわみ、川は蹴上げの流塵に埋む。一番太鼓は八聲に先立ち、三番叟は明けるを待たず。木戸の仕著せ揃ひの定紋、手巾長うして頷に餘り、扇大きうして招くに便なり。仕切場留場棧敷番、半疊中賣火繩賣、衣裝目立ち鬢光り、勢ひ猛に聲高し。貴賤老若僧俗男女、胸騷ぎ魂飛び、足を空になして脇目をふらず、衆星の北辰に共ひ、河水の海に朝するに似たり。上棧敷下棧敷內

根無草 後編 四之卷

初江王の辯舌に、閻王を初めとして、一座大きに驚き入り、詞を出す者もなし。其時大師莞爾として曰く、鮑魚の肆臭き事を覺えず、蓼の虫葵にうつらず、女色に淫るゝ輩は、我が男色の貴きことを知らず。それ男女の交りは、陰陽自然の道理にして大倫の根元なれば、いきとし生ける者此道にもるゝことなし。然るに末世に至りては、かゝる貴き男女の道を切賣にして遊所と名付け、人の心を蕩かすより、家を傾け國をかたむく、其災少からず。我これを慮りて、男色の淡きを以て其災を減ぜしむるは、鹽茶にて渴をとゞめ、むかへ酒にて宿酒を醒す。又男色の上品なるは劇場の地を專とす、これ亦樂の餘風にて人を和するの器となり、惡を懲し善を勸め、欝を散じ憂ひを忘れ、太平に居て亂世の趣をさとり、安きに座して危ふきの理を知り、愚夫も仁義のはしくれを聞き、兒女子も古人の姓名を覺ゆ、實に治世の玩なり。抑芝居のさかんなる二丁町の賑々敷、中村座市村座外記座辰松肥前掾、軒をならべ入りを爭ふ。わけて歌舞伎兩座を以て根元とし大劇場と稱す。顏見世入替り定つてより、役者附四方に散じ、

請の祝儀、物を貰つてやり手と呼ばれ、角なくて牛といはる。臺は喜の字に定まり、豆腐は山屋に名高し。袖の梅、卷せんべい、漬菜昆布卷甘露梅、群玉庵は河漏に名をなし、最中の月は竹村に仕出す。小買の淺漬茶碗の煮豆、宵の文蛤夜明の按摩、世に並なく外に類なし。遊の興多き中にも大黑舞のいさましき、燈籠の花々しき、二日七種藏開き、初午涅槃事納め、上巳灌佛衣更、端午七夕盂蘭盆會、八朔重陽えびす講、ゐのこ餅つき淺草市、櫻の風流月見の趣向、善盡し美を盡す、一時の榮花に千歳をのべ、白髮忽ち黑きに變ず、世に譬ふべき樂しみあらんや。かゝる風流を知らずして、若衆を愛し給ふ事は、夏の蟲氷を知らず、乞食の女房搗立の餅を喰はざるにひとし。サア返答を承はらんと、席を叩いて演べらるゝ。

乾いて手をならせば、丫鬟の返事もながく〱しき夜を獨かも寐んかといと心細し。欠し伸し心氣勞れて纓と來り、たばこくゆらすも亦思はせぶりなり。初會の遊は莟める花の色を含みて日を待つがごとく、谷の報春鳥枝に來て聲を出さゞるに似たり。かゝる内なん九郎助稲荷もいまだ講中とは思はず、出雲の神も先づ當座帳に記すなるべし。行くに解け通ふに馴染み、白き糸の染まるにたとへ、陽氣に物の暖まるがごとく、茶屋にむかへ大門におくり、先座の委細巨細新造の人身御供、させども貰ひ、もめれども來る。愈々思へば愈思はれ、可憐がれば又がられ、連あれば行き一人も行く。異見いふを野夫と見くだし、馬の合つたを粋なりと思ふ。惣仕舞は門帷をおろし、居つゞけは浴室を覺え、雪の旦の小鍋立には、丫鬟向ふの人を呼び、雨の夜のしつぽり酒には、內の女郎追々に集る。語り盡して歸ると思へど、別になれば詞殘るがごとく、逢はねばならぬ用ありと呼ばれて行けば、又左のみ外に用なし。枕の定紋ほくろの命、箸紙客の替名をしるせば、文には己が本名をあらはし、昔を明し行末をかたり、神に誓ひ佛に祈り、或は指或は爪、實と見える虛あれば、虛より出る實もあり。若し飛鳥川の淵瀬定まらず、月草のうつろふ色あれば、捕手待ち伏勢おこり、羽織さかれ髮切られ、男は女の操を守れば、女に男の意氣地あるも、實に此里のならはせなり。物日の約束夜具の敷初め、袖留めつき出し身

る。五丁町の名遠近に傳へ、夜店の氣色古風を變へず。身仕舞濟んで鈴の音聞え、日暮れて後格子賑ふ。座は位を定め衣裝は新古をわかつ。油煙天に登り三絃地に響き、文は誰が爲に書き、囁きは何事をかいふ。地廻りの下駄鼻歌と共に去り、はむきの町人新吾左と作ひ來る。老爺あれば少年あり、醫人あれば先士あり、野夫あれば通り者あり。どらは盡くす始終の氣、僧は忍ぶ借り著の紋、頭巾は一むれの闇を生じ、編笠一片の山を蓋く。種々の出立さま〴〵の風俗、波のごとく寄り雲の如く集る。人の心各異に、物好亦一般ならず。日本に惚れゝば口元になづみ、鼻筋に見込めば靨に打ち込み、莠と苗と燕石と玉と、何れをか捨て何れをか殘さん。初會の盃おもむき古く、給べえせぬも久しいものなり。作法を崩さず位を落さず、座を明けず囁かず、さわぎの拍子に乘らざる事、岡場所の企て及ぶべきにあらず。料理出で床をさまり、來る事おそく待つ事長し。引ケ四つの柝聲ほの聞ゆれば、廊下の足音耳に響き、茶屋は迎ひの刻限を約し、男僕來りて油をつぐ。隣の口舌よそのむつ言、浦山しき風情ありて、待つは久しき物にぞ有りけりの小歌の文句も身にこたへ、モウ來さうなものぢやといふ狂言も思ひ出す上草履の音、扨こそと待てば、夫にはあらで行過ぎたるも本意なく、障子の明くは是なんめりと思へば、新造來りて厨櫃を鳴らすもにくし。長うなり短うなり、右に寢ね左に起き、咽

多しといへども、出る舟あれば入る舟あり。懸方燈水を照らせば提燈の火は土手に映ず。道哲の鉦耳をすませば煙の臭鼻をつらぬく。金なき男は無常を觀ずれども、時めく人は遊ばぬが損なりと悟る。草青々と萌え出ては心殊更春めき、月皎々と照りては其俤益ゆかし。螢かすかに飛んでは別世界の風涼しく、雪ちら／＼と落ちては醉覺の顏心地よし。野路の風景他に異なるを、見れども見えず聞けども聞えず、衣紋坂大門口、人の風俗常にあらざれば我心我にあらず、仙人も通を失ひ石佛もうかれ出る。衣裝の伊達あまたの物好、三人一般ならざれば、萬人亦同じからず。知る人あれば知らぬ人あり、見ぬふりあれば見せるふりあり。待合の辻中の町、大道直うして髪のごとく、料理潔うして玉のごとし。茶屋の饗應牽頭の洒落、小戸は茶漬に正體をあらはし、底ぬけは先底を入れる。垣間見の隣座敷は見し玉簾の内ぞ床敷く、行き過ぐる道中には乙女の姿しばしとゞめよと思ふ。提灯寸をはづれて大きく、定紋紙にあまつて目立つ。花美を極むる繡には鳳凰も文彩を恥ぢ、照を選べる瑇瑁には名玉も光輝を失ふ。道筋糸をはゆるがごとく、足音節を打つに似たり。禿のさわやかなる、新造の花やかなる、やりての一くせある顏色も、芝蘭の室に入つて自ら香しき、常の嫗とはたがへる樣におもほゆるもをかし。江戸町京町前後に在つて、各左右二町に分れ、すみ町亦其中にはさまれて、獨南一町にかたよ

に志を奪はれんや。大師の若衆を愛するは、一には辯二には糟糠も腹にみつれば八珍をかへりみず、末世の坊主男色にて事を濟ませ、女犯の害をまぬかれしめんと、遠きを慮る權者の心、不學無術の輩の容易知る所にあらずと、詞を放つて云ひ返せば、初江王すゝみ出で、轉輪王の詞面白し。しかし坊主は左もあらんが、女色をいましめぬ俗人の男色を好む事、甚だ以て其意を得ず。大王も只今より路考が事を思ひ切り、是より三谷通ひと出掛け、土手をしつぽり雪の鷺。只一人は用心いかゞ、我等御供仕らん。それ廓通ひの風流なる、宿の出入に人目を忍び、家業のいとまに我身を竊む。或は兜籠或は船、黄帝車を製すれども、四つ手の輕き案じは出でず。梶原逆櫓を爭へども、猪牙の早さに心付かず。末世の手まはし浮世の才覺、腰のすわり櫓の手練、飛鳥と成りて雲に入らざれば、射る矢と成りて空をしのぐかと疑ふ。船かろく人重く、動けば動き鎭まれば鎭まる。潮引いては橋杭長く、月出でては登ること早し。火繩箱にくゆれば吸ひがら舷をたゝく、聲は聞えず往來の人、目は屆く左右の河岸、椎の木は屋ねをしのいで高く、首尾の松は波をくゞりて榮ゆ。竹町か屋の渡十文字に過ぎ、駒形の堂斜に見渡す。遠きもの自ら近づき、近き物忽ち遠ざかる。程なく廬崎眞乳山、三圍の鳥居恨めしさうに覗けば、洲の上の葦心有りげに招く。今戸橋小しといへども、通る人よりくゞる人多く、堀の船宿

折は堺町葭町通ひもめさるやら、坊ね忍ぶは闇がよい、月夜にはあたまがぶらりしやらりと諷はる。天地自然の女色さへ、淫るゝ時は身をしくじり、家を失ひ國を亡す、況んや男色の無理非道なること、耳の穴へ食を喰ひ、煮茶鑵で味噌を擂るがごとし。かゝる不埒を行ひながら、此宗一派の洪匠とあふがれ、密教とやら夕河岸の阿字本不生の脊ごし膾、酢の過ぎた衆生を化す上べ計の見せかけにて、葛西舟の船頭雪隠の神の末社も同前、己がなくば我々もかゝる憂目は見まいぞと、此一宗の新發意が祖師のあたまを叩くといふも、實に尤と覺ゆるなり。いそぎ教法を追ひまくり、廣野山と黄蜀葵根店を片時も早く破却して、痔病の愁を除くべし。ソレ〳〵と下知すれば、轉輪王押しとゞめ、宗帝王の詞は皆理窟と申す物にて、大道を知るの理にあらず。閻王の御身持諌むるは臣下の道とは申しながら、譬へば雷火に水を掛くれば、其火ます〳〵さかんなれども、合せ火をなす時は、其火却つて消ゆるがごとし。浮世に此理を知らぬ者、人のすること皆非に見え、獨り嗔恚を燃しつゝ、世をうらむる族も多し。又教法の若衆好は、其人の一癖にて、道を害するに至るべからず。なくて七癖といふ諺あり、王濟が馬癖和嶠が財癖、杜預が左傳慈鎭の倭歌、盛親僧都の芋魁、宗祇法師の髭を愛せしも、皆人々の癖ぞかし。志尋常にして癖大なる者は癖の爲にとらかされ、志大にしてなみ〳〵の癖ある者、何ぞ癖の爲

河原の別業に逗留せし山承り、御次まで召寄せ置きたり。それ〳〵と呼び次げば、香の衣に九條の袈裟、御衣の袂の香を殘す、縹帽子の花々しく、いとも殊勝に著座あれば、閻王近くと招かせ給ひ、汝を召す事餘の儀ならず、聞きも及ばん此大王見ぬ戀に身をやつす、御坊は名高き若衆の開基、此道一派の祖師なれば、諸分功者と聞き及ぶ、何卒路考を手に入れる魂膽は有るまいかと、惚々として勅諚あれば、教法の詞を待たず、宗帝王居丈高に成つて、毎日每夜諫めても、金言耳に逆馬の、指つまりたる御所存かな。三千世界の其中には、日本といひ唐といひ、天竺阿蘭陀をはじめとして、數萬の國々ありといへども、皆それ〳〵の司あつて國を治め民を敎へ、萬國太平を樂しむこと、皆上一人の德によれり。されば古唐土にて、吳王劔をこのまるれば民きずつく者多く、楚王女の腰の細きをすけば宮女に餓死多かりしも、上の好む所下必ず隨ふならひ。君は世界の惣司にして、過去現在未來までの善惡を正し給ふ大切の御身を以て、稚子の小路がくれ、二才野郎の拔參りのごとく、地獄を逐電し給ふさへ沙汰の限りの事なるに、寢ても起きても若衆の噂、一ッ穴の狐とやらで、教法までを呼び寄せて言語道斷の御しかた。是に居らるゝ教法大師も、廣野へ入定めされて以來、まだに戲家がやまぬかして、動もすれば石芋石蛤で人をちやかし、古河では水でじやうだんをはじめ、役にも立たぬ日の目を切り、折

かやうに候者は市川の雷藏にて候、我久々の病氣にて、醫療手を盡すといへども、更に快氣もなかりし處に、此程淺草の觀世音を念じ奉りける驗にや、いつに勝れて快く覺え候程に、御禮の爲淺草に參詣せばやと存じ候。浮世の夢も短夜の、まだ晴れやらぬ雲井の月、心の駒を引立てて法の爲には藏前の、閻魔堂にぞ著きにけり〳〵。淺草までは程遠し、爰にていざや休まんとて、堂のかたへに蹲踞り、暫し念珠し居ける所に、拜殿俄に物音して、晝のごとく照り渡り、閻王中央に坐し給へば、左右に十王列を正し、表の方には獄卒ども數もかぎらず並居たる。閻魔大王御聲高く、是まで心を盡せども、戀の叶はぬ業腹まぎれ、朕閻雲に亡命して此所に至りし心は、堺町をぶつこはし玉をこつちへ引きさらはんと、心はやたけにはやれども、日本は神國にて、伊勢八幡王子の稻荷、おへない手相が多ければ、漫りに他領へ踏込みがたし、乾道の事は教法大師の支配なれば、呼寄せて申し付けよと、轉輪王の心付き尤に思ふゆゑ、廣野へ呼びに遣はせしが、定めて使歸りつらんと勅諚あれば、轉輪王、さん候、教法が儀は幸と大師

どもさらに快氣も見えず、次第におもる病の床、贔屓の方にも聞傳へ、そこの立願かしこの祈禱、様々心を盡せども、其驗も見えざりけり。

て子なき事をうれへけるが、人の教にまかせつゝ、隅田川の龍神へ三七日の通夜なして、祈り出だせし申子は卽ち後の薪水なり。實にやびんがは卵の中より其聲衆鳥にまさるとかや、薪水子役より愛敬つよく、若衆形にて大入りを取り、僧俗男女心をうごかし、扇牙杈差煙袋歌發句はいふに及ばず、薪水が手で墨を付けても兒女子の嬉しがること、義之が墨蹟定家の色紙にもまされり。父は堅きを仕にせとし、後の薪水は初めより色事師の名代にて、舞臺の風はかはれども、常の行跡父にもまさり、最屓の人々招けども、等閑にては茶屋へも行かず、若し據なく行く時は、いつも袴を脫がざる故、客も却つて窮屈がる程行儀正しき生質にて、流石昔のあづさ弓、引かたの女中なんどは、鴈の便を求めては、玉の緒の絶えなんとかこち、人目の關を忍び兼ねつゝしたひ來るも多かりしが、自然と柳下惠が行ひに等しく、みだりなる事怪我にもなし。女はつれなしと恨むれども、其守の堅き事大人君子も恥ぢぬべし。初め薪水孤にて、親類とてもあらざれば、尾上梅幸を親と頼み、又此栢車が男氣を見込み、兄弟分の約をなし、雲と成り雨とならんと契りしが、元服の後も交り絶えず、實の兄弟より睦じゝ。いかなる過去の約束にや、戌の秋より雷藏は何となう煩ひ出し、押して勤めは勤めながら、次第に氣分惡しければ、亥の二月より舞臺を引きて養生しけるを、薪水も日々行きて看病おこたる事もなし。され

く、元服して海老藏が弟子となり、栢筵の一字を貰ひ、俳號を栢車と名乘り、村上彦四郎の荒事より、次第々々に評判よく、上方よりも招かれて、當りを取る其内に、初めの名は遠慮ありとて雷藏と改名し、再び江戸へ下りてより、益贔屓の人多し。此人常の詞にも、我は仕合せ惡くしてかゝる身となりたれば、形は武門に返りがたくとも、心はなどか昔の武士を忘れんやと、其志古の朱家劇孟がおもむきを移し、物ごと至つて正直にて、任俠をこのみ劍を愛し、弱き人には下れども、強き者には一寸も引かず。酒を飲み角力をすき、又拳の上手にて世上にならぶ者もなし。されば段々評判よく當り狂言多き中に、しのぶ賣りあかん平、總角の助六なんど類なき大入りにて、世上の評判樂屋のもてなし、取わけ女中の贔屓つよく、雷藏々々とはやし立て、仕出し團扇櫛笄、三升の中へ雷の字を付けたるは、屋敷も町も嬉しがり、鳴る雷はこはがれども、此雷はかはゆがり、抓まれたがるも多かりき。爰に又色事師坂東彦三郎薪水といふ者有り、先の彦三郎が實子にて、稚名を菊松となん呼びけるが、父薪水泉下の客と成りてより、菊松父の名を繼いで二代の彦三郎と成りにけり。元來父彦三郎は、くれ竹の伏見の里の產れにて、是も武士の忰なりしが、故ありて役者と成り、舞臺も武道を專とし、實の實といふ仕内にて、眞の上手ともてはやされ、家老職のおも〳〵しさ、其頃續く役者もなし。然るに薪水四十に至り

て、年に似合はぬ丈夫の魂、此上は留めても留まらじ、汝が望みに任すべし。去りながら此年まで養育せしは、主人を見立てて奉公させ、世に出さんとこそ思ひしに、ふがひなき親ゆゑに、年端も行かで苦勞かんなん、不便の次第とふるふ手を、長右衛門が介抱にて、證文に印形すれば、祖母と母とは左右にすがり、涙ながらに髪かきなで、思ひつゞけし數々の、胸にせまりて詞なし。二人も哀にくれながら、用意の竹轎をさし寄せさせ、民之進をいたはり乘せ、名殘は盡きじとそこ〳〵に、暇乞して立歸る、跡のなげきいはん方なし。かくて果つべき事ならねば、彼身の代にて大醫をむかへ、價の貴き人參を用ひ、殘る方なき養生に、母の病も全快し、義兵衛も程なく平愈しけり。これ偏に民之進が世に類なき孝心の、天に通ぜし故ぞかし。彼唐土の郭巨てふ人、母の爲に子を埋めんとして金の釜を掘り出だせしに、類等しき孝行なり。それよりも民之進は宮川町へ引移り、昔の武藝引きかへて、三絃小歌舞の手なんど、日數もたゝで覺えければ、嵐玉柏と名をかへて、四條の劇場へ出しけるが、卞和が玉磨かれては、瓦石と類すべきにあらねば、全盛つゞく者もなく、江戸よりも聞き傳へ、段々の云入れに、親方の相談極り堺町へ下りけるが、わけて其頃押しなべて、男色盛の時節なるに、梅のずあいのすんとして態とならぬ色香あるは、東の人の氣象に叶へば、風流の客前後を爭ひ、色子の内も評判つよ

がう養生なされい。いつも闇ではない習ひ、わしが請に立つからは、金さへ出來りや何時でも請返さうと自由な事、御子息の孝行を無にせまいと思ふゆゑ、夕べから夜も寐ずに京へ六里のたて通し、兼て懇意の親方ゆゑ、諸事しめくゝりして置きたれば、判さへ出來れば金渡さうと、詞に付いて扇屋も、長右殿の咄に違はず、孝行といひ器量といひ、目の內に見處あれば、此子は一はねはねうと思へば、飛びつく程欲しいから、六年切つて百兩と、金子の包さし出せば、父は涙の顏を上げ、何れもの御世話忰が孝行、過分にはござれども、拙者も故有る武士の浪人、いかに貧苦にせまり果て、病氣難儀なればとて、天にも地にも只ツタ一人のおひ先ある忰を賣つて、其身の代で命をつなぐは、我が子の肉を食する同前、先祖へ對して言譯なく、犬猫にもおとりたれば、譬へ砂をかみ饑ゑ死ぬとも、此儀は決して相ならずと、得心すべき氣色もなし。民之進もしをれ居しが、父の詞を聞くよりも、傍なる脇指ぬきはなし、切腹と見るよりも、皆々驚きいだき止むれば、祖母も行步は叶はねども、共々に這ひよりて、短氣をするな、どうなりとも、そちが望みにまかせんと、取り〴〵になだむれば、どうで生きて詮なき命、祖母さまや父上の、御難儀を見んよりは、死なせてたべとかこち歎けば、父も涙の目を押しのごひ、氷の魚雪の筍、其孝行にもおとるまじ。日頃一徹短慮なりと呵られし程ありて、十二や三の子心に

金にもなるべしと、つど〳〵にいひ聞かすれば、相應の金にも成り、父母の難儀をすくふならば、身は八つざきにさかれ、生膽をぬかるゝとも、さら〳〵厭ふ所存にあらずと、流石日頃の氣質程有りて、惡びれもせぬいひぶん。長右衛門呑込んで、民之進を人に送らせ、わづか三里の道なれば、其身は宿へも歸らずして直に京都へ急ぎ行く。されば孺子の非に入らんとするを見ては惻隱の心ありといふ、親父の寐言野夫ならず。斯て民之進は宿に歸れば、家内は案じ居けれども、立願の譯いひくろめ、其夜も過ぎて翌朝より長右衛門を待居ける、孝行ふかき心の内、けなげにも又哀なりけり。程なく晝にも至りければ、長右衛門が案内にて、京都の子供屋扇屋藤助、義兵衛が内に入り來れば、民之進出でむかひ、二人を伴ひ内に入り、父母の前に手をつかへ、祖母ゐと申し父上の久々の御病氣、貧苦にせまり父上の死なうと覺悟し給ふを、寐たふりにて聞きたりしが、子の身としてはうか〳〵と聞いてゐられぬ命の瀬戸、せめて廿年にもなるならば、仕様模様も有るべけれども、若年の私ゆゑ、外になすべき手だてもなく、是なる長右殿を賴んで、宮川町へ奉公に參り度御座りまするると、淚と共に願ふにぞ、祖母も夫婦も思ひよらねば、顏と顏とを見合せて、とかうの詞も出でざれば、長右衛門引きとりて、ない習ひでもござらねば、マアさうでもして身の代で諸方の借金をもつくのひ、人參でも調へて心な

獨しみ〴〵泣き居たれども、何となすべきてだても出でず。此上頼みは神佛の力ならんと稚心に思ひ付き、暮にまぎれて内を拔け出で、あたりの淵にて垢離を取る。所も名にし逢坂の、關の明神へ裸參り、神前に打ち伏して、死なうといふ父の命祖母の命、諸共に金さへあれば助かるとや、何卒金を調へて、病苦貧苦を救はせ給へ。夫も叶はぬものならば、一寸も動くまじ、爰にて我を蹴殺してたび給へと、脇目もふらず祈りけるが、頃しも冬の半なれば、次第に夜陰の空寒く、吹雪交りに吹く風は、身内を切るがごとくなれども、固より氣丈の生れつきに、一心の誠をあらはし、少しもたゆまずこたゆれども、寒氣五臟にしみ渡り、からだは氷のごとくなれば、何かは以てたまるべき、正氣を失ひ打たふれしは、目もあてられぬ次第なり。折節近所にて心易き柏屋の長右衞門といふ人、牙郞宿願の事あつて此宮へ詣でけるが、此體を見て介抱し、羽織を脫いで打著せ、あたりの家に伴ひ行き、巨燵に暖め藥をあたへ、さま〴〵といたはりければ、漸に心付きけるが、又かけ出して行かんとするを、人々とゞめ樣子を問へば、有のあらまし物語り、此上はいか樣なる奉公にも身を賣りて、家内の難儀すくひ度との稚心、有りあふ人も感に堪へ、長右衞門も哀とは思ひながら、年端も行かぬ稚き者、年季奉公に出でたりとも、高のしれたる給金なり、いつそ宮川町へ身を賣つて、男倡奉公に行くならば、いつかどの

もにむせび入れば、女房夢の心地にて、藥あたへつ抱きかゝへ、漸咳をさすりしづめ、母の目や覺めんかと聲をも立てず、ないじやくりして夫の顏をうらめしさうに打ながめつゝ、いかに難儀のかさなればとて、日頃にも似ぬ不了簡、今自滅し給はゞ、母御も生きては居給ふまじ、わらはもながらへ居らるべきか。さすれば可憐民之進は、誰か殘つて人となさん。さはいふもののいかなれば、貧苦といふも程あらんに、其日の煙も立てかねて、昨日も藥は貰ひながら、煎ずべき薪なければ、わらはが髮の中を剃り、漸少しの價にて買調へし落葉さへ、涙にしめりもえ兼る。寒氣つよき此時節、夜の物なく火の氣もなく、姑御といひ御前の大病、次第に募る苦しみを、病む目より見る目のせつなさ。人參で愈ると聞けば、せめて此身が若かりせば、君傾城に身を賣つても、しやう模樣もあるべきに、それさへも叶はぬ因果、天道にも佛神にも見かぎられたる身の上と、夫婦手に手を取り合ひて、忍ぶにあまる泣聲を、初めよりつく〴〵と寢たふりにて聞居たる民之進が子心にも、堪へかねて泣出だせば、夫婦は驚き、いかゞせしぞと尋ねながらも、樣子聞いての事なるかと、心遣ひかぎりなし。民之進もせきくる涙、明さば猶しも苦の上ぬりと、こはい夢見ておそはれしと、何氣なく取りなす內、夜明烏の聲諸共、母の目も覺めければ、藥よ湯よと女房の心遣ひ、哀なりともいふばかりなし。其日も終日民之進は、

遺ひ身をそがるゝよりせつなけれども、智恵才覺にも出來がたき金が敵の世の中なれば、只しみじみと明暮に、年の寄るより外はなし。或夜母のすや〳〵寐入りしを窺ひ、義兵衛女房に向つて申しけるは、いかなれば我々程果報拙き者あらじ、京都にて勤めし時も、何の仕落なき身ながら、朋輩のまきぞへにて御暇給はりし、それよりかゝる浪人住居、仕つけぬ業の世渡りも、今の難儀にくらぶれば、うしと見し世ぞ今は戀しき、母の病氣我腫物。剩さへ其上に四百四病にまさるといふ貧の病身にせまり、耆婆扁鵲が藥でも、生延びられぬ我がおとろへ。今日の醫者の詞にも、母の病氣も中風なり、我腫物も腐つよく、いづれも人參の力ならでは中々療治なりがたし、外へ見せよとにげらるれど、其日の煙立てかねて、知る通りの體なれば、死したる者が蘇り、枯木に榮の發けばとて、人參のことは扨置き、毎日毎夜の催促に、最早いふべき詞も盡き、貧苦の上に我大病、手がまはらねば母人の看病までが疎畧になり、不幸の罪もおそろしければ、我は今宵腹切つて相果てん、我死したりと聞くならば、貸方にてもあきらめて催促にも來るまじ、左すれば貧苦と我看病、二つのなんぎを助かりて、母一人の看病しとげ、いかなる人にも身をまかせ、奉公宮仕をしてなりとも、忰を守立て人となし、家の名字を繼せてくれ。賴み置くは是計といふ內も、腫物の痛み熱の往來、胸までせき來る無念の涙、痰咳とと

して滯はらず、手習學問鎗兵法遊藝までも器用なれば、末々は能き主取をもさせんとて、江戸の稼ぎを心掛けて、薄々用意は有りながら、老いたる母女房なんどの、知らぬ吾妻の長旅を如何あらんと思ひすごし、一日過ぎ二日過ぎ、早三年の月日さへ、立寄るべき方もなく、有附くべき主人とてもなが〳〵の浪人住居。母女房も氣毒がり、いつそ江戸へ出て見てはと思ひ立ちは立ちながら、兎して角して隙取る内、思ひ掛けなく母の中風、旅立どころにも有らばこそ。わけて義兵衛は孝行なる男にて、看病に手ぬけもなく、あなたこなたの醫者よ祈禱よと心遣ひ、もとより手薄き身代なれば、諸方に穴も秋の末より、冬の半に打ちつゞき、義兵衛も脊に癰を發し、初めは母の病苦の障りと、隱しても隱しとぐべき病ならず、段々と腐り入れば、中々一通りにて快氣しがたしと、下地せつなき其上に、又此才覺にかてゝくはへ、少しも所緣ある方は、段々無心もいひ盡し、貯へし兵器諸什器、指がへの大小の反はなけれどまげ仕舞、夫婦が著がへ夜の衾、後は銅壺茶銚まで賣代なし、漸々殘る物とては、四人が口をとぢ蓋の破鍋にさへ金氣もなく、せつなき餘りの一寸のがれ、高利の金をかりそめにも、足元を見ては猶物の哀を知らぬ族、日夜朝暮の詰催促、義兵衛は重き病氣の上、母の耳へ入れまじと斷いふ程責めかけられ、詞の劍理づめの鎗先、千騎萬騎の敵よりも、防ぎかねたる浪々の身を悔めば、女房の心

根無草 後編 二之巻

それ造化のかぎりなき、小見を以てはかるべからず。田鼠化して鶉となり、雀水に入つて蛤となり、童奴變じて伴當となり、婦化して姑となる。漆蟹を得て泥のごとく、海參藁を得て水のごとく、大戸酒に呑まれて酒風漢となり、少年娼妓にたらされて瓢客となる。千變萬化のかぎりなき、張華も博物の看板をおろし、東坡も相感志の店をたゝむ。爰に市川雷藏なる者あり、此者の變化定りなき其源を尋ぬれば、父は代々瓢象の、都の方に隱れなく、富みさかえぬる武家に仕へて、渡部義兵衞となんいふ人なりしが、朋輩の連座にて浪々の身と成りけるより、老いたる母と妻子をも養育まん手次にもと、住なれし都を離れ、うき數々に大津の町のわび住居、弓馬の道は廻り遠く、外に營むべき業なければ、給の事は先素人ながら、つい出來易き所の名物、げほうのあたまへ階子掛けても、我身の上の下り坂、主持たぬ身の一徳と、浮世は輕き瓢箪で、押へる鯰のぬらりくらり、犬のくはへて引きあるく、先士の坊の褌さへ、しまりなき世渡の、いつ果つべき事にしもあらず。其上に民之進とて一人の悴あり、容貌百人にすぐれ、心さとく

沙汰が物騒なれば、酢の蒟蒻のといやがる故、しやうことなしに自身の捷歩、三途川を歩行渡り、先祖代々持傳へし、脊中の火焔を微塵にして、大事の後光株仕舞、德はいかいで不動そん、見違へしも無理ならず。閻魔のどやが知れたれば、外をさがすに及ぶまいと、聞いて皆々色を直し、去りとはいかい御苦勞さま、安い佛に樂をさせ、御自身の急足とは、本の次第ふどう明王、婆娑の若衆にうつほれて、路考じやうどにうかれ出る、これも他生のえんま樣、迷ひ子の閻魔はと、へちまな地口口々に、鉦ちやん〳〵と打ち鳴らし、藏前さして尋ね行く。

に金絲でゆひ綿縫はせたは、おらも首たけ濱村屋、今三ヶ津の希者、鼻の高い天狗仲間、鞍馬山の太郎坊、愛宕山の治郎坊、湯の山の有馬坊、羽黒山の出羽坊を始めとして、最屓の連中、山の手から下町はいふに及ばず、蝦夷松前の果までも、路考を引かぬ者なければ、旦那の惚れたも無理ならずと、口々評議に社長のいらち、咄しがかうじて長休み、あんまりたばこ呑み過し、男倡の地獄見るやうに、尻から焰の出ぬ先に、サア最一息尋ねて見よう。コリヤ尤と大勢が立ちさわぐ最中に、急脚子と見えてすた〱走り、色眞黒にふすもり顔、眞一文字に行き過ぐるを、獄卒共引きとゞめ、我々に斷りなしに何國へ通るとゝがめられ、誰とはおろか、悉なくも藥研堀に隱れなき、不動明王を見知らぬかと、市川流で白眼付ければ、獄卒共うろたへて、能く〱見れば不動ね、後光の火焔がござらぬ故、頭巾著ぬ大黒同前、見違へしとのわび言に、不動明王打ちうなづき、おれが急足に來りし樣子は、今朝淺草の觀音殿から呼びにおこされ、閻魔ゐが藏前の出店にかくれて御座らしやる、潛に迎ひをよこす樣にと、地獄へ飛脚がやり度いが、參りの多い時節故、寺内でも人少、隙で居る久米の平内は、見る通りおもたいからだ、急ぐ間には合ひにくい。雷や風の神では通り筋の小言も氣の毒、そちの小賢をやつてくれ。ヲツト心得たんぼ道、安うけ合ひに請合つて、制吒迦衿羯羅に行けといへば、近年は地獄でも若衆の

が姿、聞きしには似も付かず、存じの外の不器量に、一座大いにあきれ果て、定めて譯の有磯海、不覺を取りし其樣子、包まず白狀仕つれと、水虎を御吟味ありけるに、己が心に覺えあり、疵持つ足の氣味惡く、御白洲にひれ伏しく〲、誤り入つたる有樣より、かつぱと伏すといふ事は、此時よりぞ初りける。されども漢子も去る者にて、詞をかざり、鷺を烏いひくろめんと、淨頗梨の鏡に掛けての詮議故、のがれぬ所と覺悟して、路考が情に大事を忘れ、荻野八重桐といふ女形を身替りに連れ來れること、有の儘なる白狀に、閻王甚怒らせ給ひ、三千世界を司どる此大王を茶にしをるは、言語道斷につくき奴と、忽ち水虎を蹴殺し給ふ。したが娑婆にて死んだ者は此所へ來れども、此所で死んだ者は行く所がない故に、魂娑婆へ迷ひ行き、人のからだを假初に、男色千人切の馬鹿を盡すも、皆此水虎の亡魂の障礙をなすと知られたり。それより年を重ねても、閻王今に熱さめず、路考をこがれ給へども、定業にあらざれば、大王の御威光でも呼寄せる事叶はぬ故、いつそ娑婆へ尋ね行かんと、思ひ詰めての亡命ならんと、始終の咄しを聞居たる、茶色の鬼が圖に乘つて、おれも御用に選出され、去年と今年の堺町、節分の夜のにくまれ役も、いやと鰮の臭さをこらへ、狗骨で目をつく〲と、路考に見とれし贔屓の證據、赤鬼白鬼黑鬼のと、昔から定法の仲間をはづれ、おれ一人が路考茶鬼、コレ見よ虎の皮の犢鼻褌

新鑄の當四錢を入れさせ、無間地獄の蛭を止めて、壹歩札にて三百兩の富を突かせ、畜生道で馬市をはじめ、劍の山を一丁目か柳原へはこんでも一方は防がれるに、閻魔王は味いな了簡、わし等はとんと呑込めぬわいのと、茶粥の腹の減りをもおぼえず、上方理窟いひ竝ぶれば、鬼仲間でも口を利殺鬼といへる通り者、銀煙管脂下りにくはへ、唐ざらさのじゆばん腕まくりに、本田あたま打振りて、イヤ親王の亡命は金でなしの色事、目玉光の赤面、髭むしやの口廣で、見掛けに似ぬ近惚れ、天人衆の奇麗事に頗いきのいちやつき、羽衣じめのちよんの間、おれこましのからだをも宿上りもずい流し。そこで大日腹を立て、閻州には似合はぬ身持と、尻われのぐつとこまり、ずるにげのぐいはづし。推量違ひ中の丁、打つて置け。チヨンとそゝり立つれば、鼠色のへんてつに、東坡巾かぶりしはすかんぴんの宗匠鬼、朝鮮扇しやにかまへ、イヤイヤ大王の亡命は中々左樣の事ならず、紀の貫之が古今の序に、繪に畫ける女を見て心を動かすがごとしとは、僧正遍照が歌の評判。それは昔の筆の跡、かゝるためしを目のあたり、眉目容類なき瀨川菊之丞が繪姿に、閻魔大王現をぬかし、龍神に勅諚ありし一部始終の委しい事は、根無艸に書きしるし、世上に隱れなみ〳〵ならぬ、其戀人を思ひ川、流れて末の逢ふ瀨あらばと、待ちわび給ふ折からに、龍神の下知を請け、手下の水虎が働きにて、伴ひ來る路考

て逐電をし申されたか、毎日さがせど影サアも見え申さない、扨うらゝまでが宿なしに成り申すは、悲しいこんだと、流涕こがれてとこぼえ申すと、譬に違はぬ鬼の目に、涙ぐんで物語れば、額をぐつとぬき上げ、さかやき延びたがつたり天窓、腕に彫物した赤鬼の八兵衞、懐手してずつと出で、つがもない、こつとらが身代でも、五兩三兩の借金にせつかれ、内外で濟まぬこんなら、高が砂利をつかむと思へば、借りる時の地藏顔、なす時の旦那の面だ。貸した奴がのたまく云や、横ぞつぽうはりのめすに、素い氣の短い旦那殿、がうぎに亡命されるとは、あて事もない外聞を失つて、おいらまでが顔が立たない。何のこんだ咄しの樣なと、めつたにりきめば、そばからねそ〳〵、上方の産れと見えて、西瓜に蠅のとまつた樣な髮の曲は、寐てもそんぜぬ勘辨ごと、白鬼はよごれめ見え、黑鬼は弱からうと、地の太き伊勢島鬼、不思議さうな顔つきにて、わしらはとんと呑込まぬわいの、閻魔ゑの身代はゑらアいもんぢやさかいで、いくら借金が有つたとて、ちつと始末なさつたら、つい直りさうな物ぢやわいな。かういへばわしがのが少い了簡の樣なれど、ひどう積つて代物の隨分利口に付くやうに、菩薩達の黄金の膚も御堂前の出來合同前、倭鉛鍍金で間を合はせ、極樂へ毎日の仕出しも百味の飲食斷りいうて、仕掛で壹ゑゝ五分膳ぐらゐで濟みそなもの。其上でまだ不足なら、娑婆中へふれを廻し、六道錢に

那の亡命、尋ねに出るこちとが難儀と、口々にわめきちらし、振廻す頭の數々、角目立つとは是なるべし。地獄の果でもない智恵ふるふ、社長戸頭と思しき鬼、しかつべらしく正中に居並び、扨々毎日町々のいかいやつかい、昔と違ひ地獄極樂ともに近年の大不景氣、日にまし死んで來る人はふえる、そう〱餓鬼道計りへも遣られねば、日々の喰潰し、段々米は貴つて來る、粥喰はしてもつゞかれぬに、娑婆で欠の序ながら申した念佛を恩に著せ、百味の飲食かはかしをり、うぬらが夫妻相對の内證事を大そうらしく、一蓮たく生と契りました、かゝアが跡から成佛いたし、格別尻が大きいから、出來合の蓮臺ではほうがへしも成りませぬ、蓮臺をひろげるとも、お臀の方を削るとも、お指圖なされて下さりませと願ふやら、菩薩達の箔の置替へ、天人衆を鈎下げる道具立の大物入り。扨又地獄の責道具も、請負方で高ばるゆゑ、近年御勝手不如意の只中、閻魔樣の無分別、捨置いては三千世界が暗闇になる事ぢやと、十王樣のとちめん棒、ふつてわいた地獄の騒動、毎日毎夜尋ねてもまだにお行方しれざること、旁いかゞ思はるゝと、小首かたむけ問掛かれば、又跡の月頃田舍から山出しと見えて、荷持瘤の跡しやちこばつた黑鬼の長助、大勢の中遠慮もなく、それ樣達アどう思うておんじやり申す。閻魔樣の亡命とは、チヤてんこちもない肝サアがでんぐりかへるにヨ。大方年内の借金につまり申し

鉄門屋

轂撃ち人肩摩り、弘誓の船宿川岸に招けば、紫雲の逵肩輿通りに遮り、五々の菩薩のめりやすは、楓紅露友がおもむきをうつし、呵責の鬼の催促は、日なしの親方火の車をめぐらし、蓮花の大屋店賃を債れば、脱衣の老婆勸化をせつく。實にや現在を見て過去未來を知り、明樽を見て澤菴漬を思ふ、油斷せぬ世の中なれば、三途川の遠干潟に數千丁の土手を築出し、白波變じて平地となれば、國に懸出しをするがごとく、後々末代に至るまで、其益すくな芥子味噌、鼻の穴までぬけめなき鐵門屋が仕出し料理、しゆんかんの筍には石女に燈心をあてがひ、硯蓋の蓮根には極樂のねだをはづす。死手の薯蕷三途の川鱒、八寒地獄の煮凍に、賽の河原の地藏燒、好み次第飲みしだい、夜の内からの人群集、是ぞ此地の名物と、詞の鹽に錢出して、辛い浮世に甘き族も、暮を限りに立歸へれば、跡は人聲も波の音のみして、更行く夜半のそよ〳〵風に、草木もおのづから居眠をそふる星の光、かすかなる闇路はるかに聲立てて、迷ひ子の閻魔樣ア〳〵と、鉦太鼓の音哀れげに、小提灯の明りを賴み、うそ物淋しき三途川の邊り、西を東、南を北と立別れ、尋ねつかれて追々に、とある結縷原を日印に、赤鬼黑鬼斑鬼、棕色正官綠碁盤島、五色八色さま〴〵の貌形、一角兩角一眼二眼、午頭馬頭あばう羅刹なんど、異類異形の獄卒どもも一つ所へ寄集まり、是程にさがしても閻魔王のお行方しれず、地獄極樂創りて、終どない旦

根無草 後編 一之巻

僞りのなき世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし

されば卵の方と娼妓に實なきのみならず、佛法に方便あれば軍法に計策あり、浮世に追從輕薄あれば、參會に座なりおはむきあり、虛言あればてれんあり、僞りあれば手くだあり、だますといひこんたんといひ、文なすといひ懸けるといふ、手爾於葉の違ひはあれど、つまる所は引きくるめて譃で丸めた世の中に、只僞りならぬものとては、產れた者の死ぬることにて、北州の千年蜉蝣の夕、長き短き限りあれども、貴きも賤しきも、賢きも愚なるも、猫も飯匙もおしなべて、此道をもるゝことなし。されども人情の淺はかなる、門松は冥途の旅の一里塚とも氣はつかで、無上に新春の御慶と壽き、懸棘鬣魚も魚の死骸と悟らねば、めつたに目出度きものとのみ覺え、熨斗鮑を顚倒ばしのと讀まれ、四の字をきらへば五の字にもごねるといへば油斷ならず。いざや其死んで行く先々を尋ぬるに、釋迦の工夫の大狂言、切落しから落の來る、萬代不易の當り劇場。地獄極樂數多ある中に、六道の街となんいへるは、繁花いはん方もなく、車

少なからんと、高慢の鼻擂槌のごとく、天狗出立の味噌盡しと、ホヽ敬白。

明和五年子の顏見せ、柹の衣に兜巾篠懸、風來山人切幕より暫と聲掛けて、世上の作者の鼻をひしぐ。

自序

味噌を上げるとは、自慢といへる東都の俗言なり。謹しんでその言の意を考ふるに、口豆がかうじ〳〵て話の鹽にいひ出せるより起れり。されば知るも知らぬも此味噌を漏るゝことなし。唐の親父は、天德を予に生せりと理窟臭い玉味噌を上ぐれば、天竺の謊つきは、唯我獨尊と頭がちの腦味噌を上げ、汨羅に沈みし偏屈者が、身の皓々たるといふより白味噌に思ひ付けば、引込思案の世間知らずが、鄕里の小人に腰を折るまじといへるは、これ五斗味噌の始なるべし。予嘗て根無草を著す。鹽加減の薄味噌なるも、當世の口に叶ひ、隣の糝汰馥しからんと、評判四方に隱れなく、遠近より尋ね來り、これを續ぐこと三千部に餘れりとて、書肆の歡び斜ならず。爰ぞ駄味噌の上げどころと、又筆を採りて後編を著し、株を守りて兎を獲へば、よき吸物の献立ならんと、眞赤な赤味噌に、神儒佛のざく〳〵汁、敎のはしくれにもならんかと、いらざる世話を燒味噌に、微意あることを記せども、牛の糞やら胡麻味噌やら、そのわかちなき人には、味噌を敷きたる灸のごとく、應へること

根無草後編序

風來山人、登萬國之東側觀娑婆大劇場、有小舞臺之志。於是以紅毛千里鏡觀冥途樂屋、仰天堂、俯地獄、啖抹香於閻魔、被犢鼻于地藏、倒舍利弗智嚢、振富樓那辯舌、三摩佛面、始知黄金膚。嘆曰、地獄天堂金次第矣。退著一書、寓言八重桐。聞柏車薪水御無常風、織爲此編、以傳諸借本屋。二子追善莫大焉。此編也掛一枚看板、而行於三箇津矣。

明和戊子秋、痳惚先生陳奮翰撰。

爰に爪とらず髪ゆはず、朽葉衣に世をのがれたる人あり、自ら天竺浪人と稱す。此人横ぐはへに草をかんで、其毒氣一角となる、其長さ三寸ばかり、其角額にあらず頭にあらず、常は脣に隱れて見えずといへども、今此根南志草を味ふにおよんで、其角長きこと三丈あまり、彼を破り是をつんざく。抑藥や毒にあらずしてまた何ぞ。

扇放さず山に住人跋

し上げ、兎なりとも角なりとも、皆々一所なるべしと、與三八船頭諸共に詞を盡して留むれば、明けていはれぬ胸の内、いたはしなみだしきなみの、そこよ爰よと大船の、思ひ頼んで求れど、姿も水のつれなくも、いづこに流れ夜の雨の、ふりかゝりにし憂事な、神に祈れどせんすべの、渚におりて玉梓の、道をたどりて若草の、妻にかくぞと告げければ、消ゆるばかりの露の身は、置き所さへしら波の、跡なき人を戀したふ。されば古歌にも、

泖潭に偃したる公をけふ〳〵と來んと待つらん妻がかなしも

と詠ぜしも、我身の上とかきくどく、歎は濱の眞砂にて、かきつくされぬ筆の海、聞く人袖をぞしぼりけり。

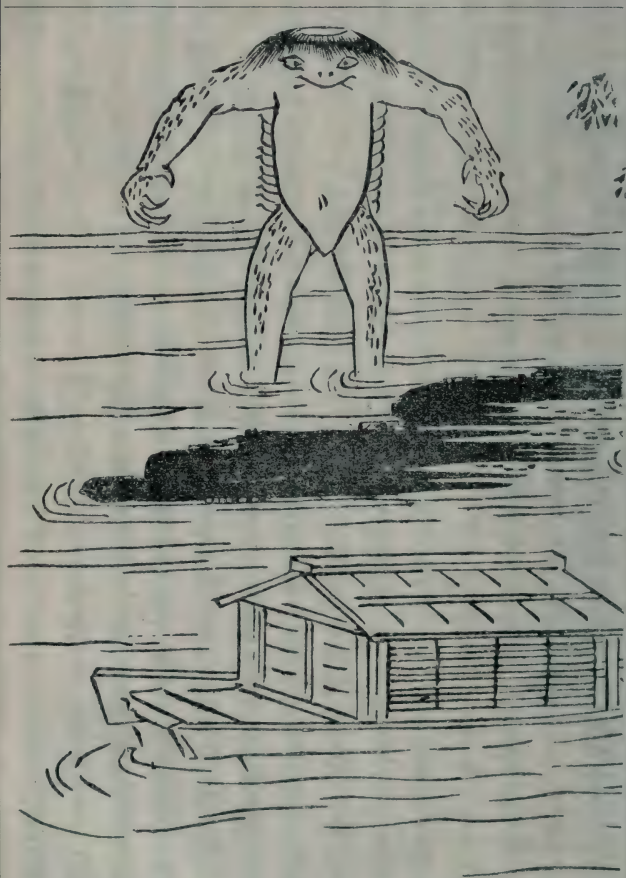
どの、身持大事に酒過さず、世上の評判落すまいと、ひたすら藝を修行して、親にも伯父にもまさりしと、いはるゝ程になり給ふが、草葉の陰の思ひ出と、いと念頃に語るにぞ、二人もなみだにくれながら、菊之丞はとりすがり、親に別れて其後は、さま〴〵の御教訓、淺からず思ひしに、身にかはらんとの御詞、生々世々忘れはおかじ、去りながら御恩ある御身をころし、何とて我身をながらへん、是非此身を。イヤ我を。イヤ某と三人が、死を爭うてはてしなき、折から平九郎與三八船頭など、蜆なんどをとりもたせ、どや〳〵と立ち歸れば、三人あわてる其中に、彼男は影のごとく、きえて行衞は見えざりけり。菊之丞はいましばしといふもいはれぬ他人の中、水面を見やる折から、八重桐は覺悟をきはめ、やぐらの上よりざんぶりと水中に飛び入れば、ばつと立つたる水けぶり、かたみに殘るうたかたの、泡と消え行く玉の緒の、絕えてはかなくなりゆけば、船中俄にさわぎたち、八重桐入水と聲々に、いへどこたへもあらし吹く、なみのまに〳〵そこ爰と、さがせどさらに詮もなし。菊之丞は涙ながら、明けていはれぬ身の上の、生きては義理も立ちがたしと、ともに入水と覺悟の體。何の樣子も知らねども、此體に驚いて平九郎押留め、尤そこの催せし船遊とは云ひながら、八重桐が入水せしは畢竟怪俄の事といひ、我々とても此船中、一所にありし事なれば、こなた一人のとがにあらず、公へ申

跡とふ人なしとて、我を親の八重桐が名に改め、こなたをむかへて養子とし、兄弟と思へとある呉々の御詞。今我不肖の身ながらも、三ケ津の舞臺を踏むこと、親にもまさる大恩は、養親とも師匠とも、一かたならぬ情ぞや。今はのきはにも枕元に招ぎ寄せ、我身ばかりか菊次郎まで、名人の名を殘せば、死ぬる命は惜しからねど、心にかゝるは吉二が事、何とぞ其方我にかはり吉二を守り立て、二代目の菊之丞といはせてくれよと淚を流せし末期の詞、心こんにしみ渡り、命にかへても後見し、名を上げさせ申すべし、御氣遣あられなと、聞いてにつこと打笑ひ、此世を去らせ給ひしを、思ひ出すも泪ぞや。まだ幼少の路考殿、せわにせしは恩返し、父御に習ひし藝の祕傳も、五年以前に又傳授、次第に名高く、見物も路考々々と評判は、我身の名を上ぐるより悅ばしさは百そうばい、評判を取る度ごとに位牌に向ひくり言の、自慢も師匠の末期の詞、忘れ置かぬ我寸志。しかるに今日の入り分けにて、路考どのを死なせては、師匠への言わけなく、二ッには又瀬川の名字斷絶させては本意ならず。我は死すとも子もあれば、荻野の名字は絶えまじければ、五ッの歲より守立てられ、親にもまさる師の大恩、報ずるは今此時、必ず必ず妻子の事、見捨てずせわを賴み入る。心にかゝるは是ばかり、閻魔王へ行きたりとも、こなたの器量にくらぶれば、雪と墨繪の鷺をからす、云ひくろむるは舞臺の功。返すぐも路考

き飛びのかんとするを、兩手にて押ししづめ、必ずさわぎ給ふべからず、最前蜆取らんとて中洲まで行きけるが、醉つよくして堪へがたく、小舟に乘つて立ち歸り、お二人の閨の内いぶかしくは思ひしが、邪魔せんもいかゞなり、または樣子も聞かんものと、舟のあなたに身をひそめ、始終の樣子は聞きたるぞや。かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らざるさへ、命を惜む習なるに、お二人の死を爭ふとは、扨々やさしき事ながら、路考どの御事は、閻魔王戀ひしたひ給ふと聞けば、とてものがれぬ命なり。去りながら見ぬ戀とある事なれば、某を身がはりに立て、路考どのを助けてたべ。何故の身替と御不審は有るべきが、路考どのには能く御存じ、我荻野の系圖といふは、元祖荻野梅三郎より親八重桐に至るまで、代々名代の女形にて、三ケ津にて人に知られ、上方にては座元迄を勤めしゆゑ、隱なき家筋なり。然るに我父八重桐浮世をはやく去りける時、某はまだ三歲、母の懷にいだかれて、知るべの方へ身を忍びしに、五の歲母に別れ、たよる方なき孤にて、乞食非人ともなるべきを、路考どのの親菊之丞どの、我親とのしたしみありとて、不便を加へ我を養ひ、產の子も同前に、お乳やめのとゝかしづきて、漸う人となりし頃より、小歌三絃扇の手、身ぶり聲色さまぐ〵に、敎へ給ひて人となし、幸ひ我に子もなければ、家をも繼すべけれども、其方我家を繼ぐならば、荻野の名字たえはてば、先祖の

見る事もなりがたし。薄きえにしと思ふほど、胸の水のとけやらず、必ず〳〵死んだ跡にて一ぺんの御ゑかうも、君が口より請けるなら、未來の苦げんものがるべし。去りながら我死すとも、龍宮城にはさま〳〵の手だれあれば、かまへて水邊へ出で給ふべからずと、事こま〳〵と物がたり、又なみだにぞむせび入る。路考も袂をしぼりしが、御身の上の物語、始めて聞いて驚き入りたり。生をかふるとは云ひながら、ためしなき事にもあらず。唐土にては非情の梅さへ其精靈美人と成り、契をこめしと聞き傳ふ。日のもとにては安部の保名、狐と夫婦の契をなせば、何かはくるしかりそめながら、枕かはせし其人を、我身のかはりに死なせては、わらは情の道立たず、其上我は閻王のしたひ給ふと聞くからに、とてものがれぬ命なれば、是非々々我を連行きて、御命全うし給ふべしと、いひつゝ立つて舟ばたより、飛び入らんとする處を、彼男いだきとめ、お志は嬉しけれども、今御身を殺しては、流石いやしき畜生ゆゑ、情を仇にて報ぜしと、世の取沙汰をせられては、我身ばかりの恥ならず、國に殘せし親兄弟、一門までの恥辱といひ、其上玉の顔を、底の藻屑となさん事、見るに忍びぬことなれば、必ずはやまり給ふまじ。我さへ死なばことをさまる。いや主を殺しては、わらは情の道立たずと、互に命捨小舟、死を爭ふ折からに、やれ待ち給へと聲をかけ、立ち出づるは荻野八重桐なり。二人は驚

わけを語るべし。故有つて閻魔王御身を深く戀したひ、何とぞ冥途へつれ來れと、我々が地頭難陀龍王へ勅諚下り、龍宮にて色々評議有りける處を、某命に懸けて申し上げ、漸々と此役目を承り、何とぞ御身を連行かんと、忠義一圖の謀、乗捨てし船を盗み、かく侍の姿と變じ、神變を以て俳諧の句などを吟じ、近寄つて御身を引立て、水中へ飛び入らんと、兼ねてよりはかりしが、思はずも御身の器量に心まよひ、わりなき戀をいひ懸けしに、君が情の深緣、松に千年と藤浪の、思ひまどひし戀衣、互の帶の打ちとけし、其むつごとのわすられず、又の逢瀬と兼言の、兼ねて工みし我心も、きのふに替る飛鳥川、淵と瀬川の君ゆゑに、我身を捨つる覺悟なれば、是より我は龍宮へ歸るとも、菊之丞を取り得る事、中々力およばずと申し上げなば、龍神より罪せられんは案の內、昔も乙姫病氣の時、猿の生膽の御用に付き、水母に仰せ付けられしを、いはれぬ口をしやべりし故、龍神のいかりを請け、筋骨ぬかれてかたはとなり、恥を殘せしためしもあり。我は其上大勢の鱗どもの並居る中にて、廣言吐きしことなれば、何面目にながらへん、山林へも身をなげて、死ぬる覺悟と極めたり。君を助けてそれ故に、死ぬる我身は本望ながら、死ぬれば忽ち生をかへ、あさましき姿とならば、さぞやあいそも盡き給はん。其上また世の人は、死して未來と契れども、君は閻王の寵を請け、我は又はかなくも畜生道に落行かば、相

二人は起きあがりて、何かは知らず手水などせしさまいと心にくし。またもとの座に直りて酒酌みかはせし體、何となう始のほどよりは一人打ちとけてぞ見えける。月も漸うさしのぼり、船中は晝のごとく、川風そよと吹き渡りて、夏去り秋の來りたる心地、いと興あるさまなりけるに、彼男路考が顏をつれ〲と打守り、初は物がなしき體なりしが、猶たへかねし思ひの色外にあらはれ、泪をはら〱と流しければ、菊之丞すり寄りて、何とてかく物思はせ給ふ體のましますやと、いと念頃に尋ぬれども、彼男は猶さらにさしうつむき、とかうの詞も泪より外いらへなし。路考も心濟まざれば、扨はわらはが心いき御氣に染まぬ事もや有りけん、かく打ちとけし中に、何とてものを包み給ふやと、打ちうらみたる體なりければ、彼男泪をおしぬぐひ、かほどに深く御身の志を仇になして、いはぬもつらし武藏鐙、かゝる情の其上に、わらはが心の氣に染まぬかとの一言、胸にこたへて覺ゆれば、子細をあかし侍るなり、必ず〱驚き給ふべからず。我實は人間にてはあら波くゞり、水底を家と定めて住みなれし水虎といふものなりと、聞くより路考はあきれけるが、いかなる子細にてあるらんと、心をしづめ聞き居たれど、思はずぞつと寒けだち、すみ〲も見らるゝ心地なりけれども、漸くに胸押しづめ、心の内にとなへごとなどして、猶も樣子をぞ聞居たりける。彼男は貌押拭ひ、我かく人間の姿と成りて來りし

根奈志具佐　前編　五之巻

定めなき世と人ごとにいへども、世の定めなきよりは只定めなきは人の心にてぞ有りける。古人春宵一刻値千金とめつたに高ばれば、又浮世を三分五厘と捨賣にする男もあり。然ども春宵一刻に千金出して買ふたはけもなく、三分五厘に賣つて仕舞ふ出來合の浮世もなし。いかに口から地代の出ぬものなればとて、出る儘のいひたい事、つまる處は能きも惡きもいひなり次第の浮世にて、浮世の定めなきは人の心の定めなきなり。聖人も父母の國を尻引からげて去り給ふは、魯國廣しといへども、馬の合つた相手なきゆゑと見えたり。また程子に逢うて蓋をかたむけ、途中にてしびりの切れる程長咄しは、初對面から心の合うたるが故なり。心合はざれば親子兄弟も仇敵のごとく、心が合へば四海みな兄分ともなり若衆ともなるとは、酸いも甘いも喰うて見たる詞なり。されば今評判隨一の路考なれば、誰か一人望まざるものなからんや。皆能い器量とゆひ綿の、紋を見てさへ心動く者多し。されども獨も手に入れる者なきに、いかなれば彼男、俄の出會にてかゝるさまに手に入れしは、誠に此道の氏神ともいふべし。程なく

なんどもつれず、我一人小舟に棹さし、此風景を樂とせり。しかるにけふ思はずも君が姿を垣間見しより、思ひははれぬ天雲の、ゆくら〳〵と釣舟の、浪にたゞよふ梶枕、一夜の情有磯海の、深き心を明し合はゞ、此世の願足りなんとて、路考が手を取りよりそへば、さすが上なき粋ながら、向ふよりは思ふ事のいとふかく、我もまた此人ならではと思ふ心のおもはゆく、詞はなくて銚子取りつゝ盃をさし寄すれば、彼の男丁と請けてつゝと干して路考にさす。呑んではさしさしてはのみ、合もおさへも二人なれば、數々めぐり逢ふことも、結ぶの神の引合せ、夜もはや五つむつごとの、雲となり龍とならんと月夜烏を心のせいし、互のちぎり淺からず、こけるともなく寢るともなく、互の帶の打ちとけし、二ッ枕のさゞめ言、いかなる夢を見しかいざしらず。

竿をさしのべて餘念もなき體なり。扨は只今の脇は此人にこそ有りけんと思へば、心ばへ奥床しく、船ばたより打ちながむれば、彼男もふりあふのきしを能く見れば、年の頃二十四五計りにして色白く淸らなるが、路考を見てにつと笑みし面ざしに、包むにあまる戀衣、胸に思ひの十寸鏡、正目には見もやらず、水に移れる俤を、やゝ見とれたる其風情、さすが岩木にあらざれば、我思ふ人の捨てがたく、やゝ打ちながめ居たりしが、互に云ひ出づる詞もなく、折しも風のそよと吹きければ、彼男ふりあふむきて、

身は風とならばや君が夏衣

と吟じければ、菊之丞取あへず、

しばし扇の骨を垣間見

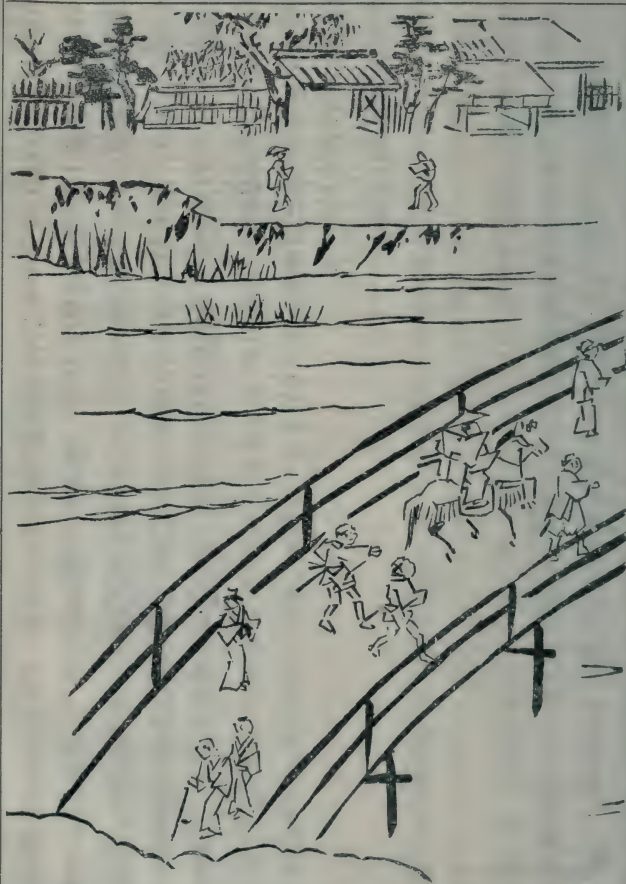
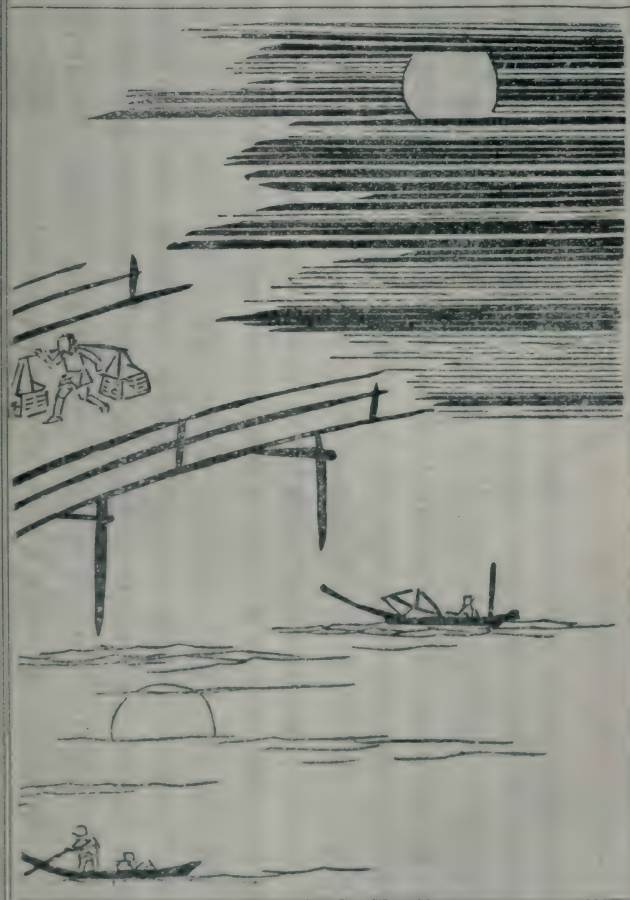
是より少しほころびて、彼男舟さし寄せ、菊之丞が舟につなぎ捨てて打のりつゝ、日の暮れてより越なう涼しくなりたりなんどとよそ事にいひものすれば、菊之丞は手づから銚子盃なんどたづさへ來り、先程ふつゝかなる口ずさみに、やんごとなき御脇賜はりしより、只人ならず見參らせたり。一樹の陰一河の流も一かたならぬえにしとなん聞き侍りたり、何國の人にてましますぞや、御名ゆかしと尋ぬれば、我は濱町邊に住めるものなり、夏の間は暑をさけんため人

かへて、軒より出でて軒に入るともいふべき風情、道行く人は只蟻なんどの行かふが如く見え渡れば、さながら仙境に入りたる心地なんして、覺えずも舷をたゝき、いとしめやかに諷ひたるに、舟屋かたの塵もちり、空行く雲もたゞよひぬともいふなる。人々は興に乘じて香包取出だして一炷くゆらせ、いとしづかにたのしみけるが、いざや中洲の邊に行きて蜆とらんと、皆皆小舟に乘り移り、菊之丞曰く、我は案じ掛けし發句あれば跡より行かんとて、一人舟にぞ殘り居たりける。頃しも水無月の中の五日、日は西山にかたむき、月代東にさし出でて、水の面漣満立ちていと涼しく、頃日の暑さも忘るゝばかり、別世界に出でたる思ひをなしければ、菊之丞硯取寄せてかく、

浪の日を染直したり夏の月

となん書きしるして、黄昏の氣色能くも云ひかなへたりと獨笑をふくみ、吟じ返しける折から、何ちともなく、

雲の峯から鐘も入相

とほの聞えければ、菊之丞は不思議の思ひをなし、何人かはかゝるしをらしきわきをなんせしと、あたりを見廻せば、一葉の舟に梶取もなく、若き侍の只一人、笠ふかぐ〳〵と打ちかつぎ、釣

ぶりあれば聲色あり。めりやす舟のゆう〳〵たる、さわぎ舟の拍子に乘つて、船頭もさつさおせおせと艫をはやめ、祇園ばやしの鉦太鼓、どらねう鉢のいたづらさわぎ、葛西舟の惡くさきまで、入り亂れたる舟いかだ。誠にかゝる繁榮は、江戸の外に又有るべきにもあらず。去る程に菊之丞が仕出し舟、荻野八重桐鎌倉平九郎中村與三八なんどは、藝はもとより珍らしからず、さわぎも又うるさし。役者の舟遊に三弦淨るりを翫ぶは、學者の書を講じ、出家の經を讀み、米つきの杵をかつぎ、大工の手斧を腰にさして、花見遊興に出づるがごとくなればとて、いと靜に酒酌みかはし、人のさわぎを見て歩行くは、月夜に挑灯のいらぬと同じ道理にて、見らるゝ者も恩に著せず、見る者は心遣ひもなく、さりとは又能き慰なり。一日あそこゝと漕廻りけるが、いざやさわがしき所を離れて遊ばんとて、船を三股てふ處へこぎ寄せて、四方の氣色を見渡せば、南は蒼海漫々として雲と海との色もさやかには見えわかず、行きかふ帆は蝶の飛びかふがごとく、安房相摸の海にそうて出でたるは、只一筆にて畫きたるに似たり。西は箱根大山なんども幽に見えわたり、けふは水無月其日なれば、かの望に消ぬれば其夜ふりけりと詠じたる富士の高根もいとしるく、近きあたりは人の家居のみ多くして、民の竈の夕煙たなびき渡り、さしもに廣き武藏野も、人の住みわたらぬ處もなく、草より出でて草に入る昔の月に引き

諸國の人家を空くして來るかと思はれ、雉菟の者も來る。さま〴〵の風俗色々の貌つき、押わけられぬ人群集は、ごみほこりの空に滿つるは、世界の雲も此處より生ずる心地ぞせらる。世の諺にも、朝より夕まで、兩國橋の上に鎗の三筋たゆる事なしといへるは常の事なんめり。夏の半より秋の初めまで、涼の盛なる時は、鎗は五筋も十筋も絶えやらぬ程の人通りなり。名にしおふ四條河原の涼なんどは、糸鬢にして僕にも連れべき程の賑ひにてぞ有りける。又かよるさう〴〵しき中にも戀といへるもののあればこそ、女太夫に聞きとれて、屋敷の中間門の限を忘れ、或はしをらしき後姿に人を押わけ向ふへ立ちまはれば、思ひの外なる貌つきにあきれ、先へ行きたる器量を襲むれば、跡から來る女連、己が事かと心得てにつと笑ふもをかし。筒の中から飛び出る玉屋が手ぎは、闇夜の錠を明くる鍵屋が趣向、ソリヤ花火といふ程こそあれ、流星其處に居て見物是に向ふの河岸から橋の上まで、人なだれを打つてどよめき、川中にも聲の聲々、田樂酒諸白酒汝陽が涎　李白か叶、劉伯倫は巾着の底をたゝき、猩々は燒石を吐き出す。茶舟ひらだ猪牙屋根舟屋形舟の數々、花を餝る吉野が風流、高尾には踊子の紅葉の袖をひるがへし、えびすの笑聲は商人の仲間舟、坊主のかこひものは大黑にての出合、酒の海に肴の築島せしは兵庫とこそは知られたり。琴あれば三弦あり、樂あれば囃子あり、拳あれば獅子あり、身

の馳走ぶり、燈籠賣は世帶の闇を照し、こはだの鮓は諸人の醉を催す。髪結床には紋を彩り、茶店には藥罐をかゞやかす。講釋師の黄色なる聲、玉子々々の白い聲、あめ賣が口の旨き、榧の痰切が横なまり、燈籠草店は珊瑚樹をならべ、王蜀黍は鮫をかざる。無縁寺の鐘は黄昏の耳に響き、淨觀坊が筆力はだうらく者の肝先にこたゆ。水馬は浪に嘶き、山猫は二階にひそむ。一文の後生心は甲に萬年の恩を戴き、淺草の代參りは足と名付けし錢のはたらき、釣竿を買ふ親仁は太公望が顏色を移し、一枚繪を見る娘は王昭君がおもむきに似たり。天を飛ぶ蝙蝠は蚊を取らん事を思ひ、地にたゝずむよたかは客をとめんことをはかる。水に船かく〳〵の自由あれば、陸に輿やらうの手まはしあり。僧あれば俗あり、男あれば女あり。屋敷侍の田舍めける、町ものの當世姿、長き櫛短き羽織、若殿の供はびいどろの金魚をたづさへ、奥方の附々は今織のきせる筒をさげ、もゝのすれる[illegible]は己が尻を引ずり渡り、歩行のいかつがましきは大小の長きに指されたるがごとし。流行醫者の人物らしき、俳諧師の風雅くさき、したゝるとてぴんとするものは色有の女妓と見え、ぴんとしてしたゝるきものは長局の女中と知らる。劍術者の身のひねり六尺の腰のすわり、座頭の鼻歌御用達のつぎ上下、浪人の破袴隱居の十德姿、役者ののらつき職人の小いそがしき、仕事師のはけの長き、百姓の鬢のそゝけし、芻蕘の者も行き

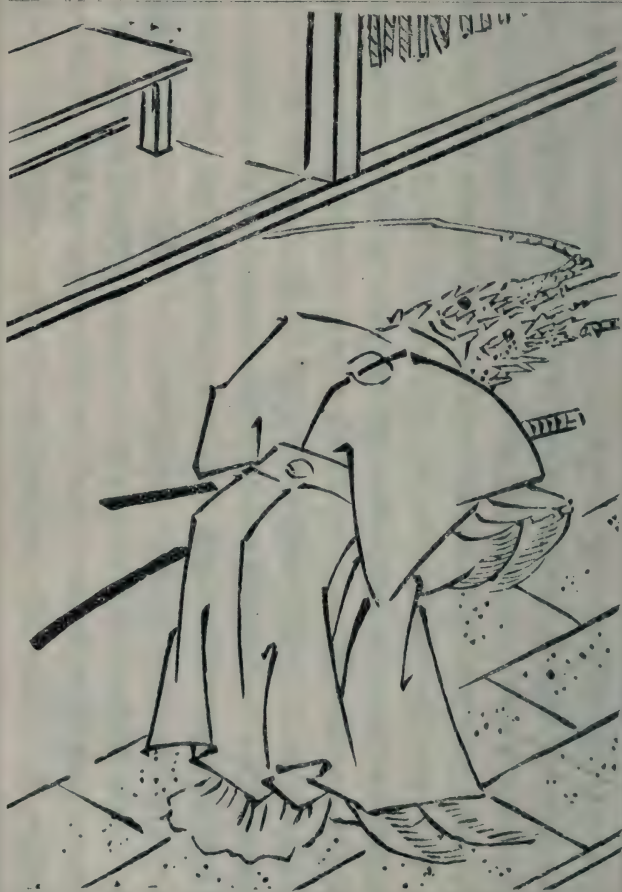
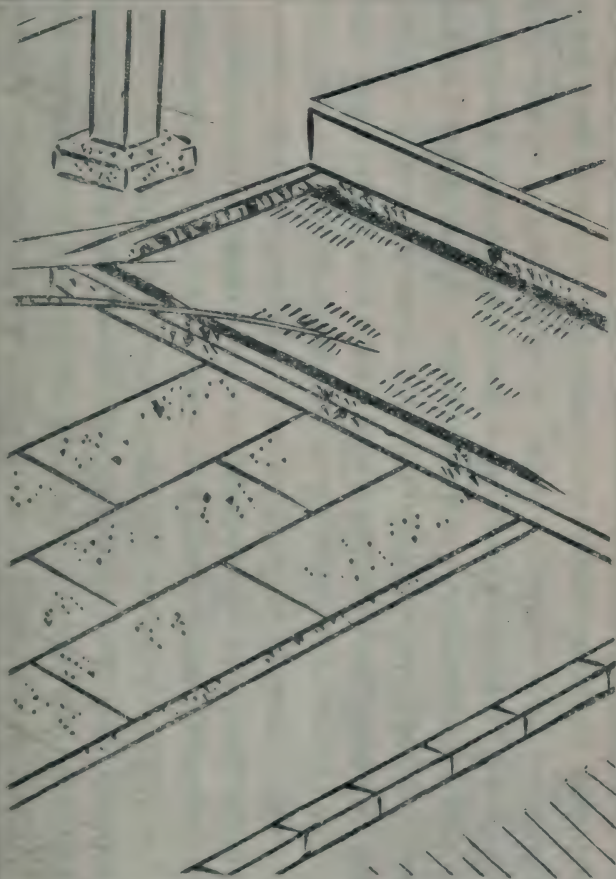
根奈志具佐　前編　四之卷

行く川の流はたえずしてしかももとの水にあらずと、鴨の長明が筆のすさみ、硯の海のふかきに殘るすみだ川の流淸らにして、武藏と下總のさかひなればとて、兩國橋の名も高く、いざこと問はむと詠じたる都鳥に引かへ、すれ違ふ舟の行方は秋の木の葉の散浮ぶがごとく、長橋の浪に伏すは龍の晝寢をするに似たり。かたへには輕業の太鼓雲に響けば、雷も臍をかゝへて迯去り、素麪の高盛は降つゝの手爾葉を移して小人島の不二山かと思ほゆ。長命丸の看板に親子連は袖を掩ひ、編笠提げた男には田舍侍懐をおさへてかた寄り、利口のはうかしは豆と德利を覆し、西瓜の立賣は行燈の朱を奪ふ事を憎む。虫の聲々は一荷の秋を荷ひ、ひやつこい〳〵は淸水流れぬ柳陰に立寄り、稽古じやうるりの乙はさんげ〳〵に打消され、五十嵐のぶん〳〵たるはかば燒の匂ひにおさる。浮繪を見るものは壺中の仙を思ひ、硝子細工にたかる群集は夏の氷柱と疑ふ。鉢植の木は水に蘇り、はりぬきの龜は風を以て魂とす。沫雪の鹽からく、幾世餅の甘たるく、かんばやしが赤前だれは、つめられた跡所斑に、若盛が二階座敷は好次第

は御聲高く、己下郎の分として推參至極と、御手をふり上げ打たんとし給ふ處を、大勢の鱗ども、左右の御手にすがり付き、御とゞめ申せしは、水虎が君への忠義なれば、惡くばし聞し召されそ、先々御座に御直りと、無理に引立てもとのごとく御座になほせば、龍王猶も怒り給ふを、水虎御前ににじり寄り、天窓の水もこぼるゝばかり涙をはら〳〵とながし、下郎の身をかへりみず無禮せしも寸志の忠義、事にのぞんで命を捨つるは臣たる者の職分なり。是に竝居る海坊主など、日頃過分の知行を賜はり、身には錦繡をまとひ網代の輿に打乘り、御菩提所の上人のとあふがれても、スハ君の御大事にのぞんでは、辯説を以て我身をかこふ不忠者、私は漸〳〵御門番を相勤め、塵より輕き足輕なれども、忠義においては高知の方におとるべからず。寺坂が昔を思召しあてられて、此度の御大事拙者に仰せ付けられかしと、思ひ込んで願ふにぞ、龍王面を和げ給ひ、彼が申分といひ力量といひ、用に立つべき奴なれば、此度の役目申し付けんと、我にくゝ思ひしかども、只今の忠義にめで、大事の役目申し付くる。天窓に水のつゞかんだけ、隨も頓より氣の付かざるにはあらねども、彼は若衆好の沙汰あれば、猫にかつをの番とやらで、心分ぬかるな。早急げと、仰をうけし水虎が面目、飛ぶがごとくに走り行く。

をかろんずるの甚しきといひ、父母より受得たる身體髪膚を、口腹の爲に亡さん事、五刑の類三千にして罪不孝より大なるはなしと云ふ、聖人の教にそむくこと、天命のがるゝ所なし。剰へ河豚なき時は、外の魚をふぐもどきと名付けて喰ふ事、歎かはしき事なり。古人の詞にも、牢を畫いて其中に坐せずとて、假にもけがれたる名は嫌ふことなり。非禮見ることなかれ、非禮聞くことなかれと、申すことを知らざる世上の文盲なるものは是非もなし、小文才有る男、或は人に毒だちなどを教ふる醫者なんどに好んで食ふものあり、是等は一向食をむさぼる犬猫のごとし。かく亂れたる風俗なれば、菊之丞も河豚は好なるべけれども、天の時を以て申さば、今水無月の半にて、河豚を喰ふ時ならざれば、此御評議御無用ならんと申し上ぐれば、龍王もせんかたなく、無用の長詮議に時うつるとも、所詮埒は明くまじければ、此上は此龍王一人自身立向ひ、雲を起し雨を降らし、菊之丞を引抓んで閻魔王へ奉らんと、波を蹴立てて立ち給ふ。一座の鱗前後をかこひ、鷄をさくに何ぞ牛の刀を用ひ給はん、今一御評議と留めても留まらず、前後左右を踏飛ばし、黑雲を起し出で給ふ處に、御門に扣へたるものつゝと出で、御腰をむづと抱く。ふりほどかんとし給へども、中々容易動き得ず、御所の五郎丸にてはよもあらじ、何者なるぞ爰をはなせとふりむき給へば、天窓に皿を戴きたる水虎にてぞ有りける。龍王

見れば、頬高く鼻小く、脊はひきく腹ふくれたるは、まがふ方なき乙姫に召使はるゝおはしたのお河豚なり。諸歴々の竝居る眞中おめる色なく立ち出で、龍王の前に畏まり、最前からの御評議を一々あれにて聞きやんすれば、大切のお使に皆ゝこまりなさんすよし、龍王ゝの御案もじが御笑止さに、姫ごぜの身で大膽ながら、わつちが思案を申し上げます。世の人毎にわつちをば槙木屋の娘か何ぞのやうに、毒ぢや〳〵と云ひふらされ、腹が立つて頬をふくらせば、おふくおふくと笑はれしが、災も三年と、今度の御用を承り、君が情に妾が百年の命を捨て、菊之丞が腹へ飛び入りて、連來らんはほんに〳〵心に覺えがありやすと、白い齒をむき出し、口をすぼめて申し上ぐれば、龍王は思案の體。傍にひかへたる棘鬣魚、鰭を正してしづ〳〵と立ち出で、かやうに申せば物知り貌に似たれども、僕儀は何によらず祝儀の席をはづさず、仁義禮智のはしくれも覺えしとて、儒者の數に加へらるれば、かゝる折から差扣へんも尸位素餐にて候へば、腹藏なく申し上げん。惣じてむかしは人間も質朴にありし故、毒といふものは喰はぬ事と心得、河豚を恐るゝ事蛇蝎のごとくなりしが、次第に人の心放蕩になりゆき、毒と知つて是を食す。人に君たる方是を憂ひ給ひて、河豚を喰うて死したる者は其家斷絶とまで律をたてて、上仁を好めども下義を好まず、ふぐや〳〵と大道を賣歩行、煮賣店にも公に出し置く事、上

る肴代に不足なれば、葬禮をかき入れ石塔を質に置きても思ふ樣にまはらざれば、もの云はぬ佛をだしに遣うて、愚癡無智の姥かゝをたらしこみ、かうすれば佛になると經文にもなきうそ八百をつきちらし、堂の寄進釣鐘のほうがなどいひ立て、衆生をたぶらかすゆゑにや、いつとなく化物仲間へ入れられ、姫路にをさかべ赤手ぬぐひと一口に謠はるゝ事、佛の敎に有るべき事にもあらざれども、御上にも能く御存じの上からは、隱すべきにもあらず。しかし他所の御用ならば、人間をたぶらかすは坊主共の得手ものなれば、早速御請申し上ぐべけれど、此度の御用には心苦しき事の侍るなり。其故は、涼船の往來する兩國永代の邊には、見せもの師共甚だ多く、唐鳥熊女 碁盤娘なども古く、孔雀にも入りがなければ、犬に輕わざをさせ、甘藷に笛まで吹かせる程の者共、何がな珍しき物見出ださんと、鵜の目鷹の目にてさがし求むれば、私などのやうなる異形の者あの邊へ貌出しせば、忽にからめとられ、憂目を見んは案の內なり。もとより出家の事なれば、死する命はいとはねども、大切の御用間違へん事本意なく覺ゆれば、餘人に仰せ付けらるべし。緣なき衆生は度しがたし、假寺を開くとも、此儀は御辭退申さんと、魚溜りへぞ引退く。當時諸人に敬はれ、智識と呼ばるゝ海坊主さへ御辭退申し上ぐるからは、我參らんといふもの一人もなき處に、奧の方に鈴の音して、いとなまめける姿にて立ち出づるを

ど船遊に出づるよし、微塵毛頭相違なしと、詞少に申し上ぐれば、龍王甚だ悅び給ひ、流石留守居役を勤むる程あつて、世間の穴を能く知つて、堺町とは氣が付いたり、神妙の働と、御褒美に預りて、髭喰ひそらしてうづくまる。龍王鰐鱶魚を近く召され、此度の役目汝等罷向ふべしと有りければ、兩人ハットひれ伏し申しけるは、凡人を取る事私どもにつゞくものなし、海中の儀にて候はゞいなみ申すべきにあらねども、船遊と承れば、兩國永代の邊なるべければ、私共力におよびかたし。虎の勢强しといへども、鼠を捕る事猫におとるの道理、譬へば最上の智者たりとも、つかひ處悪しき時は却りて其智の出でざるがごとし。是は餘人に仰せ付けられしかるべしと申し上ぐれば、龍王暫く御思案あり、然らば海坊主に申し付くべしとて、召し出されければ、油揚にて眞黑にふとりたるが、白帷子に紋呂の衣、五條の袈裟をかけ、珊瑚の珠數をいと殊勝げにつまぐり、罷り出でて申しけるは、私儀佛弟子となり、身には三衣を著し口に佛名を唱へて、厭離穢土、懇求淨土、此界の衆生どもは火宅にあらぬ水宅をのがれて、南無網の目にすくひとられ、往生の素懐をとげる樣にと導くこそ出家の役目なれ、かゝる事など勤むべき身にしもあらねども、近年は私に限らず、諸宗とも皆々風俗悪くなり、出家の身持に有るまじき榮耀榮花に暮らす故、中々定りの布施物にては、遊女狂ひお花の元手、重箱で取り寄せ

いかりをなし、汝等評議は何として、ケ樣の役に立たず共を忍びには遣せしぞ。此方の入用は菊之丞が船遊の日限なるに、其事は聞かずして、役にも立たぬ事どもを見て歸りしとて、いかめしさうに申す段、言語道斷につくいやつ。是と云ふも家老用人共が、面々の身勝手計を考へて、下々の難儀はかへり見ず、鰮やすばしりの類を澤山してやらうと計心がけて、役儀をおろそかにするゆゑ、かゝる大事に魚らしきものもやらず、さゞえや蜆をやりし段、以ての外の不屆と、鱗をさか立て怒り給へば、其時鯨鰭をうごかし、仰御尤には候得共、遣すべきもの詮議致せど、他の者は水を離れては働くこと相ならねば、水を出でて息の長きものを選み出せし處に、御用に立たざりし段不屆千萬、急度申し渡すべし。今一人忍びに入りしは、兼て上にも御存じの龍蝦なり、年罷寄つたれども、酒はそこぬけ、ぴんしやんとはねる所が當世のひんぬきなりとて、留守居役相勤むれば、元日より人間にまじはり、諸寄合無盡會吉原堺町岡場所を初め、兎角向ふへ廻りたがり、年の暮の淺草市まで年中人にすれるが役目なれば、定めて聞屆け參らんと、申し上ぐる折から、龍蝦只今罷り歸り候と案內させ、例のごとく眞赤になり、腰をかゞめて立ち出づれば、龍王御覽じ、樣子いかにと尋ね給へば、さん候、私儀は堺町からふき屋町、樂屋新道よし町邊へ入込み、能々樣子承り候處、來る十五日、菊之丞を始として荻野八重桐なん

めと掴合ひ、組んずこけつの人くんじゆ、格子はめり〳〵皿鉢はぐわら〳〵、手桶の輪がきれて水が飛べば、疊からは黒煙、腕に彫物した男ども、大はだぬきに成つてのさわぎ、聞いた處が姦夫出入、初は今も切るか挨くかと見る内に、イヤ親分ぢやの割を入れるのと、兎や角と云ふ内に、酒五升とけんどん十人前と、下らぬ文言な誤證文一通で、討果すほどの出入がついぐにやくとむづ折して、我等をかつぎし男めも近付かして仲間へ入り、茶碗でしたゝか引掛けて、千鳥足にて歸りがけ、馴染の内へ立寄れば、死んだ息子の七回忌とて、天窓に輪の入つた道心がきやり聲をはりあげて、鉦たゝいて百萬遍、世帯佛法腹念佛、豆腐のぐつ煮に干大根のはり〳〵で濟ませば、蜆はいらぬとはねられて、かつぎし男腹を立て、あたけたいないま〳〵しいと、歸りに川へさらへ込みしを幸と、干汐につれて息を切つて歸りしと、語りもはてぬ處へ、背に角をおうて一文字に成つて來るものは拳螺にてぞありける。是も忍びの役人なれば、龍王見給ひ、人間界の樣子いかに〳〵とせめ給ふ。其時さゞえにじり出でて申しけるは、私は小田原町から通り筋を一ぺん廻りしが、先づ珍しきは石町の角に、朝鮮人行列附の看板をおびたゞしくかざりたて、賣子大勢にて賣りあるき、又珍說は旦那のねつた膏藥賣が、奥州の相馬にて主の敵を討ちしとの取沙汰より外、さして替りたる事も承らずと申し上ぐれば、龍王大に

に、かゝる小さき暮にて、娘に三絃彈かすとは、扨々人間と云ふものはおごりしものかなと思ふ内に、きびらの帷子著て、小紋羽織を手に提げた男來りて、お娘はいよ〳〵やらしやるつもりに相談はきまりましたか、一昨日もいふ通り、向は國家の御大名、お妾は器量えらみ、中ぜいで鼻筋の通つた豐後ぶしを語るのがあらばとの事、爰なお娘をすりみがきしたら、いけさうなものかと思ふ。殊に先樣御好の豐後節はなるなり、彌やらしやるなら、文字に賴んで弟子分にして貰ひ濟ませる樣にしませう。支度金は八拾兩、世話ちんを二わり引いても、八々六拾四兩の手取、もし若殿でも產んで見やしやれ、こなた衆は國取の祖父ぢ祖母さまなれは、十人扶持や二十人ふちは、棚に置いた物取るよりはやすい事、いよ〳〵やらしやる合點かといへば、夫婦はよろこび、イヤモ御深切なおせわの段々、どれかゝ小半買うて來ようと、佛壇の下戶棚からはした錢とり出し、かんなべさげて足も空、どぶ板をふみぬきながら、裾をまくつて走り行く。かつぎし男は付込んで、御祝に蜆買はしやれと云ふを聞くより、もし我等も賣られてはなるまいと大勢を押退けて、籠の底へかゞんでちいさうなつて聞き居れば、女房は盃を洗ひながら、けふの祝は蜆では濟まされぬ、かばやきでも買うとの事故、かつぎし男ふしやう〴〵にふりかたげ、又二三丁程行きて、四辻を左へまがれば、今度はそこら大さわぎ、大どろぼう

所詮手下の者共の内にて才覺ある者どもを忍びに遣し置きたれば、定めて樣子相知れなんと、申す詞も終らぬ處へ、御注進と呼ばはり〳〵、眞黑になりてころ〳〵とかけ出づるは、本所邊に住居する業平蜆にてぞありける。龍王は御聲高く、彼等ごとき下郎たりとも、甚だ急ぎの事なれは、直に聞くべきとの御諚。蜆恐れ入つて口を明け、私儀人界へ忍びの役目を承り、籠の中へはかり込まれ人の肩にかつがれ、方々と歷廻り大抵人界の樣子承りて參りたり。先私罷り通りし所は、處々の新道裏店が第一なれば、大名小路は勿論通り筋などの樣子は存ぜず、先始め參りし所にて、何かは知らず私をかつぎし男、一升十五文と申せば、歲の頃三十計の女房立ち出で、五文にまけろと云ふ、かつぎし男腹を立て、とつぴようずもない、盜物では有るまいし、半分殼でもさうは賣らないと、惡たいついて立ち出づれば、跡にて女房、さしも小美しい貌しながら、えいかと思うていけすかないこてれつめ、そんな惡たいはうぬがかゝにつけろと、はり込み聲のほの聞えても、かつぎし男は聞かぬ貌して、蜆や〳〵と賣りて通れば、とある格子作りの內にかなきつた聲で、はなたれ娘が三絃をぞ彈居たる。此龍宮界にては、琴三絃などは能い衆ばかりの翫かと思ひし

根奈志具佐　前編　三之巻

去る程に龍宮城には、先達て閻魔大王の勅命を蒙りければ、急ぎ菊之丞を召捕るべき評定あるべしと、諸の鱗ども列を正して相詰めければ、龍王仰出さるゝは、我閻魔王の幕下に屬し、水中界の主となり、多くの鱗を養ふ事、皆大王の御恩なれば、かゝる時節に忠義を盡さずんば、いつの世にかは御恩を報じ奉らんや。しかはあれども世界を隔てての事なれば、容易く取り得る事かたかるべし。若此度の御用を仕損じなば、其祟は三途川の川ざらへか、極樂の御修覆など仰付けられては、近年は押なべて金魚銀魚の手はまはらず、はうぼうより緋鯉にせつかれ、世間のしびも白魚の、ひしことつまりし時節なれば、甚だ難儀たるべし。若逆鱗つよき時は、我我此水中を離れていかなる所へか追ひ立てられん。もし三十三天の内などへ左遷などとある時は、道中にて皆々枯魚となるべければ、假初ならぬ一大事、急ぎ菊之丞を召捕るべき思案あるべしとの仰。一の上座に坐し居たる鯨、ゆう／＼と立出で申しけるは、仰の通り御上の御大事此時なり。私儀は身不肖ながら、家がらたるを以て代々大老職相勤め、是に並居る鰐鱶魚な

ごとく、草は畫けるに似たり。道行く人は汗となりて消えなんかと苦しみ、犬の舌は解けて落ちんかと疑ふ、人々暑をさけん事をのみはかりけり。菊之丞も我家にありて暑をなん苦み居ける處に、同じ若女形荻野八重桐來りけるが、同座の勤めといひ、共に戴く紫ばうしのゆかりの色も有る中なれば、心置くべきにしもあらず、そこらを三保の松ならで、羽衣をぬいで掛ざをの、掛かまひなく打解ければ、菊之丞の妻は馳走ぶりと、後から扇の風も既にそよ〳〵、深川にて人になれし者なれば、葛水もつめたい所へ心を付けてのもてなし。一ッ二ッの物語も、半は暑の噂なるが、八重桐が云ひけるは、わけて今年は暑もつよき故、涼船の多き事是までになき賑ひなり、幸ひ此砌は芝居も休の事なれば、一日出なんはいかにと云ふ。菊之丞曰く、我も兼ねて其望ありながら、事繁きにまぎれて打過ぎぬれば、いざや一日出て遊ばんとの催し。然らば連をも誘ふべし、しかしあまり大勢もさう〳〵しければとて、夫より來る十五日と定めて、鎌倉平九郎中村與三八なんどへ使していひものしけるに、何れもしかるべしとの返事なれば、いよ〳〵十五日早朝よりときはめ、船中の事などつど〳〵に約しつゝ、八重桐は我家にぞ歸りける。

といへるりなり。實に其業を專一に勤むるものは、皆々かくのごとくありたきものなり。然らば敵役は常に人をいじめ、或は芝居でするごとき惡工をして、日に二三度も本に殺されても見るやと理窟いふべけれども、是又左にあらず、惡しき事は似せる事易し、譬芝居でなくとも、惡人になるは何のざうさもなき事なり。只善に移る事は勤めずんばなりがたし。殊に男にて女と見せる事は、至つて心を用ひずんば上手には成りがたし。小傳次がたしなみ誠に感ずべき事なんめり。近年は若女形にて、舞臺へ出でたる處はやさしくも見ゆれども、常の身持は、けふもあさつても鮫鞘の大脇指をぼつこみ、うでまくりして茶碗で濤左をもぢりちらし、無上にたれをかきさがしまはした跡でのはりこみ惡たい、舞臺で見た時の仕打とはお月ほとひし餅、下駄と人魂程違うたるよし。縱一應評判よくとも、名人の名を得る事には至りがたかるべし。かかる中にも蓮葉の濁にしまぬ玉の姿、瀨川菊之丞となんいへる若女形あり、此人先菊之丞が實生にはあらかねの、土の中より掘出したる分根なるが、二葉の時よりも生立野菊の類にあらずと、評判は高作り、器量は外に竝夏菊ともて囃され、今三ケ津に此歲にして此藝なしとの是沙汰、末頼もしき若者にてぞ有りける。頃しも水無月の十日あまり、わけて今年は去りし頃霖雨の降りつゞきて、俄に照りあがりたる跡なれば、暑はいつよりも強く、風見は作り付けたるが

らず、そろ〳〵あの世へせり出し道具、蓮の臺へ早替りしてより、堺町ふきや町木挽町、三方の芝居に餝海老なく、狂言の骨もぬけたか屋の高助を始めとして、名人の名をむなしく印の石にとゞめしより、又名人と呼ばるゝ人の希なるは何ごとぞや。されば諸藝押なべて昔の人よりおとれるは、近世人の心、懦弱にして小利口にして大馬鹿なる故なり。昔の役者は師に隨つて隨分其業を傳へ、晝夜心を用ひたるゆゑ名を揚げしもの多し。近年の役者は、師匠と云ふも名字を貰ふ計りにて、山上參りの權大僧都の官にのぼる樣に心得て、氣と給金計りが高く成りて、修行すべき藝は學ばず、兎角女に思ひ付かるゝを第一とし、我より目上なるをも非に見なし、味噌を上ぐればよいことゝ心得て、作者の詞をも用ひず、縱へ一花の思ひ付きにて評判を取るといへども、其おとろへの早きこと、鐵炮の玉に帆を掛けたるがごとし。是皆心を用ふる事疎きが故なり。今は昔澤村小傳次といへる若女形、河内の藤井寺の開帳へ參りて、小山といふ處に宿しけるが、小傳次曰く、一口竹輿にゆられて血暈がおこりしといへるを、連にて有りける竹中半三郎、小松才三郎、尾上源太郎など笑つて曰く、いかに女形なればとて、男に血暈とはと腹をかゝへけるを、其座に西鶴も居合せけるが、大に感じて曰く、稚より形も詞も女のごとくならんと口頃にたしなみしより、假初の頭痛も血暈と覺えしは、さて〳〵しをらしき事なり

松魚はうまきものなればなりといへるに、同じ松魚も喰うてこそ味あるべけれ、我松魚になりて人に喰はれては、我はうまくあるまじ。狂言も役者にさせて見るはよし、自ら是をするとも面白くはあるまじきことなれども、樂はまた其中に有馬筆、人形まはしや狂言にて口を糊す、貴人の心の樂とする處のひれつなる事は、我心に問うて知るべし。曾子は飴を見て老を養はんことを思ひ、盜跖は是を見て錠をあけんことを思ふ。下戸は萩を見てぼた餅を思ひ、齒なしは淺漬を見て山葵卸を思ふも、皆人々の好く處へ情の移るが故なり。好こそ物の上手なりとて、親好は孝行の名を上げ、主好は忠臣の名を殘す。是等の好は積むことをいとはず、其餘の事は好なりとて、心をゆるす時は害をなすこと少からず。食は體を養ふ物にして、過ぐる時は命をそこなひ、酒は愁をはらふといへども、内損の愁は飮まぬ先の愁にまされり。火事がこはいとて、一日も火を焚かずしては逗留のならぬ浮世なれば、兎角得失はみな其用ふる處にありと知るべし。芝居も勸善懲惡の心にて見る時は、敎ともなり戒ともなれども、是に溺るゝ時は其害少からず。或はまた人の妻女の櫛笄に、役者の紋を付けて頭にいたゞくを、涎たらして見て居る亭主の鼻毛三千丈、たはけによつてかくのごとく長しと、李白に見せたら詩にも作りさうな親玉も世に多し。扨また役者も、昔は名人多かりしが、寄年の引道具には拍子木の相圖もい

尊の太夫元にて、火酢芹命など狂言興行ありけれども、金元なかりし故に、赭とて赤き土を手にぬり貌に塗りて勤められしかども、一向に入もなくて、太夫元の名代もつぶれける。又翰林葫蘆集などを考ふれば、古は神樂とも云ひしを、聖德太子神樂の神の字の眞中に墨打をして、秦河勝に鋸にて引割らせ、是を名付けて申樂といふ。其後の人申の字の首と尻尾とを打切つて、田樂と號して專ら行はれけり。其後は田の字の口をとりて、十樂などとも名付くべきを、永祿の頃出雲のお國といへる品者、江州の名古屋三左衞門となんいへるまめ男と夫婦となり、歌舞妓と名をかへ今樣の新狂言を出す。夫より千變萬化に移りかはり、江戶は江戶風、京は京風と分れ、物の名も所によりてかはるなり、浪華の蘆屋道滿が伊勢座から名古屋の繁昌、安藝の宮島備中の宮內、讃岐の金毘羅下總の銚子まで行き渡らぬ所もなく、三歲の小兒も團十郎といへばにらむことと心得、犬打童もぐにやつく事は富十郎なりと覺ゆ。されば太平の世の翫、人を和するの道にして、孟子にいはゆる世俗の樂たりともまた捨つべきにはあらず。しかはあれども、高貴の人自ら其わざを學び、烏帽子の緒を掛くる顏を紅白粉にて塗りよごし、政をも談ずべき口にてせりふなど吐出して、みづから樂とおぼゆるは片はらいたき事なり。或愚なる人、我死して先の生は松魚になり度しといへるを、傍の人聞いて、何故松魚になり度きやといへば、

に實がいり、程なく第三番目に至つて、天兒屋命は磤馭盧丸、本名伊弉諾尊の役、天鈿女命は傾城浮橋、本名伊弉冊尊、つもり〳〵し揚代三百兩の金の代に、天瓊矛を揚屋が方へとられしを、太玉命は大戸之道尊の役にて、兩人の瓊矛を詮議し給ふ檢使の役、此處にて檢使のつよさ、兩人の愁の所、諸見物は感に堪兼ね、イヨおらが鈿女のよ、イヨ兒屋樣太玉樣などと、棧敷も下も聲々に、暫鳴もしづまらず。此時天照太神聞し召して、下地は好なりたまられず、御手を以て磐戸を細目に開けて是を窺す。折よしと二人の尊立寄りて、磐戸を明けんと手をかけ給へば、太神はたてんとし給ふ。互にえいやと引く力、勝負は更に付かざりけり。時に向の切幕より暫く〳〵と掛聲あり、太神御聲うるはしく、今朕が岩戸をたてん、いやたてさせじと爭ふところに、暫くと留めて出でたは何者なるぞと宣ふ内、拍子木俄にくわた〳〵、大薩摩尊淨瑠璃をかたり給へば、切幕をさつと明け、柿のすはうに大太刀はき、市川流の貌のくまどり、鬼かイヽンニヤ神かムヽエイ手力雄尊だモサアと、せりふに味噌を八百萬程上げて、つか〳〵と立ち寄り、何の苦もなく岩戸を取つてつまみ碎き、天照太神を引き出し奉る。中臣神忌部神端出之繩を引渡す。日の神出でさせ給ひければ、昔のごとく明るくなり、人の面しろ〳〵と見えしより、芝居を見て面白やといふ事は、此時よりぞ始まりける。扨また同じ神代に彦火々出見

ヤ〳〵若太神怒り給ひて飛去り給はゞ、甚だ難澁なるべしと、評議さらに一決せざりし處に、近松氏の祖思兼神進み出でて宣ひけるは、中々外の事にて御機嫌は直り給ふまじ、太神常に狂言を好み給へば、岩戸の前にて狂言を初めなば、極めて岩戸を開かせ給ふべしと申しければ、皆々至極尤なり、是は慥に當りそうな趣向なりとて、扨役者をぞ撰まれける。先立役荒事角かつらにての一枚看板手力雄神、丹前所作事やつし色事師には天兒屋命、敵役には太玉命、わけて其頃名も高き、極々上々吉、女房方娘方おやま所作事引くるめて、若女形のてつぺん天鈿女命、其外居なり新下り、惣座中殘らず罷り出で、第四番目まで仕りて御目にかけまするとのはり紙、明日顏見せと聞きつたへ、諸見物山のごとく詰め懸くれば、芝居の内より茶屋の門、門、それ〴〵のひいきの定紋付けたる挑灯は星のごとく、天香山の五百箇眞坂樹を植ゑて氣色をかざり、常世の長鳴鳥を吸物にして呑み掛くれば、常闇の世も明けたる心地、神々はいさみをなし、思ひ〳〵の積物、天神組地神組と左右にわかち、花をかざりきらを盡しけるが、いつあくるともなく約束の刻限に成りければ、木戸口はどや〳〵もや〳〵錐を立つるの地もなく、誠に天地開闢以來かゝる大仕組はあるまいと、知るも知らぬも老いたるも若きも、我一との人群集、式三番も終りお定りの口上も相濟みければ、是より天浮橋瓊矛日記、一番目より段々狂言

扨また世間のつきあひ等は、麁服にても目に立たねば始末にはよけれども、或はいつ何日に御出合申すべしといふ事も、正眞の闇夜の鐵砲にてあてどもなく、物を洗うても火であぶるより外は干すべき手だてもあらざれば、士農工商の神々、業を勤る事もならず、中にも色里にては、いつを夜みせと時も知れねば、物日などといふ事もなく、花の時やら燈籠やらわけもなくなりゆき、客も初の程はしつぽりとして結句能いなどとて來るものも多かりしが、次第に世間かまびすしくなりければ、後には遊ぶ者もなく、太夫格子さんちやより、河岸女郎に至るまで、さしも多かりし馴染の客も、科戸の風の天の八重雲を吹きはなつことのごとく、繁木が本を燒鎌の敏鎌を以て打掃ふ事のごとく、ことゝふ者もあらざれば、忘八夫婦は頭痛八百、やりて若い者などを呼寄せ、コリヤマアどうしたらよからうと、四人額に皺をよせ、八の耳をふり立てて色々評議の詮もなく、口に諸々の啼はすれども、目に諸々の客を見ず、借の有る茶屋船宿は、拂ひ給へ淸め給へとせがむべき相手もなく、幇頭が貰うた紙花も、坎艮震巽の卦に當つたとの悔言。其外上下押なべて、勝手によいといふものは、只鼠と朝寐好の男より外にはなし。是ではたまるまいと、八百萬の神天の安の河邊に會ひて、色々評議ありけれども、さして尤らしき事もきこえず、或は石匠に入札させ、天窟屋を切り開かんといへば、イ

根南志久佐　前編　二之巻

抑狂言の濫觴を尋ぬるに、地神五代の始め天照太神、此日の本を治め給ふに、御弟素盞嗚尊、御性質甚だきやんにてましませば、何事も麻布にて、樣々だうらくをなし給ふ。太神是を愁ひ給ひて、あの通りの安本丹にては行末心もとなしとて、色々御異見ありけれども、久しいもんぢやソリヤないぴいなどとて請付け給はず、後にはいろ〳〵の悪あがき長じければ、太神慍りまして、天石窟に入りまして、磐戸を閉ぢて籠り給ふ。故に六合の内常闇にして、晝夜の相代をも知らず、初の程は行燈挑灯にても用を辨じけるが、何が家々にて晝夜不斷とぼす事なれば、俄に蠟燭油の切もの、次第に直段は高間が原、神の力にも自由にならぬは金銀なれば、中以下にては挑灯とぼすことなどもならざれば、馬士の神車引の神などはあられぬ所へ引かけて、神ンたゞきに打き合ひ、神抓に抓み合ひ、町々小路々々にて喧嘩のたゆる隙もなし。されども闇夜の盲打、誰相手と云ふ事も知れず、公へ持ち出しても、くらがりに牛つないだ樣にて、是非のわかちも付けがたければ、先世の中の明るく成るまでは、名主の神大屋の神へ御預との事なり。

をやすめ奉らんと、事もなげに勅答あれば、大王怡悦ましく〳〵て、然らば菊之丞が来る迄は、奥の殿に引籠り、天人どもに三味絃彈かせてなぐさまん。此砌に罪人ども見えたりとも、大抵輕きは追ひ返し、重きやつは先づ六道の辻の溜へ打込んで置くべし。また最前の坊主め、菊之丞に身を打ちし事、初は憎しと思ひしが、朕が心にくらぶれば、若い者の有りさうな事なれば、再び娑婆へ返すべし。しかし此後菊之丞買ふことは法度たるべし、辨藏松助菊次なんどを初として、其外湯島神明に至るまで、外の者は免許なるぞ」と勅諚ありて、御簾さつとおりければ、龍王は水府に歸り、皆々退出したりけり。

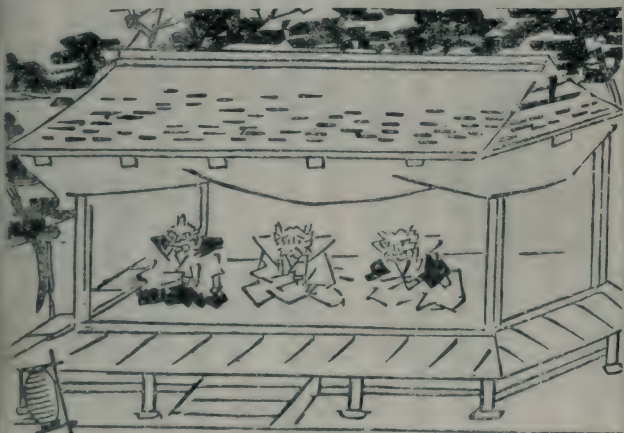
の地獄界、再び亂世となるならば、上閻王より下獄卒に至るまでの難儀なれば、軍者を御招きは御無用たるべし。私は人のかたに居て善惡を規すが役目なれば、人々心に思ふ事をも、明白に是を知れり。菊之丞を初として其外の役者ども、船遊に出づべききざし有る事、兼ねてより存じたり、此虚に乘つて謀り給はゞ、やはか御手に入らざらん哉と、聞くより大王悅び給ひ、それくつきやうの事なめり、水邊の事なれば、いそぎ水府へ使を立て、龍王を呼寄せよ、畏り候とて、數多の鬼の中より、足疾鬼とて、またゝく內に千里行きて千里戾る、地獄の三度仲間へ仰付けられければ、兎角する間もなく八大龍王の惣頭、難陀龍王參內と披露させ、衣冠正しき其よそほひ、頭に金色の龍をいたゞき、瑪瑙の冠瑠璃の纓、珊瑚虎珀の石の帶、玻璃の笏瑇瑁の履、異形異類の鱗ども、前後をかこみ參內あり。御階の本にひれ伏せば、大王はるかに御覽あり、珍しや龍王、只今召すこと餘の儀にあらず、此大王うそ恥しくも、心をくだく戀人は、南瞻部州日本の地に、瀨川菊之丞と云ふ美少年あり、是を我手に入れんため、さま〲と評議せしに、彼菊之丞近日船遊に出づるとの事ゆゑ、水中は汝が領分なれば、急ぎ召捕り來るべしとありければ、龍王は恐れ入り、勅諚の趣ゐさい畏り奉る、私支配の者どもには、鰐鱶魚を初として、水虎水獺海坊子なんど、人を取ること妙を得て候へば、此者共に申し付け、急に召捕り差上げて、宸襟

やすまずに自ら古方家或は儒醫などとは名乘れども、病は見えず藥は覺えず、濫に石膏芒消の類を用ひて殺すゆゑ、死して此土へ來るもの、格別に色も悪く痩せおとろへて、正眞の地獄から火を貰ひに來たと云ふやうな形になる事、是皆當世の醫者共、己が盲はかへりみず、仲景孫子邈張子和など同じやうに心得て、鸕鷀の眞似をする烏なれば、かあいや踏考も藥毒に中りて死したらば、花の姿も引かへて、火箸に目鼻と痩せおとろへば、呼寄せてから詮もなし。何とぞ無事に取寄せて、互ちん〳〵ちがひの手枕に、娑婆と冥途の寐物語、緣につるれば日の本の、若衆の肌を富樓那の辯、舍利弗が智惠目蓮が神通をかりてなりとも、片時もはやく呼寄せて、朕が思ひをはらさせよと、しを〳〵として宣へば、さしもの十王方便に盡き、もはや我々が智惠も中橋なれば、此上は修羅道へ使を立て、太公望孔明韓信張良孫子吳子武則義經正成道鬼が類の軍師どもを召され、御評議然るべしと申し上ぐれば、末座より、色至つて赤く眼の光鏡のごとく、口耳のきはまで切れて、首有つて形なきもの出づるを見れば、人の一生の事を見屆けて帳に記す横目役、見る目と云へる者なり。閻王の前にすゝみ出で、かた〴〵の御評議御尤には候得ども、是式の事に修羅道へ人を遣し、軍師どもを召されんことは、此界の恥辱といふべし。其上彼等が智謀計略にて、此方の智惠を見すかされなば、いかなる謀をなして、小夜嵐の騷動以後太平

めり、愛宕山の太郎坊、比良山の次郎坊などに申し付けなば、忽ち抓んで参らんこといとやすし。誰かある天狗どもを召寄せよと呼ばはり給へば、五官王しばしと押しとめ、いや〳〵此評議宜しかるまじ。情を知らぬ天狗ども、力にまかせ引抓んで、もし疵付けては悔んで返らず、それより疫神を遣さるゝが近道ならんと申さるれば、變生王かぶり打ちふり、イヤ〳〵疫病神といへども、のふさんころり山椒味噌と、手短に殺す事はなりがたし、大陽經から段々傳經をしてゐる内には、大王御待遠なるべければ、疫病神は御無用たるべし。一向それより近道は、今世上に澤山なる醫者どもに申し付くれば、一ぷくにてもやり付くる事、疫神などのおよぶべき所にあらず、此使は醫者共に申付けん、と申さるれば、皆尤とうなづき、先よく殺す醫者は誰々ならんと評定ありけるに、一向文盲なる醫者は、こはがつてめつたなる藥はもらず、何見せても六君子湯益氣湯の類、一服の掛目わづか五分か七分の藥にて、白湯に香煎も同前、つまる所は一ぷくで何分ヅツのわりを以て謝禮をせしめる計にて、毒にもならず藥にもならざれば、そろ〳〵干べりのするは格別、急に殺すことは成りがたし。小文才のある醫者は、人を殺すが商賣なれば、一ぷくにても驗あるべしと申し上ぐれば、閻王暫御思案あり、イヤ〳〵近年の醫者どもは、切つぎ普請の詩文章でも書きおぼえ、所まだらに傷寒論の會が一ぺん通り、濟む

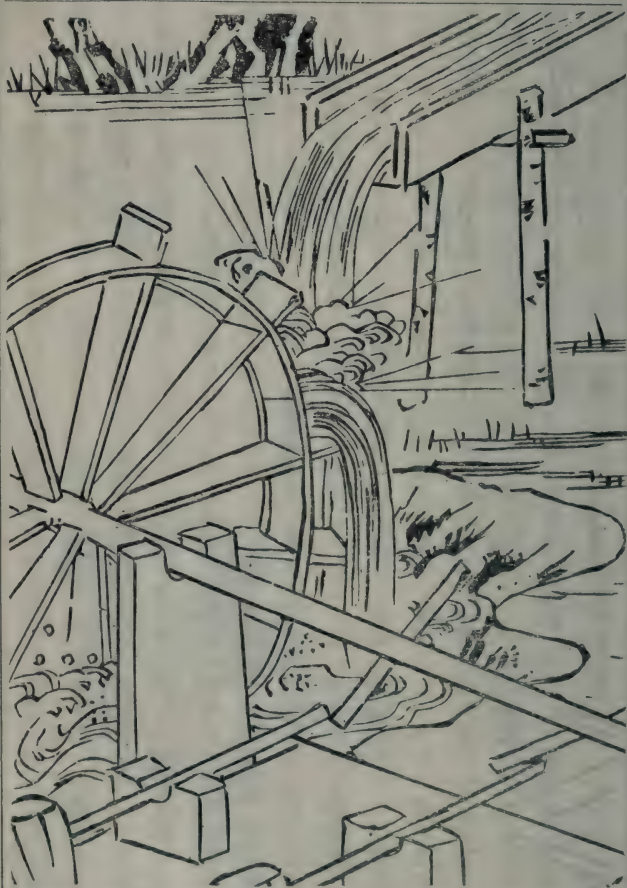
伍子胥が眼をぬかれ、木曾の忠太が義仲を諫めて腹切りたるにも、をさ〳〵おとるべうはあらねども、日頃御偏意地の大王、一旦仰せ出だされたる事は變じ給はぬ御氣質、一杯の水を以て車薪の火は救ひがたし、いか程に諫め給ふとも、馬の耳の風牛の角の蜂とやらで、さして御爲にもなら山の、この手柏の二面に、男とも見え女とも、みめよき路考が姿故に、此冥府を捨て給はんとは、世上の息子の了簡にして、地獄極樂の主たる大王の智と云ふべきにあらず。是非々々御望とある事ならば、使をつかはし召捕りて參らんに、何條事の有るべきや。何れもいかにと申されければ、一座の人々口を揃へ、平等王の評議甚だ道理に當つて碎ける大王も尤と聞かれければ、いざや路考を召捕に遣すべき使を詮議せられけるに、泰山王申されけるは、それ人生れては定業にあらざれば此土へは來らざる習なり、いざ〳〵定業帳を詮議あるべしとて取出させ、つく〴〵とくり返して申されけるは、午の霜月佐野川市松、未の七月中村助五郎、腫物にて死すべしとは有れども、菊之丞が命はいまだ盡くべき時節にあらず、御使を遣されたりとも、彼國には伊勢八幡を始めとして、彼が氏神王子の稻荷なんどとて、四も五も喰はぬ手あひにて、此界をも直下に見下すおへない親父が澤山に守り居れば、中々表立つての御使にては存じもよらず、此儀いかにと申されければ、初江王進み出でて申しけるは、それこそ安き事なん

王の御振舞、わづか一人の色におぼれ、此冥府の王位を捨て、娑婆に出でて人間にまじはり給はば、地獄極樂の政は執行者もなく、善惡を正すべき所なければ、三千世界の衆生は何を以て教とせんや。かゝる貴き御身をば、優童買と成果給はゞ、極樂に滿々たる金の砂は、忽に堺町の有となり、いくら有りとも使足らずば、金のなる木がわしやほしいと悔む段に成つては、極樂の先生釋迦如來の黃金のはだへまで、潰に掛けて下金屋へ賣りてやり、地藏菩薩は長太郎坊主同前に、子供のなぶりものと落ぶれ、びんが鳥は兩國橋の見せものとなり、天人も女衒の手に渡り、三途川の姥はのり賣姥と變じ、仁王は辻竹輿かくやうに成行かば、地獄極樂破滅せんは目のあたりなるに、其氣の付かざる御年ばいにもあらず。また嘗へ當世を見習ひて、蝙蝠羽織に長脇指、髮は本田に銀ぎせる、男娼買と見せ掛けても、色のとれる御顏にてもましまさず。昔海老藏が景淸の狂言にて御姿を似せしさへ、娑婆の者共はおぢおそるゝに、其御姿にてぶらつき給はゞ、うさんな者と召捕られ、大屋を詮議せらるゝ時、大屋は釋尊名主は大日と云ひたりとも、證據に立つ者もなければ、無緣法界の無宿仲間へ入れられて、憂目を見給はんは案の內。それとも御得心なくば、此宗帝王、御前にて腹かつさばき申すべし、御返答承らんと、席を打つて諫めける處に、平等王しづ〳〵と立出で申されけるは、宗帝王の諫言は、比干が胸をさかれ、

る天人なれば美しいとも思はず、路考とくらべて見る時は、閻魔王の冠と、餓鬼のふんどし程の違ひあり、聞きしにまさる路考が姿、古今無雙の器量かなと、十王を始として、見る目は目玉を光らし、かぐ鼻は鼻をいからし、其外一座に有あうたる牛頭馬頭阿防羅刹まで、額の角を振立てて感ずる聲止まざりければ、閻王覺えず目をひらき御覺じけるに、越なうあてやかなるに心動き、初笑ひしことはどこへやら、只茫然と空蟬のもぬけのごとくになりて、覺えず玉座よりころび落ち給へば、皆々驚きいだき起し奉れば、漸く正氣付かせ給ひ、ため息をほつとつき、扨々かた〴〵が見る前面目もなき事ながら、我思はずも此綺姿のみやびやかなるに迷ひたる心を、何と遍照が歌のさまなる我ふるまひ。扨つく〴〵と按ずるに、古より美人の聞え數もかぎらぬ其中にも、またならぶべき人もなし。西施がまなじり小町が眉、楊貴妃が唇、赫奕姫が鼻筋、飛燕が腰つき衣通姫の衣裳の著こなし、ひつくるめたる此姿、桐は御守殿山丹は娘盛と瞿麥の、などとは並々の事、花にも月にも菩薩にも、又あるべきともおもほえず。まして唐日本の地に、かゝるもの二度生ずべきにあらざれば、我も是より冥府の王位を捨て、娑婆に出でて此者と枕をかはさば、王位の貴きも何かはせんと、御目の内もしどろにて、うかれ出でんとし給ふ處に、宗帝王かけ出で御袖をひかへ、にがり切つて申しけるは、こはけしからぬ大

だ以て不埒の至りなり。今より娑婆世界にて男色相止候樣に、急度申し渡すべしとの勅命、皆皆はつとお請を申しけるが、十王の中より轉輪王進み出でて申しけるは、勅諚を返し奉るは恐多きに似たれども、思ふ事いはでやみなんも腹ふくるゝわざなり。仰の通り男色も亦害なきにはあらず、しかはあれども、其害女色に比すれば至つて輕くして、中々同日の談にあらず。譬へば女色はその甘きこと蜜のごとく、男色は淡きこと水のごとし。無味の味は佳境に入らずんば知りがたし。是は畢竟大王の若衆御嫌ひなるがゆゑ、上戸の餅屋をやめさせ度と申すがごとし。其上娑婆の評判を餘所ながら、菊之丞が絶色なる事兼ねてよりかくれなければ、せめて此世の思ひ出に、繪姿なりとも見まほしシ。此義は何とぞ御免を蒙りたしと願へば、閻王は不機嫌にて、蓼喰ふ蟲も好々とは其方が事なり。然れどもたつての願もだしがたし、繪圖を見る事は勝手次第たるべし。しかしおれは若衆を見るは嫌ひなれば、繪の有る内は目を閉ぢて見まじき程に、早とく／＼と御目を閉ぢさせ給へば、彼罪人が持ちたりし姿繪を柱に掛けるに、淸如春柳含初月艶似桃花帶曉烟その姿のあてやかなる事、えもいはれざれば、人々は目をはなさず、はつと感じて暫は鳴もやまず。誠に娑婆にてうつくしきものは、天人の天降りたるといへども、それは畢竟遠が花の香なり、此國の極樂にては、凧を登す同然に、常に見

師匠親の日をかすめたる科、一々鐵札に記し置きたり。しかしながら今時の坊主、表むきは抹香くさい貌しながら、遊女狂ひにうき身をやつし、鴨を明神葱を神主などと名付け、取喰ふから見れば、坊主の優童狂ひは其罪輕きに似たれば、劍の山の責一等を許し、彼が好む處の釜いりに仕らん、と窺へば、閻王以ての外怒らせ給ひ、いや／＼彼が罪輕きに似て輕からず。都て娑婆にて男色といへる事有るよし、我甚だ合點ゆかず。夫婦の道は陰陽自然なれば其はずの事なれども、同じ男をおかすこと決して有るべからざる事なり。唐土にては久しき世より有りて、書經には頑童を近づくる事なかれといましめ、周穆王は慈童を愛してより菊座の名始り、彌子瑕董賢孟東野が類。また日本にては弘法大師渡天の砌、流沙川の川上にて文殊と契をこめしより、文珠は支利菩薩の號を取り、弘法は若衆の祖師と汚名を殘し、熊谷の直實は無官の太夫敦盛を須磨の浦にて引こかし、ハリハドッコイなされけるとうたはれ、牛若は天狗にしめられ、増賀聖の業平、後醍醐帝の阿新、信長の蘭丸、其名も高尾の文覺は、六代御前にうつゝをぬかし、いらざる謀反をすゝめこみ、頼朝のとがめを受けしより、娑婆にて尻の來るといふ詞始れり。但馬の城の崎箱根の底倉へ湯治するもの多きは、皆この男色の有るゆゑなり。昔は坊主計が弄びし故にや、侍といふ字は疒冠に寺といふ字なり。しかるに近年は僧俗押なべて好むこと、甚

久の事なれば、塵積つて山師共の謀、又は三途川の古着を一人にて座に仰付けられば、其かはりには獄卒衆中樗蒲一に御まけなされ、虎の皮のふんどしを質に御置なさるゝとも、隨分利安に仕らん。左ある時は惣地獄の御うるほひにも相成り申すべしと、己が勝手は押かくし、お爲ごかしに數通の願書、地獄の沙汰も錢次第、油斷せぬ世の中とぞ知られける。閻王もさま〴〵の政を聞かせられければ、少しの暇もなきをりふし、獄卒ども地獄の地の字の付きたる高提灯を先に立て、一人の罪人を引立て來れり。閻王はるかに御覽あれば、年の頃廿計の僧の色白く瘦せたるに手かせ首かせを入れ、腰のまはりに何やらんふくさに包みたる物をくゝり付けてぞ有りける。此者いかなる罪にてか有ると尋ね給へば、かたはらより倶生神罷り出でて申しけるは、此坊主は、南瞻部州大日本國江戶の所化なるが、堺町の若女形瀨川菊之丞といへる若衆の色に染められて、師匠の身代からくれなゐ、錦の戶帳は道具市にひるがへり、行基の作の彌陀如來は質屋の藏へ御來迎、若衆の戀のしすごしに、尻のつまらぬ尻がわれて、座敷牢に押込められ、したふかひなく己が身を、宇津の山部の現にも、逢はれぬ事を苦に病んで、むなしくあの世を去りけるが、だんまつまの苦にも忘れ得ぬは、路考が俤なりとて、此處までも身をはなさず、アノ腰に付けたるは、鳥居淸信が畫きたる菊之丞が繪姿なり。若氣とは云ひながら、

たるゆゑ、樣々の惡作る者多く、日にまして罪人の數かぎりもあらざれば、前々より有來の地獄にては、中々地面不足なりとて、閻魔王こまり給ふ折を窺ひ、山師共は我一と内證より付込み、役人にてれん追從賄賂などしてさま〴〵の願を出し、極樂海道十萬億土の内にてあれ地を見たて、地藏菩薩の領分茄子畠の邊までを切りひらき、數百里の池を堀り、蘇枋を煎じて血の池をこしらへ、山を築きては劍の苗を植ゑさせ、罪人をはたく臼も、獄卒どもの手が屆かざればとて水車を仕懸させ、焦熱地獄には人排を仕かけ、其外叫喚大叫喚、等活黑繩無間地獄等の外に、さま〴〵の新地獄をこしらへて、岡場所地獄と稱し、三途川の姥も、一人にてはなかなか手がまはり得ぬとて、久敷地獄に墮居たりし淺草の一ツ家の姥、安達が原の黑塚姥、堺町の笋姥、其外娑婆にてよく婦をいぢり繼子を憎みたる惡姥どもの罪を御赦免あり、三途川の姥の加勢に入れて、段々地獄も廣まりければ、彼山師共また〳〵願を出し、何とぞ新地獄町の大屋に成度との願。しかし餓鬼道の分は掃除代が上らざれば、節句錢を貳百文づつに御定め下されば度と願へば、或は舌を抜く鋏の入口、鐵の棒火の車の請おひ、釜も新敷仰せ付けられ候よりは、古地獄にて底のぬけたるを取集めて鑄懸させ、竹の根を掘る燈心も、蠟燭屋の切屑を御買上になさるゝが至極下直に付き事候。少々の事にても、地獄の年數は假初にも百萬劫などと久

根南志具佐

前編一之卷

公無渡河、公竟渡河、墮河而死、當奈公何と詩に作りしは、見ぬ唐土の古、夫の水に溺れて死したるをなん、かなしみに堪へざる妹子の歎とかや。されば寶暦十あまり三の年水無月の頃、荻野八重桐となんいへる俳優人の水に入つて死したる事、世の取沙汰のまち〳〵にして、それと定めたる事を知る人なし。其由りて來る處を尋るに、皓々の白を以て世俗の塵埃を蒙らんやと、憤りて、汨羅に沈みし屈原が流にもあらず、龍宮の玉を取らんと海底に飛び入りて、命を捨てたる蜑人にも異なり。此世にもあらぬ世界の極樂と地獄の眞中に、閻魔大王となんいへるやんごとなき方ぞまし〳〵ける。此大王三千世界を領し給ふことなれば、十王を始として朝廷の臣下數もかぎらず、それ〳〵の役を司る者多し。されば人間の世渡、士農工商の各隙なきも理ぞかし。閻魔王宮も、昔はさのみ閙敷もあらざりしが、近年は人の心もかたましくなり

卵、老荘の譫言、紫式部が空言八百に比すべきにはあらざれども、只人情を論ずるにおいては、彼も一時なり是も一時なり。

安本元年盧月三十一日　　　　天竺浪人誌

自序

唐人の陳粉看、天竺のおんべらぼう、紅毛の*Su tu pe l po mu*朝鮮の口차리구차리、京の男の髭喰そらして、あのおしやんすことわいな、江戸の女の口紅から、いま〳〵しいはつつけ野郎なんど、其詞は違へども、喰うて糞して寐て起きて、死んで仕舞ふ命とは知りながら、めつたに金を慾がる人情は、唐も大倭も昔も今も易ることなし。聖人も、學べば祿其中にありと、旨く云つて食付かせ、佛は黄金の膚となりて慾がらせ、初穗なしには神道加持力も頼まれず。皆是金が敵の世の中なり。一口貸本屋何某、來りて予に乞ふことあり。其源を尋れば、こいつまた慾がる病の膏肓に入りたる親父なり。是を治せんとするに、鍼灸藥の及ぶべきにあらず。是を戒るに儒を以てすれば、彼曰く、聖人物を食せざりしや。神道を以てすればまたいはく、貧しくして正直なりがたし。佛法を以てすれば又曰く、未來より現在なり、冀はまづ銄と繩とを賜へ、家內の口を天井へつるして、而して後教を受くべし。予答ふるに詞なく、卽ち筆を執りて此篇をなし、名づけて根南志具佐といふ。釋迦の鼻の

根南志具佐序

余讀斯篇也。不覺擊節驚呼曰。咄人邪鬼邪。無能名焉。蓋可測而測。可言而言。旦暮萬古。咫尺六合。世有若人而爲若事。亦曷異之。若乃冥途瀦府幽昧浩渺。瞿曇氏者姑舍。其他雖有明者。不能窺測也。而斯篇能測其不可測也。能言其不可言也。紀事詳悉。屬辭壯快。波瀾變幻不可端倪。嗚呼人邪鬼邪。果無能名焉。童子秉燭曰。儻有類黃帝華胥之遊者。非邪。

寶曆癸未秋九月　黑塚處士題

根南志具佐

餘れば人々恐をなす、恐れられゝば用ひられず。嗚呼難いかな。こゝをもつて今六部を増補して、十二部の利を得んと欲すと云ふ。

小膽山人

風來六々部集跋

千里をはしる馬ありといへども、これを知る伯樂なければ、四ツ谷街道の屎取馬と共に引かれ、人を知る識なければ、ともに遣つて見やうのはなしも出來ず。なんでも一番やつけべいと、やたら骨を粉にして、命を縮める程のおもひをしても、殘るものは借金。ソコデヤヽヨ今年はてうど庚申、何事も是から先のえんぎにもと、ふじ參詣の思立。牛は牛づれ馬は馬連、同氣相求める友二三人うち伴ひ、行手の道も笑艸、採藥しても漢名に、また靈名もむづかしく、しらべた所がひまづひえ、費るまゝにさしかゝる、御山の廣大靈異なる事、今更いふもくだ〳〵し。昔語にふじ山で、近江の湖水を埋めたれば、餘程の新田ができるとは、やつぱり是も山咄し。また金銀銅の出るやうすも見えず。物廣大なれば手が屆かず、手のとゞかざるは金のたらざるなり。こゝにおいて止むにはしかじ、止むに至りては古人を友とするにしかず、友としてこゝろを慰するものは、風來六々部集にしくものなし。先生もとより世に用ひられず、世をすつとのかはに引込みしも、その智の餘れるなり。

細見嗚呼御江戸序

女衒、女を見るに法あり、一に目二に鼻すじ、三に口四にはへぎは、膚は凝れる脂のごとし、歯は瓠犀のごとし。家々の風好々の顔、尻の見やう親指の口傳、刀豆臭橘の祕術ありて、これを選むこと等閑ならねど、牙あるものは角なく、柳の翠なるは華なく、智あるは醜く、美しきに馬鹿あり、靜なるははりなく、賑なればきやんなり。顔と心と風俗と、三拍子揃ふもの、中座となり立者と呼ばる。人の中に人なく、女郎の中に女郎まれなり。貴きかな得がたきかな。或は骨太毛むくじやれ、猪首獅子鼻棚尻、蟲喰栗のつよくるみも、引け四ッの前後に至れば、餘つて捨るは一人もなく、ひろいところがアヽお江戸なり。

午のはつはる　福内鬼外戲作

跋

去る御方、善光寺の緣起を聞き給ひ、夜は如來善光を負ひ給ふといへるを論じて宣ふには、閻浮檀金の尊像は小像なるよし、善光が五尺の體を二寸八分にておひ給ふとは、甚以て心得がたしと。或人答へ申されしは、そこが佛の通力にて、一寸八分の尊像を、五尺にも七尺にも忽ち變じ給ふなりといへども合點し給はず、左程通力自在ならば、尊像變じて負はんより、竹輿を雇ふが近道なるべし。斯く智惠のなき如來にて、衆生濟度は覺束なしと。或人又申しけるは、一應竹輿は借りられしが、善光路錢を持たざれば、なんぼ佛の通力でも、柹の蔕では合點せず。爾時如來の小言に曰く、嗚呼錢なき衆生は度しがたし。

門人　無名子　愼書

けり。

るをなま物じり共が、イヤ名代ぢやの前立のと、色々理窟をこねるは、去りとは若輩千萬なり。抑實の無量壽佛と申し奉るは、在るがごとく無きがごとく、遠きがごとく近きがごとく、草木國土引きくるめて、皆如來の細工なれば、廣大無邊いふばかりなし。閻浮檀金も燒付も、聊形容を標するばかり、皆同じ前立なり。人間の目から見れば、金は尊く燒付は賤しい樣に思へども、佛の目より見る時は、金も銀も銅も皆一圓の土にして、佛の照らす光明なり。斯く廣大に說く時は、本尊も念佛もいらず、儒者の獨を愼み、神道者の正直計で濟みさうなものなれど、譬へば弓の稽古する者、すびき藁砧計りで手前さへかたまれば、的に掛るに及ぶまじけれども、我身を我心で試すには、其手前のかたまりしか、かたまらざるか、委しう分らぬ物故に、的に掛けて射て見れば、今の矢は上だ下だと、的を目當に手前を直す。本尊に向つて念佛申し、惡念を去つて善心に立ちかへるも、彼的を射る心にて、閻浮檀金でも燒付でも、目當計の事なれば、貪著はなき事なり。只人々の力相應、弓は強くも弱くもあれ、的は金でも燒付でも、一心不亂に願ふ時は、風やんで埃なく、浪靜まりて水清し、惡念邪氣の雲晴れて、硝子のごとくすきとほれば、心が卽火珠にて、誠の如來うつらせ給へば、其時悟を開くなりと、宜ふ聲の耳へ入りしは、是も我鼾にて、如來と見えしは有明の、行燈幽にちらつきて、夜はほの〴〵と明けに

に衆生が文盲な迚、如來ともいはるゝ者が、座頭に熱湯浴せるやうに、贋物をつかませう筈はなけれど、愚痴無智の凡夫ども、おれを最屓の引だふし、却つて恥をかゝせるなり。成程一圖に祈るものは、奇瑞もある筈の事なれど、千人に百人も誠の信心で來るは少く、衣裝自慢器量じまん、見せに來る人見に來る人、納涼ながらの參詣やら、負けるが嫌ひの日參講中、挑灯の伊達前後を爭ひ、念佛の聲遠近に響く、人そばへの朝參り、隣のかゝをそゝのかし、門前の茶やで出合ひ、おれを出しに大それた事をして、日比の思ひをはらしたも如來ゐの御蔭、有がたいといはるゝ時は、身をそがるゝよりせつなけれど、一々罸も當てられず。實に此度の菩提樹の事は、臺座後光をぶちこはされ、とつかへべいの飴賣が手へ渡る德もあれ、おれは夢にも知らぬ事なり。都て世上の習ひにて、何ぞ替つた事が有れば、名高い人の名を立て、牛若が切つた石ぢやの、辨慶が捻岩ぢやの、片目の杜父魚武文蟹、石芋、石蛤、臼の目切つたも弘法大師と、あられもない名を立てらるゝ。おれも善光寺の如來というてや、佛仲間での立もの故、此度の菩提樹の樣に、無い名を立てらるゝも常不斷ある事なり。扨又おれを安くして、引ヶ四ツ迄見世ざらしの新造ッ子の樣におもやるさうな。成程天竺より渡ッたるには觀音勢至の脇立もなく、閻浮檀金に違ひなければ、無法の族奪ひ取らん事を慮つて、祕佛として藏置くなり。然

りければ、山人も閨に入つて、とろ〳〵とまどろみける。然るに夜更け人靜りて後、表の戸口をとん〳〵〳〵、たゝくは秧鷄の聲にもあらず、節季でなければ借金乞の氣遣もなく、誰と答へてぐわらりと明くれば、思ひ掛なき善光寺如來、金色の光を放ち、近う〳〵と招かせ給ひ、爰は一番、善哉々々、我はこれ、と言ひさうな處なれども、近年雜劇で不斷する故、古い趣向と笑はれんが恥かしさに、しら化と出掛けたり。其方最前菩提樹の辨、茶にしたるいひまはし、近比以て痛み入り、面目もなき次第なり。勿論我等が方便で、山事をやらかして人の目をくらまさうとおもへば、竹田の關捩出羽の手づま、藥研堀の龜丈が工伎ぐらゐはやり兼もせまいけれども、正法に奇特なし。夫も開帳が不當りで難儀にも及ぶならば、又思案も有るべけれ共、流行過ぎてこまつた位、何に不足のない仕合、菩提樹をふらして入りを取るにも及ばず、又重ねて出る時は三四十年も後の事、今の人間はぐわらりと替れば、跡の仕込にも迂遠し。殊に降らせた菩提樹といふは、其方も知る通り正眞の物ではなく、倭名水木、又俗に水草共いへる木の實を、烏が好んで喰ふ物にて、彼水木の實の肉は烏の腹中でところけても、中の核は其儘に糞に雜りて出でたるが、度々の雨に能く漂射て、そこ爰に落ちて居るを、一人が見付けて菩提樹が降つたといへば、百犬聲に吠ゆるなり。眞の菩提樹とは形狀も違ひ大きさもちがふなり。いか

て置いて、新に三尊にせし譯は、客の多い女郎の名代をだす、まづ其ごとく、引手あまたの御手の糸、來る人多きも一方ならぬ閻浮檀金の名代に、新造如來を出されたり。それもしよんぼり只一人では、ト見た所が淋しい故、歩行かしやいの二菩薩は、二人禿の心也。扨又開帳の名殘狂言、いかにも花降り音樂聞え、東遊の羽衣の曲が相應といふ事は、如來をして喰ふ身の上で、知らぬ事はなけれども、五々の菩薩の管絃天人の舞といふも、やはり昔の通りなれば、土佐の芝居見る樣で、甚だ古風な事故に、慶子路考杜若が所作、噺町の手合には寄つてもつけず、言はれぬ出來し立をして味噌つければ、極樂の株仕舞と思ふ故、是もさらりとやめしと見えたり。又錢金を雨らしては、此廣い江戶中へ、五千兩や七千兩では、どこのはなへも行屆かず、出開帳も權兵衞ごんにやく、こゝは一番錢入らずに、輕く刎る仕方が有らうと、如來も茶番をする氣に成つて、思ひ付かれた菩提樹なれ共、さう〳〵は有合はさねば、えしれぬ木の實を取雜ぜて、ちやらくらをやらかされたり。トハ知らずして凡夫ども、めつた無上に有がたがれども、聊も害にならず。若も腹へ入る藥ならば、辨じ樣も有るべけれど、天狗の髑髏同樣にて、何の絲瓜の可愛さうに、落を取つて居らるゝものを、我一人知つた顏にけちを付けるもおとなげなしと、菩提樹にして置くなり。是にも議論有りやといへば、門人もあきれた顏にて、詞なく歸

しても地獄へ落る氣遣なしと、衆生の心を安堵させるは、跡をかまはぬ肝煎が、判賃取らう計に、どこやらへ遣るべき宿なしを奉公にありつかせ、主人の難儀かけまくも、忝くも如來ともいはるゝ程の身を以て、去とは不埒千萬なり。斯の如く一ッとして取處もなき佛なるに、先生も雷同して、菩提樹なりと極る事、以の外の不見識、言語同斷の事なりと、にがり切つて申しける。其時山人莞爾として笑つて曰く、子が詞一々理あるに似たりといへ共、一概の論なり。先日本紀にどうあらうが、善光寺でも阿彌陀といひ、世間一統阿彌陀なりと、覺えて居るが阿彌陀にて、何の邪魔にもならぬ事。小刀細工の青表紙、いらざる所へ骨折つて、法界悋氣闇焼餅、去とは無用な穿なり。扨御印文といふ事も、あさとい樣なる事なれ共、佛とも法共辨へぬ、人間の皮かぶつた猫また姥や、きやん〳〵わん〳〵の類には、仁義禮智は間に合はず、百位なら極樂へ往つても見ようと、思ひ立つが取も直さず仁の端、佛家でいふ結縁にて、めくりに負けて裸に成つたり、夜たか買うて鼻を落す程氣の毒にも思はぬ事なり。又晝は善光如來を負ひ、夜は如來善光を負ひ給ふとは、陰徳あれば陽報あり、善のむくい著く、負へば負はるゝといふ比喩なるべし。こゝらをあしく心得ると、牛馬にむごく當る人は、死んで牛馬になる故に、佛にむごくあたる人、死して佛に成るといふ間違も有る物なり。扨三國傳來の閻浮檀金は藏し

川柳點の前句附に、善光も初手は水虎と思うて居、といへるごとく、纔見付けて笈に入れて、處々方々負歩行きたる佛といふは、何にもせよ一軀にて、後世三尊に作り直せる杜撰を笑ひたる句作なり。扨又晝は善光如來を負ひ、夜は如來善光を負ひ給ふといふも、難有い事の樣なれど、去りとは聞えぬ仕方なり。晝の内長の旅路、重い佛を負歩行き、草臥れて居る善光、せめて夜はとつくりと足踏延して休んでこそ、旅の勞も直るべけれ、夜がな夜一夜佛に負はれては、眠る事も成るまいし、寒い時には冷え渡つて、去りとはこまつた物なるべし。扨又極樂海道の切手なり迚、御印文を戴かす。若地獄極樂ある物にしてからが、一生涯佛を念じ、善根を積んでこそ極樂へも至るべけれ、夫さへ上品上生より下品下生に至る迄、九品の淨土のわかち有つて、謾に極樂へは行かれぬと聞きしに、壹分に壹〆賣る時も、壹〆五百賣る時も相場に構はず、百文で極樂の切手の安賣、世智辛い人間ども、二百出して蹴轉を買うては、ちつとの間の樂しみなり、其半分の百だして、億萬劫が其間、百味の飲食振舞はれ、天人を揚詰にして蓮の臺に店賃入らずの活計歡樂、是程安いものはないと、我一と戴いて、只さへ善事は嫌ひにて、惡作りたがる凡夫共、御印文を楯について、額に極印がすわつたからは、つがもねェどんな惡い事

大木有り、東都にては東叡山の寺中に有りて、先生固より能く知れる所なり。其實大豆粒より大にして、念珠に作る物故に號けて菩提樹と云ふ。今降る處は麥粒のごとく、何か得しれぬ木の實にて、念珠に成るべき物にも有らず。降つた所が役にも立たず、降らぬ迚不自由にもなし。扨舊記を考ふるに、粟を雨し麥をふらし、石をふらし土をふらし、灰をふらし毛をふらし、血を雨し肉をふらし、虫をふらし魚をふらし、或は沸湯紅雪をふらすも、皆譯のある事なれど、つまる處なきにはしかず。若も佛の靈顯ならば、虚空に花降り音樂聞え、天津乙女の羽衣の曲にて、諸人の心を慰むるか、同じく降らす物ならば、錢金か麥米なら、下のくつろぎ、如來の御蔭と難有く思ふべきに、江戸中から近在掛けて一萬兩餘もせしめて置いて、けふ閉帳の名殘とて、降らすものに事缺いて、役にも立たぬ菩提樹の、しかも贋物をふらすとは、さりとはあたじけ如來なり。又熟案ずるに、日本書紀第十九の巻、欽明天皇十三年冬十月、百濟の聖明王、釋迦佛の金銅の像一軀、幡蓋經論等を獻ず。小墾田の家に安置す。國に疫病行はれて、治療する事あたはず。物部の大連尾輿、中臣連鎌子同じく奏して、佛像を難波の堀江に流し棄つと。此說に據る時は、實の善光寺如來といふは、釋迦如來なるべけれど、夫は先差置いて、釋迦にもあれ、彌陀にもあれ、浪花の堀江へぶち込まれ、鯽や鼈と相店の住居なりし。これを

菩提樹之辨

今年六月朔日より、本所回向院において、信州善光寺如來の出開帳、參詣群集前代未聞の事は、人々の知る處なれば、今更いふもくだくだし。程なく日延の日限もみちけるにや、閏七月十七日の曉限りに閉帳有りける。然るに十七日の日中より、誰いひ出すとなく、善光寺如來の奇瑞によつて菩提樹を降らし給ふと、我先と是を拾ふ。三十年前開帳の時も降らし給ふ。又今年もふらし給ふは、誠に世は澆季に及ぶといへども、佛法の奇瑞有りがたしと、諸人益渴仰す。追々高貴の御方より、予に是を監定せよとて見せ給ふ事七八ヶ處に及べり。予皆眞の菩提樹なりと答へける。或日門人何某來掛りて問うて曰く、先生彼品を以て眞の菩提樹と答へ給ふ事、甚以て不稽の言なり。夫菩提樹の事は、翻譯名義集に、佛其下に生じ成等正覺し給ふ、因つて是を菩提樹といふと、其形狀潛確類書に出でたり。又元亨釋書に、千光國師榮西入宋の時、菩提樹の種を傳へて筑前國香椎の宮の側に植ゑしより、京部泉涌寺六角堂、同寺町、又叡山西塔にありと、貝原先生大和本艸に詳に出されたり。又筑後國鎭西本山善導寺中に、昔より

佛法奇瑞菩提樹之辨自序

舊板其砌大に行はれ、所々磨滅に及び、見易からねば、ヶ程の文章埋木となるを悲しみ、このめる人の望に任せ、再刻なしてこゝろに加ふ。

或人南無阿彌陀佛の六字を註釋して曰く、それ南無とは南無と書きたる文字にて、死んで仕舞へば皆身無し、後生を願へといふ心。阿彌陀とは世の人を救はせ玉ふ網だ程に、隨分頼めとの御誓願。佛とは念佛を高聲に稱へる名聞也。口の内にてぶつ〳〵と申せよとの事なりと、しかつべらしき傍より、如來とは扨如何。是には殆こまりながら、いひ掛り引かれもせず、嵯峨の釋迦でも善光寺でも開帳に出る事は、衆生濟度は勿論なれども、二ツには參詣の散錢をによらふ故、そこで如來と申すといへば、一座どつと笑ひけるを、此書の序とはなしけらし。

風來山人誌

序

抑この風來假名文選といつぱ、錠前鐵物なほしの秀句と聞ゆれども、其樣な茶なる事ではなし。是我先師の筆進にして、狂文戲作を書く人には、白氏の文集紫清が艸紙、夫にも勝る至寶なり。夫先生の文だるや、活々たる事龍の如く、彼の唐山の文選茣蓙を、はるか足下に掛川茣蓙、詞に咲かする花茣蓙は、堅いやうにて和かく、浮世茣蓙の世話にわたる、いふに云はれぬ味い事、あたかも天にあらば比翼茣蓙の、飛んだはづんだ筆拍子、又地にあらば連理の枝の、寢茣蓙を掘りても悪落に類せず。かへす〴〵も世上の戲作者、草履をぬいで下座茣蓙に手をつかね、此書を拜して筆を採れと、我ものよしの先生自慢、書して序文の明地をふさぐ。

于時天明八の歳霜月二十日、他所へ出懸の追とり筆、出たら目に述之。

萬　象　亭

風來山人遺弟

下界隱士天竺老人述

跋

佛は衆生の爲に花を降らし、勇士は戰場に火花を散らす。大盡は末社の爲に紙花を飛ばし、折介は夜鷹の爲に鼻を落す。是等は落しても散らしても懸替も有るべけれど、此花の外に此花なきは、いはずと皆樣御存じの作者の巨擘風來山人、盛を見する程もなく、遮陽版の岐穴から、賊風の心なく、吹き散らしたる花は根に、復花となせし事、惜むべき事にあらずや。此比嘗て四方山人、彼の風來の書き置かれし、劇本の後序新樣物の報條なンど、敗紙に紛雜込んで還魂紙とならん事ををしみ、編つて一部の小册となし、櫻木に花と開かしむる事とはなりぬ。飛花落葉と標題せるは、春は櫻の花の雨、秋は落葉の村時雨、徒然を慰むる端香のつよい茶飲ばなしの、はなしの主兒にも換へ給はゞ、故人の鼻を高くして、亡名に花を咲かする心で、名をつけた物で御座るてやと、四方山人のはなしにいはれたりしを、鼻紙に書留めて、此書の跋とはなし侍る。

天明三年むつきの頃

跋

易に曰く、雷は來也、能く百里を驚かし、聲あれども形はなしと。きのふ聞く風來山人、飛んだ噂も七十五日、今は昔と成田屋の、人の噂や我身の上、この人にして斯疾、六道の辻駕にのり、極樂淨土の居つゞけとは、御釋迦も御存じあるまいと、留守の閑庭を覗き見れば、飛花落葉のちり塚のちり。多くの人の目にふれば、見ぬ世の友ともなれかしと、さる御方の思ひ付、わがむだ口も跋の心、やうやくこゝに口作たり。時に天も明るき三のとし、兎の耳の長き春の日、虚言八百里の野の片端、迯水の流にのぞみて、二二平二滿藏闌になつて誌す。

そこがかのやすりとかすり、かひての仕合うりての悦、すたつた所が南鐐一片、まうけた所が五十か七十、みぢんつもれば山をなし、頭巾と見せてほうかぶり、いかな御客も足かろ〲と御出被成て、めしを出せ、コリヤ酒をだせ、ヨウイ得意にならしやんせよ。

を以て國の禍福を論ぜんや。(此間闕)又吉凶を知らしむるならば、天地といへる名人の作者に、春夏秋冬といへる上手の細工人の手が揃つて居れば、まだ外に尤らしき趣向も有るべし。是衆人のまどへる事、言を待たずして明なり。去年の春にてか有りけん、江戸西が原といへる所に、木に餅なりたりとて群集せしも、ならの木に付きたる瘤のごときものにて、今年の物とは小異なり。去冬家内に餅のなりたる木は柳なり、此外に餅のなる木の有りやと問はゞ、只稲と答へんのみ。門人笑うて去る。

寶曆十一辛巳年彌生上の九日

麥飯報條

高からうよからう、安からうわるからうとは、やほの時代のたとへにて、今どきは御合點なされず。ひつぱりみせで二の膳にすわり、安札で棧敷へ上る。賣人のやすり買人のかすり、やすりかすりと云ふ事を知らねば、今比の商賣はならぬと、さる御方の御說法。聞くとそのまゝ早合點、かしこまり子のとろゝ汁より、むぎめしの思ひ付、南鐐一片六進が三進、二一天作の御臺人前、つもり上げて見れば、サアやすい〳〵作頭殿のそろばんちがひ歟、ぬすみ物歟ひけ物

ず、萬物陰陽に造化す、陰陽不順なればよのつねならぬ異物生ず、異物の生ずるは吉にあらず凶なり。後醍醐帝の御宇龍馬を献ぜしを、中納言藤房の卿評せしも理に當りたるにあらずや。予謂へらく、是も亦陰陽の大なる事を知らざるが故なり。造化のかぎりなき、億萬を以てはかるべからず、豈悉く全き事あらんや。五瓣の花六瓣に咲き、茄子の巾著形なる、釋迦如來の黄疸色なる、福祿壽の天窓の長き、鎭西八郎爲朝が弓手の腕の長きも、皆同じく出來そこなひなり。六瓣の花は必ず其實雙仁ありて人を殺す、二子茄子を孕婦食へば二子を産むといふも俗說なり。又贔屓の方から押して理を付くる時は、釋尊の黄疸は黄金の肌と號す。いかに佛なればとて、體が金ならば、風呂に入り巨燵にあたらば、五體なま金と成つて病者と成るべし。又指を切つて兩替にもやられねば、正眞の金の持ぐさらしなり。殊更夜道の獨旅、盜人の用心悪かるべければ、損有つて益なし。故に我は佛は生れぞこなひの病イ者と見る事理なきにあらず。又福祿壽の天窓が長きとて、南極星の化身といへるも、見て來たものなければ請合ひがたし。爲朝が腕の長きは、弓取と盜人には重寶なれども、つまる處は出來そこなひなり。此類の出來そこなひ今も世に多し。生れ付のかたはもの、葉替りの草木、碁盤娘、熊女、馬に角あるの類、みな出來そこなひにして、ならごうの餅に似たるも、同じ造化の細工屑なり。何ぞかゝる小物

を槲といふ。小ならは槲中の小さきものにして、詩經の樸樕、鎭江府志の孛落葉是なり。實おのおの苞ありてその半を包む。花は栗の花に似て短し。又此花實の外に毬ありて、形松かさの小さきがごとく、榿の實のぶの實のごとし、是亦別に一物なり、其名をならがうといふ。今餅といへるは、ならがうの初生木の、勢惡くして一ッ處にかたまりたる物なり。是畢竟は木の病なり。吉にあらず凶にあらず、餅にあらず實にあらず、又今年のみ有るにはあらず、年毎にあれども、常は氣を付けざれば只に止むのみ。今年はからずも俗人の目にふれしより、一犬形に吠えて百犬聲に吠え、己が愚を賣るとは知らず、木に餅のなりたりといふもの少からず。只是のみにしもあらず、國の吉事としてこれを祝す。その祝する下心は貪欲よりおこれり。佛を賴んで極樂へ行きたがるも、先の世の榮花、身には金箔をぬりながら、蓮花の腰かけに半座を分けて、嗅と戲をなし、耳には二十五菩薩の音樂に、豐後ぶしの艶なるを聞き、口には百味の飲食金翅鳥の燒鳥、天の邪鬼の糟漬等を食はんが爲なり。木の餅を祝するも、國家の安全を祈るにてはなく、國の吉事といへば我身の上にふりかゝる仕合もあらんかと思ふより、知るも知らぬも祝して曰く、木に餅のなりたるは古今無雙の吉事なりと。夫天吉凶を知らしむるに、なんぞ小兒の戲の如きを以て是をしめさんや。或人曰く、しかれども又其理もなきにはあら

木に餅の生る辨

つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつり行くよしなし事を、そこはかとなくかき付くるといへば、向上らしう聞ゆれど、借錢の斷手紙や質の利上の書物に、ほつと精をつかせし所へ、門人無名子なる者來つて曰く、けふ藥を葛西の邊に採る、至ッて珍らかなる事あり。木に餅のなりたるとて、人々市の如くいたりつどひ、猶此說街に滿つ。願はくは先生の說を聞かんと、一と枝を携さへ來れり。予答へて曰く、天地の廣き、かゝる異物も有るまじき事にしもあらず。然れども、これは餅といへる名ばかりにて、食ふべきにあらざれば、眞の餅といふべからず。又我家別に木になりたる餅ありて食すべきものなり。門人驚いて曰く、先生既にかゝる異物あらば、幸に我に見ん事を許せと、ねもごろに是を乞ふ。よつて箱を開き取出せば、門人笑つて曰く、これ初春をことぶく餅花にあらずや。爰に於て予是に教へて曰く、世人の愚昧なる今に始めぬ事なり、試に是を論ぜん。夫くのぎ類數種あり、（讃岐にてくにぎと云ふ）ならかしはあり、一にかしはといふ。くのぎあり、又大ならといふ。又一種あへくのぎあり、櫟あり柞あり小ならあり。皆同類異種にして、漢名實の大なるを槲といひ、實を橡實といふ。實小なる方

リン〳〵リンに引きかへて、えいとう〳〵と御見物、幾重にも奉願上候。

三月日　ふきや丁　結城座

荒御靈新田神德後序

近松老翁、世を戯場に避けて數の淨瑠璃を作りけるに、筑後播磨の名人有ッて、普く世上に行き渡る。勸善懲惡世を教ふるの一助たる事、是近松氏の本心なり。中頃千前軒文耕堂が類も、亦近松氏の意をうけて、作れる所正しければ、此道甚盛んなりしが、いつの頃よりか衰へて、今時の作者は固よりそこ所ではなく、文法を知らず手爾於葉を辨へず、嘲を遠近に傳へ、恥を千歳に殘す。讀めぬ同士書かぬ同士、金聾雷をこはがらず、盲蛇物におぢず。されども五年か三年に一度、犬も歩行けば棒に逢ふ、闇夜の鐵砲まぐれ當り、はくらんの藥ははくらん病が買ひに來る、遲牛も淀、早牛も淀、それも作者是も作者。鴈が飛べば飛んで見たがる石龜仲間のじだんだ組、すつぺらほんの髓作者、泥水に足を踏込み首をすつこめ、敬白。

亥のとし卯月上旬　福内鬼外書

やりそこなうてもこいつはよい　いけない所もけちな所もこいつはよい〳〵と、委細構はずお譽めなされて、御見物の程奉希上候。

同口上後日

先達而奉申上候通、貳文四文のはした芝居、誠に海老雜魚の魚まじり、一寸法師の脊くらべ、さりとてはあつかましい、ねりま大根で、太いの根と來た萬八芝居と御呵も可被下所、判官贔屓曾我贔屓、弱い者を見捨てぬは、實に頼母しきお江戸の御氣象、有がたいのてつぺんにて、屋根の穴から雨の漏るをも御いとひなく、御出被下候御贔屓御憐愍を笠に戴き、どうやらかうやら芝居の樣な物に成懸り、偏に御蔭御取立故と、難有仕合に奉存候。何をがな御禮御慰に相成候樣にと、心はやたけにはやれども、ない袖は振られず、瓢簞から駒も出ねば、金主から金も出ず「提灯で餅つく樣に、氣ばかりあせつて埒明かず、鐙ふんばり身代かぎり、えいやつとの思ひ付にて、來ル廿七日を七ッ目の泥仕合、八ッ目九ッ目大切迄、追々出し奉入御覽候へ共、是以て道具衣裳そこらだらけが不都合だらけ、御目まだるきは勿論なれども、惡うても能い負けても勝ぢやと、御町中樣御贔屓の御蔭を以て、此度の四幕目、澁團扇の氏子をはなれ、

矢口後日荒御靈新田神德口上

軍は勢の多少によらず、芝居は水物とは、昔から負をしみに能く申す事なれども、終どこれまで芋がらで足ついたためしもなければ、止めるに相談きはまりしを、去る方樣の御異見に、去りとはお江戸の廣いことを知らないか、二丁町を聲色をつかうて通り、吉野丸でさわげばにたりでも諷ふ。主水の表で駄菓子を賣り、越後屋の門を切レ賣が通る。晝三から夜鷹まで、夫相應に賣れるといふが、お江戸の廣い證據なり。裸で物は落さず、女角力で睾丸をつめたためしなしと、闇雲にすゝめられ、運は天にありぼた餅は棚にあり、下りは隣にあり、此方には何ンにもなければども、其代金の出し人もなければ、請子をしてはる樣な心持にて、はたいた所が元直なり。入らぬ所が平氣なりと、申すもやつぱりへらず口。やねの破れた一ッ德に、寐ながら月を見るというて、味噌を上げる理屈にて、ろくな事ではなけれども、只御見物樣の御ひいきを、下りの太夫三絃とも、守り神とも金主とも、是計が賴みにて、心一盃の思ひ付、福内鬼外先生の新淨るりを出せども、衣裳もなければ道具もなし、江戸のお氣ではお目まだるし、大山御參詣の道すがら、旅芝居を見るお心にて、悪い所が面白い、不出來な所もこいつは能い、

此あひだ底貫鱶右衛門様と申す生酔様御出なされ、巻舌にて御意被成まするは、ヤイ亭主、清水といへば水に縁ある酒をこそ賣るべけれ、何ぞや野夫な餅店を出し、下戸めらをうまがらせ、錢をせしめんとの謀、言語道斷の次第なり。汝が口上書を見るに、皆身勝手のせりふなり。我上戸の眼より見れは、餅ほど穢らはしき物はなし。先痰持は胸を苦しめ、疝氣持はきん玉にもてあつかひ、女郎の末は癪持となり、かげまの果は痔持となる。子持は女の色氣をさまし、やきもちはあいそをつかす。不器量のあくたいを棚から落した牡丹もちといひ、蒲團ばかりの獨寐をかしは餅と異名せり。とりもちは殺生戒を破り、むぐらもちは植木をそこなふ。高望王は下總に朽ちはて、持氏は鎌倉に亡ぶ。秩父におほさき持あり、四國に犬神持あり、賤しき事を荷持歩行持と言ひ、無首尾な事を手もち無沙汰といふ。身持氣質は附合を知らず、餅喰は相手がいやがる。鑓持は鑓を遣はず、金持は金をつかはず、辨當持先へ食はず。かゝる不埒の餅ゆゑに、下戸の建てたる藏はなし。早く相止め然るべしと、青筋はつてぞ申しける。

右の返答に、上戸を一まくりにやりこめ、餅の利運に相成候文談、跡より出し可奉入御覽候、已上。

口上

世上の下戸樣がたへ申上候、そも我朝の風俗にて、目出たき事にもちひの鏡、子もち金もち屋敷もち、道具に長もち魚に石もち、廓に座もち牽頭もち、家持は歌に名高く、惟茂武勇かくれなし。かゝるめでたき餅ゆゑに、此度おもひつきたての、器物もさつぱり淸水餅、味は勿論よいく〳〵と、御贔屓御評判の御取もちにて、私身代もち直し、よろしき氣もち心もち、嬶もやきもち打忘れ、尻もちついて嬉しがるやう、重箱のすみから隅まで、木に餅のなる御評判奉願候以上。

未四月　ゑかうゐんまへ

音羽屋多吉

淸水餅口上書第二番

風流　餅酒論

私餅店の儀、町中御下戸樣方御贔屓御取立を以て、段々繁昌仕り、ありがたく奉存候。然る處

嫩窠葉相生源氏後序

古語に曰く、寸も長きことあり、尺も短きことありと。されば木綿を買ふ者は、價少なうして其丈長しといへども長しとせず、錦を買ふものは、價多くして其丈短しといへどもみじかしとせず。予が戯に作れる嫩窠葉相生源氏、九段續なるを、東都の芝居の習なれば、末の三幕をのこし置き、評判しだいにて猶追々に出さんと、先六段目まで取組みけるに、當正月二日より如月下旬の今に至るまで、引續いての大入、棧敷切落はいふもさらなり、二の手をのけて見物雲の如く集り、舞臺の後人の山を築く。入るにあまへ勝に乘つて、末三段は趣向のみにていまだ筆をさへ採らず。しかるを淨瑠璃をこのむ人々しきりに正本を望むと、本屋が錢をほしがるとにうがにうに止むことを得ず、物足らぬ正本を出しぬ。手織木綿の地太にして、しかも丈の足らざるをも、ひいきの目には蜀江の錦とも見違へて、跡の出づるを待ち給へかし。

福内鬼外誌

安永二年癸巳二月三十日

りやうごく橋の邊
きよみづもち
新見世びらき仕り候

あり。又水中にうかんでは、磁石にかはるの徳あれば、ゆびにひねられ灰吹の、底のもくづとしづむとも、尸に譽有明の、つきぬ妹脊の旅づかれ、いざや急がん夜明けなば、東しらみと人やとがめん。兎にかくに身の用心の腰眼や、雲のかけはし白たへの、加賀越中の國境、ふんどし谷のかたほとり、肛門寺とて名にしおふ、大師の古跡ふし拜み、蟻のとわたり打過ぎて、金だの宿にぞ三重著きにけり。

神靈矢口渡跋

樽ぬき澁柹を笑つて曰く、汝我身の澁きを耻ぢず。澁柹答へて曰く、汝も澁を拔かずんば澁く、我も澁をぬかば甘からんと。善惡は本不二なり。一日吉田冠子來りて、淨瑠璃の作を請ふことしきり也。されば盲は蛇に畏ぢず、小戸はぼた餅に迯げずと、不稽無上の筆任せ、只初段の切三段目の口のみ予が筆にあらず、其餘は闇雲に綴合はせども、今なはじめの作者の巣立、しかも初日の急なれば、引書を閲るに遑あらず、校合も足らざれば、其誤多からん。澁のぬけざる澁柹の、澁き所は容したまへ。寅の初春中旬、作者の甲拆福内鬼外まじめに成て誌す。

とかう〳〵たるけんぺきの、峨々たる峯をよそに見て、脊筋海道とぼ〳〵と、たどり出づるぞうざ〳〵し。見上ぐればはるかのみねに生茂る、木々の梢や烏羽玉の、夜晝わかぬ所にも、頭しらみはすむとかや。世上の人のわる口に、花見虱と浮名立つ、身のたのしみもいつしかに、きのふはけふの瀬とかはる、あすやさつてやもえ出づる、くさのにそよぐ風さへも、もしや知死期のつかひかと、世を忍ぶ身の一ト筋に、千手の御手につく〴〵と、杖とたのしみ七九の里、四くわくわんおんを打越えて、鳥のそらねや帶の關、十四十六初戀に、思ひみだれし物心、血汐の酒のゑひまぎれ、縫めの糸のたまさかに、ほころびそめしころび寐の、そのむつ言にいひかはし、取りかはしたる誓紙のからす、かはい男とだきしめて、たとへ野の末山のおく、虎ふす野邊の足の毛や、爪の地ごくへ落つるとも、はなれはせぬといはしやんした、その言の葉がしみ付いて、わたしが脊の入ぼくろ、苦勞する身のうき旅も、みんなわしからおこつた事、こらへてやいのとよりそへば、男もともに打ちしをれ、親のゆるさぬ不義いたづら、襟の住居も叶はねば、かく落ちぶれし二人が中、心はやたけにはやれども、走らうにも飛ばうにも、のみならぬ身のかなしさと、そゞろ涙にくれけるが、ハア丶まようたり誤つたり、實に數ならぬ此身にも、先祖の譽に王猛が、傍若無人と名を傳へ、不思議を殘す節穴に、恨をむくいしためしも

孝弟忠信を口に稱し身に行ふ君子有りとも、當世是を號して野夫といひ、武を知り國家を守る者を、人嘲りて新吾左といふ。又此譏をまぬかれんと思ふたはけは、ぬしと呼びわつちととなへ、顔は白きをいとはず脇指は細きをいとはず、今の浮世に交らんもの、此境を知らずんばあるべからずと、案じの鋼鐵棟へまはり、まゝ坊が弟子と成つて斯くべら坊とは成りけり。しかれども又かゝる中にも、おのづから孝弟忠信の意備はれるは我筆力の妙なり。若し目玉の明きたる人ありて、其妙を知るに至らば、こいつ咄せる奴なるべし。或は知らずして譏るもの有りとも、我々へちまの皮とも思はず。

申のはつ春　　悟道軒書

道行虱の妹背筋

太夫　爪本加久太夫直傳

戀すてふわが名はまだき立ち出づる、襟の縫目やはだ著のうら、なれし故郷をふり捨てて、何國をあてとさだめなく、おちて行く身は人のみか、虱の身にも戀のふち、深き妹脊の一足づれ、生れ付きたる數々の、あし手まどひのはかどらぬ、大椎峠天柱の原、風門が谷うちわたり、い

み、隨分念入れ調合仕り、ありやうは錢がほしさのまゝ早々賣出し申し候。御つかひ被遊候て、萬一不宜候はゞ、だいなし御打ちやり被遊候ても、高のしれたる御損、私方は塵つもつて山とやらにて大に爲に相成候。一度切にて御求め不被下とても、御恨み可申上樣は無御座候。若又御意に入り、スハ能いはと御評判被遊被下候へば、皆樣御贔屓御取立にて段々繁昌仕り、表店へ罷出、金看板を輝かせ、今の難儀を昔語と御引立のほど、隅からすみまでづらりつと奉希上候。其爲の御斷左樣に、クワチクワチ〳〵〳〵。

てつぱう町うら店の住人

丑霜月日　　川合惣助元無

本白銀町四丁目南がは是も同くうら店にて

賣弘所　　えびすや兵助

くわんおんのむかふろぢ口に安かんばんあり

出店は勿論無御座候、せり賣等一切出し不申候、折々私自身出申候。

長枕褥合戰後序

口　上

トウザイ〳〵、抑私住所之儀、八方は八ツ棟作り、四方に四面の藏を建てんと存じ立ちたる甲斐もなく、段々の不仕合、商の損相つゞき、澁團扇にあふぎたてられ、跡へも先へも參りがたし。然る所去る御方より、何ぞ元手のいらぬ商賣おもひ付くやうにと御引立被下候、はみがきの儀、今時の皆樣は能く御存じの上なれば、かくすは野夫の至なり。其穴を委しく尋ね奉れば、房州砂ににほひを入れ、人々のおもひ付にて名を替へるばかりにて、元來下直の品にて御座候へ共、畢竟袋を拵へ候の、板行をすり候の、あののもののにて手間代に引け候。依之此度箱入に仕り、世上の袋入の目方二十袋分一箱に入れ、御つかひ勝手よろしく、袋が落ちちり楊枝がよごれるとり申すやうな、へちまな事の無之樣仕り、かさでせしめる積にて、少しばかり利を取り下直に差上申し候。尤藥方の儀、私は文盲怠才にてなんにも不存候へども、是も去る御方より御差圖にて、第一に齒をしろくし口中をさわやかにし、あしき臭をさり熱をさまし、其外しゆ〴〵ざつた、富士の山ほど功能有之由の藥方御傳へ被下候。應くかきかぬかのほど私は夢中にて、一向存じ不申候へ共、高が齒をみがくが肝心にて、其外の功能はきかずとも害にもならず、また傳へられた其人も丸で馬鹿でもなく候へば、よもや惡しくはあるまいと存じ、敎の通り藥種をえら

飛花落葉

江戸男色細見序

餅好酒中の趣を知らず、上戸は又羊羹の旨きを憎む。寒暑晝夜はかはる〴〵をなし、春の花秋の紅葉、何れをか捨ていづれをかとらん。男色女色の異なるも亦しからん歟。吉原に細見あれば、堺町木挽町には四季折々の番附有つて、世の人普くありがたがれども、恨むらくは此道の盛なる事を知らざる愚痴無智の凡夫もあらんかと、贔屓の腕をさすりつゝ、みづから有頂天に登り夢中に氣を採りて、ところ斑の讒言を、そこはかとなく書き付くれば、馴染の名に至つてその顏ちら〳〵として目のあたりに出でたるは、アヽラ不思議や生靈にあらずんば是親玉のかたまりならん。ヤイ餅好の衆生ども、みだりに是を笑ふことなかれ。ナント一番誤つてその粕を食ふに至らば、漸にして酒中の趣を知らん。きのえ申葉月の比、水虎散人悪寒發熱中に書す。

はこいり はみがき　嗽石香　はなしろくし口中 あしき匂ひをさる　二十袋分入一箱代七十二文　つめかへ四十八文

序

悉是吾子は釋迦の世話やき、教而不レ倦は孔子の世話やき、拍子木をうつ神會の世話やき、耳に數珠ある後生の世話やき、口を酢くするおきな、腰をたゝく姥、大小のたがひあれども、終に肝煎の名をのがれず。風來子きたさのさぬきの志度浦より、めつほうこはいの玉をもち來り、匱にをさめてかくしたり。あらめや〳〵大根の切ほしとひとしく、吝嗇家の惣菜となりて、漸百匁三文の價をまつ。其紙袋のうらを見れば、憤激と自棄なひまぜの文章なり。風來子もまた吾黨一人の世話燒なりしを、今は此土の世話に厭きて、無何有の郷の講頭とやなられけん。その書捨もなつかしとて、四方山人の世話によつて、此小册とはなりけらし。

へづつ東作書

序

四方山人、こゝに故人何がしが遺草を集めて専世上に售りつけんとす。されば現金阮宣が杖にぶらつく風來先生、百家にわたりし百の口は、きなかもぬけめのない人にて、波の文章たくみなるや、眞鍮錢の左氏司馬子長も、恐をなして三舍を避くべし。げにや先生、一盃機嫌の咳唾は玉の盃となり、そこで肴に千金の裘、一狐の洗鯉なり。そのいり酒に酢の過ぎたる、二三兄弟ひざぐみにて、おいらも一口ゆかうかと、あんときつ口さし出すにぞ。

あけら管江題

飛花落葉序

風來先生のかいやりたる戲れのくさ〴〵多かる中に、ありとは見えてさだかならず散りもてゆきしを、四方やま人のよもに求め、いそのかみ古ふんでのはよきぎにかきあつめて、飛花落葉となづく。其文は飛んだことの華やかにして、落の來ることの葉なれば、見る人無常を觀ぜすして只無性に感ず。遙に察す風來の面目何ものかこれに過ぎん。もとより觀と感と音相混じて、お慮がいをかんたいのカン則かんのんさんのカンなれば、佛におどけの相通あり、髪に本田の大通あり、牛込にはへぬきの圓通ありて、かれたるいたの櫻木に花咲かせ、よしてくれ竹のふしみやをして微笑せしむ。それは禪錄これは善六、所は下谷池のはた、黃泉の客の讃岐圓座に、換へしはちすの糸口の、尻も結ばぬ序幕の口上、飛花落葉のおことわり、左樣にと書いてやみぬ。

天明卯のむ月はじめ　喜三二識す

飛花落葉序

春の朝中の町にちる花を見て、山屋豆腐の雪かとうたがひ、秋の夕正燈寺の落葉をわけて、淺茅が原の露をあはれむ。こゝにどこのか風來山人、一文紙鳶の糸きれしより、かきおかれたる狂言綺語、讃佛ならぬ六部集など、すでに書林の櫻木ににほひて、茶屋にことわる紙花のごとし。たゞ相對の紙花は風前の塵とひとしく、根なし草の根に歸らず、廊下座敷の箒にはかれて、終に砂利場のすきがへしとならむ事をかなしみて、千早ぶるかみ屑を、くれ竹のよくひろひあつめ、近からんものは目に見なんし、遠からんものは音にきく、耳搔寮の腰張の張交とはなしぬ。

てんつる天明みずぢの糸の長き春の日

四方山人

ならば、來りて我と議論せよ。所は神田大和町の代地、一月三分の貸店に、貧乏に暮せども本名も隱れなし。時に安永五ッの年、尻眞赤いな申の極月、借金乞にいひ譯の暇、風來山人識。

跋

天狗髑髏鑒定緣起といへるは、一とせ予が戲に書きちらし、大場豐水に與へたるを、此頃書林開板しけるを、或人見て、予に謂て曰く、嗚呼子が人を譏る事甚しいかな。彼文中醫者と藥店共に盲とし、陳皮も知らずとは何事ぞや。陳皮は蜜柑の皮にして、三歲の小兒も能く是を知る、まして醫者藥屋をや。此書行はれざる以前、此文を削り去りて、世の嘲を免るべしと。予答へて曰く、陳皮の事、神農本草經には橘柚と有り、後世二物自から別なり。或は方書に橘皮と記し、陳皮青皮のわかちあり。然るを香川氏が藥撰に譫言をついてより、古方家と稱する文盲醫者ども、陳皮を捨て青皮而已をつかふ。陰陽造化の理に暗く、藥を知らずして療治するは、坐行にて轎夫と成り、達磨が串童を勤むるに似たり。蜜柑の皮より腹の皮、日頃笑止千萬と思ふ息が鼻へぬけ、戲まじりに書きちらせしなり。こけおどしの大言にあらず、習ひたくば教へてやるべし。若し此惡たいを無念と思はゞ、藥屋にもせよ醫者にもせよ、遠い藥はさて置いて、陳皮一味の事なりとも、わかるといふ人有る

の際限なき、一人の目を以て極めがたければ、若は繪に畫く天狗殿がお出やるまいものにもあらず。有つたとて天狗ぐらゐにさらはれる男でなければ、微塵こはくもなんともなく、無いとて小遣錢の切れた程に不自由にも思はねば、只造化といへる細工人のお心持次第なり。若又天狗が何故死んだと根問する人の有るならば、あまり高慢が過ぎて、科なき者を悪くいふたり、人を食つたり抓んだりがかうじた故、天狗の親玉太郎坊殿怒をなし、木の葉天狗を引とらへ、首ねぢ切つて捨てたるを、豐水が見つけて拾ひ上げし物ならん。これ皆餘所の事ならず、今時世上に目がなければ、おとなしう爪をかくせば鳶かと思うて、たはけどもは茶にしたり馬鹿にする故、謙退辭讓は間に合はず、高慢いはぬは損なれども、又其高慢が過ぎる時は、天道からがたまをへさへ、必ず憂目にあふものなり。人々愼み給へかしといへば、皆尤とうなづきぬ。
天狗さへ野夫ではないとしやれかうべ極めてやるが通りものなり。

きかな文盲なるかな。予これを憂へて藥物の眞僞を正し、世上の醫者の目を明けんとて千辛萬苦すれば、うぬらが心に引當てて山などとの取沙汰、智者は水を樂み、仁者は山を樂む。后稷は農を教へ禹王は水を治む。過ぎたるをはぶき足らざるを補ふは聖人のいさをしなり。山のやまなる山の芋、鰻鱺とならで朽果てなば、薯蕷とも甘藷とも、旨い奴等が口の端に、かゝる浮世に產れ來て、牛の糞やら胡麻味噌やら、やみらみつちやの流渡、海參の尻やら頭やら、蟹の竪やら横道やら、にうがにうへとちりあべこべ、錢あるものは利口に見え、出る杙は打たるゝ習ひ、天狗のあたまの眞僞を論じ、時を移せば腹がへり、日が重なれば店賃がふえ、月が延れば質が流るゝ。儒者は本田あたまの通り者をとらへて堯舜の民たらしめんとし、賢女兩夫に見えずと、女郎屋の二階で講釋をするは、蠐螬が蜈蚣をとらへて、我に似よといふが如し。動と止との文字は合うても、馬めが合點いたさねば、世話やくがたはけながらも、腹へはいる藥は人の命の存亡にあづかれば、聞かぬまでも赤目引はり、某時珍になりかはり、一問答せねばならねど、呑もせず傅もせず、目を歡ばすばかりにて、毒にもならず藥にも、何のお茶とうにもならざれば、諸人自から甘ンじて天狗というて嬉しがるならば、其波を揚げその醨をすゝりて、天狗にするが卓見なり。そのうへ縫目の蚤虱さへ悉くは見盡されず、まして天地の廣大なる萬物

嘴の長きは駄口を利きて差出たがる、木の葉天狗溝飛天狗の形狀なり。翅ありて草鞋をはくは、飛もしつ步行もする自由にかたどる。杉の梢に住居すれども、店賃を出さゞるは横著者なり。羽扇はもの入をいとふ吝嗇に譬す。これ皆畫工の思ひ付にて、實に此の如き物あるにはあらず。聖人も怪力亂神を語らずとこそ宣へ、いま是を天狗の髑髏なりとは、我々を欺き給ふや。予曰く、諸子の疑その理なきにあらず、去りながら我微意を悟らずんば、いざさらば語り聞かさん。古人の曰く、藥を賣るものは兩眼、藥を用ひる者は一眼、藥を服する者は無眼とは、とつと昔の譬、今時の醫者といふは、武士の子なれば惰弱者、百姓なれば疎懶者、町人なれば商を爲得ず、職人なれば無器用者にて、糊口を爲兼るもの、醫者にでもならうといふ。これを號けて、でも醫者とて、あたまぐるりの長羽織、見えと座なり計にて、藥の事は陳皮も知らず、長屋も露路も踏むもすべるも、そこらだらけが醫者だらけ、藥種屋も盲、醫者もめくら、病家は猶盲故、臭橘を枳殼とし、鼠麴草を芫花とし、鯨の牙をうにかうるとし、氣蟹を蟨虫とし、翻白菜を柴胡と心得、廣東人參を人參と思ふ。其外千變萬化の大間違。されども浮世は盲千人、はくらんの藥ははくらん病が買ふ習なれば、是を賣るもの家藏を建て、これを用ふるもの四枚肩に乘り、これを呑む者往生の素懐をとげながら、恨もせねば氣の毒なとも思はず。嗚呼悲し

天狗髑髏鑒定縁起

明和七ツのとし菊月末の四日、門人來りて藥物の眞僞を論ず。折ふし扉を叩くものは大場豐水なり。一の異物を携へ來りて曰く、昨夜天狗を夢む、今朝夢さめて思ふに、けふは二十四日にて、愛宕の縁日なればとて、芝の愛宕に詣けるに、門前櫻川と號する小流の中に怪しき物あり、拾ひ上げて泥土の穢を洗ひ去れば、しか〴〵の物なりとて、筐を開いて取出し、けふ此品を得て歸るさの道にて、見るもの皆天狗の髑髏なりとて市をなせども、固より俗人の臆見、證とするに足らず。希くは先生眞僞を辨ぜよと。予諾して門人に告げて、各其志をいはしむ。一人が曰く、これ大鳥の頭なり、阿蘭陀のぼうごる、すとろいすならんと。又一人が曰く、蠻夷の大鳥たりとも斯くまで大きには有るべからず、これ大魚の頭骨ならんと。反覆上下の論、異說まち〳〵にして衆議一決せず。予曰く、これ天狗のしやれかうべなり。門人驚いて曰く、夫れ倭俗の天狗と稱するものは、全く魑魅魍魎を指すなれども、定まれる形あるべうもあらず、然るに今世に天狗を畫くに、鼻高きは心の高慢鼻にあらはるゝを標して大天狗の容とし、又

序

不時に吹くを天狗風といひ、當なく打つを天狗礫と呼ふ。天狗頼母子、天狗俳諧等、みなあてじまひより號けしなり。予が拾ひ得たる異骨を、天狗の髑髏といひそめしも此類ならん歟。しかるを風來先生筆を採りてより、普く世上に隱れなく、見ん事をねがふ人多し。我も亦これを見せて、錢を取るべき工もなく、只持ちあるきて隙をつひやせば、諸共に能き見せものなり。

人の目をくらまさんにもあらばこそもとより山の天狗でもなしと口すさみて、一座の笑種としけるを、今書林のもとめに應じて寫しあたへぬ。

大場豐水誌

天狗髑髏圖

頭大サ六寸余

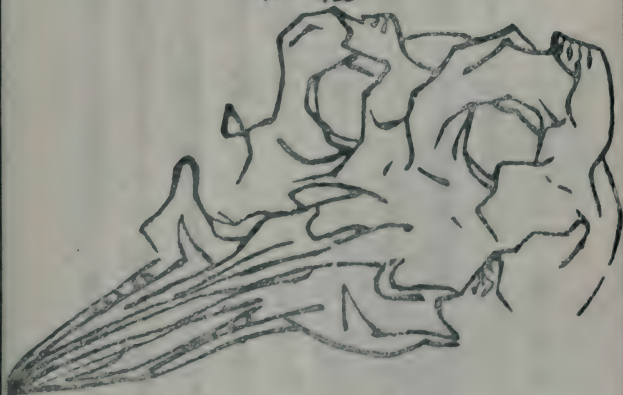
觜七寸余

目のくぼく成穴一寸半程

耳の穴二寸　牙五分程

咽のくぼくの穴二寸

都て一尺二寸余

序

我風來先生、戯に筆を採り、多くの小說世に行れてより、近世開板の俗、文名をかすり文意を贋せ、或は直に風來山人と記すもあり。是皆書林智恵もなくて錢を欲がり、謾に先生の名をかたる事、言語道斷不屈千萬なり。まだしも評判茶臼藝は、痳惚先生の作にして、筆勢頗る相似たれども、作れる花の匂ひなきが如し。其餘紫の朱を奪ひ、莠の苗をみだる而已ならず、炭團を名玉と欺き、夜鷹を晝三と僞るもの少からず。今より後堅く制して可ならんといへば、先生笑つて曰く、我飯を喰うて人の聲色を遣ふも、皆人々の物好にて、盲萬人目明三人、賣れるも本屋の渡世なれば、强ひて咎むるに及ばずとて、其儘に打ちやり置きぬ。頃日書肆淸風堂大場氏の方より、天狗髑髏鑒定緣起を得て櫻木に鏤む。是ぞ正眞正銘の風來先生の作なり。善と惡いはお手にとりて御覽じやれ。

戯蝶謹誌

家業の敵も討ちおふせ、書籍を集め歌誹諧を樂とし、是迄あしき沙汰もなく、木場に有つての親父分、其くせ年は若けれ共、闇夜にはなす鐵砲汁、當ると死ぬる色事ならず、いはゞふぐもどきを食つての食傷、明家で棒を振つた計、誰に當障もなければ、天竺迄持出しても彼首の氣遣なし。隱す〳〵と思へ共、天道といふ日の玉が、不斷上から見てござれば、首の有る人間と首のない人間は、誰が見ても知れるなり。かういふ心に成つて居れば、與風うまい首尾が有つて、人の女房の手を握る、其時はモウ首筋に墨打をされたと思へば、こそばく成つて止めるなり。團十郎もいか程に氣丈でも元氣でも、首がなければちんころがうんこ踏んだ樣な顏をして、だまつて居ねばならね共、首が有る故舞臺での口上も男らしく、去とは氣象が面白いと、江戸中の諸見物、益見增の紋所、おいらも神田の贔屓組、惡くぬかすたうへんぼくは、どいつでも相手になる。あゝつがもねエ。時に安永七の年、飛んだ噂と菊月上旬、風來山人清住町の別荘に、獨きほうて是を評す。

かす事有るなり。常に心を禁むべし。

大石内藏介も、遊里に在りては面白き事、世の風流の士とさのみ替る事なし。只敵を討つ事を忘れざるなり。主親の敵のみ敵と思ふべからず、人々志す處家業藝術皆敵を持ちたり、討たずんば有るべからずと、行住座臥にこれを思へば、あちらの物よりこちらの稱錘が重き故、面白き事になづまず、思ふ敵を討つと知るべし。早く其本にかへれ。

興に乘じて酒を呑む共、酒に乘じて興を呑む事なかれ。

友人何某大に家計を失して、來つて我に談ずる事有り。或人傍に在つて問うて曰く、汝が首有りや。友人曰く、有り。予が曰く、首あらば何の憂ふる事かあらんと、大に笑うて去る。これを聞いて論實に過ぎたりといふ人有り。予答へて曰く、大丈夫事をなすに、時に臨んで狐疑猶豫すべからず。然れ共其事固より善悪有り、只々遠きを慮かつて首の落ちざる用心すべし、幸にしてまぬかるゝは道にあらず。人々心に問へば、首のぶらつく事多かるべし。孟子の國に入つて大禁を問ふと、首の用心と見えたりと、謾にしるして禁の一助とす。

右は善の善たる敎にはあらね共、いかなる扁柏の上材木でも、初手から鉋は掛けられず、先手斧にて荒削り、盗博奕密夫の朽さへ入らざれば、いつでも鉋はかゝるなり。彼團十郎が爲人、

の名家故、少しの事も仰山に、飛んだ事といはれるは、江戸生抜の名代の家柄、當團十郎に至りても株を落さず、江戸中の贔負が多き故なりと、我は却つて頼母しく思ふといへば、彼人大に腹を立て、後家と契りて斯取沙汰に及ぶ事を、無體に理を付け取なしをいふ人は、其身にも後闇き下心が有る故なりと、以ての外の腹立。其時詞を和らげて教へて曰く、小善なりとて捨つべからず、小悪なりとてなすべからず、是は一通り知れた事にて、寢ても起きても飯と汁と香の物計食つて居れば、病氣も出ず勘定にもよけれ共、うまい物のほしくなるは、お定まりの人欲にて、百病は口より入り、諸事の災彼所よりおこる。是も親父の呼んでくれた、女房計かぢつて居れば、黴瘡もかゝらず錢も入らず、結構な事なれども、我も人もそうはつゞかず、踏はづしは有る物なれども、同じ樣な踏はづしでも、することとせぬ事有り。此處が分らねば、必ず災に逢ふ物なり。我門人何某が、古郷へ歸る餞別に送りたる一書有りとて、取出して見せにける。

門人何某に示す

予若年の時漢書を讀み、高祖關中に入つて秦の苛法を去り、法三章を立つ。我も自ら法三章に約して血氣の禁とす、盜博奕密夫なり。此三の悪しき事は小兒も知りたる事なれ共、我知らずお

れば奴が土手店で買つた鞘には事替り、去とは能く仕た細工にて、どれにもしつくり相生の、松茸賣とは是ならん。こちらの後家も素人なれば、能い野鴨の類に成つて、さのみ目にも立たねども、名高い役者の後家故に、大さうなる評判すれど、若も彼團十郎代々の儒者ならば、相手の後家に貞女兩夫にまみえずの女の道を破らせ、其身も定まれる妻の外に他の女を犯し、江戸中の口の端に掛る不埒を仕出して、言語道斷ともいふべけれ、相手も役者の後家なれば、譬殿御に別れても、又の夫をまうけなよ、主有る女の不義同前といふ事は、芝居で聞いても耳へは入らず、どうで只は居ぬ者なれば、團十郎がせしめてもせしめいでも亦同じ事なり。扨又器量のよし惡しは、天此人を生ずれば、不男でも惡女でも餘りて打やつたためしもなく、夫相應にかた付く物にて、人々の物好次第、鼻のひくいが靨と見え、毛深いが天鵝絨の手ざはりに覺えるは、外より少も搆はぬ事なり。不器量な女と色事したを笑ふなら、美人を女房に持つた者へは誤證文を書かねばならず。此方に一切喰ふ氣がなけりや、人の女房と枯木の枝ぶり、よからうが惡からうが、してやんしてどうしやうと、やつさもつさぺんぺこぺん、いらぬおせわのかばやきなり。扨々飛ばぬ事なるを、飛んだ事ンだ〳〵と江戸中の沙汰に成るは、大そう過ぎた比喩なれど、君子の過は月日の蝕のごとし、過つ時は人是をしるのはしくれにて、此道

て問うて曰く、市川團十郎とは何人なるや。彼人腹を立てて曰く、知れた事役者なり。役者も役者による物なり、元祖團十郎一天下に名を揚げてより、初の柏筵後の海老藏、今の團十郎に至る迄、都鄙遠近三歳の小兒も知り、親玉といへば團十郎と覺えたる、此道の名家なるを、此度の不埒故、數代の名家に疵を附け、市川の苗字を穢し、世上の口の端に掛る事、言語道斷の事なり。扨彼後家といへるも、左のみ美人の聞えもなく、いか物喰ひの噂とり〴〵、江戸中の物笑ひと、眞黑に成つての咄。矛又笑うて曰く、扨々先程飛んだ事の讀賣、其譯も分り兼ね、今亦飛んだ事のお物語、初はほんに飛んだ事かと思ひしが、能々咄承れば、是程飛ばぬ事はなし。夫役者の身の上は、貴賤上下の贔屓を請け、諸人愛敬を第一とするなり。わけて立役ぬれ事師、女に贔屓せらるれば、棧敷の入が多い迚、給金も上るなり。或は女の櫛笄手拭浴衣烟草入に、贔屓の紋を付ける事、是等は不屆千萬なれども、付けさせる親や亭主がべら坊といふ物にて、役者の方に科はなし。又奥勤の女中なんど、傳を求め緣にたよりて、扇楊枝差に役者の手跡歌發句を書いて貰うて、是を尊ぶ事祖師の御筆定家の色紙よりも勝れりとす。夫にも千差萬別蓼くふ虫も好々と、己々が贔屓々々、或は西の下棧敷、通りながらの捨詞、夫から熱にうかされては、種々樣々の夢を見る。中にも後家の明重箱、借人の仕合貸人の歡び、さ

飛だ噂の評

我も亦徒然なる儘に、日ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなし事を、そこはかとなく書きつくるとは謊の皮、折角ない智恵の底を叩いて工夫仕出した金唐革も、度々の雨天に差つかへ、隙あれ共錢なければ、せう事なしの別莊に、風雅でもなく洒落でもなく、浪人の侘住居、喰はず貧樂のみなれ共、主人が欲けりや飯粒を二百石か三百石に負けてやれば、何時でも出來ると思へば苦にもならず、二朱か壹歩工面すりや、四海皆女房なりと悟れば寐覺も淋しからずとはいへ、一人できよろり、關々たる雎鳩は三股の洲にあり、窈窕たる妓女は中洲にも好逑ありと口すさみたる折しも、表の方に人聲して、飛んだ事ンだ〳〵、市川の團十郎色事の大評判、又彼後家も後家でござる。惚れるにも程が有る、ほれて惚れてほれぬいた、飛んだ事だ〳〵と追々の賣聲は、例のたわいもなき事ならんと、つぶやき居たる處へ、或人來りて曰く、世間一枚飛んだ噂は、市川團十郎或後家に喰ひ込み、段々ともめ出して、旣に市川の苗字を削られ、芝居も搆はるべき程の事なり。あゝ愼しむべきは色事なりと吐息ついての咄を聞いて、予笑う

自序

むかし〳〵其昔、祖父は山へしばかりに、娘は川へ洗濯に、其娘のぼた餅を、萩の花と間違へ、美しからうと思ひしやら、久米の仙人目をまはし、すんでんころり山椒味噌、からき命を漸〳〵と息吹返し、娘も共に雲に打乗り消失せけり。夫故末世に行衞しれぬ道中の竹輿かきを、雲介とは名附けたり。扨祖父は山より立歸り、おらが娘が飛んだ〳〵と立ちさわぐを、近在近郷聞き傳へ、飛んだ咄をお聞きだか、飛んた事だ〳〵と、だん〳〵といひ傳へる、是飛んだ事の始り〳〵。

戊の九月　　風來山人誌

跋

童謠に曰く、五尺體が三尺解けて、跡の二尺はちぎる樣な。謹んで按ずるに、解けるが如くちぎるがごときもの、海參に藁あり、人に人あり。或は新五左石部金吉も、一度吉原の風に當れば、其柔なること山屋の豆腐のごとし。我風來先生嘗ていへる事あり、豆腐は軟なるをいとはず、遊は和するを厭はず、しかはあれども、若豆腐に膽水を入れざれば、練酒のごとく米泔水の如く、遊の節々に極なければ、闇夜に鐵砲を放すに似たり。我に極あれば、先の是非自から明けし。酒の失を知らざれば、酒を呑んで酒に呑まれ、遊所の是非を辨へざれば、遊所に行つて前後を忘ると。宜なるかな此言。手前に一箇の曲尺ありて、能く人の長短を知り、今此をだまきの評を著す。彼義士大星由良殿の敵程にはあらずとも、人皆願あり望あり、望は本なり遊は末なり、本を外にし末を内にすることなく、身の分限を知りて程々に遊びなば、一時の榮花に千年を延るとやいはん。

安永三年甲午秋七月　　門人無名子誌

しといへども、三千人に餘れり。岡場所より來れるは多しといへども、五十人に過ぎず。孟子に所謂、諸の楚人これを咻しうせば、多勢に無勢叶ひ申さず、岡場所の悪風儀もいつとなくそろ〳〵と吉原風に變ずるなり、必しもいとふべからず。山は塊を辭せず海は細流を辭せず、日の輝すが如く鏡の映すが如く、廣大無邊の取込勝負、六十餘州の人所、千差萬別の物好、粋は粋だけ面白がり、鈍漢は鈍漢程嬉しがる。萬兩も一夜につかひ、百疋で二度も行かれる、勝手次第の衆生濟度、廣いが吉原、つかへぬが吉原、花は三芳野女郎は吉原、他所の櫻を芳野へ植ゑても、卽ち吉野の櫻なり。岡場所の私娼でも、吉原へ來りたれば直に吉原の娼妓なり。美と悪いは手に取つて御覽じやれし。

甲午の初秋　　風來山人書

りては、粋もなく野夫もなく、無中に有あり有中に無あり、尊きと美しきが面白きにも限らず、賤しきと醜きが面白からざるにもあらず、それ相應の樂にて、撮千魚は石菖鉢をめぐり、鯨は大海をおよぐ。牡丹も花なり野菊も花なり、夜鷹船まんぢうを樂む者は、鼻の落ちるを事ともせず、岡場所に遊ぶ人は、岡場所を最上と心得、吉原よりも勝れりと思ふ。花景丈の味噌を上ぐる、女の羽織は世の風俗を亂り、跡先しらずの浮拍子は、遊に風情ある事を知らず。是岡場所の惡風儀なり。又内證の苦み薄く、自然と心のびやかにて、氣象に微塵もいやみなしとは、鮑魚の肆臭きことを覺えず、深川に遊んで深川の穴を知らず。夫彼地の女郎は鞍替ものあり、つき出しあり、甚しきに至りては、人の女房を賣るもあり。或は女郎の身で新子をかゝへ、我身を買うてめぐりを打ち、掛金百落しの下卑有つて、いけもせぬ癖人を茶にし、客の前にて呼き合ひ、一字はさみてあて付けたり、歌の唱歌の耳こすり、亭主の身替りのれん替、前の家名は風呂敷に殘り、大工はしがく所に工夫をこらし、一二三王玉と名付く。流れ渡りの岡場所と、萬代不易の吉原をくらべ物にはなりがたし。又吉原の裏三廻は扨置き、詞つきからもの日の作法、仕著せ衣裳の模樣迄、古風を少しも易へざるが、此地の尊き所なれども、未熟の人の知る所にあらず。又吉遊子の議論尤なる事ながら、これも去りとはいらざる世話なり。今吉原の女郎少

里、大磯假粧坂の類、其名殘りて今はなし。實に治まれる御代の御惠み、繁花の地は鄙都を限らず、色里多きその中に、押出したる免許の地あり、擬者あり、かくしものあり、地者有り、はんかあり。其品々をいはゞ、傾城湯女白人踊子、比丘尼飯盛綿つみ、夜鷹蹴轉し舟饅頭の類は小歌にも出でたれば人々の知るところなり。近年提鑑と稱するは、持はこびの手輕きよりいひはじめ、山猫と名付けしは、化けて出るといふ事ならん。又地獄とあだ名せしは、其初淸左衞門となんいへるもの、此事を企てけるを、箱根の淸左衞門地獄にもとづきて、仲間の者の合詞に、地獄々々といひしより、今は其名とは成りけらし。ものの名も所によりて易るなり、浪華にては惣嫁といひ、伊勢の鳥羽阿濃津にては走りがねと呼び、古市にてはあんにやといふ。伊豆の下田にせんびりあり、松崎にくねんぼあり、丹後にしやらかう、越後には冷水浮身あをのごあり、長門の萩にかごまはし、下ノ關にて手拍とは、船を見掛けて手をたゝくより號く。肥後にきぶし、長崎にはいはちあり、小女性有り、信州上田にべざいあり、松本に張箱あり、加賀に化鳥名護屋にもか、出羽奥州に根餅とは、其初の女共蕨餅を賣りける故、其名とは成りけるなり。津輕にてけんぼといひ、南部にておしやらくと呼び、松前にて藥鑵といふは、尻が早いといふ事なり。尊きと賤しきと善と惡いの差別はあれども、情を賣るは一ッにて、極意に至り至

なし。竹子の調味升屋が洒落、二軒茶屋二軒に限らずして榮え、鹽濱鹽を燒かざれども賑ふ。角力あり開帳あり、山開あり夜宮あり、木場の岡釣には太公望も歩をはこび、三十三間堂の大矢數には養由基も汗を流す。新地の名いつとなく古り、石場の人自から和らぎ、追々客の入船町、遊びの跡を直助屋敷、表櫓裏櫓、裾繼やぐら佃新地。中にも土橋中丁には全盛の君多く、川には船筏を組み、陸には駕夫の屯をなす。送りむかひの提灯は宇治の螢の飛びかふが如く、茶屋に持込む寢衣は鳴門の濤の寄するがごとし。間毎の座敷はれやかにして、山海の美味刻を正し、藝者の調子尋常に勝り、さわぎの小歌天下に類なし。世上の女の羽織着ると、サッサオセオセの浮拍子も、皆此里を始とす。又女郎の氣象といはゞ、夜店といへる退屈なく、或は裏の三廻目のと、わけ隔てた仕打なく、新造袖とめ座敷の普請、簞笥長持夜具諸道具、抱の仕著せ茶屋船宿、牽頭末社の付屆、紋日の數々暮のやりくり、無心工面の責もなく、同じ勤といひながら、内證の苦しみ薄く、自然と心のびやかにて、氣象に微塵もいやみなし。今吉原へ押出しても、あまり跡へは下らぬなり。是でも岡場所と賤しむやと、顏を赤めて論じければ、麻布先生莞爾と打咲みて曰く、御兩所の爭ひ最前より承る、各一理なきにしもあらず。去りながら井の内の蛙大海を知らず、夏の虫氷を笑ふの論なり。夫吉より著しきは、江口神崎野上の

ながら能いと定めたるにもあらず。細見嗚呼お江戸の序に有る如く、成は骨太毛むくじやれ、猪首獅子鼻棚尻の類なきにしもあらず。吉原の女郎なればとて、代々其家筋有つて、女郎が女郎を産むにもあらず、腹の中から誂へて拵へさせるにもあらず、又岡場所の女郎とて、下り細工の出來合にもあらず、つまる所は親兄弟榮耀榮花で賣りもせず、爲事なしの廻り足、吉原へ行き岡場所へ行くも、皆夫々の因縁づく、能きも有り惡いもあり。江戸前うなぎと旅うなぎ程旨味も違はず、下り酒と地酒ほど水の違もあらざれば、吉原にも絲瓜有り、岡場所にも美人あり、又幼少からの育てがら、立居ふるまひ髪容、第一氣どりを大切と、此詞又非なり。習性と成るといへば、鉢木の梅うけぢの松、仕込にもよるべけれど、堯の子丹朱不肖なり、舜の子も亦不肖なり、三年磨いても無患子は黒く、十年煮ても石は硬し。又龍文鳳姿とて、生れながらによきものあり。八丈島で八端がけを織り、王子から菊之丞が出たれば、土橋中丁は扨置き、根津音羽萊菔圃にも、揚貴妃西施が有らうも知れず。扨又當世に疎き族、深川の風流なる事を知らず、只一口に岡場所とのみ覺えたるは、片腹いたき事共なり。吉原の地は北陰にかたより、一方口にして道遠く、くはだてざれば行く事ならず。深川の地は陽氣にして偏らず、船の通路自由にて、牡蠣店の牡蠣文蛤町の文蛤、鰻鱺は黒江丁に名高く、鴈金焼は萬年丁にかくれ

何やらに似て氣の毒なりと、心ある人々の評判も有りしぞかし。病に應かぬまや藥は、ゐあひを拔き獨樂をまはし、いろ〳〵にしやべらねば賣れぬ故にもがけ共、眞に病に應く藥はだまつて居ても買ひに來るなり。料理で落を取らうとしたり、さま〴〵の思ひ付は、まや藥を賣る同前で、女郎の恥と心得べし。又藝者幇間も、岡場所にまぎれぬやうにと、不斷の心得第一なり。かくいへばとて、必しも大きな面はせぬがよし。米が安うても江戸は江戸なり、買人の來ぬは地合が悪いか、染樣が氣に入らぬか、模樣が當世にむかぬかと、代物に氣は付けず、あぢな所に骨を打り、今の樣に段々と思ひ付がかうじたら、中の町に男倡茶屋、大門口で夜鷹が引とめ、大どぶに船をつなぎ、船饅頭が出やうも知れず。モウそろ〳〵と此節は、岡場所が吉原歟、吉原が岡場所歟、我がおれかおれが我歟、女郎と賣女のつかみ賣、何でも擇取十九文、扨苦々敷事なりと、眉をしかめて申しける。其時花景銀烟管を取直し、灰吹をくわち〳〵と敲き、あざ笑つて曰く、古遊子の論高きに似て甚低し。されば古歌にも、

植ゑて見よ花の育たぬ里もなし心からこそ身は賤しけれ

同じ天地の間に生ずる人間、國をわけ郡をわけ、村をわけ里をわけて、其品を論ずるは僻事なり。いかにも吉原は日本第一の遊所にて、女の姿勝れたりといへども、百人が百人千人が千人

影向あり、天人が天降つても、負けぬが此地の女郎なり。岡場所の賣女ども、奴となりて來りなば、やはりかへ玉同前に、一月一貫八百づつで預捨にして置く歟、さんとか松とか名をかへて、嬖妾傅婢にして使ふ歟、いつそ鐵砲店へでも追下し、免許の遊所と岡場所は雲泥萬里の違ある勢を見せてこそ、吉原ともいふべけれ、いかに末世に成ればとて、岡場所の土娼共に大造なる名を付けて、二人禿座敷持、歩行もしつけぬ道中、其癖稽古に骨を折り、あひるの足どり南繇傀、中の町の人立に氣を登して眩轉せば、跡のいざこざ面倒なり、又下地から吉原に居る女郎もふがひなし、親方は金さへとれば、幽靈をとらまへても商させ度心なりとも、イエわつち等は岡場所の土妓衆と傍輩には得成りいせんとつゝぱれば、此相談はじやみる筈なり。吉原中に智恵がなく、女郎に氣がなき故、斯のごとくに成行きて、剩さへ自慢さうに細見迄を拵へて世上へ恥をさらすなり。岡場所の容までを引付うといふ氣をやめて、客が來いでも吉原ぢやと、古流の角を崩さぬやうに、じつと守つて居る時は、奥床敷見ゆる故、自から繁昌するなり。移り安きは人心、上方にても、一頃は祇園町島の内北の新地が繁昌し、新町島原は不景氣なりしが、近頃は又そろ〳〵と餅は餅匠へ復るなり。思ひ付にて流行事は、一花計でさめ易し。當年の俄なども、初は手がるくてをかしかりしが、後は段々おもくれて、役者の聲色門をどり、

黒い所も一面に涙をばら〳〵とこぼし、山の手から吉原まで屆きさうなる吐息をついて申しけるは、嗚呼笑止なる事を承るものかな。我日本は小國なりといへども、五穀豐饒に金銀多く、萬の物に事を缺かず、繁花の地甚だ多し。京に島原大坂に新町長崎の丸山をはじめ、諸國の色里かぞへ盡しがたく、各土地の風流有りて、何れも面白からざるはなし。有るが中にもお江戸の吉原、一というて二のなき事は人々の知るところなれば、今更にいふがくだなり。世上にて目に立つ器量も、此里の女と競べては、思ひの外に見おとすなり。近き證據は、山下にてとんだ茶釜と聞えしは、一頃の大評判、能く聞けば吉原にて何とかいへる女郎なりしが、吉原に居た内は本の十把一からげ、さして目に立つ事もなし。廓外へ押出せば、掃溜の鶴砂の中の金、飛んだ茶釜の堀出しものとは評判に及びしなり。斯く吉原の女郎の勝れて宜しう見ゆる事は、幼少よりの育がら、立居振舞髪容、第一氣取を大切とし、禿の時より姉女郎の仕込方あることなり。就中其古、太夫格子の上品に至りては、琴三絃はいふに及ばず、詩歌俳諧香茶の湯、碁雙六躾方、何れの道にも闇からず、諸藝を知つて知つた顏せず、見識有つてべた付かず、上方の女郎などの眞似てもならぬが吉原なり。今のさんちや付廻しは、以前の太夫格子に劣らず、意氣地あり風雅あり、各たしなみの藝術あり。これ昔の風儀殘り、古川に水絶えず、假令菩薩の

吉原細見 里のをだ巻評

賢を賢として色に易へよと、唐の親父がむだをいひ、外面似菩薩内心如夜叉と、天竺のすつとの皮が思ひ入にはり込みても、面白いといふ事を呑込んでゐる凡夫ども、氣短にいうてはいけぬと、闇雲に踏破りて、あしびきの山の手に一ツの艸庵を構へ、自から麻布先生と號する人あり。されば賤しき諺に、牛は牛連馬は馬連、同氣相求め同類相集るの習にて、古遊散人といへるしれもの、殘暑の見舞に來りし折節、麻布先生の門人花景といへる當世男來掛りて、四方山のもの語。三人寄れば文珠の智惠はどこへやら、そろ〳〵と理に入つて、例の遊びの魂膽咄し。花景じかづべらしく懐中より小册を取出し、先生達も御存じ有るまじ、これこそ吉原細見の一枚摺、里の緒環といふものなり。抑此一卷といつぱ、土橋中丁樓下の腐艸化して螢と成り、今五丁町に光を爭ひ、全盛いはん方なし。京の娼妓に江戸のはりと、それは昔の喩草、今ぞ吉原深川をもみまぜば、兩の手に梅櫻、遊のきつする喜見城、此上の有るべきやと、我一人呑込んでりきみ返つて味噌を上ぐれば、古遊散人熟聞いて、彼をだまきの一枚摺、白い所も

里のをだまき評自序

莊子が寓言、紫式部が筆ずさみ、司馬相如が子虚烏有、弘法大師の兎角龜毛、去りとては久しい物なり。予も亦彼虚言にならひ、氣のしれぬ麻布先生、古遊花景の人物を設へて、譌八百を書きちらす。針を棒にいひなし、火を以て水とするは、我が持まへの滑稽にして、文の餘情の譫言なり。或は所々の地名なんどは、人の耳馴たるに便りて、直に其名を出せども、固より作り物語なれば、實に此事の有るにはあらず、見る人怪しむべからず。安本元年手狐のはつ秋、有頂天皇九代の後胤、風來散人、居續の風呂揚、宿酒の夢中に筆を採る。

飛だ噂の評　天狗髑髏鑒定縁起　里のをだ巻

飛花落葉　菩提樹の辨　細見嗚呼お江戸の序

風來六々部集　後編

風來先生書捨て給ひし反古を太平館主人拾集めて六部集といふ其言意外に出て一家の文法古今獨歩といふべし今に至りても我人共に見んことをほりすしかるにかの集はやくより世にともしく成りもて行くまゝにこたび櫻木に彫り猶殘れる花をもあつめて六部を增補し前後四巻となし六々部集とはなりぬ

餘貨樓銅多言

跋

先に風來先生、はなさき男のために放屁論を戯述して、其屁海内に響き、其文は淀の川屁に水車の廻るが如し。書林は錢を積上げて、階子屁の尊きを知る。此屁の臭味を忘れ兼ねて、又ともよが事を著せよと我門人滑稽浪を責む。彼は屁の可笑物をとらへて天下の才子に握らせ、是は力業の可笑からぬ者を以て、井の内の蛙に物眞似せよとは、屁ぴり儒者にもあらばこそ、俳の力もない者に、さりとは〳〵と云ひながら、其後に書して書肆浮龍軒に與ふ。ナント榮良軒朶老

げて量るべからず。是に於て主人五年の給仕を免し、期年にして故郷に歸らしめんと約し、且其力を千萬人に見せしめんことを求む。登毛與期にして歸郷するの歡に堪へず、辱を千萬人に忍んで遂に此業を爲す、其孝ある事見つべし。誰か是を憐まざるべけんや。

む事は武士の道めづらしからずと、今川状の眞中を一寸斗り切拔いて己が行ひとし、只新らしい事好み、象牙の撥の胝は手綱の胝より高く、弓手の爪の糸道は鞢の弦道より深し。役者の身振を學ばずんば、いかんぞ奢の腹をへらさんと、怠懈放侈の心より、親仁の尻は祖父樣より重く、息子父爺樣より弱し。只通を以て義とし口を以て勇とす。弓矢神かゝるのら者の多きを歎き給ひ、武士は天下の神物なり、すべからく靜謐る事を掌るべし。それに何ぞ今の若さに武藝をも語止めて、天の岩倉に居つゞけし。伊豆の千別に千話文の手跡さへ拙く、遣り手若い者への祝義は紙拂に掃ひくさり、ちくらの置藏にひどい工面をしてにげ、耳にもろ〳〵の異見を聞いて心に此頃の不孝を思はず。こゝに於て八百萬の神たち神議にはかり給ひ、中にも大力持尊、ともよが體にやどり給ひ、世上のなまけ男に見せしめ給ひて勇氣に引入れ給ふ歟。何にもせよともよが力量、ハテいぶかしやナア。

傳に曰く。登毛與越の後州、高田城邊の農夫の女なり。父が收むるの田六十畝あり。（六十畝は大畝也千八百歩をいふ）家極めて貧し、今年黄金十片の爲に、六反の田を失ふに及ぶ。晨昏歎息す。登毛與父が悲歎を見るに忍びず、隣家の主を憑んで我身を十片金にうつて、二月十日東都の蘿蔔畠に至り、柳家某が半物となり、六年奉仕の約をなせり。一日登毛與、四斗酒一樽を酒局に納るゝに、一毬を

の上には自然と其姿のあらはるゝものから、小町の歌を評しては、つよからぬは女の歌なれば
なるべしとも書いて、三十一文字のことくさにも嫋々たる風情は見ゆるを、婦人としてかゝる
力者に生れたるは何ぞや。
私に按ずるに、扶桑武を専に尊む事、鎌倉の右幕下、總追捕使の職に補せられしより以來、天下
盡く武威に伏して今猶かくの如し。治世に亂を忘れざるは専武道の本意なるに、今時の息子
株、安樂に居て安樂に厭きたらぬ事をいかん。こゝに江都の自由自在なる事、試に其一二を擧
げば、鴈鴨のあてがい賣、冬瓜東瓜の切賣はまだな事にて、短尺梶の葉の裁賣あれば、鳶凧の請
合賣有り、鯨うなりのふりうりあれば、鐘の出來合あり、風鈴そば切夜發そば、田樂鳴燒やき
肴、一ぷく一錢の荷ひ賣、結納の突かけ買、葬式の損料貸、切ぬきの地紙には古骨を世に出し、
張ぬきの似面はむだ骨とも聞えず、よかれあしかれ捨るものなく、何でもかでも十九文と、何
闇からぬお江戸の繁昌、イヨ秀鶴有がたいと、めつたむしやうに有がたがるかと思へば、かゝる
御代に生れ出しを有がたいとは思はず、夏は晝寐して居る座敷迄屋根船が著かぬとの小言を云
ひ出し、冬は巨燵の前へ芝居があるいて來ればよいとの我儘、只いきな事をのみ尊み、欣々通
通として、鮫鞘のお太刀は煙管より輕く、囊の帋入は七ツ道具を兼ねて重し。弓馬合戰たしな

をくはせて、書物を片つぶしにもなりがたし。傾城に誠なしといへばとて、どうぞ節句に來ておくんなんし、外に頼む所もありいせんと、せつなる詐の無い事なるべし。詐多きは見せ物の看板、かんばんにいつはりの無いと云ふが則詐なるに、此ともよが力はまことに往古の巴にも賢りつべし。民部省に主税寮あり、仁王樣に力紙あり、腕に覺えは力瘤、鷹の抓むは力艸、馬具に逆鞁あれば刑具に萬力あり、祇園に一力伍長に與力、山伏に強力苗字に高力、コンコヽリキコヽマカリキ迄は聞きしが、女にかゝる大力ある事を聞かず。奇なるかな妙なるかな。俠たる彼淫行黨が、大根畠に豆の萠がござると唄ひしは、此地開闢の比の口調にして、大根ばたけ豆藏を蒔くと武玉川にも見えたり。時なる哉、今此畠を探して力もちといふ餅を得しは。末代力者の鏡餅、くもらぬ御代のしるしとて、田に出來る餅米を畑へ植ゑても熟しつべく、畑へ作る餅粟を田へ蒔いても實りつべし。此時に當つて、木に餅の生るといふ譬もあまり旨過ぎた事とも聞えず、畠の中といへども、田螺をも取得べく、赤貝をも取りつべし。琛を提げて木場に趣き、提籠をかたげて榑河岸を過るも、木に據つて魚を求むるともこじつけてん。孟軻は泰山を挾さんで北海を超ゆると、力業にも及ばぬ事錠の下りたとへに引けば、貫之は力をも入れずして天地を動かすと、敷島の道廣く溫和に說きかけし、此國のきまりなるべし。さればよみ歌

力の士なれども、家をさし上ぐるを片手わざにせんや、重ねては兩手にて指上げ給へかし」と。栢莚答へて曰く、「非なり。時宗いかに大力なりとも、いかんぞ家を指上ぐる事を得んや。これをさし上ぐるは則狂言戲藝の情なり。是剛强の甚しきを見するのみにて尤虛なり。されば兩手にてさし上げて强く見せんよりも、片手にてさし上げたらんは殊に强く見ゆべきなり。其實を正さば、兩手にても指しあぐべからず」と云ひしを、訥子深く感じけるとぞ。況んや唐土の萬八卷の書籍に力婦の沙汰ありとも、それは夫れに片付けて置かんものなり。詩邶風簡兮篇に、有レ力如レ虎とは、大磯のとらが事を言ひて、大磯のとらは漢宮三千第一の美人、夫狹手彥が不老不死の藥を取りに日本へ歸る時、李白王維等と共に明州の津に分れを惜み、きこえませぬぞ狹手彥さんと追ひかけしに、股野五郎景久が、山の上より投げかけし重さ三萬三千三百三十三貫目の大石を請留め、目より高く指上げたり。深川の三非先生筆を揮つて、三圍の繪馬堂に此額有り、石はあづまの森の內に有り、則とらが石是なり。夫狹手彥此勢ひに恐れ凝堅まつて石と成る、今淺草の地內に久米の平內是なり、などと書いて置かれても、見ぬ事は口が利かれず。されば水滸傳に一丈青扈三娘あれ共、ともよが心には豆腐小半挺とも思ふべからず。故に盡く書を信ぜば書無きに如かずとは、諸事杓子定規にするなとの敎、さればとて無性やたらにはり込

戸口のやつさもつさ、大入とは云ふをだまき、くる〳〵車に俵の曲持、つく〴〵感ずる円のれんまん、うつゝをぬかす碁盤のかねあひ、譽める聲は高けれど、安いは木戸錢廿四銅、四人合せて百せんの雷一チ度に落つるがごとくなり。抑此ともよは、此度大坂表よりお江戸見物のために罷下りしを相頼み、各樣へお慰のため御覽に入れ奉ります、といふは表向の口上にして、實は大坂の者にあらず。北陸道の北の方、越後の國のかたほとりに、山岡が末葉にもあらず、酒呑童子の親類にもあらず、上杉家の臣下にもあらず、弘智法印の檀家にもあらず、高田近鄕の產なり。其容貌美にして膚は狗脊の綿のごとく、ぽちや〳〵やは〳〵としかも雪國の白きを見せ、皮薄なる事のし縮の如く、湯上りの姿は鹽引の色を帶びたり。越後の國の大坊主も、首のありたけ延しつべき風情、更に力者のあらくれたるさまにあらず。故ありて江都に來り、大根畠に住する事又故あり。

凡力婦は、日本にては巴板額を親玉として、清水上野が妻以下、近江のおかね奴の小萬に至る迄、其數あまたありといへども、目前の事にあらざれば、くらべ物になりがたし。男子の力量といへども、書の上に形容し、狂言綺語にまなびて信しからぬ事多し。故人栢莚、五郎の役にて、せり出しにて、家を片手にさし上げて出たり。訥子これを謙めて曰く、「時宗もとより大

力婦傳

都鳥は吾妻の隅田川に名高く、すみだ川諸白は淺草の名物、眞先の狐は稻荷の社をはなれて、汐入神明の地内にお出〳〵と呼ばる。元柳橋に柳ありて、柳橋に柳の無きたぐひ、何共其意得ぬ事に存ずると、苦に病んだ所が大の無娜なり。柳の糸の、かゝる事は打遣りておくべき事とて、諸事柳の名あり。名にしおふ兩國の涼も、大橋の新地にけおとされ、千ふね百ふね、皆三ッ叉を臨んで走れば、岡涼の千萬人は各石垣にそうて進む。銀燈萬樹のはなの穴もふすぶる計の灯の光、陸は安藝の宮島の本店かと疑ひ、川は天滿祭のふり賣かと怪しむ。硝子細工は逆につるさね共美しく、汲たての氷水ぬるけれ共涼し。鰹の雉子燒夜の鶴市、子を思ふ親仁も口に涎を流す。憐むべしお跡眞闇にして、間部河岸鍋より黑く、元矢の倉素より暗し。此時に當りてさんげ〳〵は岡に居て唱ふとも、見咎むる者も有るべからず。境葺屋の兩町も、今年は五月雨と共に垂れこめて曾我祭の沙汰もなく、土用休に引續けていと寂寞たるさまなり。それが中に樂屋新道の賑ひ、いかなる事かと見れば、大坂下り女ちからわざ、ともよと染ぬきの大幟、木

りくらりの劫を歴て、青大通の殻を脱け、浮世くるめて丸飲の、蟒蛇となり給へと、叢探の穴賢穴賢。

貞の家士大星由良之介が、嘘から出た誠でなければ末が遂げぬといへるごとく、魂膽狐のすつとの皮、釣留んとする狩人は、度々の罠に金銀を費し、果は直化實の化、實が嘘にて嘘が實、心の誠がまことに顯はれ、身の油の揚鼠で、眞の甘味を喰はせたら、どの樣な白藏主でも、しん實の尾先を顯し、手に入る段に成つたなら、懷春の處女や、男ほしい侍女の、郤合切つた浮氣より、垢拔のしたいろざとなるべし。併かやうに申せば辻、親の讓の家を潰し、居屋敷を打ちこんで、深はまりはいらぬもの。只女郎は遊び物、遊君遊女の遊の字は、あそぶといふ文字なれば、一歩ならば一分だけ、二朱ならば南鐐だけ、客といふ字の位を落さず、買といふ字を心に込め、惡穴を言はず、惡洒落を決してせず、見えをいはず嘘をつかず、男氣を專らとして、座敷の數を重ぬる時は、需めずして通となり、態とならざる仕内の中に、自づと出づる面白みには、傾城もおもひ付き、世間でも難有がるべし。よしやそれは千差萬別、女郎殺の魂膽にて、お手に入るのも有るべけれど、高が玼瑕ない女郎の才角、拾兩遣つて五兩は引けず、假令五兩引けた所が、心盡しがいくらのこと。なれ共是も得手勝手、吉原でかいた恥が、家の瑕瑾に成るでもなく、女郎に不實をしたればとて、一家親類に見放されもせぬものなれば、詰る所が理屈もいらず、何して見るも樂しみなれば、差徒に千年似た山に千年、すつとの皮に千年の、ぬら

りやアえエから勤めたがいゝ、あんな横倒しやァ座敷をあけろといふだらう、口を明かせねエやうにこけエ入れたがえエと、うぬが方から引けを取り、氣を通す心遣ひ、誠に粋が身を喰ふとは、是らが事を言ふなるべし。此調子にてばんじけちく\と立廻るを、色仕立と號くるよし。どこの仕立やが仕立るか、去りとはきう屈な仕立樣、我等がやうな肥滿た者には、尻がへばつで著悪しと、笑はれしも理なり。斯の如く引けを取るも、一體の下心は女郎の内股へこび付いて、一度振の勤なり共、引みんたんにせんと欲する、むさき根性より起る事なり。蓼くふ虫も好好ゆゑ、一概には言はれねど、左程身錢がだしとむなくば、たかで遊びに行かぬがよし。一度ぶりの勤さへ工面の出來ぬごくだうなら、假令氣のある女郎でも、あいそを盡かすは知れた事なり。行著くまでは遣つて見ぬ不甲斐なき魂にては、傾城は扨置、何事に寄らず行くものではなし。又席狹き遍鋋が、傾城に誠なしと、四角な卵を引事にて無面目に言破れど、女郎の子が女郎にもならねば、傾城の種ぢや迚禿の黄巻が有るでもなし。我は親兄弟の爲に沈みし戀の淵、一頭の朱脣萬客嘗むと聯ねし如く、入替り引替り來る客が、惚れられまいと思ふも無ければ、鍾愛可愛の情を述べ、惚れた惚れぬのせりふにもげつぶをして居る矢先なれば、めつたに惚れぬも道理なり。其又惚れぬ傾城を手に入れやうと思ふには、誠の一字を以てすべし。鹽冶判官高

ひ、寢む度とも居眠らず、泣ともなく共きぬ〴〵の、別に泣かせ申すべし、起請誓紙に身の內の、血をば惜ませ申すまじと、書きたる如く、思ひまゐらせぬといふ文もなく、替りませうと書く誓文もなきものにて、臨機應變御緣次第、小股潜の書人と見れば、主に苦勞は懸いせんと、夫相應の調子に合せ、所詮いうても錢にはならず、三度來たなら三度だけ客帳の駄目を差し、賣の込むのが得なりと、十把一トからげに見縊られたる心、恥敷事にあらずや。大通の元〆文魚先生が茶飮咄に曰く、今の浮世の女郎買に、まだしもに見ゆる物は新吾左の遊びなり。買切つた上からは、傾城の五輪五體は我ものと決定し、假令名染の客にもせよ、貰引を聞き入れず、少と床が不勤か又は床廻が惡いと、忘八を呼べと切刃廻し、傍搆はずがなり出せば、心の內では親の敵のやうに思ひながらも、何でも一夜の賜願なれば、おゆるしなんしと誤つて小言いはるゝ右流左さに、まんぢりともせず勤めても、商賣冥利かうする筈と、客といふ字を眞向に差翳し、腹一盃に權威をふるへど、定式の入目の外格別の金が入るでもなし。又聞いた風の通共が、書人とか魂膽師とか名を付けて、諸事扣目に立廻り、面白くさえて居る最中に、件の如き客が來て、差合ならば貰うて出せと、言譯聞かずだゝけ散せば、まだ貰にも來ぬ先に、爰が通だと氣を通し、ありやァ手前が客人か、つがもねェとんちきだの、したがあんな奴が爲に成る、お

は、穴の貉の盆暗共、適登樓の後朝には、先づ友立の所へ欠込み、態と寢むたい顏付にて、マア聞いてくんなさエ、斯いやァどうか味噌を上げる樣だが、つがもねエ難有てエ句が有るサ。どうしたもんかめつきりと晝が付くよ。マア斯だ、夕ア少切ツ懸のある傾を張りやした、所で床が納まると、サアつがもねエ銘句を吐きやす。そかァまた恐敷い櫻田が狂言に高麗やが魂膽で、廿五點といふ所をヅドン〳〵と當てた所が、先刻承知の山櫻、裏ァ身揚でゐる筈だが、隙ならおめへもあいばねエか、連の一人や二人ァロ許ではたらかせる、何んでも強敵に引みんたんのソレ、ほん突出しだが、とわへぢやねエかへと、繻袢で咽を〆ながら、脣反した自慢貌、約束の夜にいて見れば、女郎の方でもぬかりなく、夕ア貰ふ筈の客人が來いせんから、今夜はどう共しておくんなんし、今度はきつと働きいす、ホンニしみ〴〵お氣の毒でござんすと、どうしいせうの二ツ三ツもやらかして、明透らしく見せかくれば、今度は〳〵と思ふより、木乃伊取る迚蜜人已が手に蹴返して、罠に懸る白痴共、去迚は世に多し。是より段々惡業が入り、金のとれぬ腹いせに、無理にせこめて髮を切らせ、墨彫らせて嬉しがり、坊主にも俗にもござれ〳〵の起請文、又は盜人證文の當名は誰でもお望次第、指の先の厚皮でも削がせれば、早手の物と悦ぶは、去とは狹き了簡ならずや。近松翁が傾城請狀に、文には嘘を書きならひ、床にて人を燒きなら

眞暗に洒落散らすを、心ある人々はさげすんで苦笑すれば、扨はおれが口先には楯突く者こそ無ツかりけると、仕たり顔する痴漢共、知恵は三文番椒の袋より狹く、高慢の高きこと前引の月踊はそこ退なり。彼の殘口翁が小言に曰く、未熟柿が己熟せりと甘味を付けれど、根からの美味ならねば、何所ぞに否なる味の出るは腐の付けるなり。腐付けば萬の物も臭し、臭味の付く族に眞物はなしと知るべし。味噌はみそながら味噌臭きはわろく、粋も粋くさきは粋ならぬものぞとは、誠に古今の通言なり。かたの如き鈍漢めらが盡した衆の魂膽ばなしを、得手の道へ引ッかけて、とかく女郎を買ふなら魂膽が第一にて、一文なり共引きずと出でねば、手に入つたといふではないと、手前勝手な横ぞつぼう、馬鹿の上盛鈍間の下積、能く積ッても見るがよし。女郎に無心を言ふ迚も、折と時とがあるものなり。れつきとした通達でも、遊廓の金には詰るならひ、遣つた上の金詰、切刃詰りし才角に、膝とも談合男づく、頰を捨ての無心には、女郎の心は知らねども、其苦は誰がさす事ぞと、氣の毒餘ればいとほしく、人の譏りも顧みず、躶にも成り年をも入れ、身を粉に碎く黄金心中、貸人の手柄借ての名聞、氣の切れた女郎ぢやと、立つ浮名には客が殖え、客が殖えれば金もでき、首長はまる借金の、淵は瀬となる陰徳陽報、遣ふ丈の金も遣はず、何がくせやら寢がつてやら、まだ氣も知れぬ傾城に、かう一雙から魂膽と

蛇蛻青大通

大通は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。花に行く無駄人、月に通ふ遍鈍も、いづれか通を知らざりける。夫大通といふ文字は唐の俗語にて、大に人情に通じたるを稱したる字の通りの詞なり。近頃世上一般の通語と成りて、晝三買の意氣人より、切店そよりの俠客に至る迄、假にも通を唱へざるはなし。彼通に差別あり、極眞の大通は上方の達衆に等しく、くつきり立ちし水際は、水道の水の名物男、意氣地の立引男氣は、くだ〳〵言ふも緒環なり。夫より次へ落ちて來て、木葉通といふ溝飛ありて、彼大通の大びらに錢金遣ふを鈍漢と譏り、熱鐵のぐひ飲に高まんの脂をさげ、我慢己惚の鼻高く、四ッ手の翼の自在を得ざれば、ぱつち尻端折の愲惜を用ひ、羽折は長きを厭はず、身幅はひろきを嫌はず、流行物の仕出しに追はれて、工面のときんに額を痛め、常に意氣過の梢に架を高くして、江戸節の横噤をじぶくるを、天狗倒と唱へしが、近頃號けて横倒といふ。扨言語も跡を詰め、笑話の受賣に、稍々口拍子が廻つて來ると、おれは餘程通だはへと、我と我手に印可を許し、人の咄の腰折つてお先

自序

夫本覺の佛は形なく、法性の神に姿なしといへる如く、寔の通といふものは、面に通をぶら付かせず、能ない髐態をもヲヽいゝと讃め、左迄なき事にても難有と育つる故、人の照るといふことなく、立引を専とする心より、金がなくては娼妓は買はぬがまし、聲花をせぬくらゐなら、大門をば潜らぬが能しと、天の岩戸に閉籠れば、世は常不變にお先眞暗、わいだめもなき虚に乘つて、神や末社の濫吹共、神集に寄合つて魂膽咄の意氣ちよんを、聞いて居るのも無益數、殘口翁が口眞似に、勃然としたる惡口は、世上の通を壁と見て、達摩大師のはりこみを、おきやァがれ小法師といはゞいへ、頭を振つて搆はね而已。

下界隱士　天竺老人誌

けて、神のいがきもはゞかりなくて大股に打越し、終に一夜の枕をならぶ。出替りは年の暮を定め、給分の加增は赤まへだれをこぎる。物皆終あれば、古筵も蔦にはなりけり、此ものの行衛何にかならん。むかしは普賢ぼさつにもなりたる先例もあれど、今は少しの違ひありて、果は駕籠かきの妻になり、瘦子產捨て生涯を終る。未來とても覺束なし。八萬地獄あれば素人の地ごくあるをきくも、たゞ一生の福をいのる。諺にいへる、運は天にあり牡丹餅は棚にあり、まんぢうは船にありといふ。

嵩　天　坊　誌

後　序

傾城傾國は唐人の付けたる名にして、白拍子ながれの女は我朝のやはらぎなるべし。昔より品類あまたかぞふるにいとまなからん。國々の名目當世の洒落、柄杓干瓢白人巾著のたぐひ、大むね一種より出て、位階の高下は金銀の相當るなるべし。たつとからずして勅撰にゆるされ、貴人のかたはらに侍るゆゑにや、ちと子細過ぎて多くはふるみに落ちたり。爰に天竺老人のいへる如く、遊君有つて終に人の魂をとらかすいきはりも見えず、まして歌よむほどの戀にてもなし、たゞ物くひ月落烏啼の吟も、此君にあはぬうらみをのべ、江口の泊に宿かさぬきみもなくなりて、今はたゞの所にはなりぬ。伊勢路の彩色はあかめがちにて、大津草津は少しうすかるべし。冬枯のまばらなる頃は、いつとなくよわり果てて、鼻の下の煤氣もさむく、木綿所の小車の音もさびしくくれて、水風呂のほかげに足袋さすわざも侘し。片田舎は法度きびしく、表向はつとめせず。されどあはれなるかたには心ひかるゝならひ、夜更けてあるじしづまりぬればぬけいで、しのびやかに書院床の小障子あ

とやら子分とやら、どうやらかうやら亭主にしても、綻一ツぬはれねば、こそくり物にも人だのみ、ぬかみそへ手を入るゝがいや、飯をたくも手おもいと、けんどんそばで腹をつくろひ、菜はいつでも取つけの、ひしほうりがもつてくる座禪豆や菜漬で仕まふ、當座のがれのじだらく世帶、まんまと身のうへ持崩して、末はでいしのながれの身。よく〳〵運にかなうたところが、よび出し茶屋のむすめとばけ、又はそこここゝの水茶屋ぐらゐで、貧しいくらしをするもあり。おめへがたもそのとほり、いつまで若い身ではなし、今からそろ〳〵身のをさまりを分別しておきなさるのが、よささうなものではないかへ。さういふもおめへがたが、うそにもわつちが爲をおもつて、親切にいつてくださんした御禮ながらのあてこすり、良藥は苦いとやら、むしにさはらばゆるさんせ。またおめへがたが高尾さんぐらゐな人で、わつちがお跡さんほどな器量ものなら、まだいふ事もあらうけれど、何をいつても讀まぬどしかゝぬどし、今夜はとまりの客もあるはず、モウお暇申しやす」と、おのれが舟へのりうつり、ふなばたをたたいていはく、「大川の水すめらば髮をあらふべし、濁らば脚布をあらふべし。よしかく〳〵のりなんし」と、鼻聲でうたうてさる。あとに二人は顔見合せ、「なんだかねつから分らねへの。アハヽヽヽヽ」

りよせて、あとの拂はむすこのふところ。またその上に小釣はみんな手前へかきこみ、また用をいひ付けるのを鼻にかけて、茶屋のおぢゞに飯の菜をねだつてやる。さす手ひく手がみんな慾づら。その内にもうちつといゝ鳥がかゝると、さきのむすこをとらまへて、けさもゆ屋へゆく道で、おまへの來なさるのを近所のわかい衆がいろ〳〵にどくづきやす、あれでは喧嘩でもしかけやしようから、これからはこつそりと屋根船で出やしようと、あぢにもてなし、むすこが足があがつたあとへ引ずりこみ、今度のお客はからあたまから惣身で仕かけ、おやぢは用事とおもてへはづせば、おふくろは念佛講、ついそのうちにちよ〳〵けまちよけのこんたんで、疊がへをもねだり出し、竹格子がすかし窓のくろ塀とかはれば、そのあと變じておちまのくり石、隅にちよつこり布袋竹、ひかりの手合がもつて來た不動樣の御えん日にかつた鉢うゑ、藥師さまの御えん日にかつたせきだいなど、むかふの方へづらりとならべ、たけずのえんに擬寶珠のやきもの、はんどうはんざふみゝだらひ、樂屋鏡臺が立派にでき、手まへ雪隱のふしんもすめば、一夜けんぎやう半日乞食、だん〳〵ええうに實が入つて、とりつけひつつけねだりごとも、顏にしかけがあるうちばかり。目元にしわよるちりめんの、三十ふりそでになつてくると、仕おくり客もはなれて仕舞ふ。又さま〴〵な男をくつた上は、一通りなはいやになり、兄分

のを、見えらしう言はんすが、とりもなほさず狆ころや猫の子を、お膝のもとへ引付けて、なぶりものになさると同じ事。夫をよい子のふりをして、ひつかける鼻の高でうし、五分ながのいたじめ繻絆で、座いとの三をきゆつ〳〵といはせ、きく間がつぎ三味線に、千枚ばりのつらの皮、さりとはばちあたりのさいじりは、ろくでもない聲じまん。春はさくらのむかふじま、客の羽織をひつかけて、置手ぬぐひのはなうたに、裾はばら〳〵ばらをの草履、けまはしの裏模樣、もれ出る淺黄のちりめんは、しりくらひ觀音の御戸帳か、羽織のかんばんと思はれて、このもしげは微塵もなし。夏は納涼のやかた舟に、二度の月見をくゝりつけ、冬は雪見の二軒茶屋、醉潰どののつぐ酒を、新川の前垂どうぜんに、酒びたしに成つた箸替の膝へうけこぼしてざつぶりいはせ、平氣で袖で拭つて見せるは、かはりの小袖をしてやらうと、りづめでいはせる下ごゝろ。ある時はまた座敷もなく、ねッからひまな時分には、御機嫌うかゞひとこしらへて、お得意方へおして參上、御祝儀なしのたゝまりは、打ッちやッてもおかれやるまじと、呑なめずりのあつかましさ。またちつともひけさうなむすこと見れば、あしだをはいたなまゑひのごとく、ころぶようでころばぬように、おもしろをかしくだましかけ、モシわつちが内へ來なさえと、めりやすの稽古はおもてむき、仕だし茶屋へいひ付けて、くひたい物をと

まづおとびゐのさしてゐさんす、斑なし鼈甲のむなたか櫛に、しのぎの笄、まへかんざしの銀匁から、安積りに見たふして、十八九兩が物はある。柳ちやの緞子のおびに、縮緬ひとへのぶつかさね、蝦夷錦のどんぶりぐるめ、これも十兩からが物はしつかり。サアそのかねの出どころをたづぬれば、おめへがたの晝夜のつとめが、二人しばつて三歩づつ、たゝきわけにした所が一歩二朱にしかならねへぞへ。月三十日うりつめて、あぶみふんばり十兩あまり、そのうちを百助が、枸杞の油に下村の舞臺香、あぶら元結かみゆひ代、たなちんから飯米から、とゝさまかゝゐまはしの仕著せ、内を出る時うちかける火うちがまにひうちいし、こつぽり下駄によせ緒のうらつけ、諸しきくるめて勘定した引のこり、おめへひとりの身じんまくにも足りようかへ。さうしてみれば定式のほかにもらう客が、たんとなくては一日もくらされうか。また金をくれるだんなぢやとて、むしやうにくれるものでもなし。そこがかのころぶとやらけつまづくとやら、たゞは起きぬつかみ金山、寢ずにとる藥とはほつてもゆかず、うはべばかりは娘の命でも、御本地は正はちまん、賣女からつりをとるは、おめへがたの身のうへぢやぞへ。惣じて世間のことわざに、どじやうの事ををどり子といふは、汁がおもぢやと云ふ事なれど、いま時のをどり子に、汁氣が有つたらそれこそほんに二ッとない鼻ッかけぢや。またいゝ衆の前へ出る

思はず。内をば船でのり出す時、冬ならば炭團二ツにかた炭一升、淺草紙の四ツぎりを、親方から請けとれば、小づかひに追はれる氣ぐらうなく、二階の小用所はくるわばかりと自慢らしくいふけれど、それはお客の小べん所、わしらが船の重寶は、あれ見なさえ、苫のわきの四角に明いたところから、おいどを川へつき出して、しやッ〳〵とはじく氣さんじ。ゆく水の流はたえず、後は奇麗な潮をくんで、てうづ水にも事かゝず。また行燈のないうろ〳〵船や、一ぜん二六の舟蕎麥が、毎夜こゝをうりあるけば、むかふの人をよばずして、ゐながら萬事の用がたる。三十二文ときまりはあれども、五十六十乃至は百、なげ出して行く客があれば、上端はわしがほまちにて、かひぐらひの仕拂。明るひるまへ勘定すれば、物前の苦勞もなし。おせきねの身のうへも、わしらがつとめもどうぜんにて、おもてをはるむだがなければ、紋日物日のとんぢやくなし。錢がほしいともおもはねば、客衆をたらすいつはりなく、ちよんの間の事なれば、いろ男ぢやとてうれしくもなし、ぶ男ぢやとていやでもなし。心にまかせてふるといふわがまゝなし。わづか三十二文でなさけをうれば、くぜつをじぶくる野暮もなし。いやなれば來ず、客にうそなければ此方に手くだもなし。詐らざるより眞なるはなく、眞なるより正直なるはなし。サアこれでも船まんぢうが卑いかへ。またこれからはおめへがたのたなおろしぢや。

淵にしづみて、てん〳〵舞のをどりの拍子、これを來て見よ河岸へさげられ、または女護の島の惣雪隱かとあやしまるゝ、伏見のつぼねへおろされ、夜晝わかたぬ鐵砲責のくるしみ。晝三ッのつけまはしのと、くらゐが付いて全盛するほど、座敷代が月に壹まい、しんざうまでにつかはせる、みすの紙からおはぐろ代、茶屋の付金買ぐらひ、さま〴〵のもの入がおほくなり、ものいりの多いにしたがつて軍用金におはれて來て、おつつめは手くだへ落ち、かうすれば客がせきこむ、どういひかければのぼせて來ると、あけてもくれても狂言のすぢをかんがへ、正月の元日からしはすの三十日まで、こゝをしきつてかうせめてと、ゆらの介が夜うちまへといふ氣になつて暮す事ゆゑ、なか〳〵優な事や情らしい事に頓著してゐられぬはず、こけおどしの唐樣や歌書のことばをひねくるを、やさしい事と見給ふな。有ていの所を申さうなら、古人の句にいへるごとく、

にしき著てたゝみのうへのこじきかな

これ今の世の傾城の身のうへなり。さてわたしらがつとめのいきかた、心いきのいさぎよきをはなさうから聞きなんし。江口の君のながれはたえず、三十二銅のすがたを顯じて、此河岸端のこまよせを、まがきとも格子とも思つて居れは、いろざとのみせつきも、さまで格別の事とも

みあがりの二三度もはりこめば、こけはむしやうにうれしがり、あしが付いたがさいご、ぬしにやァなにもかくしいせんと、うちかぶとを見せかけて、白化の金太板ごき、下でもぬしに目をつけて、外の客人のじやまになるゆゑ、二階をとめると申しいすから、なんぞ主の仕てくんなんした分にして、こしらへて見せいせんではならぬやうになりいした。じつにぬしの外はつとめる事がしみ〴〵いやでおざんすから、ねつから客衆ははなれて仕舞ひ、どうもしやうもおざんせんが、半金ぐらゐはゐなかの客人にどうとも仕てもらひいすから、どうぞ寢道具をしておくんなんしと、のつぴきさせずくゝり付ければ、身あがりだけの事はうまる。すつぱり寢道具のできた時分、もらうあてがまちがひしたと、もらつた金はあたゝまり、どうも顏が合されいせん、さう〳〵如在でない事は、これでゆるしてくんなんしと、指のさきを少しそぐか、髮の毛の中でもすかしてやれば、童子格子がたんのうすると、胸の算盤のけたを合せてはじきこみ、爪のながさ心のうちのさもしき事、口にてはいはれもせず。さりながらそれも道理、入江町に居さんしたお跖ねが、（跖婦傳の惣嫁なり）三浦屋の高尾ねにいはんした通り、傾城のものとては、錢が一文楊枝が一本さらになし、みな客人のふところをあてにする境界、どうしてこれが正直に情をたつてくらさるべき。心は山瓜どうぜんに、どうがなしてくゝり付かねば、たちまち借金の

菱川がむかしゑのぬけ出たるかとうたがはれ、正月の伊達ぞめは、一蝶が名所遊女を眼前に見るがごとし。つるべ蕎麥はほそきをきらはず、やまやが豆腐は白きをいとはず、竹むらが卷煎餅は、齒當のかたきをしやうし、なかの街のこぶまきは、齒ごたへのせざるを感ず。甘露梅は下戸くらうて舌うちし、袖の梅は醉潰服してゲップ〳〵す。八朔のしろ小そでは、時ならぬに何の雪ぞ。七月のどうろうは、やみなるに何の月ぞ。うちへむけての松かざり、あらごものざふに餅、庭の焚火に草市小そで、春の櫻は秋のにはかとかはれども、かはらぬものは家々の格式、どうしようはま屋におざんす、松かは屋にいんすりんすのことばのはしに、むかしの風がのこつてはあるけれど、かはりはてたは娼妓衆の體たらく、いにしへは十八樓の揚屋より、名ざしの女郎の名をしるし、おくに御法度の客に御座なく候といふ文言をしたゝめるを、あげやさしがみと名付けたりとぞ。かゝる蕩々たる花街の粉頭が、相手かまはずつとめの外のたのしみも、人めをしのぶ間夫ぐるひ、それもむかしの高尾に島田、あげまきに助六、小むらさきに權八ともいふやうな、末の世までもうたはれるやうな事はなく、たゞわけもなくちわるもあり。又近ごろのはやりもの、こゝかしこで見た人や、つき合にくる客人の、あたゝからしう見えるあひてに、惚身でかけるじかけ、どうぞ一度なり共つれまうして來てくんなんしと、

いといふ事なり。大坂の新まちでは、太夫に付くを引舟といひ、はじめて客にあひそめるを、水あげとしやうくわんし、はじめて勤にいづる者を新艘となづくるは、あらたにつくりし舟によそへて、のり初めらるゝといふ事なり。なじみをふかき淺きといひ、ゐつゞけをうつをながすといひ、心がはりを水くさいといふ。なんでも女郎の身のうへは、たいてい水によそへてあれば、ナント遊女のはじまりは、船まんぢうではあるめへか。そのかみはあさづま船といひたりしを、まんぢうぶねとなづくる事、つく〴〵とかんがふるに、むかし西行法師にまみえ給ふ江口の君、三十二相のすがたをげんじ、普賢ぼさつとあらはれ給ひ、めされたる御ふねは白き象となりたるよし。象はもとよりまんぢうをすくものゆゑ、うかれめののる舟をまんぢうぶねとぞなづけけん。また一切を三十二銅にきはめしは、三十二相のえんをとりしものならん。なんぢややらおまへがたは、いろざとぢやのくるわぢやのといはんすが、それも燈籠の時分かにはかの時、おきやくのともでゆかんして、おもてむきばかり見さんすゆゑ、溫和らしう思はんしようが、ないしようへまはつて見ると、精靈さまのもりもの同前、內と外とは大ちがひでござんすぞえ。わたしもかへ玉になつて、まる三年あづけられてゐるうちに、とつくりと見て知つてをりやす。むかしから替らぬものは、引四ッに大あんどん、もめんかぶろのとりなりは、

落にうつて付でござんせう。すべてわたしらが商賣は、うぢなくて玉のこしとやら、身はいやしうても能衆のまへなどへ出られて、面白い事やをかしい事を見るばかりはつとめの一德。又さもしい事ながら、うまいものは年中くひあき、これもみんな藝のおかげ。ナント今から船まんぢうをやめにして、藝者をして見る氣はないかへ」と、むだ半分にいひければ、ちよくつ〱とふき出し、「ホンニ夏の虫がこほりをわらふとは、おまへがたの事ぢやわいな。ふなまんぢう〱とおしさげていはんすけれど、ふなまんぢうの尊い事、あらましつまんではなしやしやう、後學のために聞いておきねエなア。こう唐の詩經いふ本に、漢に遊女ありといふ事がある、漢とはひろい川の事、遊女といふはうかれめの事、川中のうかれ女なら、船まんぢうではあるまいか。さうすりやァわしらが商賣は、人のをしへのもととする、五經のなかにも出てゐるぞえ。また朗詠にも、秋水未遊女の珮を鳴らさずと、四角な字で書いてあれば、きつとしたけいづぢやァあるめへか。貞家卿うかれめに寄する御うたにも、

　心かよふゆききのふねのながめまでさしてかばかりものはおもはじ

これ川中にふねをうかべて、客をまつ風情をよめり。すべて遊女といふ文字をうかれめとよみ、うき川竹のながれといひ、越後の國ではうきみといひ、又ひや水となづくるは、ひつふか

れば、所の番人さし置きがたく、六尺棒にておつ拂ふ。是辻ばんから棒が出たと童謠にいふ所なり。ころしも三伏の夏の夜なりしが、お江戸にその名立花の新飛といふ藝者あり。客人は四季庵から仲町へはしけて仕舞ひ、相仕の小まきと舟にてもどる其折から、新飛「ナント小まきさん、この比名代のおちよとやらいふ船まんぢうを、はなしの種に船へ呼んで、なぶつて見ようぢやアあるまいか」といへば、小まき「ホンニこれはいゝ所だねエ」と廻しにたのめば心得て、たれだく〳〵と聞くうちに、おちよが舟にたづねあたり、酒のあひてに此船へと、のりうつらせて見た所が、むきみしぼりのもめんゆかたに、黒もめんの手拭を、はしと〳〵でむすび合せ、帶と見せるは仕似のいでたち、やき付のかんざしで頭をかきながら、おくめんなく座になほれば、新飛取あへず「おちよさんとはおまへの事かへ、佛千人神千人、世間をちつとも廣くするは、わたしらがつとめのならひ、これをえんに心やすくしてくださんせな。かういへばどうやら團子らしいが、あつたら器量をもちながら、さりとはいやしいおまへの商賣、とてもつとめを仕なさるなら、せめて女閭の河岸へなりとも出なさつたが、よからうではあるまいか。おしたてならみめかたち、あつぱれお職といつても、たれか點の打人もあるまい。もしまた藝者になる氣なら、わたしが妹分にしてひき廻して上げやんせう。ちつとはなへ聲のぬける所は、新内のふし

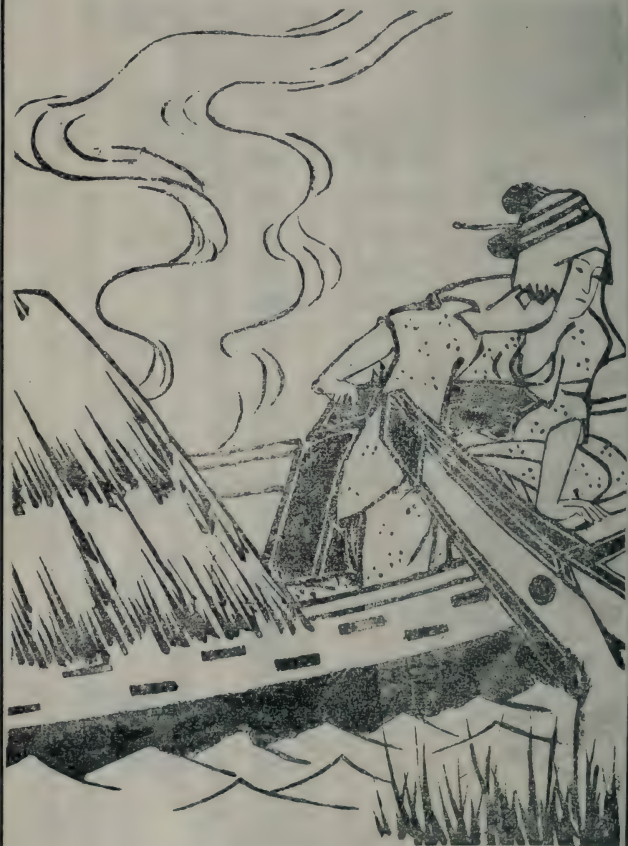
太平樂卷物

阿千代之傳

泯江の源は觴を浮ぶべし、楚に入るに及んでは、舟船にあらずんば渡るべからずと。毛唐人の陳奮漢を三十一文字にやはらぐれば、

よし野川その水上をたずぬれば苔の岩間の雫なりけり

此歌の心をやはらぐれば、水のながれと人の身は、よるべ定めぬ川竹の、あるが中にも取分けて、浮ふししげき浮れ舟、笘もる名代隠れなき、ぼちや〳〵の阿千代といふ船饅頭の品者あり。おちよだアなア、こうよつていきねエなアこうとよびかける。鼻聲もどうやらあぢに可愛らしく、これに折込む折介は、心の竹光うち割つて、うつゝをぶんぬきまことをつくし、そゝり手合の俠客は、手ぬぐひのあひそめてより、日和下駄の鼻を落さうとまゝよてんぽのかは財布、そこをはらつて通ひつめ、永久ばしのこまよせにて、磨墨のまつくろに成つていきつきあらき戰ひに、われぞ先陣われ一陣と、梶原が逆櫓にひとしく、舟軍のかけ引にて、喧嘩口論たえざ

名物の饅頭は皆樣御存じのぼちや〱
川端の笛船は普賢菩薩の御緣起
柳腰の取形は江都妓女のしやな〱
縮緬の二布は尻喰觀音の御戸帳

序

やまと歌は、たけき心をも和らげ、鬼神をも感ぜしむ。男女の中をも和らぐるは歌なり。されば犢鼻褌もてゝらといへば歌にもよまれ、下紐といへば雨の上人の口號ともなりなんかし。ものは言様言品にて、仇し仇浪寄せては返る波、淺妻船の淺ましやといへば、さも麗しく聞ゆとなん。取もなほさず今の世に船饅頭ともて囃す、此道の蒼妓、肥滿〱の阿千代てふもの、新飛てふ白拍子にまみえて、生活の不祥を說破り、浪世は卞和が替玉となりて、女閭の寓店に目下見し兩瓦三舍の荒唐を、口かたましくも言ひたるを、慣熟の奴が供待の聲高に語りしを、予物蔭より立聞きしが、言葉のはなはひくしといへども、見識は水道尻の火の見より高く、彼の泥良が得難にしたる跖婦傳の趣にも、をさ〱劣るまじと、筆にまかせてかいつけ、太平樂の巻物と號す。希はくは四方の君子、鼻の孔の行屆かざる所は、瘠深い奴が脫漏たる事も多からんと、萬事茶にして見給へかしと云爾。

天竺老人戲書

痿陰隱逸傳

贊曰

六寸許撅、十丈的舌、堀萬物ノ根ヲ、說虛空ノ穴ヲ、盲天下ノ睛ヲ、明婆婆ノ埒ヲ、哂人ノ行キ過ルヲ、悲ム世ノ乀ノヲ、

咦

配シテ闇浮ノ屍ニ、不滅精血ヲ、聞キテ一屁聲ヲ、悟ル捺落ノ滅スルヲ、

無名禪師撰

跋

風來山人放屁論後編をひり出して、予をして屁へに跋せしむ。按ずるに放屁字典に曰く、屁ブブウの反、音ブウ、去聲に發して音スウ。論語に所謂、舞雩に風して詠じて歸らんとは、それこれ是をいふ歟。此書や、始には狂言綺語のすかし屁を放り、中は萬物の理を掌に握り屁の極意をこき、末又合うて一ッ屁の尻をすぼむ。讀者その臭を逐はゞ、高に升る階梯屁の一助たらんと云爾。

葛西土民姑射杜老糞船の中に書す

用ふることあたはず、只山師々々と譏るより外なし。又造化の理を知らんが爲、産物に心を盡せば、人我を本草者と號け、草澤醫人の下細工人の樣に心得、已むに賢るのむだ書に、淨瑠璃や小說が當れば、近松門左衞門自笑其磧が類と心得、火浣布ゑれきてるの奇物を工めば、竹田近江や藤助と十把一トからげの思ひをなして、變化龍の如き事を知らず。我は只及ばずながら日本の益をなさん事を思ふのみ。或は適〻大諸侯の爲に謀りし事ども、國家の大益なきにしもあらざれども、狡兎死して良狗烹られ、高鳥盡きて良弓藏る、細工貧乏人寶、嗚呼薄いかな我耳垂珠と悟を開き、露命をつなぐ營に、當時賤しき內職にて、其糟をくらひ其錢をせしめんと思ひ付きしを、早くも卯雲木室君に尻尾を見出され、おくり賜はる狂歌に、

　醉うて來て小間物見せのおて際は仕出しの櫛もはやる筈なり

實や己を知らざるに屈して、己を知るに伸びるとなんいへば、此御答申さんとて、はがまゝ八百を書きちらす。固より己を知らざる人に見せるにはあらず。嵐音八が曰く、アヽ氣が違うたさうな。

　かゝる時何と千里のこまものや伯樂もなし小づかひもなし

風來山人誌

追加

去る申の歳、菅原櫛といへるを工み出し世に行はれける時、好人より狂歌を賜ひしその返歌、并に序を爰にしるす。

用ひれば鼠の子も上尖竿をおぼえ、用ひざれば虎皮褌も地獄の古著店に釣さるとは、とつと昔の唐人の寐語。眞實で呵らるゝより、座なりに譽めらるゝが快きは人情なれば、虛言と追從輕薄をいはねば、人當世を知らぬといふ。抑此當世といふもの、今ばかり有るにあらず。祝鮀が佞有つて宋朝が美あらずんば、難乎今の世に免れんこととあれば、昔より有來の當世にして、八百藏が助六は柏筵が助六なれども、人今更の樣に心得るも片腹いたし。我も此當世を知らざるにはあらねども、萬人の盲より一人有眼の人を思うて、假にも追從輕薄をいはざれば、時にあはぬは持前なり。されども人と生れし冥加の爲、國恩を報ぜん事を思うて心を盡せば、世人稱して山師といふ。矛戲れて曰く、智惠ある者、智惠なき者を譏るには、馬鹿といひ、たはけと呼ぶ、あはうといひ、べら坊といへども、智惠なき者智惠あるものを譏るには、其詞を

やとて、毛を織りて國家の益にもなる物を、らしやめんなんど、あてじまいな名をつけ、給具で體を塗りちらし、引ずり廻して恥をさらす、綿羊の手前も氣の毒なり。世にある人は錢をほしがり、錢なき者は意地をはり、渇しても盜泉の水を飲まず、道理で南瓜が唐茄にて、いらざる工夫に金銀を費す故に錢內なり。夫熟惟みれば、骨を折つて譏らるゝは、酒買うて尻切らるゝ、古今無雙の大だはけ、屁の中落とは是ならん。けふよりゑれきてるをへれきてると名をかへ、我も三國福平が弟子となり、故鄕をかたどりて四國猿平と改名し、屁撒藝の仲間へ入り、芋連中と參會して、尻の穴のあらん限り撒り習はゞやと存ずるなり。臭い者の身知らず、以來御用捨下さるべしと、屁撒つて後の尻すぼめ、まじめになつていひければ、新五左衞門あきれた顏にて、兎角是は古方家に下させずは、此疳癪はなほるまいと、つぶやきながら歸ると見て、眠らぬ夢は覺めにけり。

爲に骨を折れば、世上で山師と譏れども、鼠捕る猫は爪をかくす、我よりおとなしく人物臭き面な奴に、却つて山師はいくらもあり。人は藝を以て山の足代とし、我は山に似たるを以て藝の助とす。顯るゝと隱るゝとは、譬へばあん餅とあんころ餅の赤小豆の如し。まこと金をほしく思うて、是までの精力を一圖に金銀計に凝りて、一生鼴鼠見る樣な親父と成り、生爪はもがれても握つたる金は放さず。徒然草にある通り、假にも無常を觀ずべからず。人は惡しかれ我善かれ、義理も絲瓜も瓢簞も、沈香も焚かず屁も撒らず、上手名人といふは扨置、下手といはるる藝もなく、食うて屎して寐て起きて、死んだ所で殘る物は骨と證文ばかりなりといふ樣なわかちも知らず、彌出るなら無間の鐘の蛭は扨置、蝮蛇や龍盤魚を糞でこくせうに煮て食はせても食ふ氣に成つてためる時は、盲でさへも出來る金、出來ざる事もあるまじく、近い例は、爲れきてるを兩國か淺草の見せ物に出す時は、押へ付けたる大金、豪猪綿羊なんどの例もありとすゝむる者も多けれど、陰陽の理を盡せし物を、勿體なしと合點せず。されば曾子は飴を見て老を養はん事を思ひ、盜跖は錠を明けん事を思ふ、それ相應の了簡。我は綿羊を見て、日本にて羅紗らせいたごろふくれんしよんとろめんへるへとあんさるせ毛氈類の毛織を織らせ、外國の渡りを待たず用に給せんと心を碎き、人は手短に錢をせしめんと計る。いかに物いはぬ畜類ち

の本を大陽と號づけ、その末を火と號づく。日と火の倭訓同じきも天地自然の道理なり。されば神に天照太神、佛に大日如來、金剛界とは地上をさし、胎藏界とは地下をさす。十萬億土無量壽佛、反照自己本來空、祕密も悟道も引きくるめて、此日輪ましまさゞれば、土は皆本體の石、水は皆本體の氷なる故、草木を生ずる事なく、魚鼈を育すべき道なし。役者あつても座元なければ、戯場の出來ざるに異ならず。かゝる道理を知る時は、糞と成るも汗となるも、屁の出るも火の出るも、同じ體の小天地、固より怪しむに足らざれども、理にくらき輩は、燧より出る火は常となる故怪まず、ゑれきてるより出る火は、飯綱幻術の樣に心得、又は關捩手づま人形と一ツ事に覺え、慰に呼んで見る旁も多き中に、天文暦數酸いも甘いも呑込んだ親玉をはじめ、理に通達せるからは、問ふに骨ありて答ふるにはづみあり。人の分量智惠の程を知らざる人は、僅の藝をいひ立に口過する浪人者や、日待月待に召さるゝ雜劇の藝者同樣に心得たるぞ苦々し。凡天地の間に火程尊き物なく、その火の道理を目前に喩す故、ゑれきてるほど尊き器なし。又吾日本、神武帝より今年まで二千四百三十九年。死んで生れて入替る人、其數かぞへ盡されず。其大勢の人間の知らざる事を拵へんと、産を破り祿を捨て、工夫を凝らし金銀を費し、工出せるもの、此ゑれきてるのみにあらず、是まで倭産になき産物を見出せるも亦少からず。世間の

魚は人をちやかすなり。子供角觝の取組は、河津股野が俤をうつし。鶺鴒相撲の勝負には、魯の季桓子拳を握る。馬の立合狗の藝、仕込に馴れ教に順ふ。是を思へば人並に人別帳には付きながら、畜生に劣りたる無藝の者は、心にて己が恥を思ふべし。あるが中にも險竿の大當り、小櫻松江が笑顔には、弘法大師筆を捨て、韓退之涎を流す。無三飛新藏が體は、龍骨車のめぐるがごとく、早飛梅之丞が一本綱は、五體を天へ釣るかと疑ふ。是等をして珍しともいふべけれ。何ぞや古き屁撒を、こと〴〵敷長物語、拙者屁の講釋を聞きには參らず、彼のゑれきてるより火の出る道理を聞かんとこそ望みしに、以の外の屁あしらひ。さては我らを屁の如く思ひ給ふやと、眞黒になつて立腹す。其時錢内詞を和らげ、ゑれきてるより火の出る道理を、聞かんとお尋あれども、一天四海引くるめての大論にて、一朝一夕に論じがたし。能く近く譬を取つて教へん爲、扨こそ屁論に及びたり。夫佛法に地水火風空を五輪といへども、空と風とは體用にて、つまる所は四大なり。此水火土氣は天地の間に滿々たる故、固より人の體中に備へたれば、四の物皆體中より出るなり。日々の食物糞と成つて五穀の肥となる。これ人間の體より土の出るにあらずや。又小便となり汗と成るは體中水を出すなり。上に在つては呼吸、下に在つては屁と號く。是體中氣の出るなり。あるが中にも、火といへるが萬物造化の座元にて、そ

浪花津に咲くや此花咲男、今を春屁と咲くや此、花の都に匂ひ渡り、再び江戸へ歸り咲、三國福平と名乘りて、采女原の春霞、立つ子這ふ子も知らぬ者なし。扨佐次兵衛と連になり、四國をめぐりし兩人も、目前かゝる不思議を見、且は福平が志を感じ、佐次兵衛が追善供養、共に力を合さん爲、空也上人の鉢扣、茶筅賣より思ひ付き、歌念佛を趣向して、六字を節にねりまぜ、うまひだ、うまい陀佛うまいだより樣々の替唱歌。扨當世の立者は、仲藏幸四郎三五郎、また半道のきゝ者は、時に大谷友右衛門。贔屓市川團十郎は、木場についての親父分、其癖年は若いだ。若い陀佛若い陀と賣步行、大評判に預りしも、皆福平が孝行のなす所、古今にまれなる屁柄者と語りければ、新五右衛門一圓に呑込まず、不思議の事を承るもの哉、いかにも彼撒糞漢、先年兩國にては流行しかど、此度采女原へ出でたれども、其後は聲もなく臭もなく、今は世間に沙汰もなし。當時諸方にて評判の品々は、飛んだ靈寶珍しき物、十月の胎内千里の車、鹿に兩頭あれば猿に曲馬あり、穢銀杏が辨說には、蘇秦張儀も跣足で逃げ、友世綱世が力には、巴、坂額干鱈持つて禮に來る。源水が獨樂は魂ありて動くがごとく、鶴市が聲色はその人そこに在るが如し。新之助は一身に骨なく、どう突請身は五臟金鐵にや有らん、大魚出れば大蛇骨出で、硝子細工牽絲傀儡、古きを以て新しく、田舍道者の目を悅ばしめ、烏娘は名にてくろめ、人

かる事は思ひもよらず。いかなる理にて火出づるや、後學の爲承らんと。其時主人うち點頭、書を讀む計を學問と思ひ、紙上の空論を以て格物窮理と思ふより間違も出來るなり。さらば火の出る根元をお目にかけんと、取出す小冊に、昔語花咲男放屁論と題號せり。主人笑つて申しけるは、抑此放屁といつぱ、四年以前兩國橋の邊にて花咲男と號け、見せものにて近年の大當り、諸〳〵の小戯場を撒潰せし趣は、此放屁論に詳なり。今年また采女原に出て、三國福平と名乘る。扨此者の身の上を尋ぬるに、父は大和の國吉野の郷の狩人佐次兵衛といへる者なりしが、年來多くの猪猿を殺せし罪亡しとや思ひけん、近所の者兩人といひ合せ、四國順禮に出でけるに、彼の殺生の報にや、伊豫の國に至りて、佐次兵衛生ながら猿と成つて、林の中へ逃入りければ、二人の連はあきれ果て、是非なく國に歸りけり。今童謠に、一ッ長屋の佐次兵衛殿、四國をめぐりて猿となるんの、二人の連衆は歸れども、お猿の身なれば置いて來たんのとは此事因縁なり。さて兩人は國に歸り、悴福平に此譯を語れば、一ト方ならぬ歎なれども、なすべき樣もあらざれば、せめては父が現世未來畜生道の苦患を免るゝ爲にとて、一切經を供養せんと思ひ立ち、鳥が鳴く東路を、錢がなく〳〵たどり著き、本錢の入らぬ金まうけを工夫して、いつとなく屁を比類なき、親孝行の奇特にや、兩國橋の屁撒と江戸中の大評判。夫よりも

行き度所を駈けめぐり、否な所は茶にして仕舞ふ。せめては一生我體を自由にするがまうけなり。斯く隙なるを幸ひに、種々の工夫をめぐらして、何卒日本の金銀を唐阿蘭陀へ引たくられぬ一ッの助にもならんかと、思ふもいらざる佐平次にて、せめては寸志の國恩を報ずるといふもしやらくさし。其位にあらざれば其政を謀らず、身の程知らぬ大呆と、己も知つては居るさうなれど、蓼食ふ蟲も好々と生れ付きたる不物好、わる塊にかたまつて、椽の下の力持、むだ骨だらけの其中に、ゑれきてるせゑりていといへる、人の體より火を出し病を治する器を作り出せり。抑此器は西洋の人、電の理を以て考へ、一旦工夫は付けれども、其身の生涯には事成らず、三代を經て成就しけるといへり。阿蘭陀人といへども知る者は至つて少く、固より朝鮮唐天竺の人は夢にも知らず。況んや日本開闢以來創めて出來たる事なれば、高貴の旁を初として、見ん事を願ふ者夥し。或日去る屋敷の儒官石倉新五左衛門といへる人來りて、觀る事良久うして曰く、天地人の三才に通達するを儒といふ。我天下の書に眼をさらし、理を以て推す時は森羅萬象明かならざる事有るべからずと思ひしが、今是を見て始めて驚く。それ燧と石、扁柏と扁柏相激する歟、又は日輪の水精硝子を照らし、或は鏡に映ずる時は火を生じ、時に臨んでは目からも出で臑からも出で、扨又貧なる家内へは、火の降る事も有りとは聞けども、か

四國八十八ヶ所

ても、名もなきはいく〳〵役者のする浦人の嫡流なり。母夢に澁團扇を呑むと見て懐胎し、此者を産みしより、貧乏神を氏神と仰ぎ、七福神と喧嘩して、故郷を去つて江戸の住居。されば諸藝貳百石、無藝高なしとやらいへども、此男何一ッ覺えたる藝もなく、又無藝にもあらざれば、どちら足らずのちくらが洋、磯にもよらず浪にもつかず、流れ渡りの瓢簞で、鯰の樺燒鰻鱺魚を欺き、見識は吉原の天水桶よりも高く、智惠は品川の雪隱よりも深しと、こけおどしの駄味噌を、千人に一人は實かと聞き込んで、敎化的の報謝米で召抱へうと相談すれば、イヤ〳〵女は美惡となく宮に入つて妬まれ、士は賢不肖となく朝に入つて惡まる。比喩を鳥で申さうなら、孔雀錦鷄鸚哥の類、高金出して弄べども、外飾のよいばかりで、鳥も捕らず晨も司らず、葱、線午蒡の相手にもならず、又烏の男ぶりは惡しけれども、朝は早く起きて人をおこし、吉凶を能く知りて豫め告知らせば、忝いといふべきを、烏啼が惡いの、いま〳〵しい烏めのと惡まるるを見るにつけ、良藥は口に苦く、出る杙は打たるゝ習ひ。されども御無理御尤、君君たらず臣臣たらず、八幡大名太郎冠者、脫活の虎見る樣に、己が性根は微塵もなく、風次第で首を振つて一生を過さんは、折角親の產付けた睪丸を無にする道理。浪人の心易さは、一簞のぶッかけ一瓢の小半酒、恒の產なき代には、主人といふ贅もなく、知行といふ飯粒が足の裏にひつ付かず、

雪隱が決ちん、穴のせまい仕送り用人に乘越され、扨はお家に由緒ある數代出入の町人でも、不如意になれば安くあしらひ、昨日今日まで手代奉公、年季野郎の成上でも、金さへ持てば追從輕薄、御堅勝御安全、樣の字までをひねくり廻して六ヶ敷認めるは、地獄の沙汰も金次第、金が敵の世の中。されば歌にも、

鉦敲金がないゆゑ鉦たゝく金があるなら鉦はたゝかじ

又それに付けても金のほしさよといへる下の句は、いづれの歌にも連屬すると卑劣千萬に覺え、富十郎が鐘入も金の供養といふ故に、若し才覺の計策にもと、味な所へ目のつく世の中。此間さる方にて段々と不如意に付き、一家中鑓の稽古を止にして、鈴の稽古が初まりしとの噂、よくよく聞けば、鑓といふ字は金篇に遣ふといふ字、鈴は金篇に令るといふ字なれば、遣ふ事を止めにして只々金を令めよと、あて字ながらも主命は默止がたし。いかなる名人達人でも、金なき衆生は度しがたしと、佛もあちらむくと見えたり。いつの比にか有りけん、江戸神田の邊に、貧家錢内といへる見る陰もなき瘦浪人あり。抑彼が系圖といッぱ、忝くも天兒屋根命の苗裔、大織冠鎌足公の御子藤原淡海公、讃州志度の浦にて海士人と野合ひ、かの面向不背の玉を探得給ふ時、一日を六十四文で人足に傭はれ、浦人よろこび引上げたりけりと謠にも作られ、戲場でし

放屁論後編

世の諺に、剪逕するも浪人の習ひと、御所櫻の伊勢の三郎、風俗太平記の日本左衛門なんど、淨瑠璃本にある時は、さも手強う侍らしく聞ゆれども、夫は血臭い時節の事にて、かく治まれる時世に、そんなけびらひが有るや否、とんだ目にあふ故に、今時の浪人は紙子羽織に破編笠、御子孫も御繁昌、猶いつまでか活延るほど恥の上ぬり。但浪人のみにあらず。春さきの華臍魚と目出度御代の侍は、段々に直が下り、工農商の三民に養はれる素餐の様に思はれ、まさかの時は侍でなければ世は治らず、日本は小國でも、唐高麗から指もさゝせぬは皆武德なりといふ事を、思ひ出す者もなきは、是ぞ誠に太平の世の御恩澤、井を鑿りて飲み耕して食ふ、提燈かりた禮はいへども、月日に禮はいはざるに等し。段々太平の化にあまへ、世上一統金銀にのみ目が付く故、先祖はお馬の先に進み、義は金鐵よりも堅く、命は塵芥よりも輕しと、踏止まつて高名を顯したる家柄の子孫でも、又君を諫め萬民を教へ、國家の礎を堅うせんと心を碎く忠臣でも、算盤の桁には合はず、見一無頭早急に金にならねば、二一天作言語道斷、六沈が二進、

また兵衛佐頼朝卿伊豆の國へ左遷の内、貧乏にて常に芋飯を喰ひ、好んで放屁なされける故、其所をひるが小島と號けたり。野にて放るを野邊といひ、山にて撒るを山邊といふ。古今集の歌に、

霞立つ春の山屁は遠けれどふく春風は花の香ぞする

海邊といひ磯邊といひ、澤邊の螢は尻に縁あり。奥州に一の戸二の戸、古戸の字をへと訓ぜしも、家あれば人あり、人あれば撒る故なりと、倭訓の講釋聞取法問、出まかせに放出して、此書の序とはなりけらしブツツ。

風來山人誌

放屁論後編自序

倭學先生曰く、夜はおよるの上略にて、晝とは諸人目を寤せば小便をたれ屁を撒る故、夜晝の倭訓起れり。或は鯨淺き所に寐入りたる内、潮引きて洲となる時は、大に困りて無術氣を撒る、故に潮の引くをも干るといふ。此道を好ませ給ふ御神を、蛭子といひえびすといふ。えびすはへびすの間違にて、あいうえおはひふへほの通韵より誤り來れり。又日本武尊東夷征伐の時、夷ども、草に火をかけ、大勢一度に尻をまくりて撒りければ、焔尊の方へ吹き靡き、御身に火掛らんとする時、御劒をぬいて投付け給へば、夷の臀をしたゝかに切られ八方へ逃げし故、逃ぐる事をへきえきといひ始め、(へきえきとは屁消益なり。屁消えて尊の爲に益あるをいふなり)十束の御劒を改めて臭薙の寶劒と號け給ふ。臭き物を薙ぎちらせしといふ詞なり。太政入道清盛は火の病を煩ひ、初は居風呂桶に水を入れて體を浸せば、即時に湯となる故、後は大なる池を掘り、加茂川の水を堰き入れ這入られけるに、水火激して頻に屁を撒りしにより、屁池の大將と異名せられ、記せし記錄を屁池物語といふ。後世平家と書くは當字なり。

跋

漢にては放屁といひ、上方にては屁をこくといひ、關東にてはひるといひ、女中は都ておならといふ。其語は異なれども、鳴ると臭きは同じことなり。その音に三等あり、ブツと鳴るもの上品にして其形圓く、ブウと鳴るもの中品にして其形飯櫃形なり。スーとすかすもの下品にて細長くして少しひらたし。是等は皆素人も常に撒る所なり。彼放屁男のごとく、奇々妙々に至りては、放らざる音なく備らざる形なし。抑いかなる故ぞと聞けば、彼が母常に芋を好みけるが、或夜の夢に火吹竹を吞むと見て懐胎し、鳳屁元年へのえ鼬鼠の歳、今を春邊と梅匂ふ頃誕生せしが、成人に隨ひて段々功を屁ひり男、今江戸中の大評判、屁は身を助けるとは是ならん歟。讃岐の行脚無一坊、神田の寓居に筆を採る。

が曰く、我をして天下に宰たらしめば又此肉の如けんと。我も亦謂へらく、若し賢人ありて此屁の如く工夫をこらし、天下の人を救ひ給はゞ、其功大ならん。心を用ひて修行すれば、屁さへも猶かくの如し。阿呼濟世に志す人、或は諸藝を學ぶ人、一心に務むれば、天下に鳴らん事屁よりも亦甚し。我は彼の屁の音を貸りて、自暴自棄未熟不出精の人々の睡を寤さん爲なりといふも又理屈臭し。子が論屁の如しといはゞいへ、我も亦屁ともおもはず。

しの眞劍勝負、二寸に足らぬ屁眼にて、諸々の小芝居を一まくりに撒り潰す事、皆屁威光とは此事にて、地口でいへば屁柄者なり。されば諸々の音曲者、いふべき筈の口、語るべき筈の咽を以て、師匠に隨ひ口傳を請け、高給金はほしがれども、聲のよしあしは生れ付、月夜烏や五位鷺のがあ〱と鳴くがごとく、古き節の口眞似はすれども、微塵も文句に意なく、序破急開合節はかせの鹽梅を知らざれば、新淨瑠璃の文句を殺し、面々家業の衰微に及ぶ。然るに此屁ひり男は、自身の工夫計にて、師匠なければ口傳もなし。物いはぬ屁分るまじき屁にて、開合呼吸の拍子を覺え、五音十二律自から備り、其品々を撒り分ける事、下手淨瑠璃の口よりも、屁の氣取が拔群よし、奇とやいはん妙とやいはん、誠に屁道開基の祖師なり。但し音曲のみに限らず、近年の下手糞ども、學者は唐の反古に縛られ、詩文章を好む人は、韓柳盛唐の鉋屑を拾ひ集めて柱と心得、歌人は居ながら飯粒が足の裏にひばり付き、醫者は古法家後世家と、陰辨慶の議論はすれども、治する病も療し得ず、流行風の皆殺し。誹諧の宗匠顏は芭蕉其角が涎を舐り、茶人の人柄風流めくも、利休宗旦が糞を嘗める。其餘諸藝皆衰へ、己が工夫才覺なければ、古人のしふるしたる事さへも、古人の足本へもとゞかざるは、心を用ひざるが故なり。しかるに此放屁漢、今迄用ひぬ臀を以て、古人も撒らぬ曲屁をひり出し、一天下に名を顯す。陳平

の目にさらす事、無躾千萬此上なし。見せるものは錢まうけ、見るが鈍漢なりと思ふに、先生雷同し給ふ事、見限り果てたる事なり。盜泉の水勝母の地、皆其名をさへ惡むなり。非禮聞くことなかれ非禮見ることなかれとは聖人の敎なりと、青筋ばつてのいひぶん。予答へて曰く、子が辭甚だ是なり、去ながらいまだ道の大なる事を知らず。孔子は童謠をも捨てず、我亦屁ひりを取る事論あり。夫天地の間に有るもの、皆自から貴賤上下の品あり、其中に至り極りて下品とするもの、大小便に止る。賤き譬喩を漢にては糞土といひ、日本にては屎のごとしと。其糞小便のきたなきも、皆五穀の肥となりて萬民を養ふ。只屁のみ、撒た者暫時の腹中快き計にて、無益無能の長物なり。上天のことは音もなく香もなしといふに引きかへ、音あれども太皷皷の如く聞くべきものにあらず、匂あれども伽羅麝香の如く用ふべき能なし。却つて人を臭がらせ、韮蒜握屁と口の端にかゝり、空より出でて空に消え、肥にさへならざれば微塵用に立つことなし。志道軒が腐儒をさして屁ぴり儒者といひ初めしも、尤千萬の詞なり。斯ばかり天地の間に無用の物と成り果てて、何の用にも立たざるものを、こやつめが思ひ付にて、種々に案じさま〴〵に撒りわけ、評判の大入、小芝居なんどは續くべき勢ならず。富三一人が大當りは菊之丞が餘光も有り、屁には固より餘光もなく惚人もなく贔屓もなし。實に生正味むき出

星由良介が仕打は忠臣の鑑と成り、梅枝が無間の鐘は女の操をすゝむるなり。見せものの異様なるも、親の罪が子に報い、狩人の子は蹄と成り、悪の報は針の先、必ず人々油斷するなとの教なるに、近年は只錢まうけのみに掛り、箇樣の所へ心を用ひず、剩さへ屁ひり男の見せ物、言語道斷のことなり。夫屁は人中にて撒るものにあらず、放るまじき座敷にて、若し誤つてとりはづせば、武士は腹を切る程耻とす。傳へ聞く、品川にて何とかいへる女、客の前にてとりはづせしが、其座に小田原町の李堂、堺町の巳なんど居合せて笑ひけるに、彼女忍び兼ね、一間へ入りて自害せんとするを、傍輩の女が見付け、さま〴〵に諫むれども、一座がかの通り者なれば、悪口にいひふらされ、世上の沙汰に成るなれば、どうも活きては居られぬとのせりふ、彼二人も詞を盡し、此事決していふまじとひたすらになだむれども、イヤ〳〵今こそ左樣に請がひ給へ、跡にていひ給はんは必定、活きて耻をさらさんよりは、死なせてたび給へとかきくどき、とゞまる氣色あらざれば、二人もすべき方なくて、此事口外せまじきよし證文を書いて、漸〳〵自害をとゞめしとかや。可咲事の樣なれど、女が自害と覺悟せしは、情を商ふ身の上にて、耻を知りて命を捨てんといひ、又いき過の通者も惻隱の心ありて、おほづけなくも證文書いて人の命を助けしは、又艶しき事ならずや。かく人の耻とする事を、大道端に簡板を掛け、衆人

を知る。大坂千種屋清右衞門といへる者、をかしき藥を賣るが好にて、喧嘩下し屁ひり藥等の簡板を出す。其藥方も聞き得たれど、それは只屁の出るのみにて、箇樣の曲竅を放ることを聞かず。又仕掛ならんとの疑ひ尤に似たれども、竹田の舞臺に事替り、四方正面のやりばなし、しかも不埒の取しまり、何に仕掛の有りとも見えず。數萬の人の目にさらし、仕掛の見えぬ程なれば、譬仕掛有りとても、眞にひると同前なり。衆人眞に放るといはゞ、其糟を食ひ其泥を濁らして放ると思うて見るが可し。扨つく〴〵と案ずれば、かく世智辛き世の中に、人の錢をせしめんと、千變萬化に思案して、新しい事を工めども、十が十餅の形、昨日新しきも今日は古く、固より古きは猶古し。此放屁男計は咄には有りといへども、我日本神武天皇元年より此年安永三年に至りて、二千四百三十六年の星霜を經るといへども、舊紀にも見えずいひ傳にもなし。我日本のみならず、唐土朝鮮をはじめ、天竺阿蘭陀諸の國々にもあるまじ。於戲思ひ付きたり能く放つたりと、譽むれば一座皆感心す。遙末座より聲を掛け、先生の論甚だ非なり、余申すべき事有りと出づるを見れば、頃日田舍より來りたる石部金吉郎といへる侍なり。以ての外の顏色にて、扨々苦々敷事を承る物かな。それ芝居見せものの類、公より御免あるは、人を和するの術にして、君臣父子夫婦兄弟朋友の道をあかし、譬へば大

伊勢音頭、一中半中豐後節、土佐文彌半太夫、外記河東大薩摩、義太夫節の長き事も、忠臣藏矢口渡は望次第、一段ヅツ三絃淨瑠璃に合せ、比類なき名人出でたりと、聞くよりも見ぬ事は咄にならず、いざ行きて見ばやとて、二三輩打連れて横山町より兩國橋の廣小路、橋を渡らずして右へ行けば、昔語花咲男と、こと〴〵しく幟を立て、僧俗男女押合ひへし合ふ中より、先看板を見れば、あやしの男尻もつたてたる後に、薄墨に隈取りて、彼の道成寺三番叟なんど、數多の品を一所に寄せて畫きたるさま、夢を畫く筆意に似たれば、此沙汰知らぬ田舍者の、若し來掛りて見るならば、尻から夢を見るとや疑はんと、つぶやきながら木戸をはいれば、上に紅白の水引ひき渡し、彼放屁漢は囃方と共に小高き所に座す。その爲人中肉にして色白く、三ケ月形の撥鬢奴、縹の單に緋縮緬の襦袢、口上爽にして憎氣なく、囃に合はせ先最初が目出度三番叟屁、トッパヒヨロ〳〵ピッ〳〵〳〵と拍子よく、次が雞東天紅をブヽブウーブウと撒分け、其跡が水車、ブウ〳〵〳〵と放りながら、己が體を車返り、左ながら車の水勢に迫り、汲んではうつす風情あり。サア入替り〳〵と、打出しの太鼓と共に立出で、朋友の許に立寄り、放屁男を見たりといへば、一座擧りてこれを論ず。或は藥を用ひて放るといひ、又は仕掛の有るならんと、衆議さらに一決せず。予衆人に告げて曰く、諸子いふことなかれ。放屁藥ある事は我嘗てこれ

放屁論

人參呑んで縊る癡漢あれば、河豚汁喰うて長壽する男もあり。一度で父なし子孕む下女あれば、毎晩夜鷹買うて鼻の無事なる奴あり。大そうなれど嗚呼天歟命歟。又物の流行と不流行も、時の仕合不仕合歟、又は趣向の善悪によるならんか。柏莚が氣どり、慶子が所作事、仲藏が功者、金作が愛敬、廣治が調子、三五郎がしこなし、梅幸浪花をひしげば、富三東都に名を顯し、川口の參詣、淺草の群集、深川の角力、吉原の俄、沙洲は木挽町に河東節の根本を弘むれば、住太夫は葺屋町に義太夫節の骨髓を語る。或は機關、子供狂言、身ぶり聲色辻談議、今にはじめぬお江戸の繁榮、其品數へ盡しがたき中に、さいつ頃より、兩國橋の邊に放屁男出でたりとて、評議とり〴〵町々の風說なり。それ熟惟みれば、人は小天地なれば、天地に雷あり人に屁あり、陰陽相激するの聲にして、時に發し時に撒るこそ持まへなれ。いかなれば彼男、昔よりいひ傳へし階子屁數珠屁はいふもさらなり、砧すががき三番叟、三ツ地七艸祇園囃、犬の吠聲鷄屁、花火の響は兩國を欺き、水車の音は淀川に擬す。道成寺、菊慈童、はうた、めりやす、

放屁論自序

屁てふもののある故に、への字も何とやらをかしけれど、天に霹靂あり、神に幣帛あり、原に經緒有り、船に艫あり、草に女青あり、虫に氣蟄あり、狐鼬鼠の最後屁は、一生懸命の敵を防ぐ。人として放らずんば、獸にだも如かざるべけんや。放つたり臭いだり屁たる君子ありといへば、強ちこれを賤しむべからず。今評判の撒屁漢、論より證據兩國橋。

風來山人誌

風來六部集序

時に遇はざれは孔子もお茶を引きたまひ、管仲が鞍替も能い所へ乗込めば、桓公の揚詰と成つて遂に齊國のおいらんとなる。予が先師風來山人、宿昔青雲の梯を踏失して、天竺浪人と成りしより、滄浪の水糝に濁醪の世の醉を醒し、吐散したる酒反吐は、醉うた浮世に廻さるゝ、醉漬共に目を明す、太平樂の卷物を、纔の本に書きつゞめ、世に行はるゝ物六卷あり。頃日書林太平館、其小冊にして讀足らず、且ちよぼくさと數多きは、回覽するの煩はしきを厭ひ、六部を合して二卷となし、是を號けて風來六部集と題す。全く殘口が無駄書を八部せんとするには非ず、唯是會刻の六部に御放施。

于時安永九年五月十八日下界隱士天竺老人頼みもせぬに筆を採る。

放屁論　同後篇　痿陰隱逸傳

力婦傳　蛇蛻青大通　於千代傳

風來六々部集

前編

風來先生書捨て給ひし反古を太平館主人拾集めて六部集といふ其言意外に出て一家の文法古今獨歩といふべし今に至りても我人共に見んことをほりすしかるにかの集はやくより世にともしくなりもて行くまゝにこたび櫻木に彫り猶殘れる花をもあつめて六部を增補し前後四卷となし六々部集とはなりぬ

餘貨樓銅多言

平賀源内集 目録

て、姑く考證を經ずして之を本書中に採錄したるのみ。此書寫本として行はれ、版本の信據すべきものあるを見ず。依て帝國文庫本に參看するに帝國圖書館本その他二三の寫本を以てし、語句の最も宜しと認むるものを擇みたれども、魯魚の誤と誤脱錯簡との甚しきものあるが如く、文の疑はしき所なほ少なからず。

神靈矢口渡は明和七年作の淨瑠璃にして、材を新田義興義岑兄弟に取り、兵庫之助、南瀨六郎等の忠節を配して、最も悲壯を極めたるもの也。淨瑠璃には外に「源氏大草紙」「嫩葉相生源氏」「前太平記古跡鑑」等の作あり、寔に江戶作者の棟梁として推すべし。

校訂に關する一般方針は他の本文庫と異なる事なく、その校訂校正に當りては、古賀友太、星野亮太郎二氏を煩はしたる所多し。記して謝意を表す。

大正四年六月　　校訂者　塚本哲三

風流志道軒傳は淺之進といへる稚兒が風來仙人と號する仙術者に如意自在なる一葉の團扇を授けられ、其德によりて世界各國を飛行し、或は支那の後宮に忍び入りて宮女と通じ、或は女護島に漂流して男郞屋を開始する時、幾多の狂態を演じての後、再び仙人の戒を受けて、志道軒と號し、淺草觀音の地內に机を据ゑ、木の松茸を以て面白をかしく群集に說話するに至る迄の、一篇の架空小說にして、最もよく源內の抱負と性格とを窺ふべきもの也。

そしり草は史上に有名なる幾多の人物を捉し來りて批評を下せる一家言にして、また痛快の文字たるを失はざれども、其言ふ所概ね淺薄にして、其文致又上乘といふべからず、或は後人の名を源內に假れるものなるべきか。帝國圖書館所藏の寫本には、奥に、

此書溪翁の戲作にて祕置也、一世の後枕中にありしを予請得て祕せること久し、依て後記す、萬象述。

と明記すれども、未だ遽かに信ずべからず。今は其源內作として人口に膾炙せるの故を以

筆に隱れて幾多の狂文戲作を出し、德川文學中の一異彩として其名却つて文界に不朽なるを致せるもの、蓋し亦彼が不遇不滿の結果たらずんばあらず。文に激越の調多きは、元より其所といふべし。鳩溪を以て號とし、戲作の書には天竺浪人、松籟子、風來散人、森羅萬象翁、無根叟、福内鬼外等といへり。安永八年寄宿生東天紅の誤つて人を殺すに坐し、傳馬町の獄に繫がれ、其十二月十八日瘡を痛みて獄裏に死すといふ。彼の最後につきては尙二三異說の存するあれども、未だ其何れか眞なるを知らず。

風來六々部集は彼が狂文の集にして、前後兩篇共に各六部の文を集めたるを以てこの名あり。其前篇中に痿陰隱逸傳（なえまらいんいつでん）と稱する一篇あり、事を男根の說に托して、世を罵る所、亦好箇の快文字なれども、其措辭概ね陰部の事に屬し、善良の風俗を亂すの慣なきにあらねば、今只其篇名と題辭とのみを止めて、全文を抹消する事となしたり。

根南志草は一篇の架空的小說にして、閻魔大王が名優瀨川菊之丞を戀ひて之を地獄に捉し來らんとし、幾多の苦計を弄する次第を骨子として、專ら男色の樣を寫したるもの也。

緒言

本書には平賀源内の述作中最も人口に膾炙せる「風來六々部集」「根南志草」「風流志道軒傳」「そしり草」「神靈矢口渡」の五篇を萃めたり。

源内は讚岐の人、幼より奇行多く、深く志を皇典と本草の學とに潛め、賀茂眞淵、田村藍水等に師事せしが、後長崎に出でて唐人館に出入し、輸入藥物の眞僞を判ずる傍、和蘭譯官につきて蘭語を究め、博物學上の智識を得たる事尠なからず。後去りて大阪に往き、豪商中島屋喜四郎の爲めに甘蔗の栽培を教へ、更に諸國を歴遊して寶暦中江戸に出でたり。源内天賦の英才は向ふ所として可ならざるなく、殊に其發明的天才と科學的頭腦とは、當時全く他に其匹を見ざる所なりしかども、その說く所高遠に過ぎて世の君主に用ひられず、殊に傲岸不羈なる彼の性格は世の滔々者流と合ふ能はずして、麒麟空しく槽櫪の間に老ゆるに至れり。彼や元より君子の器にあらず、我が意我が說の遂に世に容れられざるを見るや、頽然自ら棄てて酒を使ひ色に耽り、放言大語世の人士を痛罵して快しとせり。彼が文

平賀源内集

全